

伊丹市埋蔵文化財調査報告書

震災復旧・復興事業に伴う発掘調査

2001年3月

伊丹市教育委員会

序

伊丹市は、長尾連山や六甲山地に囲まれ東西に猪名川、武庫川という河川に育まれた自然に恵まれた豊かな台地であります。その歴史は古く国史跡伊丹廃寺跡にも伺えますように奈良時代には立派な寺院が建立されるなど、川辺郡の中心地として発展してきました。また中世には伊丹氏の支配のもとに城下町が形成され、さらに江戸時代になりますと酒造業の繁栄により在郷町として発達してきました。

この報告書には、伊丹氏から荒木村重によって築かれた有岡城と江戸時代の伊丹の酒造業にかかわる酒蔵の発掘調査成果をまとめております。この発掘調査では、酒蔵の規模や建物の構造が明らかになり、近世伊丹酒造業の変遷を知る上で貴重な資料が得られました。この成果を踏まえて、今後の町づくりに活かして自然や歴史的な特徴を踏まえた伝統ある魅力的な都市としての伊丹らしさと、近代都市にふさわしい新しい伊丹らしさ、すなわち、現在の伝統ある都市にふさわしい個性的な優れた文化遺産を保存・伝承し、より良い町づくりに活かすため、今後とも調査・研究に努め伊丹の自然と歴史と市民意識に根ざしたすばらしい文化財行政の形成を進めていきたいと考えております。

この報告書は、阪神淡路震災復興事業に関連して行ないました発掘調査の成果をまとめたものであります。平成7年に発生しました地震によりまして旧岡田家住宅などに甚大な被害が生じましたが、埋蔵文化財の発掘調査につきましても住宅の再建などにより発掘調査が急増致しました。こうした緊急時の発掘調査では市教育委員会の体制では対応できず、他府県から応援に駆けつけてくださいました文化財専門職員の方々の支援をいただいております。

最後になりましたが、発掘調査に直接協力頂きました支援職員の皆様、また調査の指導を頂きました兵庫県教育委員会の方々に深甚なる感謝の意を表します。

平成13年3月

伊丹市教育委員会

教育長 脇本芳夫

例 言

1 本書は、平成7年1月17日に発生した「阪神・淡路大震災」の震災復旧・復興事業に伴う緊急調査として実施した埋蔵文化財調査の成果をまとめたものである。

2 本書に収めた調査成果及び調査期間は下記のとおりである。

有岡城跡・伊丹郷町遺跡第151次調査	平成7年6月19日～9月8日
〃 第163次調査	平成8年4月18日～6月12日
〃 第182次調査	平成8年7月24日～9月5日
〃 第187次調査	平成8年11月20日～平成9年3月5日
〃 第188次調査	平成9年1月27日～3月27日

3 発掘調査及び整理作業は伊丹市教育委員会生涯学習部で行った。組織は次のとおりである。

発掘調査（平成7・8年度）

整理作業（平成11・12年度）

生涯学習部長 高木 正捷

生涯学習部長 富田五十一

主幹 滝内 和之

副参事 河井嘉一郎（12年度）

主査 片岡 隆

主幹 梅本 照雄（11年度）

主査 小長谷正治

主査 片岡 隆

大野 智子（7年度）

主査 小長谷正治

中田 正仁（8年度）

中田 正仁

嘱託 細川 佳子

中睦明日香

嘱託 細川 佳子

嘱託 瀬川眞美子（12年度）

調査補助員

岡野理奈、高須賀由美、三輪隆子、森美恵子、徳永悦子、岡村富美江、赤松由美子

村下佳子、藤本理子、中原 静、中野由美子、川上美幸、小倉仲裕、渡部友紀

寺西健一、木村雅之、上谷浩司

4 第182次調査、第187次調査については「阪神・淡路大震災に係わる埋蔵文化財発掘調査の支援に関する協定」に基づき兵庫県教育委員会より埋蔵文化財職員の派遣を得て実施した。県派遣職員は、他府県の教育委員会からの支援職員を主体に構成されている。

・第182次調査 伊藤 敏 行（兵庫県教育委員会・東京都派遣）

河合 修（兵庫県教育委員会・静岡県派遣）

・第187次調査 武内 雅 人（兵庫県教育委員会・和歌山県派遣）

若嶋 一 則（兵庫県教育委員会・広島県派遣）

第182次調査については提出された実績報告を組み替え転載し、遺構図版はそのまま掲載している。

5 整理作業は、発掘調査担当者の指導のもと、伊丹市埋蔵文化財臨時職員が遺物の実測・トレースなどを行った。ただし、遺物実測は中睦明日香・瀬川眞美子・三輪隆子・高須賀由美・森 美恵子、遺物・遺構のトレースは瀬川眞美子・岡野理奈・丸岡タカミ、写真図版の作成は上谷浩司が行った。

6 報告の執筆は各々の発掘担当者が分担して行った。執筆者の氏名は文末に記した。

7 第163次調査出土の貝は赤松和佳氏に鑑定と原稿をお願いした。

8 本書作成にあたって、下記の方から多くの教示を得た。（敬称省略・順不同）

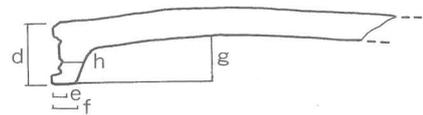
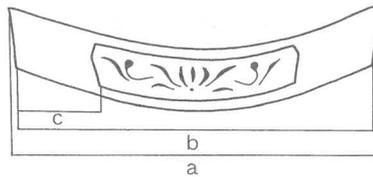
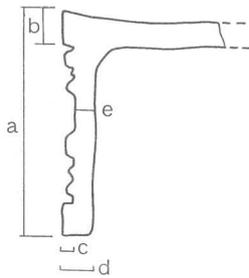
藤澤一夫、和島恭仁雄、川口宏海、藤川永子、森口日向、積山 洋、松尾信裕、藤井幸司

9 本書の編集作業は、小長谷と瀬川があたった。

10 出土遺物及び発掘調査資料は伊丹市教育委員会にて保管している。

凡 例

- 1 遺構実測図は、国土座標第V系を使用した。水準高は第163次・187次調査は大阪湾平均海水値(O.P)を用い、第182次・188次調査は東京湾平均海水値(T.P)を用いている。
- 2 現地の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人色彩研究所監修の「新版標準土色帖」に準拠した。土器の色調は目測による。
- 3 遺物の挿図番号は、写真図版番号と一致させている。
- 4 土器実測図において中心線を一点破線で示しているものは、反転復元していることを表す。
- 5 埴輪実測図でスクリーントーンを用いているところは、黒斑の範囲を示している。
- 6 瓦の計測箇所は次のとおりである。



軒平瓦

- a. 瓦当径
- b. 外縁幅
- c. 外縁高
- d. 瓦当側面厚
- e. 瓦当厚

軒平瓦

- a. 上弦幅
- b. 下弦幅
- c. 脇区幅
- d. 瓦当幅
- e. 外縁高

- f. 瓦当側面厚
- g. 顎深
- h. 瓦当厚

目 次

序 文
例 言
凡 例

第1章 調査の概要	1
第1節 震災復旧・復興事業関連発掘調査の概要	1
第2節 遺跡の概要	1
第3節 調査地点の概要	3
第2章 発掘調査の成果	5
第1節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第151次調査	5
第2節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第163次調査	33
第3節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第182次調査	75
第4節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第187次調査	97
第5節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第188次調査	123

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 調査箇所位置図	4
第3図 第151次調査区位置図	5
第4図 調査区設定図	5
第5図 土層断面図	7
第6図 第1遺構面平面図	9
第7図 竈1平面・断面図	11
第8図 竈1・井戸4出土遺物	12
第9図 竈2平面・断面図	13
第10図 竈2・男柱1出土遺物	14
第11図 男柱1平面・断面図	15
第12図 井戸3出土遺物	16
第13図 土坑76平面・断面図、出土遺物	18
第14図 土坑2・88出土遺物	19
第15図 柱列1・2平面・断面図	20
第16図 溝6平面・断面図、出土遺物	21
第17図 第2遺構面平面図	23
第18図 堀1・2、溝14・15・16平面・断面図	25
第19図 堀1・2、溝15、土坑164出土遺物	26
第20図 堀1・溝16・土坑158出土遺物	28
第21図 土坑158平面断面図	29
第22図 試掘トレンチ出土遺物	30

第23図	「天保15年伊丹郷町分間絵図 解説図」	31
第24図	「明治19年酒造場絵図面届書写」	31
第25図	「大正4年伊丹町地籍図謄本」	32
第26図	第163次調査区位置図	33
第27図	調査区設定図	33
第28図	土層断面図	34
第29図	第1遺構面平面図	37
第30図	地下室状遺構平面・断面図	40
第31図	地下室状遺構出土遺物(1)	44
第32図	地下室状遺構出土遺物(2)	45
第33図	地下室状遺構出土遺物(3)	46
第34図	竈1平面・断面図、出土遺物	48
第35図	男柱1、土坑6平面・断面図、出土遺物	49
第36図	男柱2、土坑10平面・断面図	50
第37図	井戸2平面・断面図、出土遺物	51
第38図	井戸3出土遺物	52
第39図	胞衣垂1・2・3出土状況、出土遺物	55
第40図	土坑22遺物出土状況、出土遺物	56
第41図	土坑23・24遺物出土状況、出土遺物	57
第42図	溝3・4・5平面・断面図	59
第43図	溝3・4・5出土遺物	61
第44図	男柱3・4、土坑65平面・断面図	62
第45図	第2遺構面平面図	63
第46図	男柱4・井戸5出土遺物	65
第47図	井戸4出土遺物	65
第48図	土坑81平面・断面図、出土遺物	66
第49図	溝6・7・8・9・10平面・断面図、溝9出土遺物	67
第50図	土間・地山面出土遺物	69
第51図	「文禄伊丹之図」	71
第52図	「寛文9年伊丹郷町絵図」	71
第53図	「天保15年伊丹郷町分間絵図 解説図」	72
第54図	「大正4年伊丹町地籍図謄本」	72
第55図	第182次調査区位置図	75
第56図	調査区設定図	75
第57図	土層断面図	76
第58図	第1・2・3遺構面平面図	78
第59図	第1面平面図(1)	83
第60図	第1面平面図(2)	84
第61図	第2面平面図(1)	85
第62図	第2面平面図(2)	86
第63図	第2面平面図(3)	87
第64図	第3面平面図(1)	88
第65図	第3面平面図(2)	89
第66図	第3面平面図(3)	90
第67図	第1・2面出土遺物	93

第68図	第3面出土遺物	94
第69図	第187次調査区位置図	97
第70図	調査区設定図	97
第71図	土層断面図	98
第72図	第1遺構面平面図	99
第73図	煉瓦竈・燃料置き場平面・断面図	101
第74図	煉瓦竈出土遺物	102
第75図	竈6・7・51平面・断面図	104
第76図	竈90平面・断面図、出土遺物	105
第77図	竈9平面・断面図、竈19出土遺物	106
第78図	竈18・141・179平面・断面図	107
第79図	井戸2出土遺物	108
第80図	井戸115平面・断面図、出土遺物	109
第81図	井戸77平面・断面図、出土遺物	110
第82図	井戸149出土遺物	111
第83図	男柱83平面・断面図	113
第84図	土坑61・79・80出土遺物	114
第85図	埋甕159・180平面・断面図、出土遺物	115
第86図	第2遺構面平面図	116
第87図	堀145平面・断面図	117
第88図	堀145出土遺物(1)	118
第89図	堀145出土遺物(2)	119
第90図	「天保15年伊丹郷町分間絵図 解説図」	120
第91図	「大正4年伊丹町地籍図謄本」	121
第92図	「明治19年酒造場絵図面届書写」	121
第93図	第188次調査区位置図	123
第94図	調査区設定図	123
第95図	第1遺構面平面図、土層断面図	124
第96図	地下室状遺構平面・断面図	126
第97図	地下室状遺構・土坑28出土遺物	127
第98図	土坑9、ピット6・7・8平面・断面図、土坑9出土遺物	128
第99図	土坑35平面・断面図	128
第100図	第2遺構面平面図	129
第101図	竈1平面・断面図	130
第102図	竈1・2出土遺物	132
第103図	竈2平面・断面図(1)	133
第104図	竈2平面・断面図(2)	134
第105図	竈3・4平面・断面図	135
第106図	「寛文9年伊丹郷町絵図」	138
第107図	「天保15年伊丹郷町分間絵図 解説図」	138
第108図	「元禄7年柳沢吉保領伊丹郷町絵図 解説図」	138
第109図	「大正4年伊丹町地籍図謄本」	139
第110図	「摂州伊丹酒樽銘鑑」	140

図 版 目 次

PL.1a	第151次調査第1遺構面全景（西から）
PL.1b	“ 第2遺構面全景（西から）
PL.2a	“ 竈1全景（南から）
PL.2b	“ 竈1細部（西から）
PL.2c	“ 竈1細部（南から）
PL.2d	“ 竈1細部（北から）
PL.2e	“ 井戸4（南から）
PL.3a	“ 竈2全景（東から）
PL.3b	“ 竈2A焚口から（東から）
PL.3c	“ 竈2A細部（東から）
PL.3d	“ 竈2B（東から）
PL.3e	“ 井戸3（南から）
PL.4a	“ 堀1全景（西から）
PL.4b	“ 堀1（東から）
PL.4c	“ 堀1中央断面（西から）
PL.4d	“ 堀1・溝16（西から）
PL.4e	“ 堀1・溝16（西から）
PL.5a	“ 堀2全景（南から）
PL.5b	“ 堀2周辺（西から）
PL.5c	“ 堀2南壁断面
PL.5d	“ 土坑158（南から）
PL.6	“ 出土遺物（1）
PL.7	“ 出土遺物（2）
PL.8	“ 出土遺物（3）
PL.9	“ 出土遺物（4）
PL.10	“ 出土石造物
PL.11a	第163次調査第1遺構面全景（南から）
PL.11b	“ 第1遺構面全景（南から）
PL.12a	“ 地下室状遺構全景（南から）
PL.12b	“ 播鉢出土状況（東から）
PL.12c	“ 土師皿出土状況（北から）
PL.12d	“ 地下室状遺構断面（東から）
PL.12e	“ 地下室状遺構内の柱穴（西から）
PL.13a	“ 竈1（南から）
PL.13b	“ 竈2（東から）
PL.13c	“ 男柱1・土坑6（南から）
PL.14a	“ 土坑6断面（南から）
PL.14b	“ 男柱2・土坑10（南から）
PL.14c	“ 土坑10断面（南から）
PL.15a	“ 男柱3（南から）
PL.15b	“ 男柱4・土坑65（東から）
PL.15c	“ 土坑65断面（東から）
PL.16a	“ 井戸3断面（南から）

PL.16b	第163次調査竈4・5・6・7検出状況（南東から）
PL.16c	” トイレ遺構（土坑1・2）（南から）
PL.17a	” 土坑22水琴窟出土状況（南から）
PL.17b	” 土坑22床面の石敷状況
PL.17c	” 土坑23・24甕出土状況（南から）
PL.17d	” 胞衣壺1 胞衣壺・徳利出土状況（西から）
PL.18a	” 胞衣壺2 検出状況（1）（西から）
PL.18b	” 胞衣壺2 検出状況（2）（南から）
PL.18c	” 胞衣壺3 検出状況（東から）
PL.18d	” 土坑40検出状況（西から）
PL.19a	” 第2遺構面全景（南から）
PL.19b	” 第2遺構面全景（南から）
PL.20a	” 丸瓦敷き溝検出状況（北から）
PL.20b	” 溝11、ピット74・75検出状況（西から）
PL.20c	” 溝6・7・8・9・10検出状況（北から）
PL.21	” 地下室状遺構 出土遺物（1）
PL.22	” 地下室状遺構 出土遺物（2）
PL.23	” 地下室状遺構 出土遺物（3）
PL.24	” 地下室状遺構 出土遺物（4）
PL.25	” 地下室状遺構 出土遺物（5）
PL.26	” 地下室状遺構 出土遺物（6）
PL.27	” 井戸3 出土遺物（1）
PL.28	” 井戸3 出土遺物（2）
PL.29	” 出土遺物（1）
PL.30	” 出土遺物（2）
PL.31	” 出土遺物（3）
PL.32	” 出土遺物（4）
PL.33a	第182次調査第1面全景（北から）
PL.33b	” S H101全景（東から）
PL.34a	” S H101古銭出土状況
PL.34b	” S H102全景（北から）
PL.34c	” 水琴窟S K105完掘状況
PL.34d	” 溝状遺構S D101完掘状況
PL.35a	” 竈S X104全景
PL.35b	” 竈S X102旧燃焼室
PL.35c	” 竈S X105燃焼室
PL.36a	” 第2面全景（北から）
PL.36b	” 竈S X203全景
PL.37a	” S K207遺物出土状況
PL.37b	” S K238桶底板残存状況
PL.37c	” 土坑S P207一石五輪塔出土状況
PL.38a	” 第3面全景（北から）
PL.38b	” S K301と周囲の柱穴
PL.39a	” 瓦溜まりS K207
PL.39b	” S K323桶底痕検出状況

- PL.39c 第182次調査 S E 201側面に見える地下室状遺構
- PL.40a " S K 326全景
- PL.40b " S K 326遺物出土状況
- PL.40c " ピット状遺構 S P 320遺物出土状況
- PL.41a " S P 302内根石検出状況
- PL.41b " S P 307内根石検出状況
- PL.41c " S P 310内根石検出状況
- PL.41d " 土層の状況（調査区南面）
- PL.41e " 土層の状況（調査区西面）
- PL.42 " 出土遺物（1）
- PL.43 " 出土遺物（2）
- PL.44a 第187次調査調査区東側（礎石109等）（北西から）
- PL.44b " 礎石（根石）列 礎石109・24・94（東から）
- PL.44c " 礎石24 根石上段撤去後状況
- PL.44d " 石列169
- PL.44e " 敷居石16
- PL.45a " 煉瓦竈・燃料置き場と井戸5（東から）
- PL.45b " 煉瓦竈（東北から）
- PL.46a " 煉瓦竈細部
- PL.46b " 竈6・7の半掘状況と竈51（北東から）
- PL.46c " 竈7立石状況
- PL.47a " 竈10立石状況（東から）
- PL.47b " 竈179（西から）
- PL.47c " 竈18 燃烧部窯壁断面（北西から）
- PL.48a " 中央部竈群（東から）
- PL.48b " 竈9・52（東から）
- PL.48c " 竈52-a・b・cの重複
- PL.49a " 竈90（西から）
- PL.49b " 竈90燃烧部 粘土ブロック積構築状況（西から）
- PL.50a " 埋甕159半掘状況（南から）
- PL.50b " 埋甕173半掘状況（北から）
- PL.50c " 埋甕159半掘状況（北から）
- PL.50d " 井戸77半掘状況（西から）
- PL.51a " 調査区西北部第IV遺構面（東から）
- PL.51b " 男柱83 a・bと垂壺104（東から）
- PL.52a " 第VI遺構面全景（西から）
- PL.52b " 堀145完掘（北から）
- PL.53 " 堀145断面（東から）
- PL.54 " 出土遺物（1）
- PL.55 " 出土遺物（2）
- PL.56 " 出土遺物（3）
- PL.57 " 堀145・第IV層出土遺物（1）
- PL.58 " 堀145出土遺物（2）
- PL.59 " 堀145出土遺物（3）
- PL.60a 第188次調査第1遺構面東半部（西から）

PL.60b	第188次調査地下室状遺構（西から）
PL.61a	” 地下室状遺構断面（東から）
PL.61b	” 根太出土状況（東から）
PL.61c	” 階段検出状況（南から）
PL.62a	” 第2遺構面西半部 竈群全景（1）（西から）
PL.62b	” 第2遺構面西半部 竈群全景（2）（西から）
PL.63a	” 竈1（西から）
PL.63b	” 燃焼部bの閉塞状況（北から）
PL.63c	” 燃焼部aと焚口部の埋土状況（西から）
PL.64a	” 竈1－燃焼部a焚口の障壁検出状況（西から）
PL.64b	” 燃焼部a断割り 粘土ブロックで構築している様子（北から）
PL.65a	” 竈2（西から）
PL.65b	” 燃焼部aの焚口閉塞状況・燃焼部aとbの切合い（西から）
PL.65c	” 燃焼部aの焚口閉塞状況（西から）
PL.66a	” 竈2－燃焼部aと焚口部の埋土状況（北から）
PL.66b	” 燃焼部a断割り 凝灰岩切石と粘土ブロックで構築している（北から）
PL.66c	” 燃焼部aと竈1（燃焼部b）の間に入れられた補強のための凝灰岩（北から）
PL.67a	” 竈3・4（西から）
PL.67b	” 竈4－燃焼部a 灰の掻き出し部の施設（西から）
PL.67c	” 竈3・4－燃焼部bの造り替えと断面の様子（西から）
PL.68	” 出土遺物

表 目 次

表1 第163次 S V 3貝類組成

第1章 調査の概要

第1節 震災復旧・復興事業関連発掘調査の概要

本書に掲載した発掘調査成果は、震災復旧・復興事業として実施したものである。第151次が平成7年度、第163次以降が平成8年度に実施している。本書は、震災関連の発掘調査の内、有岡城跡・伊丹郷町遺跡の発掘調査成果をまとめたもので、とくに酒蔵遺構（竈・男柱・井戸等）を検出した調査地点を集めている。

阪神淡路大震災の結果、伊丹市の平成7年度の埋蔵文化財発掘届出・通知件数は、前年度の約2倍にあたる174件、それに基づく調査通知件数も倍の52件にのぼった。当時、伊丹市では埋蔵文化財の正規職員は1名（他に嘱託職員1名）だったことから、他府県からの支援職員の派遣を兵庫県教育委員会に依頼し、発掘調査を実施してきた。平成7年・8年度中は、とくに発掘調査件数が多かった時期で、支援職員の派遣による発掘調査についても、数カ所を同時に行うような状況であった。本書掲載の発掘調査についてもこの時期に行ったものである。

支援職員による発掘調査は、本書では第182次調査と第187次調査の2件である。整理作業の分担は、出土遺物の整理および報告書用の図版の作成・遺物写真撮影等は市教育委員会が担当し、報告書の原稿の内、遺構については基本的に支援職員にお願いした。支援職員の制度は平成9年度で終了し、派遣職員の方々もそれぞれの所属にお帰りになっている。そのため、整理作業にあたっては、連絡を密に取ることができず、この報告書に調査者の意見が反映されているか心配であるが、非常事態での発掘調査であった上に変則的な体制での整理作業である了とされたい。

第2節 遺跡の概要（第1図）

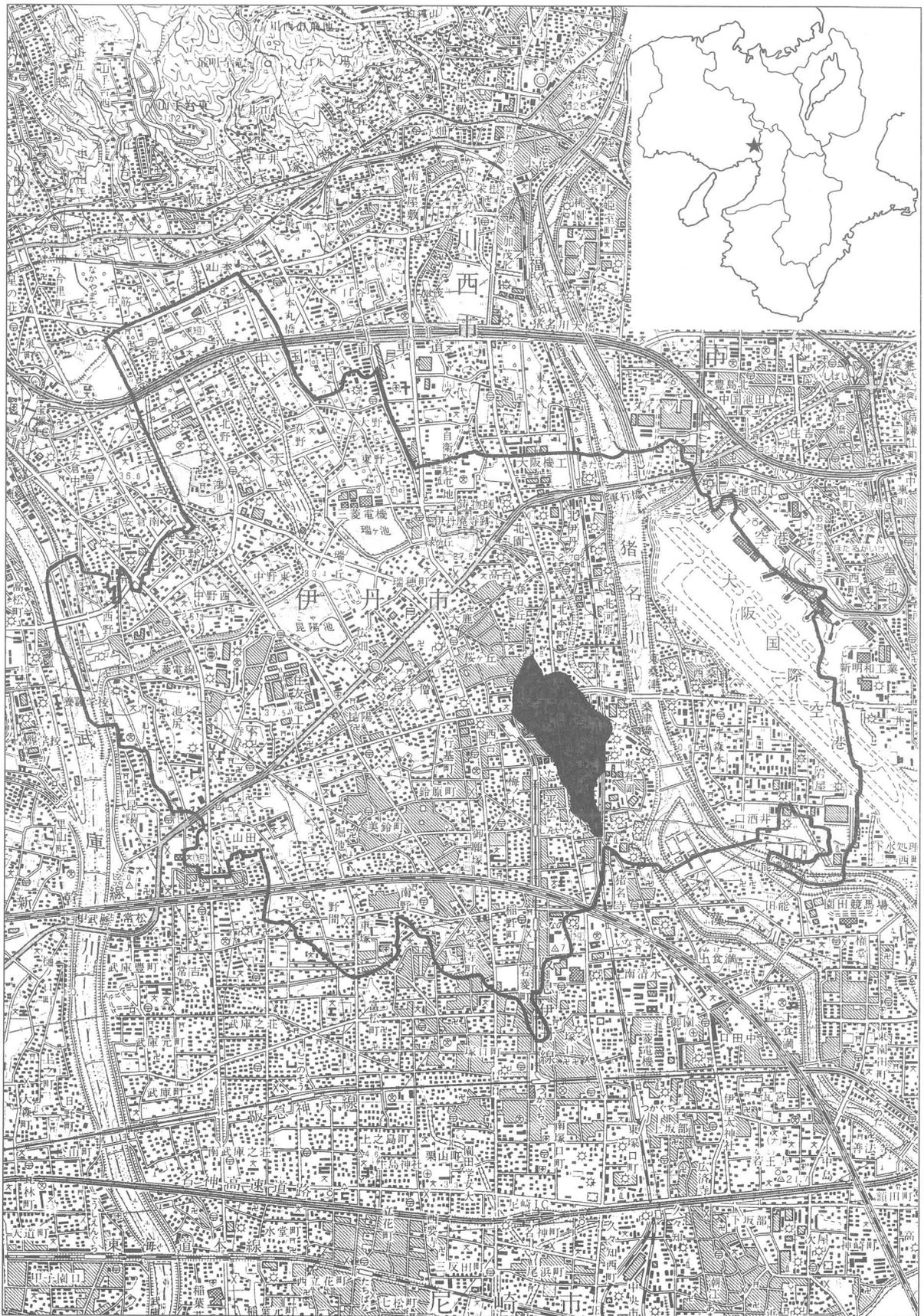
伊丹市は、大阪府豊中市、池田市と接する兵庫県の東部にあり、市域の北側は川西市、宝塚市、西側は武庫川を挟んで西宮市、南側は尼崎市に囲まれている。市の大半は、伊丹台地と呼ぶ北摂山地に端を発する低平な洪積台地が続き、東部にある猪名川流域に形成された沖積地の一部が含まれている。

有岡城は、その伊丹台地東縁に発達した高台を中心に築かれた平城である。しかし、平城といっても、東側から眺めると、城は沖積地と5～10mの比高差もつ急崖の上に築かれ、地形を巧みに利用していることが判る。

有岡城の規模は南北1.7km、東西800m、伊丹台地の地形をそのまま取り込んで築城されたため南北に長い不整形を呈している。内部の構造は、城域の最も東、伊丹台地が東側の沖積地に張り出した場所に主郭（本丸）が置かれ、その西側に侍町、城域のほぼ中央部を南北に通る大溝（堀）を境に西側に町屋が広がっていた。町屋の中心には、大坂・尼崎から宝塚（小浜）を經由し丹波へ抜ける伊丹街道（丹波道）が取り込まれていた。

有岡城は鎌倉幕府の御家人であった伊丹氏により築城されたもので、伊丹城と呼ばれていた。伊丹城の名は南北朝期の文和2年（1353）に初見（「森本基長軍忠状」北河原森本文書）される。その後、伊丹氏および伊丹城の動向を伝える資料は少ないが、細川両家の内紛に巻き込まれた応仁の乱後は度々合戦の舞台となっている。

天正2年（1574）、織田信長の命を受けた池田城主荒木村重は、伊丹城の伊丹親興を攻め、代わって城主となる。城主となった村重は、城名を有岡城と改めるとともに城の改造に着手している。その結果、町ぐるみを堀と土塁などの防御施設で圍繞する惣構えを取り入れ、要所には、北から「岸



第1図 遺跡位置図 (1/50,000「大阪西北部」)

の砦」、「上臈塚砦」、「鶴塚砦」を置いたほか、侍町と町屋の境に「大溝」（堀）を設けている。

このように惣構えを取り入れた堅固な城も、天正6年（1578）、村重は信長に対して謀反の疑いをかけられ、結果、毛利氏を頼って籠城することになる。有岡城めぐる攻防は翌年まで続き、村重が毛利氏の援軍を頼って、城を抜け出したことがきっかけとなり降伏開城となった。

廃城となった江戸時代からの伊丹の町は、寛文年間には町の大半が近衛家の所領となり、酒造業を中心産業とする在郷町として発展していく。町の中心は、有岡城の町場から発展していき、それに加えて、広い空閑地のままであった旧侍町の範囲にも、江戸中期以降酒蔵や町屋が次第に建造されるようになり、町場が拡大していった。

第3節 調査地点の概要（第2図）

有岡城の段階では、第151次調査地点が侍町、その他は町屋の範囲に含まれ、江戸時代にはいと、時期の前後はあるが、第182次調査地点を除いて酒蔵となっていく。こうした変遷は有岡城跡・伊丹郷町遺跡の特徴の一つである。次に、調査ごとに場所の説明をしておきたい。

第151次調査地点は、城域のほぼ中央部に位置し、町屋、侍町を通して主郭の大手に通じる主要な道に面している。侍町と町屋を画する大溝は、「文禄伊丹の図」、[寛政八年伊丹細見図]によると、この付近に描かれているが、調査地点が大溝の内側なのか、或いは外側なのか明確ではなかった。ところが、北側の道路上で行なわれた最近の発掘調査（1999年に兵庫県教育委員会が実施）において大溝に相当する堀跡が発見され、本地点が大溝の内側、つまり侍町に入っていることが判った。江戸時代は新町に属している。

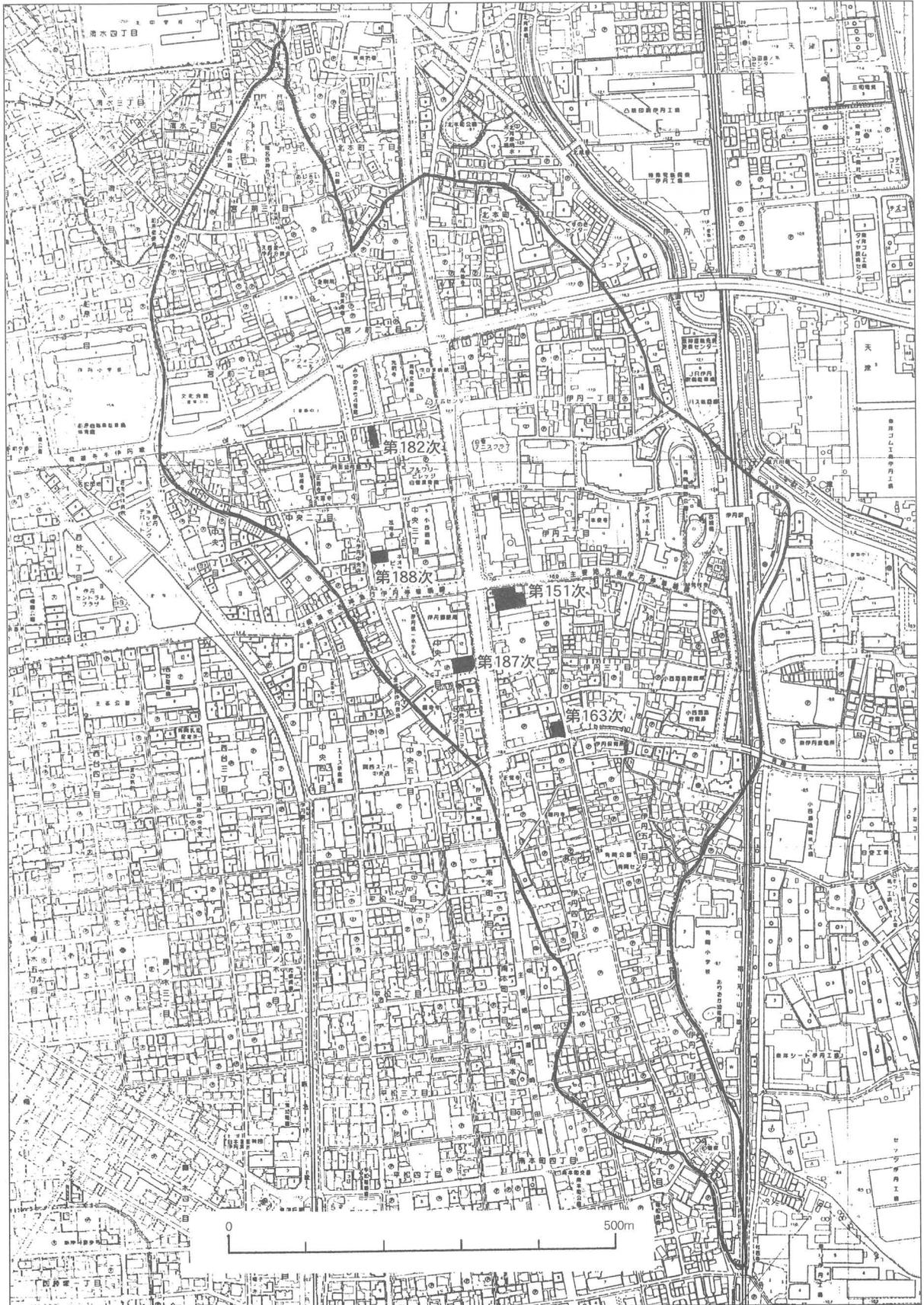
第163次調査地点は、城域の中央部よりやや南側、伊丹街道に面した場所である。伊丹街道は、大坂方向から来る場合は鶴塚砦の脇を通過して城内に入り、直線的に約560m北に上った所で左に折れるが、本地点はその北西の角にあたる。侍町からは外れている。江戸時代には南町に属している。

第182次調査地点は、城内から西へ向かう昆陽口通りに面している。早い段階から町場として成立したと見られ、本地点の位置する魚屋町は、文禄年間（1592～96）には認められる。

第187次調査地点は、城内を南北に貫く主要な道に面している。有岡城の砦の一つ、女郎塚砦の推定される場所である。この砦は前方後円墳の墳丘を利用して築造されていたことが近年の発掘調査（第20次調査）で確認されている。墳丘は、廃城後早い段階で削平されたと見られ、少なくとも文禄年間には町場となっており、材木町と呼ばれている。

第188次調査地点は、有岡城段階では町場の中心からやや西へ外れた場所で、城内で最も寺院が集まる一帯に位置する。文禄年間には中少路村と呼ばれていた。

（小長谷）



第2図 調査箇所位置図 (1/7,500)

第2章 発掘調査の成果

第1節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第151次調査

所在地 伊丹市伊丹3丁目525-4

調査面積 400m²

調査期間

確認調査 平成7年3月27日～3月29日

本調査 平成7年6月19日～9月8日

調査担当 小長谷正治・瀬川眞美子

調査概要

この調査は、共同住宅建設に伴う緊急発掘調査である。本調査に先立ち確認調査を実施したところ、有岡城に関わる小規模な堀跡等多数の遺構が存在することが明らかになったため、原因者と協議を経て本発掘調査を実施した。

確認調査では、概ね3時期の遺構面が存在することが判明した。新しい順に、江戸時代中期～後期、江戸時代前期、安土桃山時代以前である。しかし、本発掘調査では、江戸時代の2時期の遺構面を併せて第1遺構面、安土桃山時代以前を第2遺構面として、2段階の調査を行った。

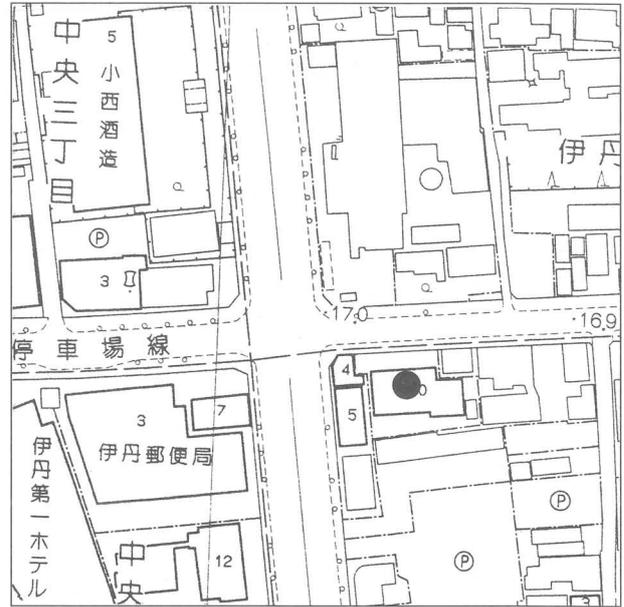
遺跡の概要（第3・4図）

当調査地点は、有岡城跡のほぼ中心部、有岡城当時の侍町の西端部に位置する。調査地点北側にある東西の道は、東へ約200m行くと有岡城の主郭となり、城下から主郭に通じる重要な道の一つである。江戸時代になると、伊丹郷町を南北に通る本町通りを中心に酒蔵が建ち始め、本地点にも少し遅れ江戸時代中期になると酒蔵が建てられるようになる。

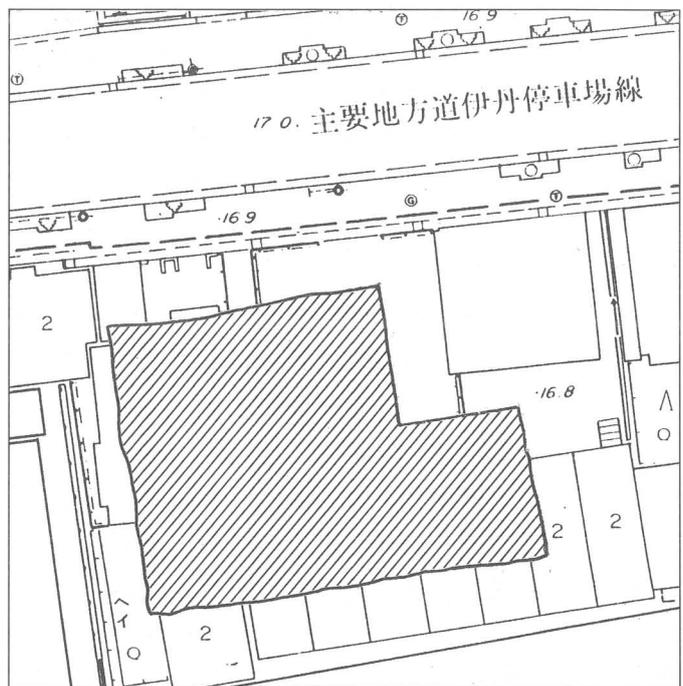
調査成果（第6・17図）

第1遺構面では、主に江戸時代中期以降の酒造関係の遺構が検出された。遺構の種類としては、酒造用の大型竈跡、大型の井戸跡、酒搾り遺構（男柱）等がある。酒造遺構の中で最も新しい時期の遺構は煉瓦造りの竈跡（竈1）である。

第2遺構面では、小規模な2本の堀跡（堀1・2）のほか、堀跡と平行あるいは直行す



第3図 第151次調査区位置図（1/2,500）



第4図 調査区設定図（1/500）

る溝跡等が検出された。

層序（第5図）

調査に際して、第1遺構面まで一気に掘り下げたが、この第1遺構面は、南壁では第20・28・46・54層の上面、西壁では、第66層上面、東壁では、第144・146層の上面である。また、第2遺構面は地山面上とした。

調査成果

第1遺構面（第6図）

検出した遺構は、主に江戸時代中期以降の酒造関係の遺構であるが、竈1のように近代の遺構まで含まれている。酒造遺構は大きく3段階の変遷が認められ、古い順に竈2・男柱の段階、井戸3の段階、竈1・井戸4の段階である。また、これ以前の江戸時代前期の遺構（土坑2・76）等も検出されている。

竈1（第7・8図）

調査区の南側に位置し、一部が調査区外に延びており未調査となっている。竈の構築材料は主に煉瓦を用いているが、竈の内部の見えない場所には凝灰岩の切石、焚口部の壁面には川原石を用いているなど、場所によって使い分けが行なわれている。酒蔵廃業時点で激しく破棄されているため、竈上部および左側燃焼部・煙道はほとんど残っていない。

復元すると、中央部に長方形の煙道を有する2基連基型（2基一組）の竈で、向かって左側がおおきく造られていることがわかる。破壊が著しいため、竈の規模はわからない。比較的残りの良い右側の竈の焚口には、鋳物製の扉が残っていた。煙道部から立ち上がる煙突の位置は、左右焚口の間中部にあった可能性が高い。焚口部の床には前面に煉瓦が敷き詰められ、東西の壁は川原石および加工石によって石垣状に積み上げられていた。南壁は未調査であるためわからないが、西側から降りる階段が設けられていた。この階段は煉瓦を積み上げた上に加工石を載せて造られており、6段が確認できた。焚口床面までの深さは1.2mである。

遺物（第8図、PL.6）

1は瀬戸白磁染付碗である。口径11.6cm、器高5.2cm、底径4.1cm、高台畳付は無釉である。外面に笹文を刷っている。2は瀬戸白磁染付輪花碗である。口径9.8cm、器高5.1cm、底径3.6cm。高台畳付は無釉である。外側には笹文を、内側には亀甲文と梅文を型紙摺りする。内面見込みに寿を描く。

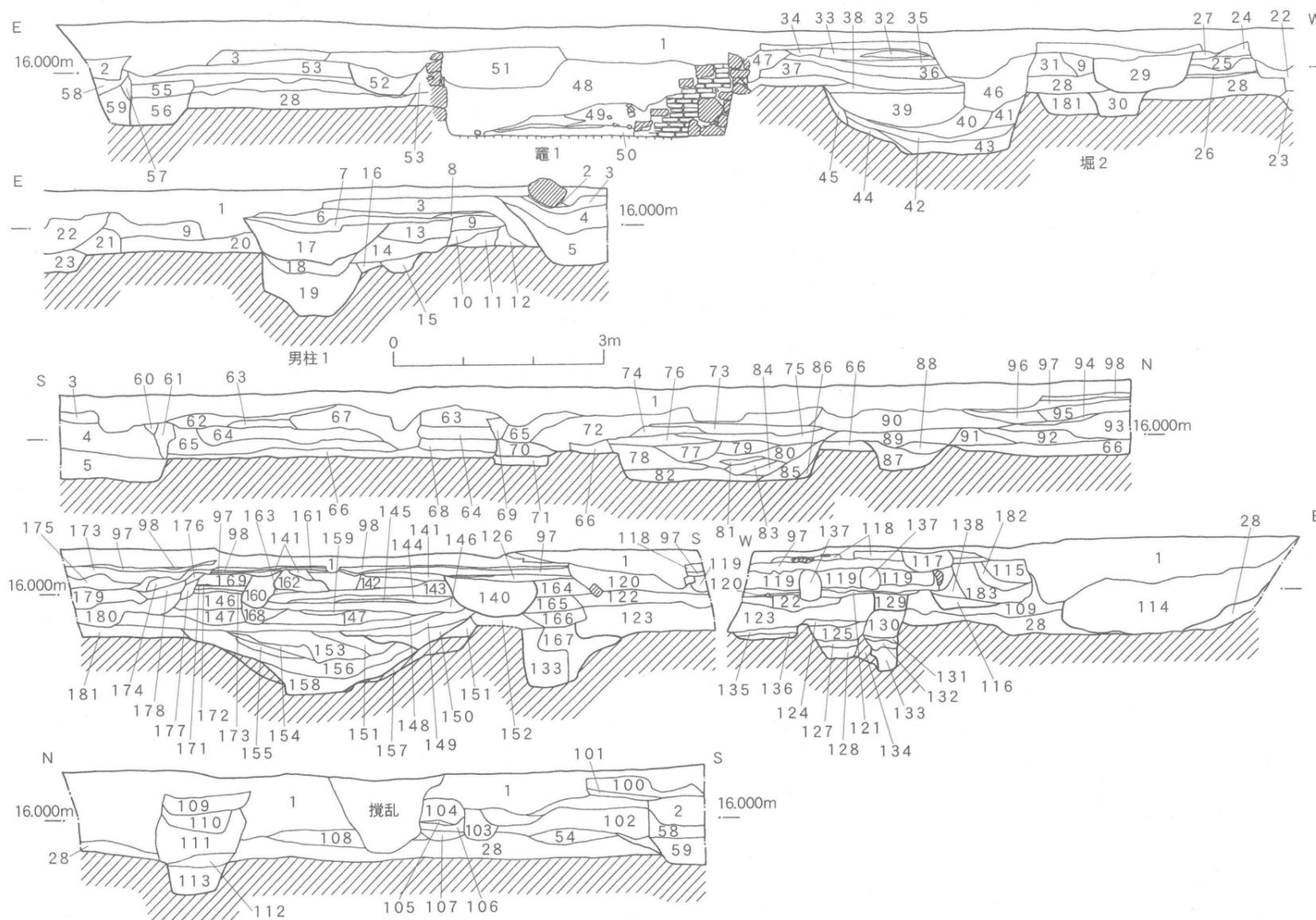
3・4は竈に使用されていた耐火煉瓦である。3は長さ22.8cm×幅10.9cm×厚さ6.1cm。「MARUSAN」の刻印が入る。4は長さ23cm×幅10.9cm×厚さ6.1cm。長辺の一方にタールが付着している。[OSAKA YOGYO]の刻印が入る。この印は大阪窯業株の刻印で、耐火煉瓦は明治39年から製造を始めている。竈に使用された耐火煉瓦の刻印はこの2種類である。

5・6は軒丸瓦である。瓦当文は左巻三巴文。5は瓦当径14.7cm、外縁幅2.2cm、瓦当側面厚2cm、外縁高0.7cmを測り、文様高とほぼ同じ高さである。外縁はヨコナデ調整し、瓦当裏面は周囲をヨコナデし、中心は指オサエとナデ調整する。灰黒色を呈し、胎土は小石・砂粒を含むが精良である。

6は瓦当径14.7cm、外縁幅2.2cm。瓦当側面厚2cm、外縁高0.7cmで、文様高とほぼ同じ高さである。外縁はヨコナデ調整し、瓦当裏面は周囲を強くヨコナデし、中央は不定方向にナデる。丸瓦凸面は縦方向にヘラミガキした後、横方向にも一部施す。瓦当周辺はヨコナデする。凹面は内タタキを施し、瓦当との接合部を丁寧にヨコナデする。灰黒色を呈し、胎土は精良。5・6は汜キズが同じであることから同汜の瓦である。構築材の耐火煉瓦から竈1は明治39年以降の操業が考えられる。

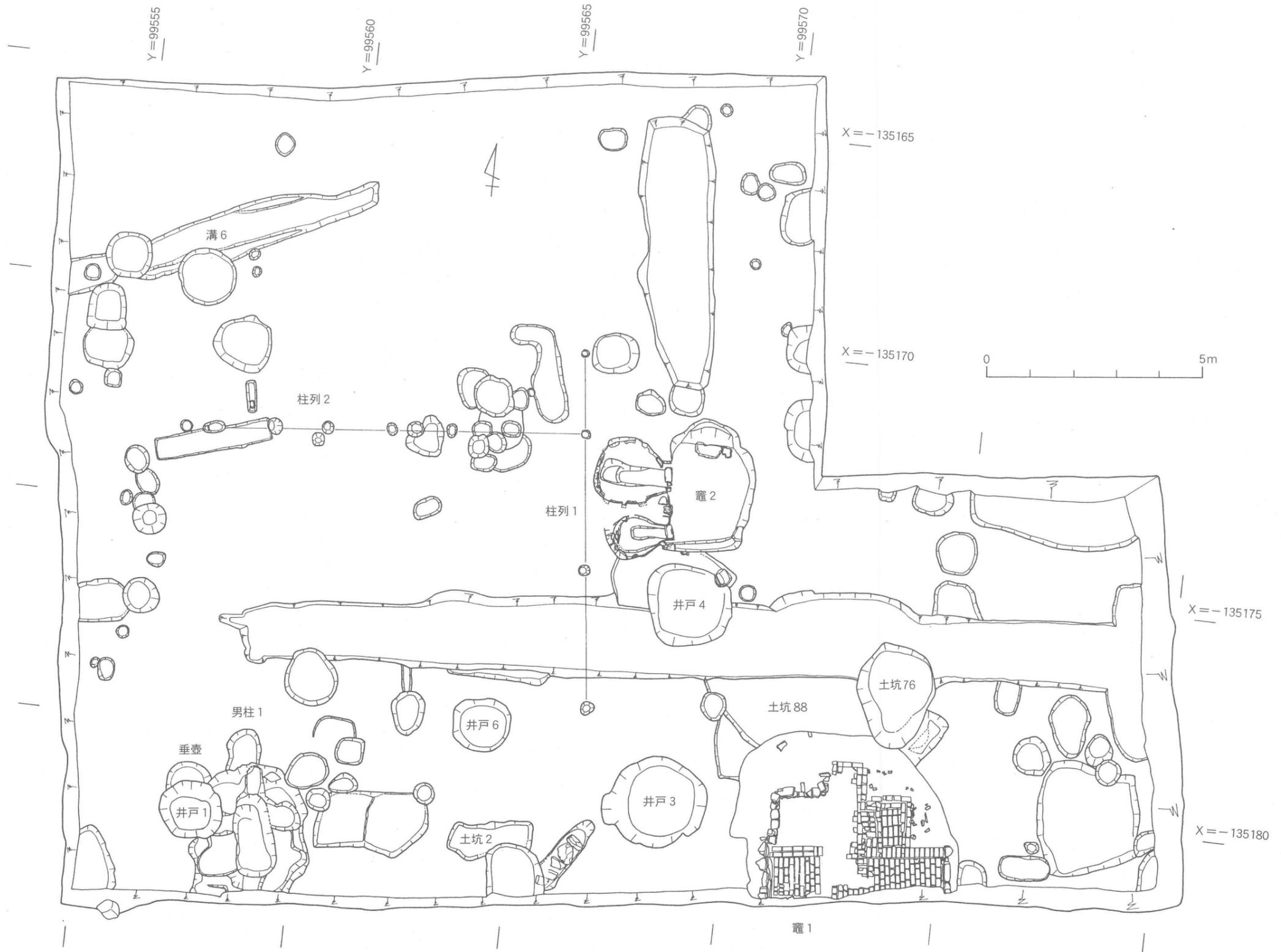
竈2（第9図）

調査区の中央部に位置する。焚口を東に向けて造られた2基連基型（2基一組）の竈である。向かっ

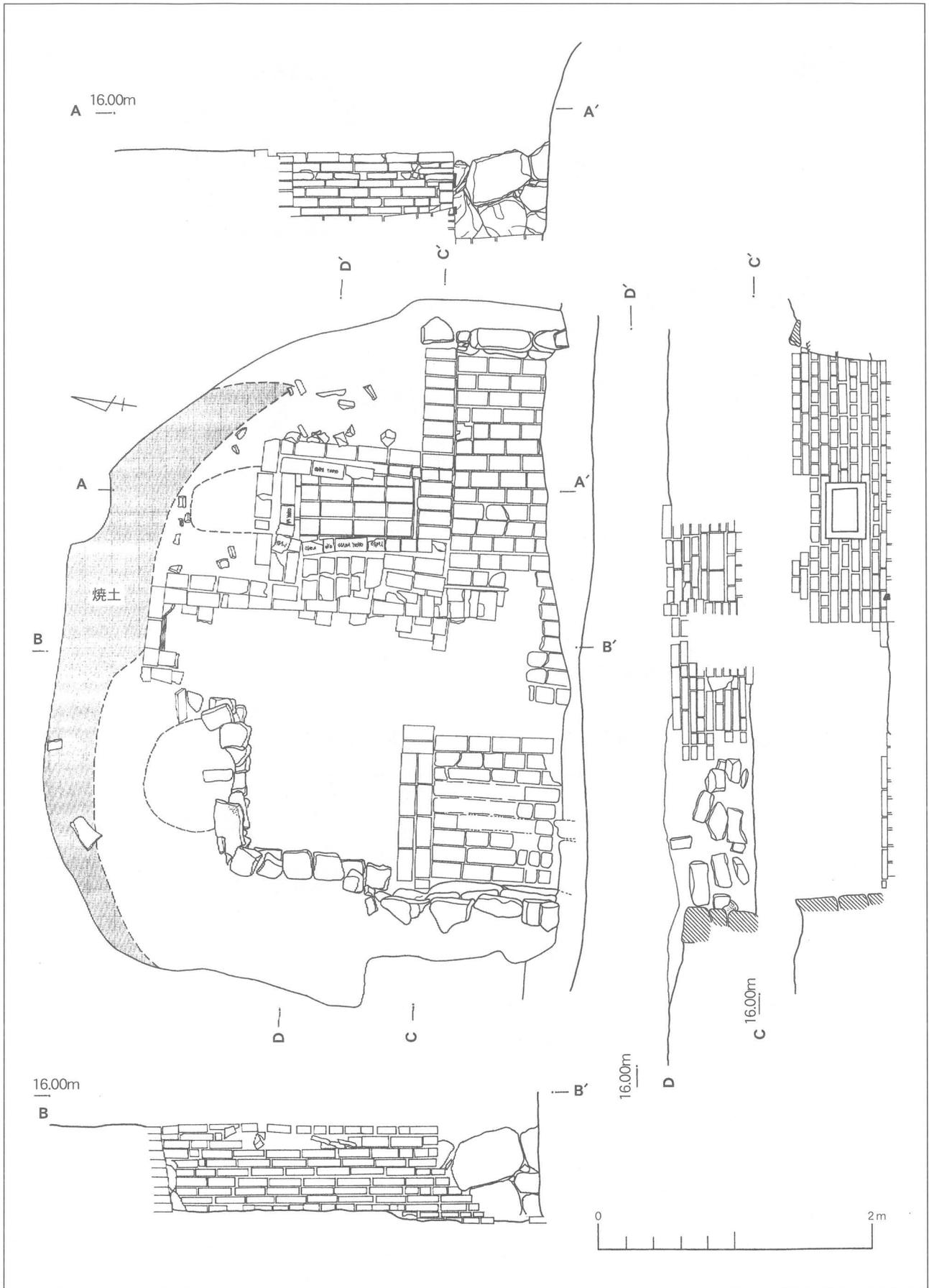


- | | | | | | | | |
|---------------|------------------------------------|---------------|--|---------------|-------------------------------|-----------------|--|
| 1. 25Y 4/6 | オリブ褐色砂質土 (微弱粘質土) | 17. 10Y R 5/4 | にぶい黄褐色砂質 (5~10cm大の礫数個 1cm大の礫多量に含む、砂粒大) | 32. 25Y 4/4 | オリブ褐色弱粘質土 (瓦を含む) | 115. 25Y 3/3 | 暗オリブ褐色砂質土 |
| 2. 5Y 3/2 | オリブ黒砂質土 | 18. 25Y 3/3 | 暗オリブ褐色砂質土 (25Y 6/3, 10Y R 6/8の粘土を多く含む) | 33. 10Y R 3/4 | 暗褐色粘質土 | 116. 25Y 4/2 | 暗灰黄色弱粘砂質土 (20cm大の石、炭を若干含む) |
| 3. 25Y 4/3 | オリブ褐色砂質土 (微弱粘質土、炭、瓦、礫 2~5cm大を多く含む) | 19. 25Y 4/3 | オリブ褐色弱粘質土 (2~10cm大の礫を多く含む) | 34. 25Y 4/2 | 暗灰黄色土 (炭を多く含む) | 117. 10Y R 5/4 | にぶい黄褐色弱粘砂質土 |
| 4. 10Y R 4/4 | 褐色弱粘砂質土 (7.5Y R 明褐色粘質土、炭を多く含む) | 20. 10Y R 6/8 | 明黄褐色粘質土 (5~10cm大の礫を多く含む) | 35. 10Y R 4/6 | オリブ褐色土 (瓦を多く含む) | 118. 25Y 4/6 | オリブ褐色粘質土 |
| 5. 10Y R 3/3 | 黒褐色土 (瓦を多量に含む) | 21. 10Y R 4/3 | にぶい黄褐色粘質土 (5~10cm大の礫を多く含む) | 36. 10Y R 4/4 | 褐色弱粘質土 (炭を若干含む) | 119. 10Y R 4/6 | 褐色弱粘質土 (炭を含む) |
| 6. 25Y 4/6 | オリブ褐色弱粘質土 | 22. 25Y 4/4 | オリブ褐色弱粘砂質土 (瓦 3~10cm大の礫を多く含む) | 37. 10Y R 4/6 | 褐色微弱粘質土 (炭、7.5Y R 6/8粘土を多く含む) | 120. 7.5Y R 5/8 | 明褐色粘質土 (炭を含む) |
| 7. 10Y R 4/6 | 褐色弱粘質土 (炭を含む、砂粒あらい) | 23. 25Y 4/3 | オリブ褐色粘質土 (2~4cm大の礫を多く含む) | 38. 10Y R 3/4 | 暗褐色微弱粘砂質土 (炭を若干含む) | 121. 7.5Y R 4/6 | 褐色粘質土 |
| 8. 25Y 4/4 | オリブ褐色土 (微細) | 24. 25Y 5/4 | 黄褐色粘質土 (礫、炭が若干含まれる) | 39. 10Y R 4/4 | 褐色弱粘質土 (砂粒あらい、3~8cm大の礫を多く含む) | 122. 10Y R 4/4 | 褐色弱粘砂質土 |
| 9. 10Y R 5/4 | にぶい黄褐色弱粘砂質土 (2~8cm大の礫を含む) | 25. 25Y 4/6 | オリブ褐色砂質土 (炭、瓦 1~2cm大の礫を含む) | 40. 10Y R 3/3 | 暗褐色強粘質土 (1~10cm大の礫を多く含む) | 123. 10Y R 3/3 | 暗褐色弱粘砂質土 (1cm大の小石を多く含む) |
| 10. 25Y 4/4 | オリブ褐色弱粘砂質土 | 26. 25Y 4/3 | オリブ褐色弱粘砂質土 (砂粒あらい やや) | 41. 10Y R 4/6 | 褐色粘質土 (1~3cm大の礫を含む) | 124. 25Y 6/8 | 明黄褐色弱粘質土 |
| 11. 25Y 4/4 | オリブ褐色粘質土 (5~10cm大の礫を数個含む) | 27. 25Y 4/6 | オリブ褐色弱粘砂質土 (砂粒あらい やや) | 42. 10Y R 3/2 | 黒褐色強粘土 | 125. 25Y 4/4 | オリブ褐色弱粘砂質土 |
| 12. 10Y R 4/4 | 褐色粘質土 (1cm大の礫、砂を含む) | 28. 25Y 3/3 | 暗オリブ褐色弱粘砂質土 (炭少し 3~15cm大の礫を含む) | 43. 10Y R 4/3 | にぶい黄褐色強粘土 | 126. 25Y 5/6 | 黄褐色粘砂質土 (129より明るい) |
| 13. 25Y 4/4 | オリブ褐色弱粘砂質土 (1~5cm大の礫を含む、砂粒大) | 29. 25Y 3/3 | 暗オリブ褐色土 (瓦ダマリ) | 44. 10Y R 4/4 | 褐色強粘質土 | 127. | |
| 14. 10Y R 5/4 | にぶい黄褐色粘砂質 | 30. 25Y 3/3 | 暗オリブ褐色弱粘質土 (1~15cm大の礫を多量に含む) | 45. 10Y R 3/4 | 暗褐色粘質土 | 128. 25Y 5/6 | 黄褐色粘砂質土 (2~4cm大の礫を含む) |
| 15. 10Y R 4/4 | 褐色弱粘質土 | 31. 25Y 4/6 | オリブ褐色弱粘質土 (炭を若干含む) | 46. 10Y R 3/3 | 暗褐色砂質土 (瓦留り) | 129. 10Y R 4/4 | 褐色弱粘砂質土 (5cm大の礫を含む) |
| 16. 10Y R | にぶい黄褐色砂質土 (6~10cm大の礫を多量に含む) | | | 47. 25Y 4/3 | 暗オリブ褐色土 (レンガ、10~15cm大の礫を含む) | 130. 10Y R 6/6 | 黄褐色粘砂質土 (砂粒あらい、1cm弱の小石を多く含む、粘質強) |
| | | | | 48. 25Y 5/4 | 黄褐色弱粘質土 (瓦ダマリ) | 131. 25Y 5/4 | 黄褐色粘質土 |
| | | | | | | 132. 25Y 5/8 | 黄褐色粘質土 |
| | | | | | | 133. 25Y 5/6 | 黄褐色粘土 |
| | | | | | | 134. 25Y 5/6 | 黄粘質土 (地山) |
| | | | | | | 135. 25Y 4/4 | オリブ褐色土 |
| | | | | | | 136. 25Y 4/6 | オリブ褐色土 |
| | | | | | | 137. 7.5Y R 5/8 | 明褐色粘質土層 (灰含む) |
| | | | | | | 138. 10Y R 5/4 | にぶい黄褐色弱粘砂質土 |
| | | | | | | 139. 25Y 4/6 | オリブ褐色土 (7.5Y 5/8) が混じっている |
| | | | | | | 140. 25Y 4/4 | オリブ褐色弱粘質土 |
| | | | | | | 141. 25Y 4/6 | オリブ褐色弱粘砂質土 |
| | | | | | | 142. 25Y 4/6 | オリブ褐色土 (炭を含む) |
| | | | | | | 143. 25Y 5/6 | 黄褐色弱粘砂質土 (1cm弱の小石、若干含む) |
| | | | | | | 144. 10Y R 4/4 | 褐色粘質土 (3~5cm大の礫を含む、砂粒あらい) |
| | | | | | | 145. 10Y R 4/4 | 褐色弱粘砂質土 |
| | | | | | | 146. 25Y 4/4 | オリブ褐色土 (2~4cm大の礫を多く含む、砂粒荒い) |
| | | | | | | 147. 25Y 4/3 | オリブ褐色弱粘砂質土 (炭、3~4cm大の礫を多く含む) |
| | | | | | | 148. 10Y R 4/4 | 褐色弱粘砂質土 (炭若干、3~4cm大の礫を若干含む) |
| | | | | | | 149. 25Y 4/4 | オリブ褐色弱粘砂質土 (8cm大の礫を含む) |
| | | | | | | 150. 25Y 4/4 | オリブ褐色弱粘質土 |
| | | | | | | 151. 25Y 5/6 | 黄褐色粘質土 |
| | | | | | | 152. 25Y 4/6 | オリブ褐色弱粘砂質土 |
| | | | | | | 153. 25Y 4/3 | オリブ褐色土 |
| | | | | | | 154. 25Y 5/4 | 黄褐色土 (15cm大の礫数個、炭を含む) |
| | | | | | | 155. 25Y 4/3 | オリブ褐色粘砂質土 (4~5cm大の礫を若干含む) |
| | | | | | | 156. 10Y R 4/3 | にぶい黄褐色粘土 |
| | | | | | | 157. 25Y 4/4 | オリブ褐色粘質土 |
| | | | | | | 158. 10Y R 5/3 | にぶい黄褐色粘土 (強い粘質) |
| | | | | | | 159. 10Y R 5/4 | にぶい黄褐色土 |
| | | | | | | 160. 25Y 3/3 | 暗オリブ褐色土 (炭、5~6cm大の礫を含む) |
| | | | | | | 161. 10Y R 4/6 | 褐色土 |
| | | | | | | 162. 25Y 3/3 | 暗オリブ褐色土 |
| | | | | | | 163. 25Y 6/8 | 明黄褐色土 |
| | | | | | | 164. 25Y 4/6 | オリブ褐色粘質土 |
| | | | | | | 165. 25Y 5/8 | 黄褐色粘質土 (1cm弱の小石若干含む) |
| | | | | | | 166. 25Y 5/8 | 黄褐色粘質土 |
| | | | | | | 167. 25Y 5/6 | 黄褐色粘砂質土 |
| | | | | | | 168. 25Y 4/6 | オリブ褐色粘質土 |
| | | | | | | 169. 10Y R 3/4 | 暗褐色土 (炭を若干含む) |
| | | | | | | 170. S D-14 | |
| | | | | | | 171. 10Y R 3/2 | 黒褐色弱粘質土 |
| | | | | | | 172. 10Y R 5/8 | 黄褐色弱粘砂質土 (砂粒粗い) |
| | | | | | | 173. 10Y R 4/4 | 褐色弱粘砂質土 |
| | | | | | | 174. 25Y 3/3 | 暗オリブ褐色砂質土 |
| | | | | | | 175. 25Y 4/4 | オリブ褐色土 (灰若干含む) |
| | | | | | | 176. 25Y 4/3 | 暗オリブ褐色砂質土 |
| | | | | | | 177. 25Y 3/3 | 暗オリブ褐色砂質土 |
| | | | | | | 178. 25Y 6/3 | にぶい黄褐色土 (瓦、1cm弱の小石、磁器碗片) |
| | | | | | | 179. 25Y 4/6 | オリブ褐色弱粘質土 (3~4cm・10cm大の礫、炭、7.5Y R 6/8の粘土を含む) |
| | | | | | | 180. 10Y R 3/4 | 暗褐色土 (1cm弱の小石、5~10cm大の礫を多く含む) |
| | | | | | | 181. 25Y 5/6 | 黄褐色粘質土 (2~4cm大の礫を多く含む) |
| | | | | | | 182. 25Y 4/3 | オリブ褐色土 (104よりやや明るく炭を含む) |
| | | | | | | 183. 25Y 3/3 | 暗オリブ褐色弱粘質土 (6cm大の石を含む) |

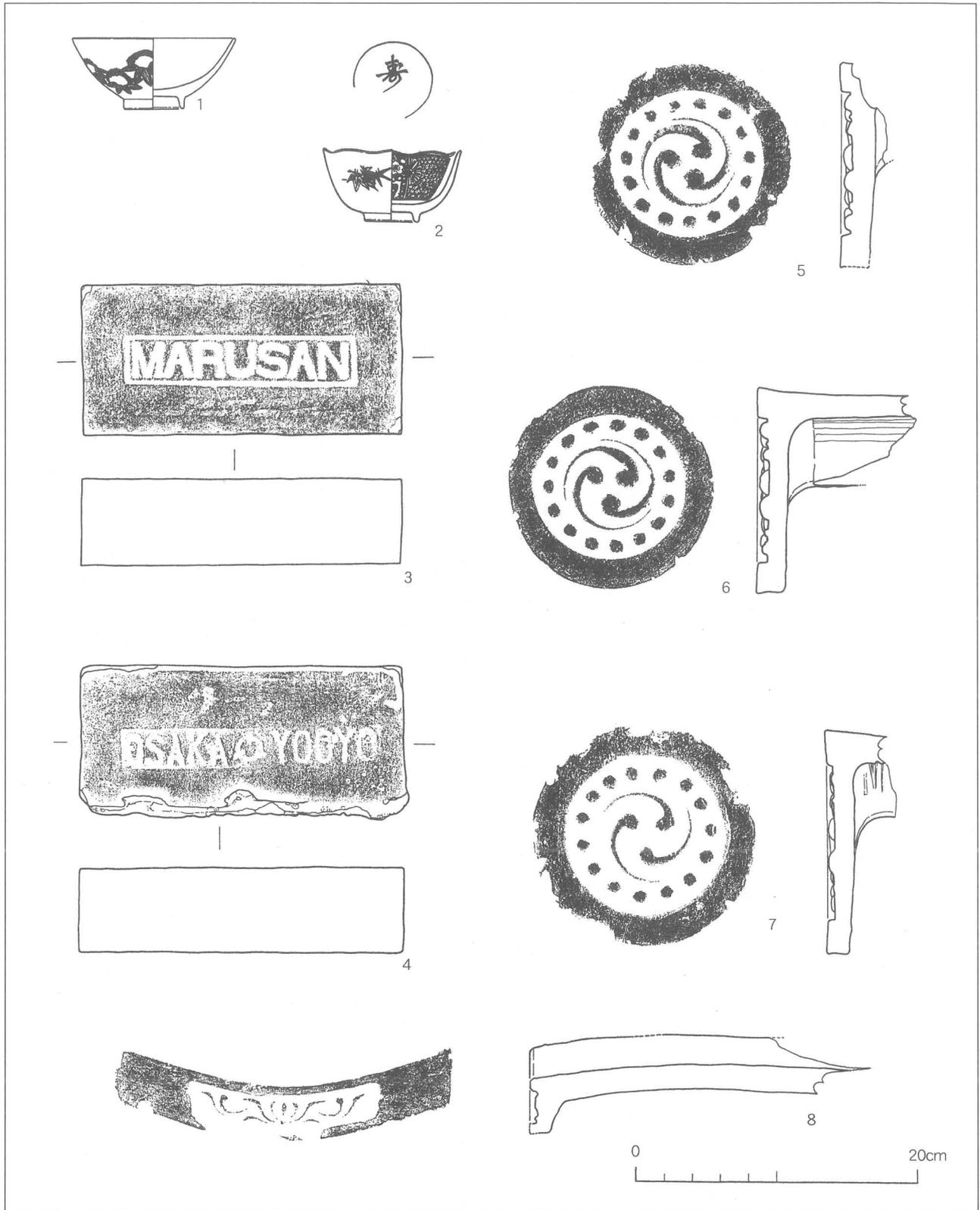
第5図 土層断面図 (1/80)



第6図 第1遺構面平面図 (1/100)



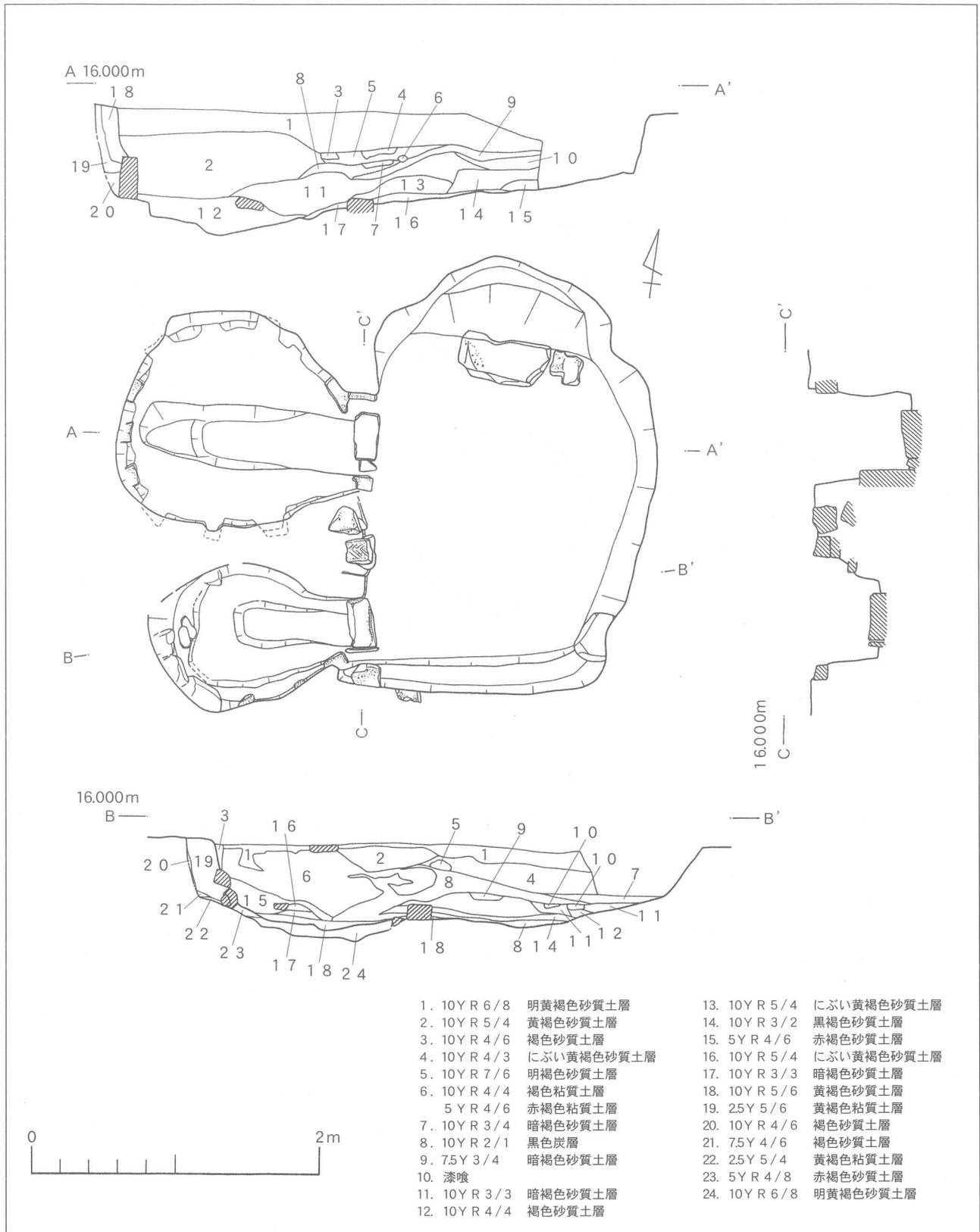
第7図 竈1 平面・断面図 (1/40)



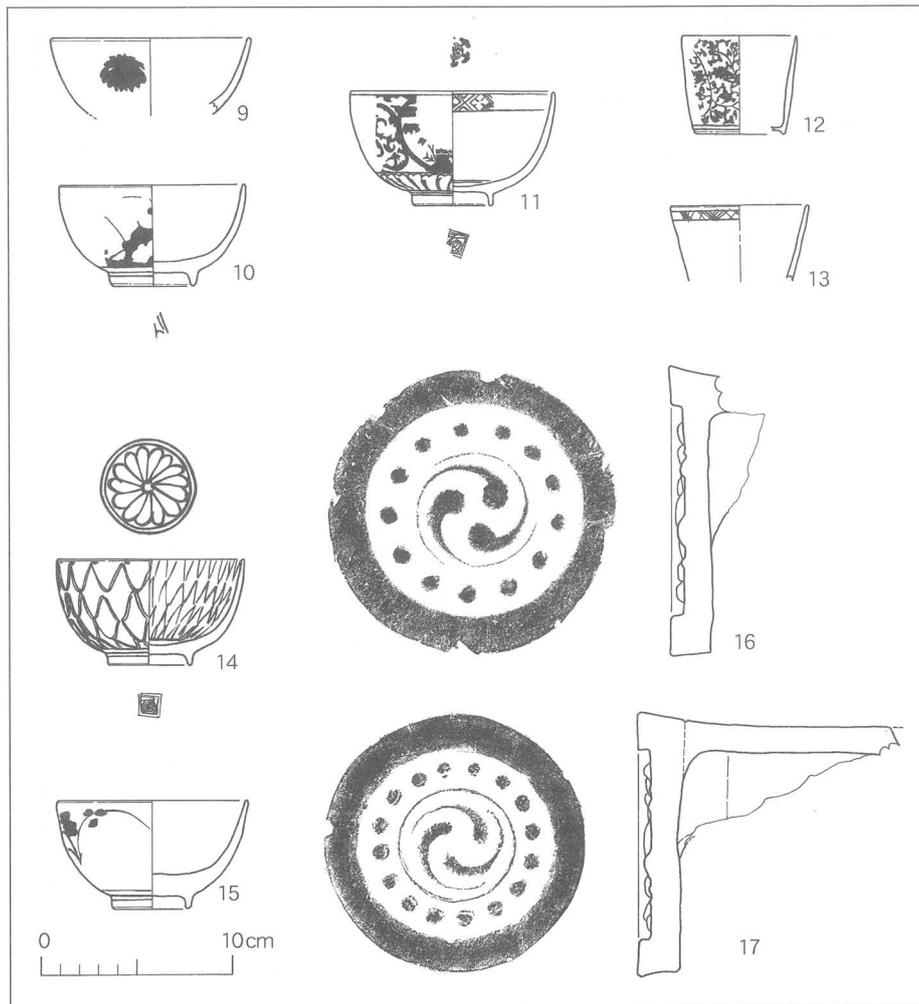
第8図 竈1・井戸4 出土遺物 (1/4)

て右側が大型、左側が小型の組み合わせとなっている。規模は右側が径1.5m、深さ88cm、左側が径1m、深さ70cmである。両方の竈とも底面に灰の掻き出し用の溝が設けられ、その溝の焚口側には長方形の石が置かれている。

竈本体の構築は、大型の石を石垣状に組み合わせた後、壁面を黄褐色粘土で覆う方法で行なわれている。焚口部は長方形の平面形を呈し、向かって右側に大型の石を配して階段が造られている。焚口部の壁面が石垣で組まれていたか明らかではないが、焚口部南壁下部に石垣の掘方と見られる溝が



第9図 かまど2 平面・断面図 (1/40)



第10図 竈2・男柱1 出土遺物（1/4）

残っていたこと、コーナーに石が一つ残っていたことから石垣が組まれていた可能性がある。

遺物（第10図、PL ）

9～11は肥前白磁染付碗である。9は口径10.4cm。外側にコンニャク印判の菊文を配す。10は口径9.6cm、器高5.4cm、底径4cm。高台畳付きは無釉で、離れ砂が付着している。外側に草花文を描き、高台内に崩れた「太明年製」を記す。11は口径10.6cm、器高6.1cm、底径2.2cmを測る。高台畳付きは無釉である。内面見込みに手描きの五弁花を、高台内に「渦福」を配す。

12・13は肥前白磁染付そば猪口である。12は口径6cm、器高5.3cm、底径4.6cm。高台畳付きは無釉である。外側に唐草文を描く。13は口径7.2cmを測り、外側口縁部に斜格子文を帯状に配す。18世紀頃のものである。

男柱（第11図）

調査区の南東部で検出した酒搾り遺構である。井戸1など複数の遺構と重複しているため、遺構の形状が不明瞭であるが、男柱を埋め込んだ遺構中央部が一段深く掘られ、男柱下部に通した横木（貫）の掘方が両側に長く伸びる形状は男柱遺構の特徴である。また、垂壺を埋め込んでいた掘方は井戸1の北側に位置している。

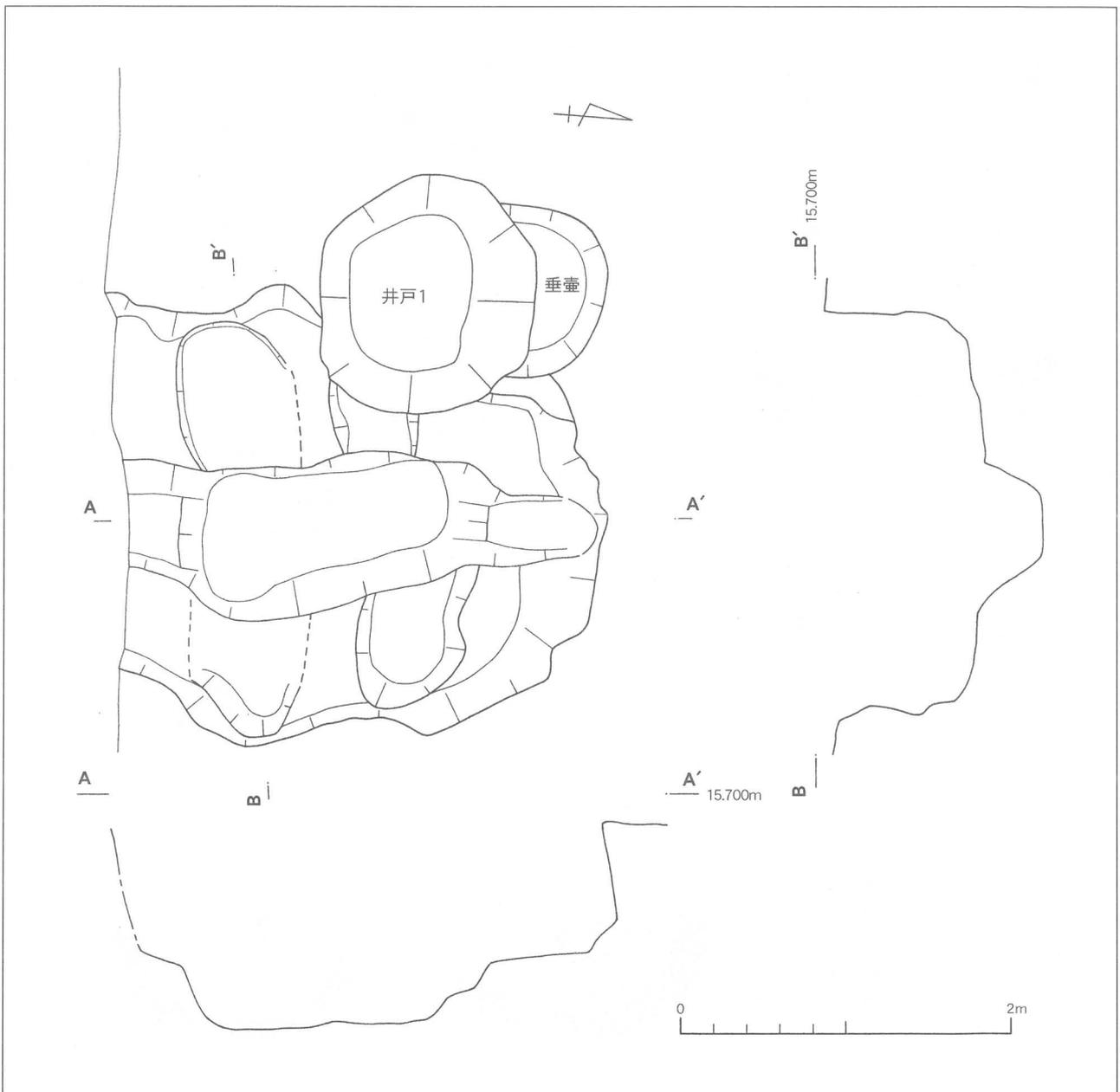
遺構の南側が未調査となっていることから、全体の規模は明らかではないが、検出長は2.94m、深さ1.3mである。

遺物 (第10図、PL.7)

14・15は肥前白磁染付碗である。14は口径9.8cm、器高5.1cm、底径2.4cm。高台畳付きは無釉である。外側に二重網目文、内側に網目文を描き、内面見込みに菊文を描く。15は口径10cm、器高5.8cm、底径4cm。高台畳付を除き全釉するが、内面見込みは蛇の目釉剥ぎする。

16・17は軒丸瓦である。瓦当文は左巻三巴文。16は瓦当径15.5cm、外縁幅2.1cm、瓦当側面厚2.1cm、外縁高0.6cmを測る。珠文は13個。巴は頭が大きく密接して配され、細長い尾を引く。外縁はヨコナデ調整。瓦当裏面は周囲をヨコナデし、中心は指オサエと不定方向にナデ調整する。丸瓦凸面はミガキ、瓦当周辺はヨコナデする。瓦当面にキラコが僅かに確認できる。黒灰色を呈し、胎土中に長石・石英等5mm以下の砂粒を含む。

17は瓦当径14cm、外縁幅2cm、瓦当側面厚2.2cm、外縁高0.6cmを測るやや小振りの瓦である。珠文は16個。巴の周りに圈線が巡る。外縁はヨコナデ調整し、瓦当裏面は周囲をヨコナデし、中心はナデ調



第11図 男柱1 平面・断面図 (1/40)

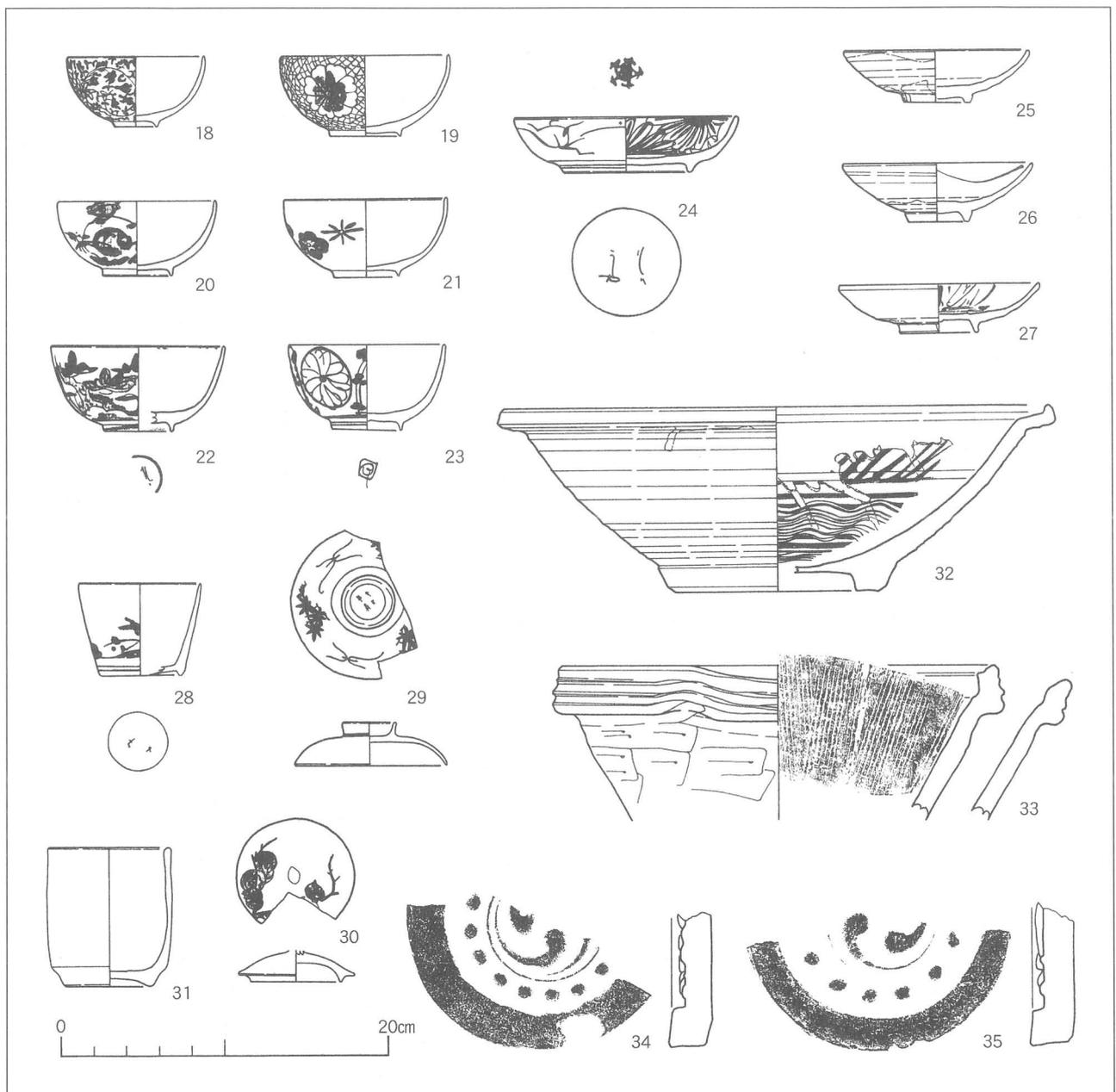
整する。丸瓦凸面はミガキ、瓦当から4cmほどはヨコナデする。凹面は布目痕が残り、瓦当との接合部は丁寧にヨコナデする。黒灰色を呈し、胎土は砂粒を含む。17世紀後半から18世紀頃のものである。

井戸3 (第6図)

調査区の南側、竈1の西側に位置する。酒造用の井戸と考えられるもので、径2~2.2mの大型の井戸である。掘り下げて検出したため、井戸の上部施設は残っていない。井戸内部は素掘りである。井戸底まではかなり深いと推定されるが、危険防止のため約1m掘り下げて掘削を止めた。埋土から多数の陶磁器が出土している。

遺物 (第12図、PL.7・8)

18~23は肥前白磁染付碗である。18は口径8.4cm、器高4.4cm、底径2.6cmを測る。小さな高台を持つ丸みを帯びた小振りの碗で、口縁部は内湾する。高台畳付きは無釉。外側に唐草文を描く。19は口径



第12図 井戸3 出土遺物 (1/4)

10.3cm、器高5.1cm、底径4.1cm。低い高台を持つ丸みを帯びた碗で、口縁部は内湾する。18より一回り大振りである。高台畳付きは無釉。外側は網目文と菊文を描く。20は口径9.7cm、器高4.7cm、底径4.2cm。細く短い高台を持ち、体部は丸みを帯びて内湾気味に立ち上がる。高台畳付きは無釉。外側に松竹梅を描く。21は口径9.9cm、器高4.85cm、底径3.9cmを測る。低い高台を持ち、体部は丸みを帯びて内湾気味に立ち上がる。高台は無釉である。外側に花文を描く。22は口径10.5cm、器高5.3cm、底径4cmを測る。高台畳付きは無釉で、離れ砂が付着する。外側に松文を描き、高台内に崩れた「太明年製」を記す。23は口径9.6cm、器高5.3cm、底径4.25cm。高台畳付きは無釉である。高台内に崩れた「渦福」を記す。

24は肥前白磁染付皿である。口径13.5cm、器高3.5cm、底径7.6cm。高台畳付きは無釉。外側に唐草文が巡り、内側に菊文を描く。内面見込みにはコンニャク印判の五弁花を配し、高台内には崩れた「太明年製」を記す。呉須の発色が悪く、オリーブ灰色を呈す。25は肥前陶器皿である。口径11.2cm、器高3.3cm、底径4cm。外面はロクロ成形痕がそのまま残り、高台は削り出しによる。内面から外面上半に灰オリーブ色の釉を掛けるが、内面見込みは蛇の目釉剥ぎし、体部下半から高台内にかけては無釉である。胎土は黄灰色を呈し、精良である。26は肥前陶器皿である。口径11.6cm、器高3.7cm、底径3.8cm。高台は削り出しによる。高台から高台内は無釉であるが、灰白色釉を内外面に施釉し、内面見込みは蛇の目釉剥ぎする。内面に明オリーブ灰色の釉で文様が描かれている。胎土は灰白色を呈し、精良である。27は肥前陶器皿である。口径12.2cm、器高3cm、底径4.8cm。内外面に灰褐色の釉を施釉する。高台から高台内は無釉で、内面見込みは蛇の目釉剥ぎする。内面には白色の釉による文様が入る。28は肥前白磁染付そば猪口である。口径7.5cm、器高5.8cm、底径5cm。高台畳付きは無釉で、内側に離れ砂が付着する。29は肥前白磁染付蓋である。口径9.3cm、器高2.7cm、つまみ径3.4cm。つまみ端部は無釉であるが、他は全面施釉する。つまみ内に「太明年製」を記す。30は肥前白磁染付合子蓋である。口径5.6cm、残存高1.9cm。口縁端部は無釉であるが、他は全面施釉する。外側に青・朱・金色で柿を描いている。

31は陶器湯呑みである。口径7.2cm、器高8.6cm、底径5.2cm。高台は断面三角形に緩く削り出されている。ロクロ成形後のヨコナデ調整は丁寧になされ、口縁端部はやや肥厚気味に丸くおさめている。にぶい赤褐色を呈し、精良な胎土である。備前焼であろうか。32は刷毛目唐津焼大鉢である。口径33.4cm、器高11.4cm、底径12.4cm。外面はロクロ成形痕がそのまま残り、高台は削り出しである。高台の外側が僅かに斜めに削り落とされている。底面の器壁は体部壁に比べ極端に薄く仕上げられている。口縁は折縁を呈し、端部を上方に摘み上げている。外面口縁の釉はオリーブ灰色、胎土は明赤褐色を呈し、精良である。

33は堺焼播鉢である。口径26.4cm。外面体部はヨコ方向にヘラケズりする。櫛目は12本単位で、密に施される。口縁端部は内傾する平坦面を持ち、体部との境の段は明瞭ではない。外面は赤褐色、内面はにぶい橙色を呈す。

34・35は軒丸瓦である。34は右巻三巴文を瓦当文とする。巴文と珠文の間に圏線が巡る。瓦当径は約16.4cm、外縁幅2.6cm、瓦当側面厚2.4cm、外縁高0.7cmを測る。文様高は外縁高に比べてかなり低い。外縁はヨコナデ調整し、瓦当裏面は周囲を強くヨコナデしている。黒灰色を呈し、胎土中には雲母と3mmほどの砂粒を含んでいる。35は左巻三巴文を瓦当文とする。瓦当径16cm、外縁幅2.2cm、瓦当側面厚2.6cm、外縁高0.7cmを測る。文様高は34に比べると高くなっている。外縁はヨコナデ調整し、瓦当裏面は周囲をヨコナデし、中心は面取り状にナデを加える。黒灰色を呈し、胎土は精良である。18世紀前～中頃の所産であろう。

井戸4 (第6図)

竈2の南側に隣接する。平面形が隅丸方形を呈する大型の井戸である。規模は1.9m×1.95m。掘り

下げて検出したため、井戸の上部施設は残っていない。井戸内部は素掘りである。危険防止のため約1mの掘削で止めている。

遺物（第8図）

7は軒丸瓦である。瓦当文は左巻三巴文。珠文は15個で、巴の頭は接近しておらず、尾は外方に延びる。瓦当径16cm、外縁幅2.4cm、瓦当側面厚1.6cm、外縁高0.5cmを測る。外縁はヨコナデ、瓦当裏面は周囲を強くヨコナデして、中心は横方向にナデる。丸瓦凸面はミガキ、凹面は接合部に横方向のヘラ掻きを入れる。瓦当面に離砂が付着している。灰黒色を呈し、5mm以下の砂粒を含む。

8は軒平瓦である。瓦当文様は17葉2点唐草文。上弦幅24.3cm、下弦幅4cm、瓦当厚3.9cm、脇区幅5.4cm、内区上弦幅13.2cm、内区下弦幅13.3cm、内区瓦当厚2.4cm、顎深3cm。顎部を横方向にナデ、それにつづく平瓦凸面は縦横にナデる。凹面は縦方向にハケ目調整した後、ヨコナデを加え、さらに瓦当付近を横方向にナデる。脇区にキラコが残っている。黒灰色を呈し、胎土に5mm以下の砂粒を含む。

土坑2（第6図）

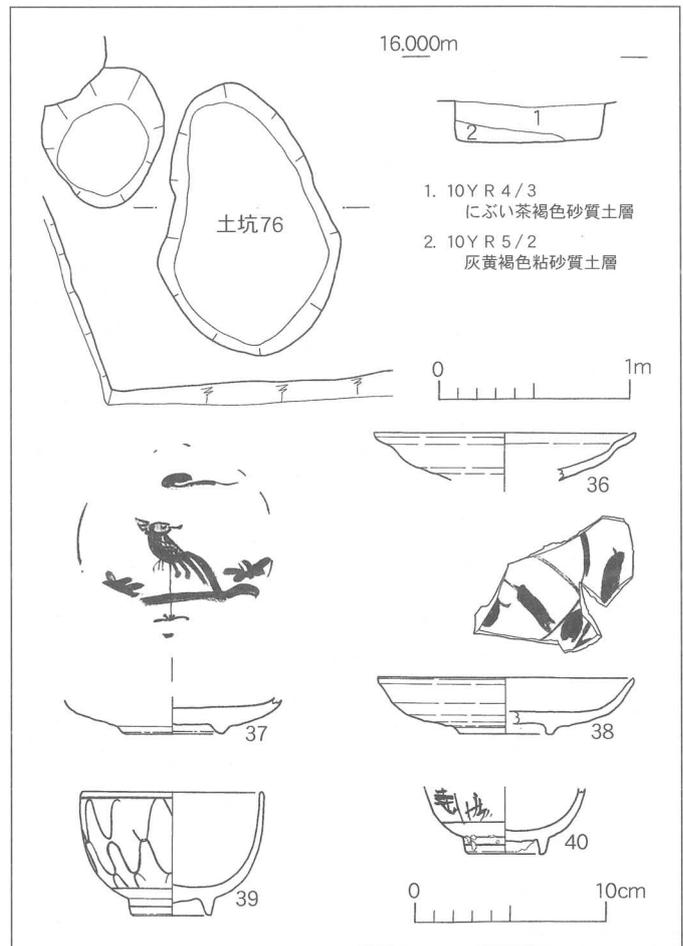
調査区の南側に位置する。土坑の南側を土坑1に切られている。平面形は長方形を呈する。規模は1.94m×84cm、深さは最も深いところで22.4cmある。

遺物（第14図）

41は焙烙である。口径22.4cm。体部は内湾気味に高く立ち上がり、口縁端部は内傾する面を持つ。外面はヨコナデ調整の後、指オサエする。底部と体部との境には右上がりのタタキを施す。内面は刷毛状工具による強いヨコナデ調整する。外面には煤が付着しており、タタキ目には煤が溜まっている。胎土は明黄橙色を呈し、雲母・クサリ礫が目立つ。

42は肥前白磁染付輪花皿である。口径13.2cm、器高3.7cm、底径4.8cm。内外面には青白色の釉が掛かる。高台畳付は無釉で、離れ砂が付着する。外面にはロクロ成形痕の凹凸が残る。

43・44は丹波焼播鉢である。43は口径26.6cm。口縁部はそのまま切り離した状態を呈し、口縁端部は平坦面をなす。口縁部内面に段を有し、体部内面に5本単位の櫛目を設けている。内外面はロクロナデを施し、外面の粘土紐巻き上げ痕に指オサエを加えている。口縁上端から内面に泥土を塗布し、器壁はにぶい褐色を呈する。胎土はにぶい黄橙色を呈し、長石・砂粒を含む。44は口径35.4cm。口縁部は上下に拡張し、断面三角形を呈する。口縁外面は強くナデられ凹線を巡らせたようになっている。内面口縁部と体部の境に段を有し、6本単位の櫛目を設ける。内面は丁寧にロクロナデを施し、外面にはロクロナデによ



第13図 土坑76 平面・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

る凹凸が残る。胎土は還元焰焼成で焼き締まった灰色を呈し、長石・石英・砂粒を含む。器壁はにぶい褐色を呈する。17世紀中葉頃の所産であろう。

土坑76（第13図）

調査区の東側、竈1の北側に位置する。土坑88と重複関係にあり、土坑88を切っている。平面は不整形を呈している。規模は1.45m×96cm、深さ24cmである。

遺物（第13図、PL.9）

36は肥前青磁皿である。口径13.6cm。内外面にオリブ灰色の釉を施釉するが、外面体部下半は無釉である。37は肥前白磁染付皿である。底径4.9cm。高台畳付は無釉で、離れ砂が付着する。外面の釉は厚ぼったい白色を呈するが、内面は青味がかっている。見込みに花鳥図を描く。呉須は淡い藍色を呈し、少し滲んでいる。38は肥前白磁染付皿である。口径13.5cm、器高3cm、底径4.8cmを測る。高台畳付は無釉で、離れ砂が付着する。釉はやや青味がかっている。外面はロクロ成形の凹凸が残るが、口縁端部は丁寧に薄く仕上げている。内面に草花を描く。39は肥前白磁染付一重網目文碗である。口径9.4cm、器高6.6cm、底径4.1cmを測る。高台畳付きは無釉で、離れ砂が付着する。外面にはロクロ成形痕が見られる。網目は途中途切れ、稚拙な描き方である。40は肥前白磁染付碗である。底径3.5cm。高台畳付は無釉で、離れ砂が付着する。釉掛けされたところには粗い貫入が入っている。外面高台付近に釉が厚く溜まっている。17世紀後半の所産であろう。

土坑88（第6図）

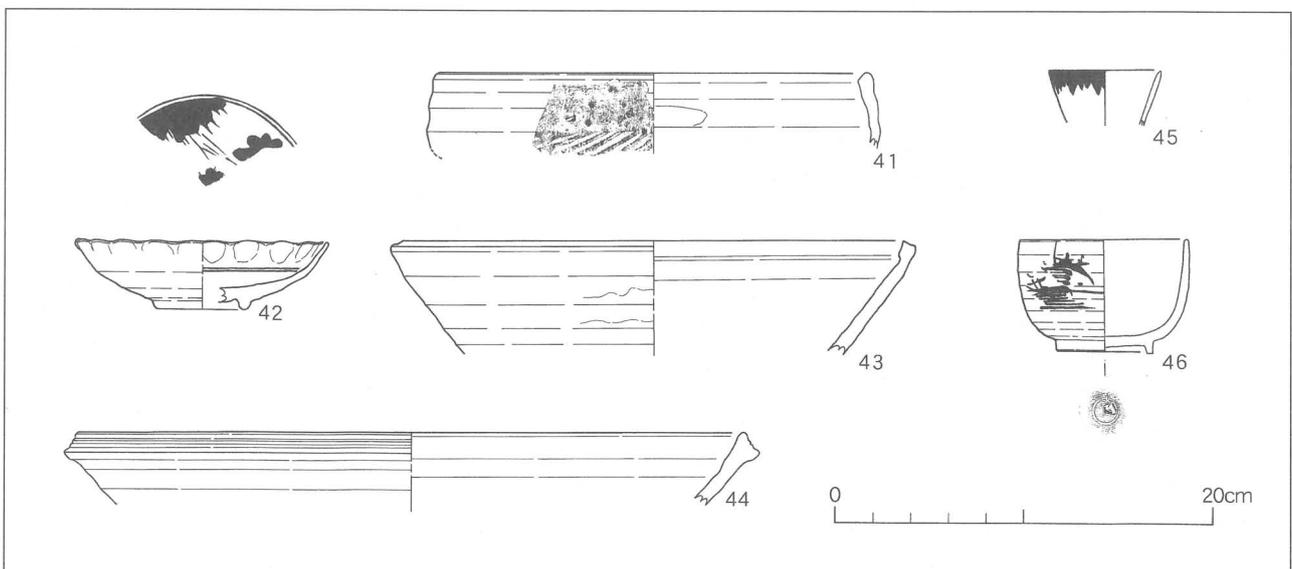
調査区の東側に位置する。土坑76、竈1、トレンチに切られている。遺構の範囲はトレンチの北側まで続いており、規模は南北3.2m以上、東西4.4m以上と考えられる。深さは、最深部で70cmとなる。

遺物（第14図）

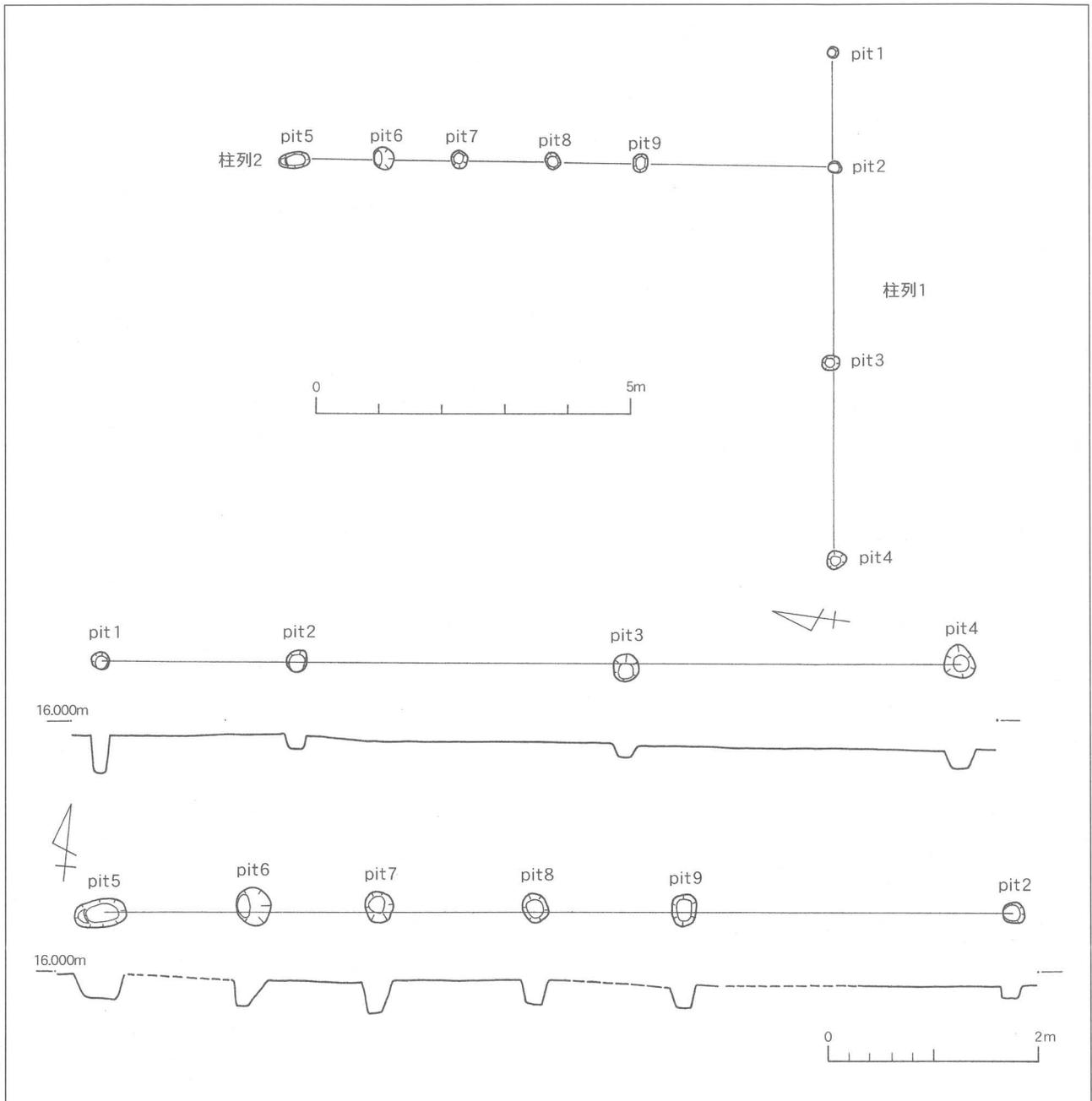
45は肥前白磁染付猪口である。口径5.8cm。口縁外側に雨降り文を巡らせる。46は肥前陶器碗である。口径8.8cm、器高6.1cm、底径5cm。内外面に透明釉を施釉し、高台以下は無釉である。高台内に「清水」の刻印がある。外面はロクロ成形による凹凸が残る。外側に山水文を描いている。胎土は白色を呈し、精良である。17世紀後半頃の所産であろう。

柱列1・2（第15図）

調査区の中央部に位置する。柱列1は南北方向に4個の柱穴が一行に並び、柱列2は、柱列1の柱



第14図 土坑2・88出土遺物（1/4）



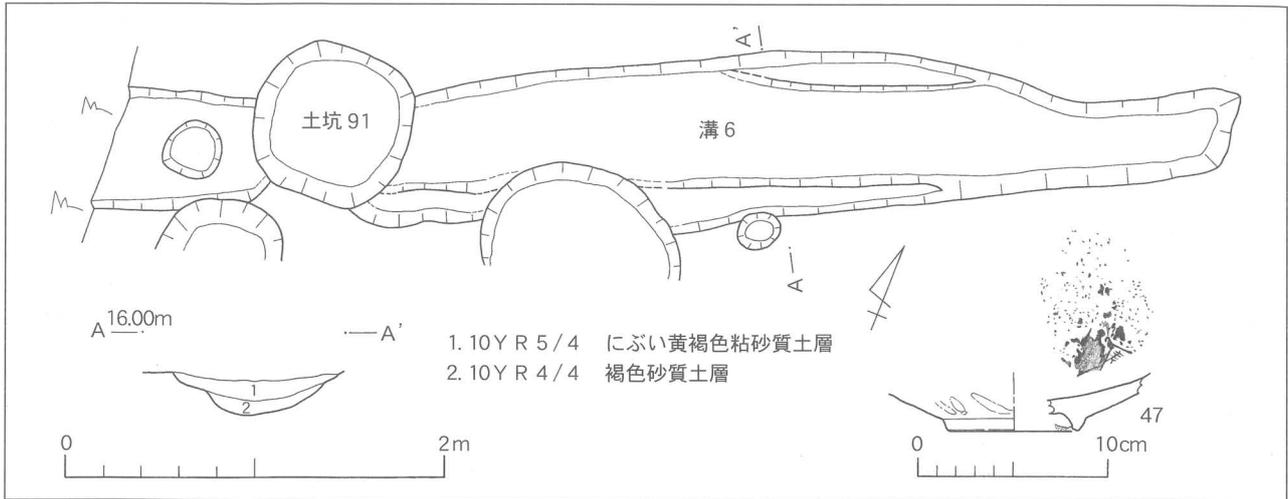
第15図 柱列1・2 平面図 (1/50)・断面図 (1/30)

穴の一つから西側に延びている。柱列2の柱穴の数は6個である。二つの柱列が直行することから、一連の遺構と考えられる。

柱列1は、径17~30cmほどの小規模な穴が、北から1.85m、3.15m、3.2mの間隔で並ぶ。また、柱列2は、25~35cmの穴が、東から1.72m、1.4m、1.45m、1.45m、1.2m、2.1mの間隔で並んでいる。柱の間隔が一定していないことや、穴の規模が小さいことなどから、建物の柱穴ではなく屋敷の周囲に設けられた塀と考えられる。

溝6 (第16図)

調査区の北西部に位置する。西壁から北東方向に延びているが、途中で消滅する。検出長は7.5mである。幅は一定せず、東へ行くにつれて細くなっていく。最も幅が広いところで1.15m、狭くなったところで54cmである。深さは15~25cm、溝の南側は2段に立ち上がっている。



第16図 溝6 平面・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)

遺物 (第16図)

47は肥前白磁染付皿である。底径6.8cm。高台畳付きは無釉で、離れ砂が付着する。内外面に淡緑灰色の釉が掛かり、内面には「春」字を配し、吹墨を施す。呉須の発色は良く、青色を呈す。17世紀後半の所産であろう。

第2遺構面 (第17図)

第2遺構面は、地山面上で検出した安土桃山時代以前の遺構面である。検出した遺構は、堀跡、溝跡、土坑などで、有岡城の防御施設に関する遺構が占めており、建物跡など生活に関する遺構は検出されていない。

堀1 (第18図)

堀1は、調査区を斜めに横断し調査区外へ続いている。堀跡の形状は、断面形は逆台形を呈し、東側が幅広く、西側に行くにつれ細くなっている。また、調査区の中央やや西寄りで堀が一段立ち上がり、それより西では浅くなっている。これは浅い堀だったものを、後に深く掘り直したとも考えられるが、最初から計画的に造られた可能性もある。

堀の規模は、幅の広い東壁際で幅4m、深さ1.32m、幅の狭い西壁際で幅2.85m、深さ80cmとなる。

遺物 (第19図、PL.9)

48～51は土師器皿である。指オサエして窪ませた底部から、外方へ大きく開く口縁部からなる。外面口縁部下半に顕著な指頭圧痕を加えて、口縁をさらに外反させている。内面はヨコナデ調整するが、特に底部と口縁部の境は強くヨコナデしている。胎土は浅黄橙色を呈し、雲母・クサリ礫等を含み精良である。量的に一番多く出土しているが、細片のため図示出来るものは少ない。48は口径6.8cm、器高1.8cmを測る小皿である。49は口径9cm、器高1.4cmを測る浅い皿である。50は口径9.3cm、器高1.6cm。51は口径9.4cm、器高2.1cm。口縁部外面には2段の指オサエを加えている。

52は志野輪花皿である。口径10.2cm。内外面にしのぎを入れている。内外面に長石釉を施し、粗い貫入が入っている。胎土は白色を呈し、精良である。

53は丹波焼壺である。底径6.5cm。内外面にはロクロ成形痕が残る。内面と外面底部付近まで褐色釉が掛かり、外面は褐色、胎土は明黄褐色を呈し、精良である。

54・55は瀬戸・美濃焼天目碗である。54は口径12cm。内外面に鉄釉を掛ける。55は口径12.1cm。外面下半に錆釉を掛け、内外面に鉄釉を上掛けする。

56は景德鎮窯白磁皿である。口径11.6cm、器高3cm、底径6.4cm。高台畳付をのぞいて白色釉が施釉

され、畳付には離れ砂が付着している。磁胎は白色で、精緻である。57は青花皿である。口径9.8cm。58は青花碗高台である。底径4.2cm。内外面に青みがかったガラス質の釉が掛かっているが、高台畳付は無釉である。見込みが盛り上がる饅頭心を呈している。呉須の発色は良好で、濃紺を呈している。磁胎は白色で、精緻である。

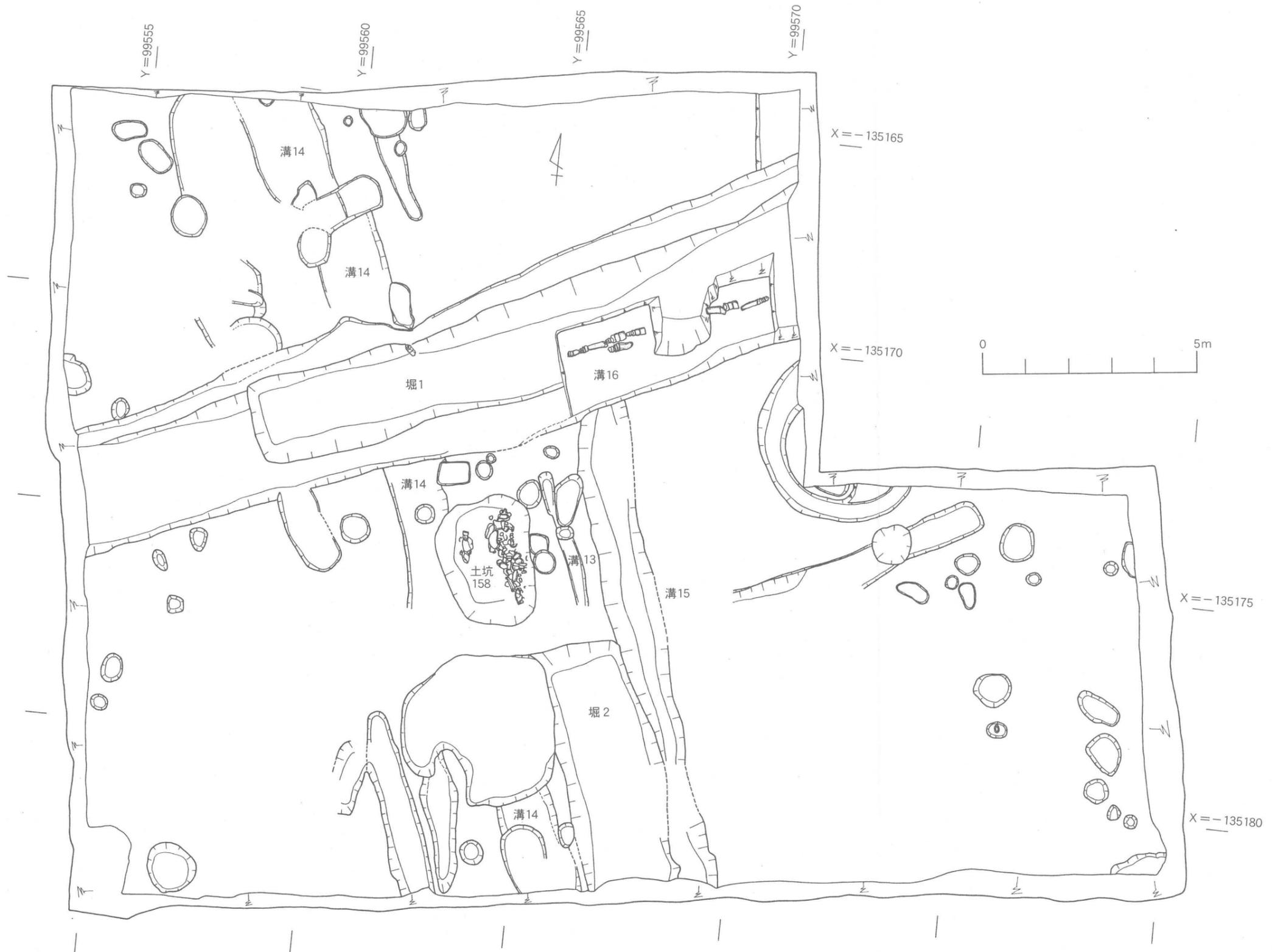
59～61は和泉D型瓦質羽釜である。59は口径22.7 cm。幅の狭い罫に内傾する口縁部がつづく。外面はヨコナデ、内面はハケ目調整する。罫下面に凹線状の段が巡っている。外面口縁部には凹線が巡っているようだが、表面磨耗のため不明瞭。内外面は灰黒色、胎土は橙色を呈し、雲母・クサリ礫・長石等の砂粒を含む。60は口径26.8 cm。幅の狭い罫に内傾して立ち上がる口縁部からなる。口縁部外面には凹線を巡らせる。外面はヨコナデ、内面は口縁部をハケ目調整、以下をヨコナデ調整する。罫下面から体部には煤が付着する。外面は灰色を呈するが、内面は炭素吸着が悪く灰黄色を呈する。胎土は灰白色を呈し、雲母・砂粒を含む。61は口径24.2 cm。球形の体部と内湾する口縁部からなり、幅の狭い罫を巡らす。口縁部外面には段を有する。内面口縁部はハケ目調整、胴部もハケ目調整と思われるが不明瞭である。胴部外面は横方向にヘラケズリする。罫以下に煤が付着している。内外面は灰黒色、胎土は橙色を呈し、雲母・クサリ礫・砂粒を含む。

62は丹波焼播鉢である。口径30cm。4本単位の幅の広い櫛目を設けている。内面は丁寧にロクロナデ調整、外面もロクロナデするが、粘土紐巻き上げ痕が残っている。胎土は橙色を呈し、石英・長石等の砂粒を含む。16世紀後半頃のものであろう。

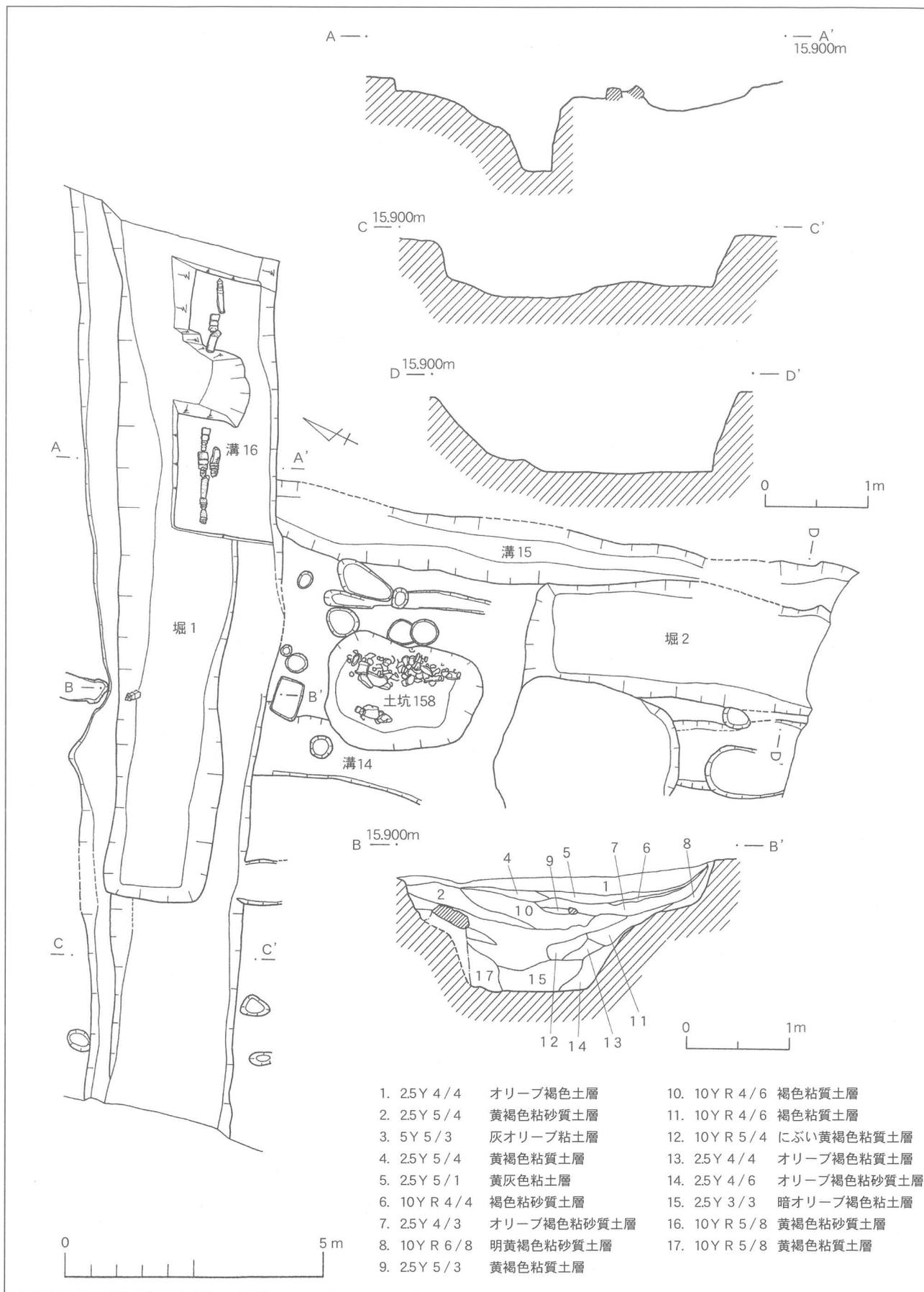
63～66は備前焼播鉢である。口縁形態にはバラエティーがある。64は口径28.6 cm。櫛目は8本単位で設けられるが、空白部分が多い。口縁部は上下に拡張され、口縁端部は先細りを呈する。口縁外面は強くヨコナデする。内外面とも丁寧にロクロナデ調整する。器壁はにぶい褐色、胎土は褐色を呈するが、一部還元焰焼成で焼き締まった灰色を呈している。砂粒・小石を含み粒子は粗い。63は口径29.2 cm。口縁は切り離れたままの状態をなしているが、僅かに上下端部をつまんでいる。7本単位の幅の狭い櫛目を設けているが、空白部分が多い。内外面はロクロナデ調整するが、内面はナデによる凹凸が残っている。胎土は褐色を呈し、小石や砂粒を含み粒子が粗い。器壁は内面から口縁部外面にかけては灰色、他はにぶい赤褐色を呈する。65は口径28.5 cm。口縁部は上方に立ち上がり、下方にも若干拡張されて幅の広い口縁帯を持つ。口縁端部は内側に肥厚している。櫛目は口縁の下から施されている。胎土は明赤褐色を呈し、小石・砂粒を含み粒子が粗い。器壁内面はにぶい赤褐色、外面は灰褐色に発色する。66は口径26.2 cm。口縁部は内傾気味に上方に立ち上がり、端部は強いヨコナデにより内傾する面を持つ。外面には凹線が巡る。外面顎部が小さく張り出している。体部はロクロナデによる凹凸がよく目立つ。5本単位の櫛目を設ける。外面口縁部周囲に黄ゴマが掛かっている。胎土は灰色を呈し、粒子は細かく精緻である。器壁は口縁から内面にかけて灰色、外面体部はにぶい赤褐色に発色する。備前焼播鉢について乗岡実氏の編年（乗岡2000）で比較すると、63が中世Ⅲb期、64が中世Ⅳ期、65が中世Ⅴa期、66が近世Ⅰa期に該当する。

67は円筒埴輪の体部片である。器壁最大厚は0.9cm。外面はタテハケ、内面はタテハケを施し、一部ヨコナデでナデ消している。外面は橙色、内面はにぶい橙色を呈する。無黒斑で土師質であるが、断面の中心は黒色化している。焼成はやや硬質。胎土は金雲母・クサリ礫・長石・石英等の4mm以下の砂粒を多く含む。68は円筒埴輪の突帯付近の破片である。器壁最大厚0.9 cm、突帯高さ1.1 cmを測る。突帯は突出度が高く、断面が細長い台形を呈している。端面は幅が狭く、強くヨコナデしているようである。器壁の磨耗が著しく、器面調整は内外面ともに不明。突帯下面において、張り付け時のヨコナデが認められる。内面は突帯裏面に横方向の指オサエ痕が残る。

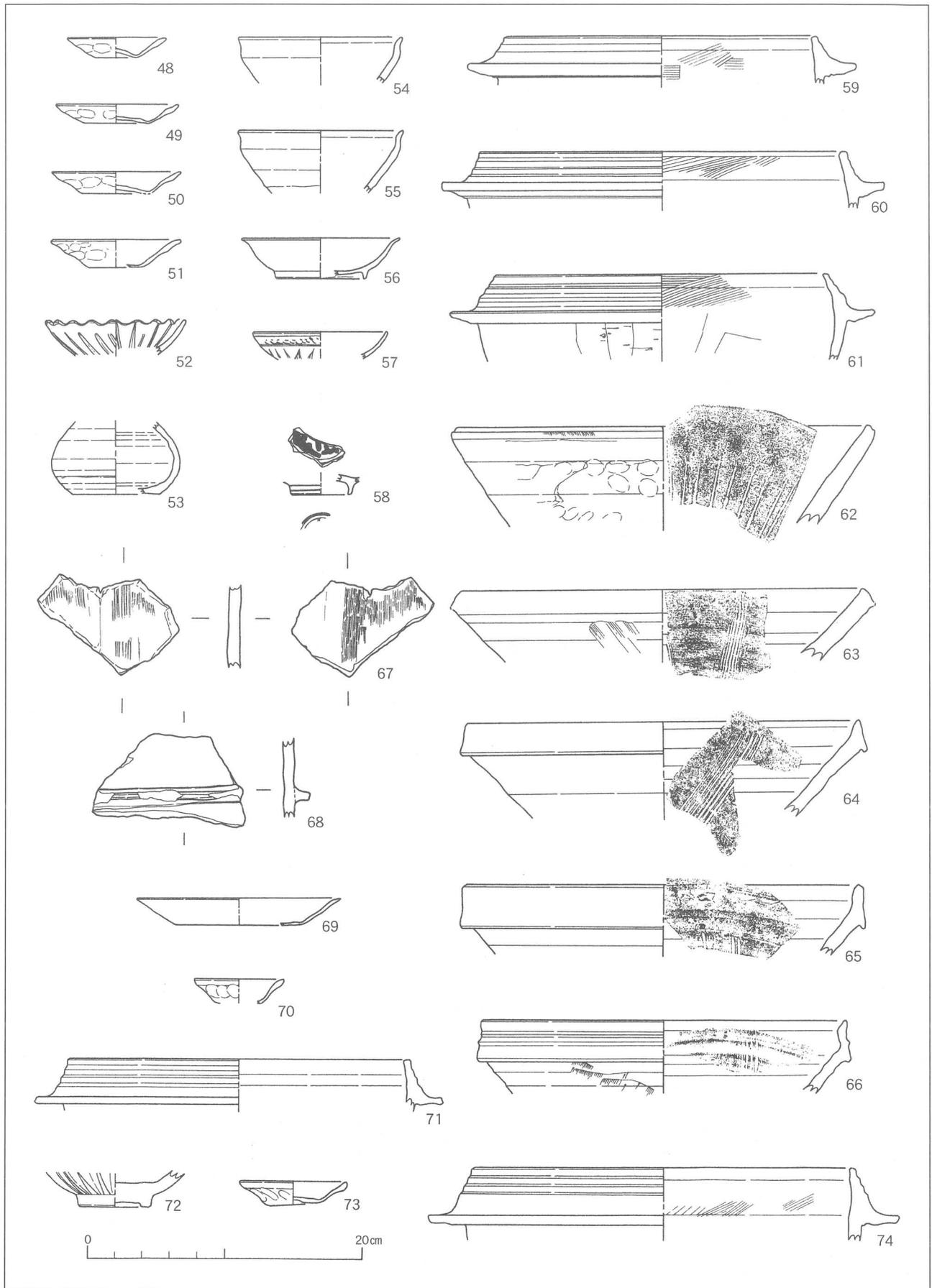
無黒斑であるが、断面の中心は黒色化している。土師質で、焼成はやや軟質。内外面は橙色を呈し、



第17図 第2遺構面平面図 (1/100)



第18図 堀1・2、溝14・15・16 平面・断面図 (1/100、1/50)



第19図 堀1・2、溝15、土溝164 出土遺物 (1/4)

胎土には金雲母・石英・長石等の3mm以下の砂粒を多く含む。

堀2 (第19図)

堀2は、調査区の中央部から始まり、南壁へと向かって延び、さらに調査区外へ続いている。堀の方向は堀1と直行し、堀1の4.5m手前で止まる。検出長は5.6m、幅は2.35m、深さは南壁において96cmである。

遺物 (第19図)

69は土師器皿である。口径14.8cm、器高2.05cm。平坦な底部から外方に大きく開く口縁部は、上方でさらに外反し、端部は先細りを呈する。口縁部内外面は丁寧なヨコナデ、底部はナデ調整を行う。

器壁は薄く、口縁端部は内側に肥厚して内傾する面を持つ。胎土は灰白色を呈し、クサリ礫・長石・石英等の砂粒を含み比較的精良である。十分に酸化焙焼成されておらず、底面と断面は黒色を呈している。

溝14 (第18図)

この溝は、堀2の西側を平行して延び、堀1に切られている。規模は、幅が1.2~1.4m、深さが14~25cmで、堀1より北側では不明瞭となる。

溝15 (第18図)

溝14と同様に、堀2と平行して北へ延びているが、堀1より北側では検出できなかった。規模は、幅が87cm~1.25m、深さは最深部で44cmを測る、検出長は11mである。

遺物 (第19図)

72は龍泉窯青磁碗である。底径5cm。高台畳付以下は無釉である。オリーブ灰色のガラス質釉が厚く掛かる。外面に蓮弁を陰刻する。胎土は灰白色を呈し、精緻である。73は土師器小皿である。口径7.8cm、器高1.8cm。口縁は不整円形で、口縁部の高さは場所によって大きく違う。内面はヨコナデ調整し、外面はナデを施した後の指頭圧痕が顕著に残る。底部は指押さえして凹ました様子がよくわかる。胎土は明黄橙色を呈し、雲母を極少量含み精良である。74は和泉D型瓦質羽釜である。口径27.3cm。内傾気味に高く立ち上がる口縁部に幅の狭い鏝がつづく。口縁部外面には段を有する。鏝下面は強くヨコナデしている。口縁部内面はハケ目調整するが、口縁下半を強くヨコナデすることで、ハケ目をナデ消している。器壁は灰色を呈しており、炭素吸着は不十分である。胎土は灰白色を呈し、雲母・砂粒・小石を含んでいる。

溝16 (第18図)

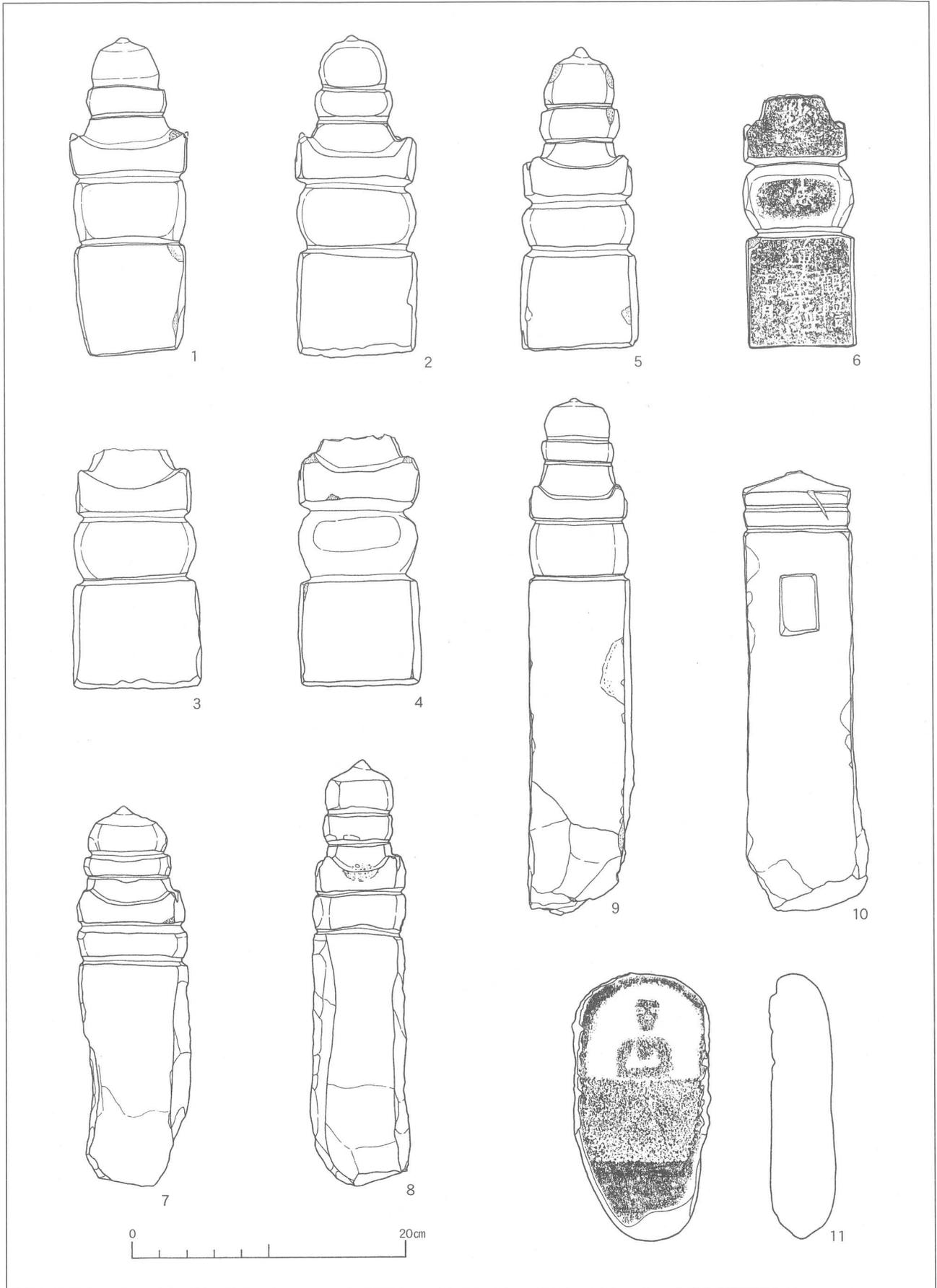
堀1が埋められた後、その上部に浅い溝が作られている。この溝は、堀1の南側の立ち上がりを溝の立ち上がりとし、北側の立ち上がりには一石五輪塔を並べている。五輪塔は間隔を空けず並べている。確認調査のトレンチにより取り上げた五輪塔を加えると、合計11基の五輪塔が使用されていたことになる。溝の規模は、幅が約1m、深さは17~19cmで、約5mにわたって続いている。

溝という名称を付けたが、溝として機能していたのか不自然な点もあり、別の用途に用いられていた可能性もある。

石造物 (第20図、PL.10)

今回出土した石造物は一石五輪塔9基、石仏1基、玉垣1基である。主な出土場所は堀1の埋土(4~6・10)と溝16の縁石(1~3・7~9)、土坑158(11)である。一石五輪塔のうち1~6は基礎の背が低い「基礎低平式」で、7~9は基礎の下端を仕上げずに、そこを地中に埋め込んで建てる「基礎細長埋込式」に分類される。

溝16 1は花崗岩製。軒の先端を欠損するほかは、各部完存する。全高47.2cm、基礎高16.4cm、幅は上端14.5cm、下端12.6cmある。2は花崗岩製。軒の先端に欠損があるほかは、各部完存する。全高47.7



第20图 堀1・溝16・土坑158 出土遺物 (1/4)

cm、基礎高16.0cm、幅は上端15.2cm、下端16.3cm。3は花崗岩製。空・風輪を欠失している。現高35.3cm、基礎高15.8cm、幅は上端16cm、下端17.6cm。4は花崗岩製。空・風輪を欠失している。現高36.9cm、基礎高16.0cm、幅は上端15.4cm、下端15.9cm。7は花崗岩製。軒の先端に欠損があるほかは、各部完存する。全高56.0cm、基礎高33.2cm、幅は上端13.6cm。各輪は平べったい。8は花崗岩製。軒の先端に欠損があるほかは、各部完存する。全高62.8cm、基礎高37.5cm、幅は上端9.9cm。9は花崗岩製。軒の先端に欠損があるほかは、各部完存する。全高76cm、基礎高49.7cm、幅は上端14cm。

堀 1 5は花崗岩製。軒の先端を欠損するほかは、各部完存する。全高44.9cm、基礎高15.0cm、幅は上端13.8cm、下端14.8cm。6は花崗岩製。空・風輪を欠失している。現高37.3cm、基礎高16.8cm、幅は上端14.9cm、下端14.8cm。一面の各輪に題目を配す。地輪の銘文は正面に三行、計8字を陰刻する。「観誓」は日蓮宗の戒名で、室町時代のものであろう。

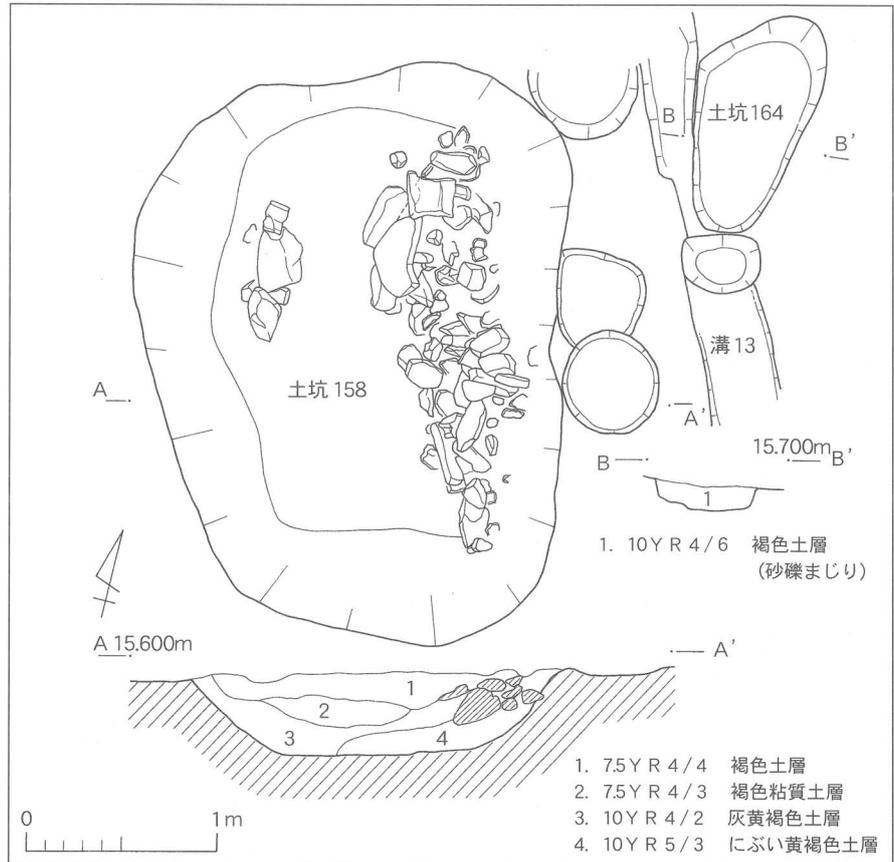
十	蓮	観
一	華	
七	経	誓
月		

10は花崗岩製。玉垣の一部と思われる。一面の基礎上方に長方形の彫り込み(柄)を設ける。全高64.8cm、基礎高56.1cm、幅は上端15cm。

土坑158 11は砂岩製の石仏である。土坑上面から俯せた状態で出土した。高さ39cm、幅は19.6cm、厚さ9.6cm、仏高13cm、頭高5.5cm、頭幅4.3cm、肩幅8.4cm、膝張り9.8cm、肉厚1.1cmである。上端を丸め、彫り窪めた中に弥陀像を刻出する。下端は尖り気味に造られていて、自立しない。根部埋め込み式であろう。仏像部分が黒く変色していることから、礎石に転用され、火災に遭った建物の柱根跡が残ったものと考えられる。

土坑158 (第21図)

堀1と堀2の間に位置し、溝14を切っている。平面は不整形を呈し、底面から緩やかに立ち上がる。規模は、3.05m×2.03m、深さ43cmである。土坑内部には10cm~40cm大の自然石が石垣状に積み上げられ、土坑の東側に集中して



第21図 土坑158 平面・断面図 (1/40)

いる。

遺物として瓦質羽釜、土師器小皿、丹波焼甕、備前焼船徳利、丸瓦などが出土しているが、何れも細片のため図示できない。丸瓦は凸面をヘラミガキし、凹面にはコビキA痕が残る。側端面を幅広く面取りしている。内外面に焼けて煤けた部分が見られる。他に凹面に布目痕が残るものも出土している。

土坑164（第21図）

調査区の中央部、土坑158の北側に位置する。溝13を切っている。平面は不整形を呈し、底面はほぼ平坦である。

遺物（第19図）

70は土師器小皿である。口径6.5cm、器高1.8cm。口縁は外反して開き、端部は尖り気味におさめる。内面はヨコナデ調整、口縁部外面はヨコナデ、下半は指オサエしているが、特に口縁部下半は強く指オサエすることで稜をなしている。胎土はにぶい黄橙色を呈す。71は和泉D型瓦質羽釜である。口径24.2cm。内傾して立ち上がる口縁部に幅の狭い鏝がつづく。口縁外面には段を有する。外面は暗灰色、内面は炭素吸着が不十分で橙色を呈する。胎土は橙色で、クサリ礫を多く含み精良。

包含層遺物（第22図）

75は青白磁皿である。底径6.4cm。高台畳付は無釉で、離れ砂が付着する。内面見込みに「木」を陽刻し、側面にも陽刻が見られる。磁胎は白色を呈し、黒色微粒を含んでいる。

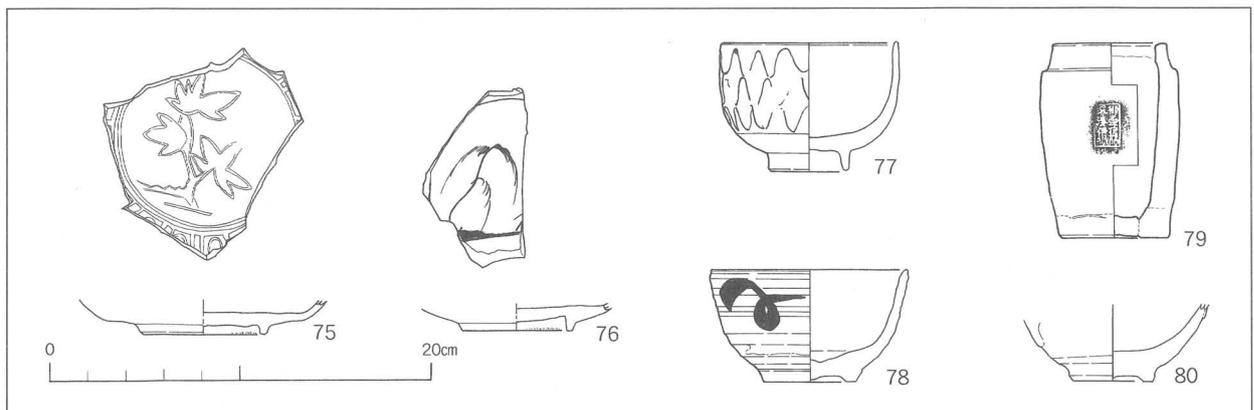
76は肥前白磁染付皿である。底径5.8cm。高台は内側を深く削り込んでいる。高台畳付は無釉で、離れ砂が付着する。釉は青みがかっており、粗い貫入が入る。見込みに柳文を描く。

77は肥前白磁染付一重網目文碗である。口径9.3cm、器高6.8cm、底径3.9cm。高台畳付は無釉で、離れ砂が付着する。外面はロクロ成形痕が残り、緑灰色気味の釉が厚ぼったく掛かる。網目文は途中で途切れたりして、稚拙な描き方をしている。

78は唐津焼碗である。口径10.2cm、器高6cm、底径4.8cm。浅い高台を削り出している。外面下半はヘラ削りの凹凸が顕著である。内面から外面体部下半にかけて長石釉が掛かり、細かい貫入が入る。外面に鉄絵を描く。胎土はにぶい赤褐色を呈し、精良である。

80は唐津焼碗である。底径4.2cm。外面はロクロナデ調整する。内面と外面下半にはガラス質の緑灰色の釉が掛かり、細かい貫入が入る。胎土はにぶい赤褐色を呈し、精良である。

79は焼塩壺である。口径6cm、器高10.3cm、底径5.6cm。底部は円板充填する。内面には円筒の型の周りに巻いた布目痕が認められる。外面は丁寧にナデ調整する。外面に「御塚湊伊織」の印を押す。胎土はにぶい黄橙色を呈し、クサリ礫・雲母・石英・小石等を含むが、精良である。



第22図 試掘トレンチ出土遺物（1/4）

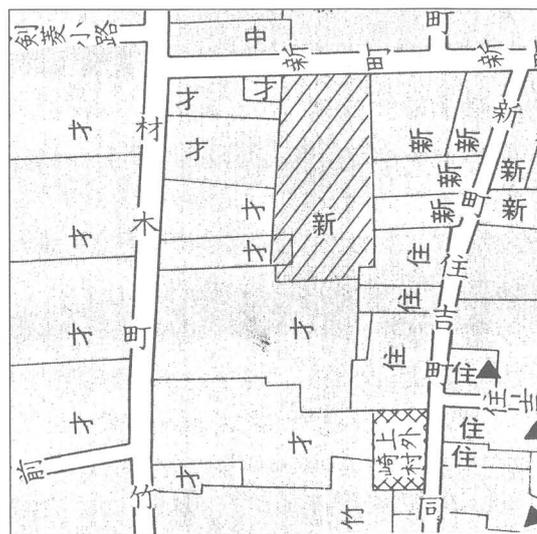
まとめ

今回の発掘調査では、大きく分けると、有岡城の堀跡・溝跡、江戸時代中期以降の酒蔵跡の2時期の遺構面が検出されたが、その間の時期にも、土坑2・土坑88・土坑158など17世紀代の遺構も僅かであるが検出されている。従って、本調査地点の遺跡は間断無く続いていたことになる。

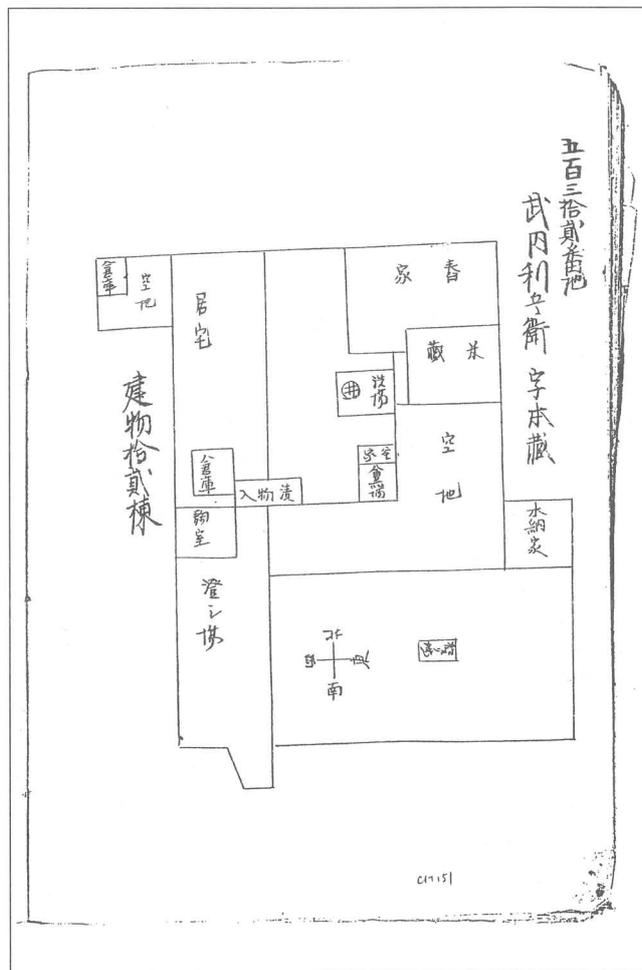
有岡城の時期の遺構には、堀1と堀2、溝14・15などが検出された。堀1と堀2は、直交する方向で築造されているが、交わず少し手前で止まっている。堀の方向の共通性や形状が似ていること、出土遺物から見ても同時に存在していたと考えられる。堀の規模が小さく、防御能力に乏しいことから、町の中に巡らされた掘り割りの一つである可能性が高い。遺構の時期については、出土遺物から見ると、15～16世紀代の備前焼播鉢、16世紀後半の丹波焼播鉢、志野輪花皿等が出土しているが、年代幅が広い。最も新しい時期の遺物から、廃棄・埋没年代はおよそ16世紀の後半と推定される。

溝14・15は、ともに堀1・堀2に切られている。従って、溝14・15を廃して後、堀1・2が築造されたことになる。溝14からは遺物が出土していないため、溝15との新旧関係は明らかではないが、溝15から出土した青磁碗および土師皿から見ると、概ね16世紀前半までの時期が考えられる。

有岡城は天正2年(1574)、荒木村重がそれまでの城主であった伊丹氏を追って城主となり、城名を伊丹城から有岡城に改めたほか、城の改造に着手したと考えられている。今回検出した堀跡は、出土遺物に比較的古い時期のものが多く含まれてことから、伊丹城期に築造された可能性が高いと考えられるが、遺物からの判断は微妙であり、どちらとも考えることはできる。しかし、堀の方向の点から見ると、これまでに発掘された有岡城期の堀跡が、現在の町割りと方向が一致するという結果が得られており、今回検出した堀が調査区北側の道路と平行せず約20度のズレがあることから、伊丹城期の可能性が高い。古い時期の溝14・15の方向も堀1・2と共通することから、ともに伊丹城期の遺構で



第23図 「天保15年伊丹郷町絵図 解説図」



第24図 「明治19年酒造場絵図面届書写」

あると考えておきたい。

第1遺構面検出の酒蔵遺構については、江戸時代中期に始まる酒蔵跡である。明確な酒蔵遺構としては、竈、井戸、男柱であり、建物の範囲を示すような礎石などは遺存していなかった。

竈は2基検出され、古い時期の竈2は、18世紀代に稼働したもので、明治以降の煉瓦造りの竈1とは年代的に連続していないが、この間の時期の竈は調査区を外れて存在するか、あるいは竈1と重複している可能性がある。伊丹郷町内の竈には同一場所で造り替えされた例が多い。

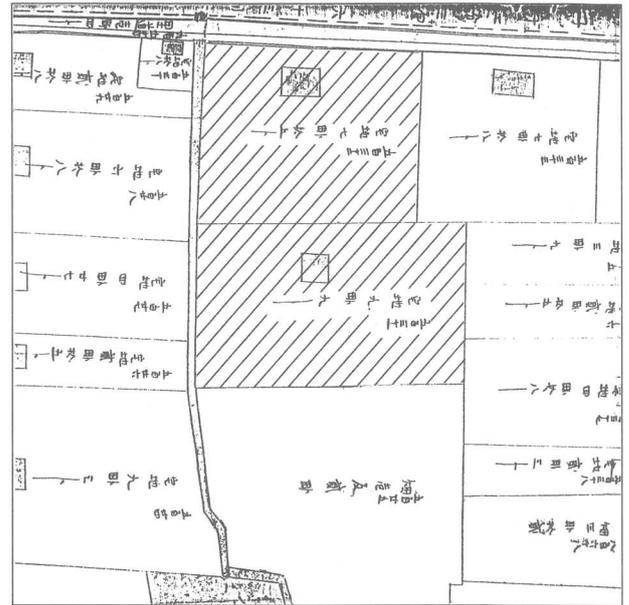
酒造用の井戸と推定されるものは井戸3・4で、共に直径が2 mを超える。酒造りの工程上、井戸は米を洗う場所で、「洗い場」と呼ばれ、竈は洗った米を蒸し上げる場所で、「釜屋」と呼ばれている。この二つの行程は、酒造行程の中で連続することから、近接した場所に設けられるのが一般的である。今回検出した竈と井戸の位置関係も近く、同一の建物内の施設と考えられる。

男柱は、酒造行程の中では、酒と粕を分離する压榨行程に使用される施設である。18世紀代に稼働した1基しか確認できていないが、別の時期の男柱は調査区外に存在するものと考えられる。

今回の発掘調査では、この場所で酒造りが行われ始めた時期は18世紀以降と推測され、その後近代まで続いていたことが判った。天保15年伊丹郷町分間絵図（第23図）によると、この場所の屋敷の範囲は、今回調査した範囲より大きく、南側の敷地を含めたものであったことがわかる。後の大正4年伊丹地籍図謄本（第25図）も同様である。

現在、ここにあった酒蔵の絵図面が一枚残されている（第24図）。これは明治19年に描かれたもので、酒蔵内の諸建物および施設の配置が記入されている。時期的にここに描かれている洗い場は井戸4にあたり、釜屋は竈1に該当する。しかし、男柱の位置する搾り場については、明治19年の段階では、南側の蔵の中央部に移っていることがわかる。

明治19年の段階の蔵の所有者は、伊丹の銘酒老松を醸造する武内利兵衛氏の本蔵であった。これ以前の所有者についても、文献の調査が進められているが、紙面の関係で記述することができなかった。今後、別の機会としたい。



第25図 「大正4年伊丹町地籍図謄本」

<参考文献>

- ・乗岡 実 2000「中近世の備前焼挿鉢の編年案」第3回中近世備前焼研究会資料 中近世備前研究会
- ・福澤 邦夫 平成3年「伊丹の中世石造美術—『伊丹市史』の補遺(3)—」地域研究いたみ第20号
- ・福澤 邦夫 1994『千早赤坂の石造文化財Ⅰ』千早赤坂村文化財調査報告書 第4集 千早赤坂村教育委員会
- ・一石五輪塔 (4)の銘文については藤澤一夫氏に御教示を頂いた。
- ・竹内 清和 1990『耐火煉瓦の歴史—セラミックス史の一断面』内田老鶴圃
- ・水野信太郎 1999『日本煉瓦史の研究』法政大学出版局

第2節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第163次調査

所在地 伊丹市伊丹3丁目1-31

調査面積 220㎡

調査期間 平成8年4月18日～6月12日

調査担当 小長谷正治・瀬川眞美子

調査概要

今回の発掘調査は阪神・淡路大震災の復興事業に伴う緊急発掘調査である。当該地に鉄筋コンクリート造りの店舗付共同住宅建築が計画されたが、以前の建物とは規模・構造を異にするため、遺跡への影響が考えられ、全面調査を行うこととなった。

敷地内に東西10m、南北20mの調査区を設定し、まず、表土を重機により除去し、その後を人力によって掘削・精査するとともに、適宜写真撮影・実測等の記録作業を行った。遺構は表土下約40cmの整地面と地山面の2面で検出した。

遺跡概要（第1・2図）

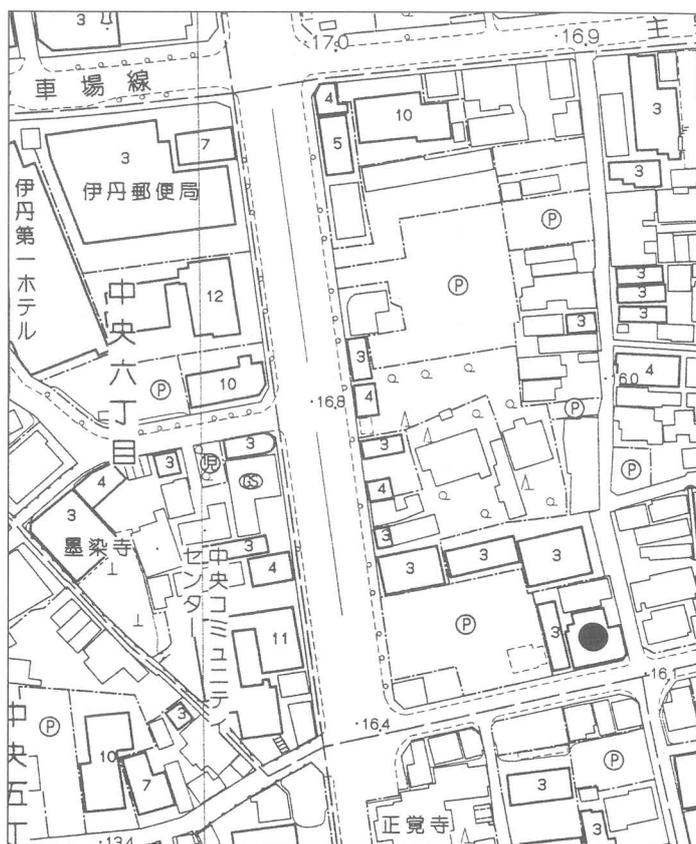
本遺跡は、伊丹氏と荒木氏の居城であった有岡城（伊丹城）と廃城後の江戸時代に酒造業で栄えた伊丹郷町の遺跡である。両者は平面的に重なり、南北1.7Km、東西800mに広がる。本調査地点は有岡城惣構の中央南寄りに位置し、惣構の東端には有岡城の主郭部が、その西には侍町があった。当地点はその侍町の南西隅に当たる。また、江戸時代の伊丹郷町では南町に属している。南町は伊丹郷町から南へ向かう大阪道の両側に発達した町で、既に文禄年間には成立している。

調査成果

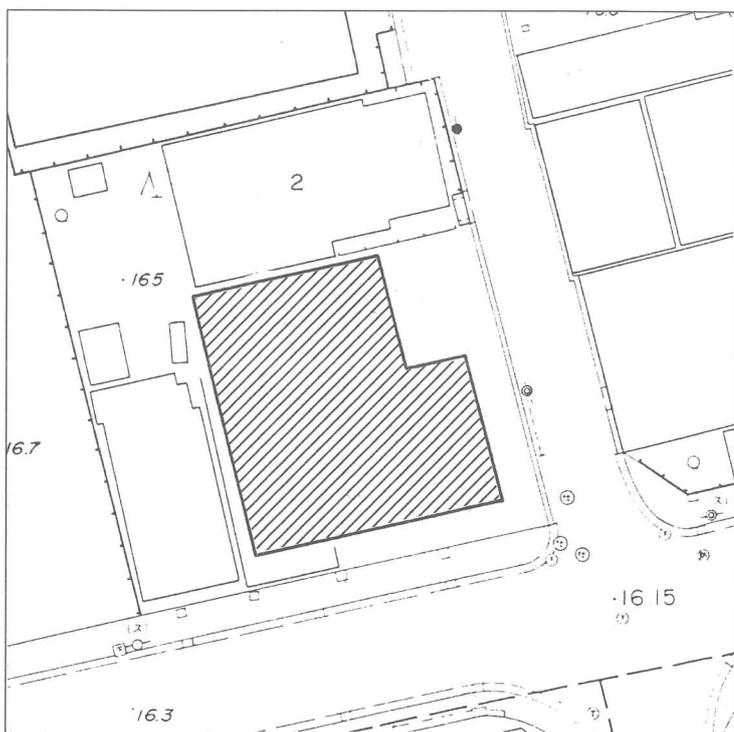
検出した遺構は、第1面で井戸3基、竈5基、地下室状遺構1基、溝4条、土坑54基、胞衣壺4基、ピット47基と調査区南側で土間面を確認している。第2面では井戸2基、竈4基、溝6条、土坑45基、ピット101基を検出した。

層序（第28図）

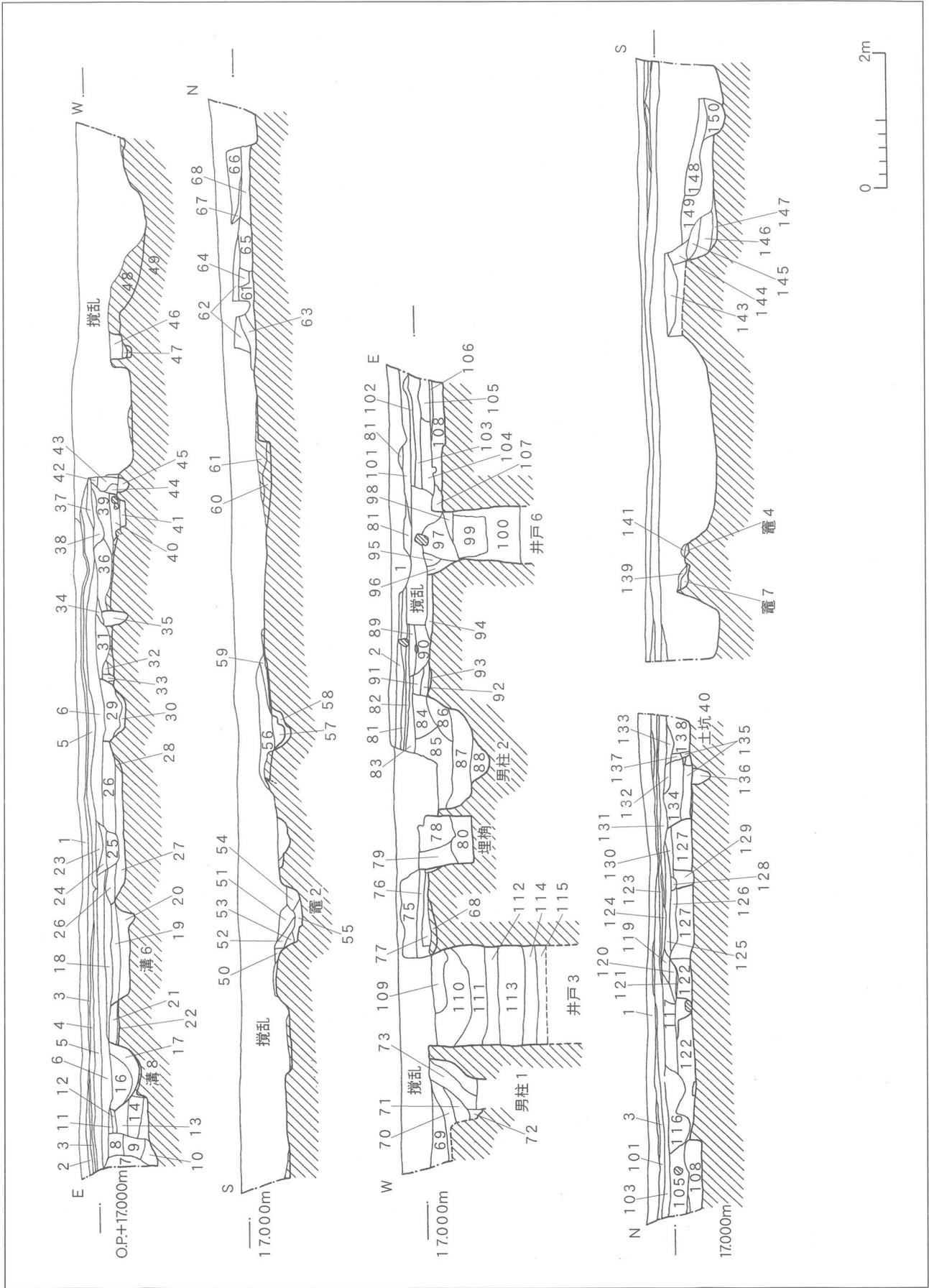
基本的な層序はコンクリートの表土



第26図 第163次調査区位置図（1/2500）



第27図 調査区設定図（1/500）



第28図 土層断面図

1. コンクリート (表土)	52. 7.5Y R 5/4 にぶい褐色土層	103. 10Y R 5/6 黄褐色土層
2. 2.5Y 5/4 黄褐色粗砂層	53. 5Y R 4/6 赤褐色土層	104. 2.5Y 5/4 黄褐色土層
3. 2.5Y 7/4 浅黄色砂質土層	54. 7.5Y R 4/3 褐色土層	105. 2.5Y 4/4 オリーブ褐色土層
4. 2.5Y 5/4 黄褐色砂層 (粗砂を含む)	55. 5Y R 4/4 にぶい褐色土層	106. 5Y 7/1 灰白色砂質土層
5. 10Y R 5/4 にぶい黄褐色土層	56. 10Y R 6/4 にぶい黄褐色土層	107. 10Y R 4/3 にぶい黄褐色土層
6. 10Y R 5/3 にぶい黄褐色土層	57. 10Y R 5/4 にぶい黄褐色粘質土層	108. 10Y R 5/8 黄褐色土層
7. 10Y R 5/3 にぶい黄褐色粗砂層 (攪乱)	58. 10Y R 5/6 黄褐色粘質土層	109. 5Y 3/2 オリーブ黒色土層
8. 10Y R 4/6 褐色土層	59. 10Y R 6/4 にぶい黄褐色土層	110. 5Y 3/3 暗オリーブ褐色土層
9. 10Y R 4/4 褐色粘質土層	60. 10Y R 6/8 明黄褐色粘質土層	111. 5Y 3/2 黒褐色土層
10. 10Y R 5/3 にぶい黄褐色粘質土層	61. 10Y R 5/8 黄褐色粘質土層	112. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色粘土層
11. 7.5Y R 5/6 明褐色粘土層	62. 10Y R 5/6 黄褐色土層	113. 2.5Y 3/2 黒褐色粗砂層 (粘土混じり)
12. 10Y R 5/4 にぶい黄褐色土層	63. 7.5Y R 5/6 明褐色土層	114. 5Y 4/2 灰オリーブ色土層 (多量の黄色壁土を含む)
13. 7.5Y R 4/4 褐色粘質土層	64. 10Y R 5/8 黄褐色粘質土層	115. 5Y 4/2 灰オリーブ色土層 (白色の壁土を含む)
14. 10Y R 5/3 にぶい黄褐色微砂層	65. 7.5Y R 6/6 橙色粘質土層	116. 10Y R 4/2 灰褐色粘質土層
15. 10Y R 5/4 にぶい黄褐色粘質土層	66. 10Y R 5/6 黄褐色粗砂礫層	117. 2.5Y 5/3 黄褐色粗砂層
16. 10Y R 5/4 にぶい黄褐色土層	67. 10Y R 3/3 暗褐色土層	118. 10Y R 3/4 暗褐色砂質土層
17. 10Y R 6/4 にぶい黄褐色粘質土層	68. 7.5Y R 5/6 明褐色粘質土層	119. 10Y R 6/4 にぶい黄褐色粘土
18. 10Y R 6/4 にぶい黄褐色土層	69. 10Y R 6/4 にぶい黄褐色砂質土層	120. 10Y R 3/4 暗褐色土層
19. 10Y R 5/3 にぶい黄褐色土層	70. 2.5Y 6/6 明褐色粘土層	121. 10Y R 5/6 黄褐色粘質土層
20. 7.5Y R 5/6 明褐色土層	71. 2.5Y 5/6 黄褐色粘土層	122. 10Y R 5/4 にぶい褐色土層
21. 10Y R 5/4 にぶい黄褐色土層	72. 10Y R 4/3 にぶい黄褐色粘質土層	123. 10Y 4/2 オリーブ灰色粘質土層
22. 10Y R 5/6 黄褐色粘質土層	73. 10Y R 4/4 褐色土層	124. 7.5Y R 5/8 明褐色砂質土層
23. 7.5Y R 5/8 明褐色粘質土層	74. 10Y R 5/6 黄褐色砂質土層	125. 10Y R 5/4 にぶい黄褐色土層
24. 10Y R 5/4 にぶい黄褐色土層	75. 10Y R 5/6 黄褐色土層	126. 10Y R 4/4 褐色土層
25. 10Y R 4/4 褐色土層	76. 10Y R 5/4 にぶい黄褐色土層	127. 10Y R 4/6 褐色土層
26. 10Y R 4/3 にぶい黄褐色土層	77. 10Y R 5/8 黄褐色土層	128. 10Y R 4/3 にぶい黄褐色土層
27. 7.5Y R 4/6 褐色土層	78. 10Y R 5/3 にぶい黄褐色土層	129. 10Y R 4/6 褐色土層
28. 2.5Y R 5/4 黄褐色砂質土層	79. 10Y R 6/2 灰黄褐色土層	130. 7.5Y R 4/4 褐色土層
29. 10Y R 5/3 にぶい黄褐色土層	80. 10Y R 4/6 褐色土層	131. 10Y R 4/3 にぶい黄褐色粘質土層
30. 10Y R 5/3 にぶい黄褐色土層	81. 5Y 6/3 オリーブ黄色土層	132. 10Y R 5/6 黄褐色粗砂層
31. 10Y R 4/3 にぶい黄褐色土層	82. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色砂質土層	133. 10Y R 3/3 暗褐色粘質土層
32. 10Y R 5/6 黄褐色土層	83. 10Y R 5/3 にぶい黄褐色土層	134. 10Y R 4/4 褐色土層
33. 10Y R 5/4 にぶい黄褐色土層	84. 10Y R 5/4 にぶい黄褐色土層	135. 10Y R 4/2 灰黄褐色砂質土層
34. 10Y R 5/3 にぶい黄褐色土層	85. 2.5Y 5/3 黄褐色砂礫層	136. 10Y R 5/4 にぶい黄灰色土層
35. 10Y R 5/4 にぶい黄褐色粘質土層	86. 2.5Y 5/4 黄褐色砂質土層	137. 2.5Y 3/2 黒褐色土層
36. 10Y R 5/6 黄褐色土層	87. 10Y R 5/4 にぶい黄褐色砂質土層	138. 10Y R 4/6 褐色土層
37. 10Y R 6/4 にぶい黄褐色砂質土層	88. 2.5Y 5/3 黄褐色粘土層	139. 10Y R 4/3 にぶい黄褐色土層
38. 10Y R 3/3 暗褐色土層	89. 7.5Y R 5/8 明褐色土層 (焼土)	140. 10Y R 5/4 にぶい黄褐色土層
39. 10Y R 4/6 褐色土層	90. 2.5Y 6/2 灰黄色粘土層	141. 2.5Y 4/4 オリーブ褐色土層
40. 2.5Y 5/2 暗褐色粘質土層	91. 10Y R 4/4 褐色土層	142. 2.5Y 4/4 オリーブ褐色粘質土層
41. 7.5Y R 4/4 褐色粘質土層	92. 10Y R 5/4 にぶい黄褐色土層	143. 10Y R 4/4 褐色粘質土層
42. 10Y R 5/3 にぶい黄褐色土層	93. 炭層	144. 10Y R 3/4 暗褐色粘質土層
43. 10Y R 5/6 黄褐色土層	94. 10Y R 5/8 黄褐色砂質土層	145. 10Y R 3/3 暗褐色粘質土層
44. 7.5Y R 5/6 明褐色粘質土層	95. 10Y R 5/4 にぶい黄褐色粘質土層	146. 7.5Y R 5/8 明褐色粘土層
45. 7.5Y R 5/6 明褐色粘質土層	96. 10Y R 4/3 にぶい黄褐色粘質土層	147. 7.5Y R 5/6 明褐色粘質土層
46. 10Y R 5/3 にぶい黄褐色土層	97. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色砂質土層	148. 5Y 6/3 オリーブ黄色土層
47. 10Y R 5/4 にぶい黄褐色粘質土層	98. 10Y R 4/3 にぶい黄褐色砂質土層	149. 10Y R 4/4 褐色土層
48. 7.5Y R 5/8 明褐色粘質土層 (地山)	99. 10Y R 4/4 褐色土層	150. 10Y R 5/4 にぶい黄褐色粗砂層
49. 10Y R 6/8 明黄褐色砂礫層	100. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色微粘質土層	
50. 7.5Y R 4/4 褐色土層	101. 10Y R 6/4 にぶい黄褐色砂質土層	
51. 2.5Y 5/3 黄褐色土層	102. 10Y R 5/4 にぶい黄褐色土層	

(1) を取り除くと黄褐色砂質土層(2~4)が堆積し、その下にぶい黄褐色土層(5・6)が20~30cmの厚さで堆積する。この層は土間面が幾層にも重なった状態を呈している。更に黄褐色土層(21・36)が堆積し、その下に地山(48・49)が続く。表土から地山までは調査区全域で約50cmを測る。

遺構と遺物

第1遺構面(第29図)

地下室状遺構(第30図、PL.12)

東西3.1~3.5m、南北5.8~6.0m、深さ1.3~1.5mを測り、伊丹礫層を掘り込んで造られている。埋土は大きく上層(1~4層)、中層(5層)、下層(6~13層)に分けられ、上層は砂利・石・瓦・遺物を多く含む褐色土層で、下層は更に多量の瓦・遺物・石を含む粘質土層である。その間に殆ど包含物のない粘質土層(中層)が堆積する。上層と下層の遺物には時間的な差異は認められず、短時間の内に埋められている。

床面には東壁に沿って柱穴が7個、西壁沿って9個並ぶ。壁材を支える柱あるいは天井を支える柱列と考えられる。造り付けの階段が見られないことから、梯子のような簡易施設を備えていたと考えられる。

遺構の性格としては酒造に伴う遺構の可能性もあるが、礫層を掘り込んで造られていることから温度を一定に保つには適した構造であると思われ、地下室としての使用が考えられる。

遺物(第31~33図、PL.21~26)

陶磁器・土師器・貝類などがコンテナ10箱と多量に出土している。灯明具が多く出土しており、なかでも家庭用とは考えにくい大型の土師器灯明皿は酒蔵やそれに付随する諸施設での使用が考えられる。

1は土師器小皿である。口径46cm、器高1.0cmを測る。内外面はヨコナデ調整し、外面底部には指頭圧痕が残る。胎土は黄橙色を呈し、クサリ礫・砂粒を含む。

2~9は透明釉を内面から口縁部外面に施す皿(柿釉皿)である。ロクロ成形され、底部外面に糸切り痕が残る。胎土は黄橙色を呈し、精良である。皿には油を入れて使用する灯明皿とその皿を乗せる受け皿がある。

2・3は柿釉灯明小皿である。口径6~6.4cm、器高1.1~1.2cm。口縁端部に煤が付着している。

4・5は柿釉灯明受け小皿である。口径6.0cm、器高1.1cm。内面に断面三角形の返りを持つ。

6は柿釉灯明皿。口径7.2cm、器高1.3cm。2・3より一回り大きな皿である。口縁に煤が付着する。

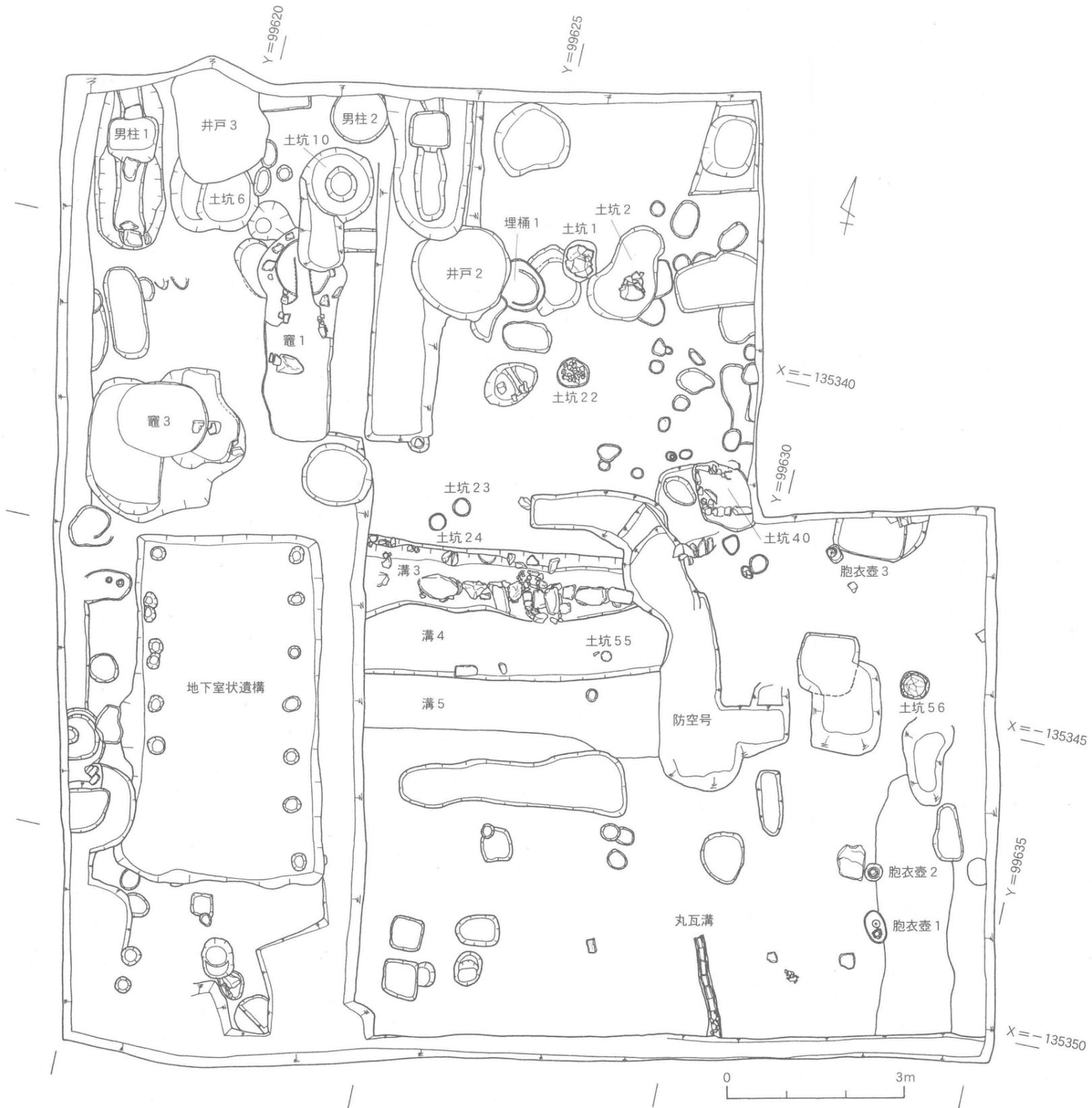
7・8は柿釉灯明受け皿である。口径6.9~7.3cm、器高1.2~1.3cm。4・5より一回り大きなものである。6の皿を乗せて使用する。

9は柿釉灯明大皿である。口径9.0cm、器高1.7cm。内外面に煤の付着は認められない。

10は土師器皿である。口径9.1cm、器高1.7cm。ロクロ成形により、器壁は薄く作られている。底部外面に糸切り痕が残る。胎土・器形・手法などは9の皿と同じであるが、透明釉が施されていない。灯明皿として使用された形跡はない。

11は柿釉灯明受け台である。口径6.8cm、器高6.0cm、底径4.6cm。ロクロ成形によるが、底部の糸切り痕は丁寧にナデ消されている。外面底部以外を全面施釉する。外反する口縁内に断面三角形の返りをもつ。

12~15は土師器灯明大皿である。口径12.0~14.1cm、器高2.4~2.8cm。胎土は鈍い橙色を呈し、精良である。ナデ調整するが、外面底部には指オサエが顕著に残る。口縁部内外面に煤の付着があり、14の内面には鉄分の塊が付着している。



第29図 第1遺構面平面図

16は土師質タンコロである。口径48 cm、器高1.8 cm。丁寧にナデ調整されている。胎土は鈍い橙色を呈し、胎土は精良。中央に灯心受けがあり、頭頂部は焦げている。底部に陽刻があることから、型作りであることがわかる。

17・18は伊賀・信楽焼系灯明具である。17は灯明皿である。口径12.0cm、器高2.3cm、底径4.8cm。ロクロ成形による。内面から口縁に灰白色の透明釉が掛かり、全体に細かい貫入が入る。内面に3本の掻き目をいれる。

18は灯明受け皿である。口径12.0 cm、器高2.05 cm、底径4.4 cm。ロクロ成形による。内面から口縁にかけて灰白色の透明釉が掛かり、全体に細かい貫入が入る。内側に断面三角状の返りが巡る。

19は瀬戸・美濃焼ひょうそくである。口径7.4 cm、器高4.2 cm、底径3.6 cm。丁寧なロクロ成形を行った後、中央に灯心受けの突起を張り付け、外面底部から直径6 mm、深さ1.3 cmの円錐の穴を入れる。外面底部中央を除いて黒褐色釉が掛かる。口縁平坦面に目痕が3ヶ所残る。

20・21は焙烙である。口径24 cmのもの(20)と、口径28.6 cmの大振りのもの(21)が出土している。胎土は黄橙色を呈し、クサリ礫が目立ち、精良。口縁部はヨコナデし、体部をナデ調整する。浅い体部に短く立ち上がる口縁部が付く。外面には煤の付着が見られる。

22は柿釉胡麻煎りである。長さ23.3 cm、厚さ2.5～3.9 cm。上下それぞれを型作りして、張り合わせている。また、上面には透明釉が施されているが、下面は無釉で、握り手を除いてよく煤けている。上面に「胡麻煎」の陽刻が入り、握り手の下面に「イナ」の墨書が残る。上面の孔から胡麻を入れて煎った後、握り手側から胡麻を取り出す仕組みである。胎土は黄橙色を呈し、クサリ礫・雲母を含み精良。

23は陶器蓋である。口径12.2 cm、器高3.8 cm、つまみ径5 cm。胎土は灰色を呈し、精良である。つまみ端部を除いて黄色がかかった白泥釉を施す。口縁口唇部・内外面の文様には鉄釉が使用されている。

24・25は伊賀・信楽焼土瓶である。算盤玉形の体部に、短く立ち上がる玉縁状の口縁を持つ。24は口径6.3 cm、器高8.5 cm、底径5.8 cmを測る小型品である。注ぎ口は欠損している。

25は口径10.9 cm、器高14.2 cm、底径7.6 cm。何れもロクロ成形により器壁は薄く仕上げられ、体部上半には凹線が巡る。底部に小さな足が3ヶ所に付く。口縁端部を除いて、内面口縁部から外面体部下半まで黄色がかかった灰釉を施す。見込みと底部周囲はよく煤けている。

26は伊賀・信楽焼蓋である。口径17.4 cm、器高4.7 cm。つまみ径4 cm。ロクロ成形により薄く仕上げられている。外面には凹線が巡る。全体にオリーブ灰色の釉を施した後、口縁端部の釉を掻き取っている。胎土は灰白色を呈し、精良である。

27は伊賀・信楽焼土埴である。口径18.0 cm、器高8.5 cm、底径7.6 cm。底部立ち上がりに小さな足が3ヶ所に付く。内面から外面下半部にかけてオリーブ灰色の釉が掛かる。見込みと底部周囲はよく煤けている。胎土は灰色を呈し、精良である。

28は堺焼播鉢である。口径36.8 cm、器高15.7 cm、底径15.8 cmの大型品である。櫛目は8本1単位で、密に施し、見込みはウールマーク状に入る。外面はヘラ削りする。胎土は赤褐色を呈し、砂粒・小石を含む。

29～43は肥前白磁染付碗である。

29は筒形碗である。口径6.0 cm、器高5.2 cm、底径3.3 cm。青味がかかった釉調を呈し、高台畳付は無釉で離れ砂が付着する。外面は七宝文、見込みには崩れたコンニャク印判による五弁花を描く。

30は笹文小碗である。口径6.8 cm、器高3.5 cm、底径2.4 cm。高台畳付は無釉である。

31は「くらわんか手」の碗である。口径11.2 cm、器高6.4 cm、底径4.2 cmを測り、高台畳付は無釉である。外側に丸文、見込みにコンニャク印判の五弁花、高台内に簡素化された「渦福」を描く。

32～36は少し小型で薄手の碗である。青味がかかった釉調を呈している。高台畳付は無釉である。

32・33は口径9.1～9.2cm、器高4.7～4.8cm、底径3.1～3.4cm。体部が外反するタイプ（32）と内湾気味のタイプ（33）がある。外面に海浜風景、見込みに「壽」の文字を描く。上手物である。

34は口径9.8cm、器高5.1cm、底径3.3cm。体部は直線的に広がる。外側に梵字文様、見込みにはくずした「壽」の文字を描く。清朝磁器の影響の強い碗である。

35は口径9.8cm、器高5.1cm、底径3.5cm。体部は腰が張り、高台畳付は幅広く造り出している。畳付は無釉である。外側に植物文、見込みには花丸を描く。

36は口径10cm、器高5.3cm、底径3.8cm。高台畳付を除き、青味がかつた釉調を呈す。細かい貫入が入る。外側は縦縞と草花文、見込みに蝶を描く。

37・38は染付蓋物である。37の蓋は、口径9.8cm、器高3.1cm、つまみ径4.2cm。つまみ端部は無釉。外側に雪輪文、内面口縁部に斜格子文、見込みに源氏香文を配す。38は口径10cm、器高6.4cm、底径4.5cm。少し大振りが高台が撥形に開く碗である。畳付は無釉で、焼継されている。外側に雪輪文、内面口縁部に斜格子文、見込みに源氏香文をあしらう。高台に「玉吉」と朱書きされる。

40～42は広東碗である。大きさに大・中・小がある。高台畳付は無釉である。40は口径9.6cm、器高6cm、底径5.5cm。外側に竹文、見込みには崩れた「壽」字を描く。41は口径10.5cm、器高6.2cm、底径5.1cm。外側に菊文、見込みにくずれた「壽」字を描く。42は口径11.6cm、器高6.7cm、底径6.1cmを測る大振りの碗である。外側は山水文、見込みには崩れた「壽」字を描く。

39は広東碗の蓋である。口径9.1cm、器高3cm、つまみ径3.85cm。つまみ端部は無釉。外側に竹文、つまみ内に笹、見込みに昆虫を描く。

43は口径12.6cm、器高7.3cm、底径5.2cmを測り、大振りが高台が撥形に開く碗である。釉は青味を帯びる。畳付は無釉である。外側に麒麟・唐人・「壽」字、見込みには「壽」字をデザイン化したものを描く。高台内には「太清雍正年製」の銘が入る。焼継を行っている。

44は段重である。口径14.4cm、器高5.7cm、底径9.1cm。口縁端部と器が重なる段以外は施釉する。外側に扇・丸文・リボン文様を描く。

45は合子。口径7.4cm、器高3cm、底径3.4cm。口禿で、高台畳付は無釉。外側に輪宝文を連続で描く。

46は手塩皿である。口径5.8cm、器高1.2cm、底径3.5cm。畳付は無釉。見込みに草花文を描く。

47は伊賀・信楽焼合子である。口径6.1cm、器高2.9cm、底径3.7cm。腰部で屈曲して口縁部は真っ直ぐに立ち上がる。内面から腰部に灰白色の釉を掛けるが、口唇部は釉搔きされる。細かい貫入が入っている。内面口唇部下端の隙間に赤色顔料が残っている。内容物であろうか。火を受けた痕跡があり灯明皿に転用されたようである。

48は伊賀・信楽焼碗である。口径8.8cm、器高5.4cm、底径3cm。淡灰緑色のガラス質の釉が掛かり、全体に粗い貫入が入る。高台は無釉である。

49は京焼系碗である。口径8.2cm、器高5cm、底径3.3cm。黄白色釉が掛かり、全体に細かな貫入が入る。高台畳付は無釉。外側に鉄釉で「宇治口」の銘を描く。胎土は灰黒色を呈し、精良である。

50は信楽焼碗である。口径8.2cm、器高5.5cm、底径3.6cm。内外面と高台内に淡オリーブ灰色の釉を施し、全体に細かい貫入が入る。畳付きから高台は無釉。外面は面取りし、体部の立ち上がりにはヘラキザミを入れる。胎土は灰色を呈し、精良である。

51は三田焼青磁碗である。口径9.4cm、器高4.8cm、底径3.8cm。外面口縁端部から内面に灰緑色の釉を施す。灰白色の大変精緻な胎土である。

52は白磁小皿である。口径10.5cm、器高3cm、底径3.8cm。高台畳付は無釉で、離れ砂が付着する。灰白色釉が施されるが、見込みは蛇の目釉剥ぎする。釉剥ぎの部分に砂が付着している。

53～57は白磁染付皿である。

53は口径12cm、器高3.7cm、底径4.9cm。高台は大きく、断面台形を呈している。器壁も厚手である。畳付き以外を全釉し、見込みを蛇の目釉剥ぎする。内側に斜交線文を描く。呉須の発色は悪く、オリーブ色を呈している。

54は口径13.8cm、器高3cm、底径7.3cm。畳付き以外を全釉し、見込みを蛇の目釉剥ぎする。内側に草花文、見込みにコンニャク印判の五弁花を描く。

55は口径13.2cm、器高3cm、底径6.8cm。外側は唐草文、内側に扇と花の文様、見込みにはコンニャク印判が押され、高台内に崩れた「太明年製」銘を描く。

56は輪花皿である。口径14.2cm、器高4.2cm、底径8cm。高台は蛇の目凹形高台で、高台内を釉剥ぎする。釉調は青味がかかった白色で、全体に大きな貫入が入る。呉須の発色は良好で濃い藍色を呈する。内側に菊と斜格子、見込みに環状の松竹梅円形文、外側に唐草文を描く。高台内には「渦福」を配し、その上に鉛ガラスで「ツキ」と記している。

57は輪花皿。口径15.4cm、器高5.2cm、底径8.6cm。高台畳付を除いて、青味がかかった釉を施す。内側は菊と山水文を交互に配し、見込みに杉を描く。外側は唐草文と波濤文、高台内に「渦福」を記す。

58は瀬戸・美濃焼馬の目皿である。口径22.5cm、器高4.5cm、底径11cm。高台畳付は幅広に作られている。灰白色の釉を施すが、体部外面下半から高台内は無釉。内側に鉄釉で渦巻き文を描く。

59は白磁色絵鉢である。口径18.8cm、器高8.5cm、底径7.6cm。高い高台を持ち、腰部で屈曲して外反して大きく開く口縁部が続く。器壁は大変薄く、上手物である。白色透明の釉を全釉し、畳付は釉剥ぎする。口唇部には口錆を施す。外側には菱形の中に「寿」を描いたものを中心に、計8個の丸・四角囲いの中に篆書と金文の銘を赤絵で描いていたが、その中の7個が残っている。文字の解説については、参考文献の項を参照されたい。

高台内には「大清乾隆年製」銘を呉須で記す。呉須の発色は良好で、濃い藍色を呈する。清朝のものであろう。

60～66は肥前磁器である。60は青磁染付碗である。口径14.7cm、器高8.1cm、底径4.7cmを測る、大振りな碗であるが、高台はかなり小さい。内外面に緑灰色の釉を施すが、高台畳付は無釉で、離れ砂が付着する。見込みに菊文をあしらい、高台内に「渦福」が記される。

61は青磁染付鉢である。口径21cm、器高8.4cm、底径11.5cm。高台は蛇の目凹形高台。内外面に淡緑灰色釉を施すが、高台内は蛇の目釉剥ぎする。口縁部は波濤文、見込みには山水文を染付する。高台内に「富貴春長」銘を記す。呉須は青色を呈し、滲んでいる。

62は白磁染付瓶である。外面は全面施釉し、高台畳付に離砂が付着する。外側に草花文を描く。

63は白磁染付御神酒徳利である。口径1.6cm、器高8.6cm、底径3.3cm。外面には青味がかかった白色釉を施すが、高台畳付は無釉である。外側に藤文を描く。

64は白磁染付仏飯器である。口径6.9cm、器高5.9cm、底径4cm。全釉し、畳付は釉剥ぎする。外側に蛸唐草文を描く。

65は青磁香炉である。口径12.8cm、器高5.9cm、底径4.4cm。体部下半に三足を持ち、肩部には耳を3ヶ所配していたようである。灰緑色の釉を施すが、内面と高台・三足の先端は無釉である。高台内に「力山」の墨書を記す。

66は青磁花生である。口径8.2cm、器高14.4cm、底径5.8cm。肩部に一对の耳を持つ。内面口縁部から外面に緑灰色の釉を掛け、高台畳付を釉剥ぎする。

67は瀬戸・美濃焼花生である。口径13.6cm、器高17cm、底径9.9cm。扁平な体部に太い頸部から外反して大きく開く口縁部がつづく。頸部中位に一对の耳を持つ。内面はロクロ成形痕が顕著に残っている。

る。頸部内面から外面に鉄釉を施し、更に、口縁部内面から外面には緑がかった黒褐色釉を施釉する。胎土は淡黄色を呈し、長石粒・砂粒を含み精良である。

68は陶器輪花鉢である。口径11.6cm、器高8.6cm、底径7.3cm。高台から直線的に延びる体部と内湾する口縁部からなる。口縁端部は上方に短く立ち上がる。口唇部にキザミ目を入れて、輪花を表している。内面から外面下半部まで褐釉を施し、外側に黒釉で梅の木をあしらう。胎土はにぶい黄橙色を呈し、精良である。

69は陶器灯火具の傘部である。板作りで、裾広がり四角形を成す。透かしを設け、対面側には空気孔を穿ち、頭部の摘みにはキザミ目を入れる。外面に光沢のある灰緑色の釉を掛けている。

70・71はままごと道具である。70は土師器壺。口径3cm、器高2.4cm、底径1.8cm。ロクロ成形し、底部に糸切り痕が残る。71は備前焼甕である。口径6cm、器高4.5cm、底径3cm。ロクロ成形され、体部上方には掻き目が入る。口縁部内面から外面にかけて赤色泥釉を施す。

72は京焼系灰落しである。口径4.4cm、器高7.1cm、底径4.4cm。底部と口縁上端部を除いて黄灰色釉を施し、上絵付けで花文様を描く。底部に墨書が記されているが、判読出来ない。

73～75は化粧道具である。73は肥前白磁紅皿である。口径4.9cm、器高1.4cm、底径1.4cm。貝の文様を型どった型押し成形。内面から口縁部に白色の釉を施す。74は丹波焼お歯黒壺である。口径6.5cm、器高9.2cm、底径6.5cm。内面頸部から外面にかけて緑褐色の釉が施される。内面に鉄分が付着している。

75は陶器お歯黒把手盃である。口径6.2cm、器高3.3cm、底径3.1cm。外面にはロクロ成形痕がよく残る。内面から体部上半に茶褐色の釉を施す。内部に鉄分の付着がある。胎土は黄橙色を呈し、精良である。

76は土師質風炉である。口径18.8cm、器高17.5cm。丁寧にロクロ成形され、外面は密に横方向にヘラミガキする。低い足を3ヶ所配し、それぞれの足の中央に内面まで貫通する孔を穿つ。口縁部直下に釜受けの突起が3ヶ所張り付けられている。胎土は橙色を呈し、雲母・砂粒を含み精良。

77は軒丸瓦である。瓦当文は左巻三巴文。瓦当径15.6cm、外縁幅2cm、瓦当側面厚2.2cm、外縁高0.6cm、珠文は13個。胴部凸面はミガキ、凹面は布目痕とコビキB痕が認められる。外縁はヨコナデ、瓦当裏面は周囲をヨコナデし、中側はナデの後、刷毛状工具で斜めにナデている。黒色を呈し、雲母・長石・石英・砂粒を含む。

この他に土人形・泥面子(PL.25-a~n)などの玩具が出土している。a~cは土人形。aは力士、bは亀、cは蛙である。d~lは泥面子で狐(d)などの動物や人の顔(e~i)を象ったもの、文字を象ったもの(j~l)がある。m・nは箱庭遊びの道具でmは鐘楼、nは家である。

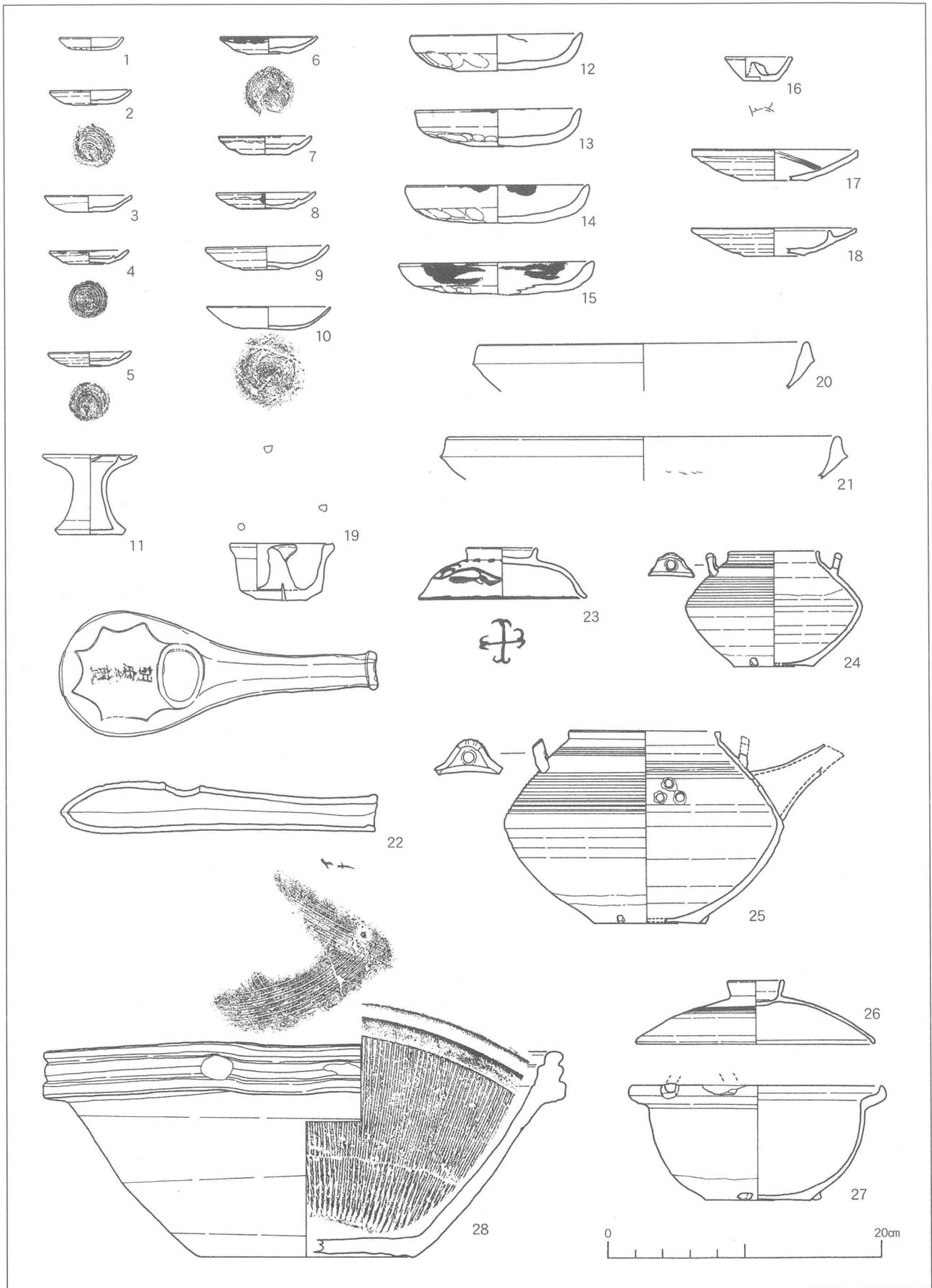
食器や台所道具・酒器・灯明具など陶磁器類の他に、当時の人々が食した多種類の貝殻が多量に出土しており、当時の食生活を知ることができる。

この遺構には出土遺物から18世紀後期後半から19世紀前半の年代が与えられる。

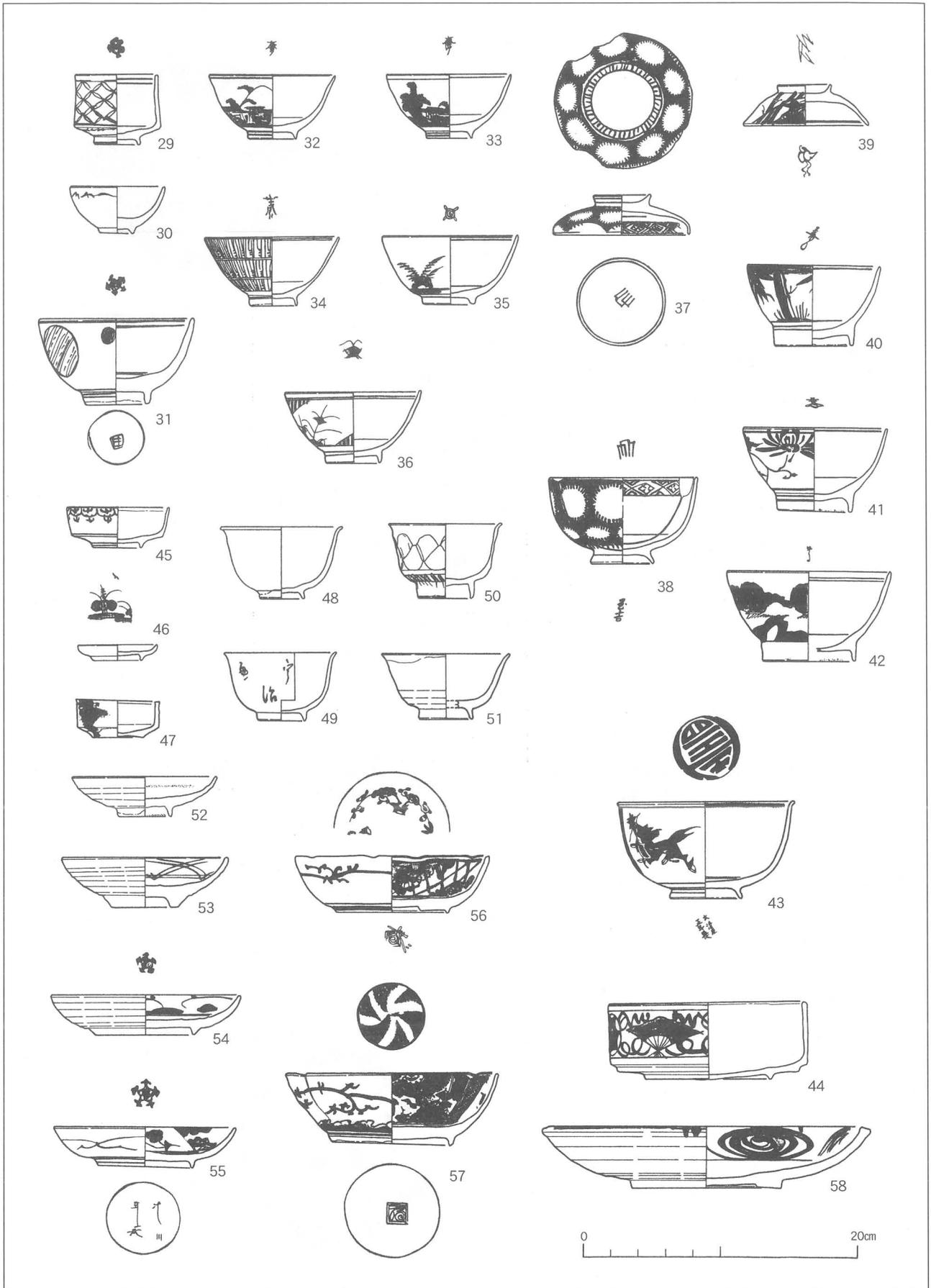
竈1 (第34図、PL.13)

全長3.6m、焚口部は南に設けられ、東西1.2m、南北2.4mの縦長に造られる。燃燒部内法0.9m、掘方径1.5m、深さ35cmを測る単基の竈である。上面をかなり削平されており、遺構の残りは浅い。燃燒部は掘方に沿って幅30cm程の粘土(16)を貼り、骨材として等間隔に長方形の凝灰岩を据え、その上を粘土(15)で覆って構築している。焚口の両袖は粘土と河原石で造られる。灰の掻き出し用に幅25cm、深さ10cm程の溝を設け、長辺には長さ80cm、高さ10cm、幅10cmの凝灰岩を据える。溝の内底面は良く焼き締まった硬化面となっている。単基の竈であるが、酒造用の竈と考えられる。

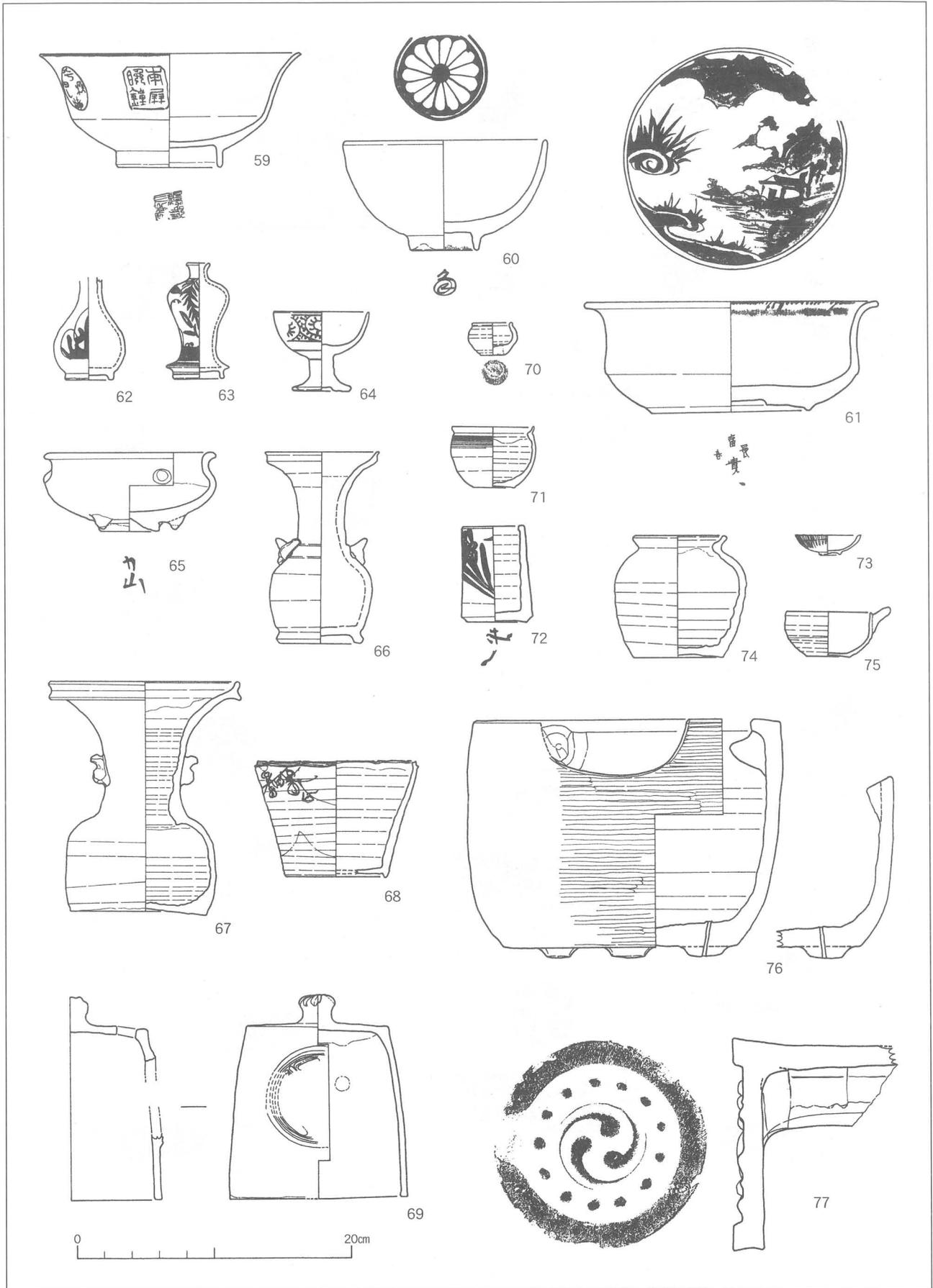
竈1の西隣では井戸を埋めて造られた竈3を検出している。後世の攪乱によって大きく破壊されて



第31图 地下室状遺構出土遺物 (1)



第32図 地下室状遺構出土遺物 (2)



第33図 地下室状遺構出土遺物 (3)

おり全容を知ることはできないが、残存する竈壁から直径1mの燃焼部が復元できる。焚口部は調査区外に延びている。井戸・竈から遺物の出土は無く時期は不明である。

竈1出土の遺物としては江戸時代中期頃の丹波焼甕、肥前磁器などが少量出土している。

78は肥前白磁染付御神酒徳利である。高台畳付は無釉。外側に草花文を描く。

79は刷毛目唐津焼鉢である。口縁は端部の折り返しにより玉縁状をなす。口縁から内面はオリーブ褐色釉を塗布し、外面は白化粧土が刷毛目状に掛かる。

18世紀後半頃の所産であろう。

男柱1（第35図、PL.13）

南北方向の搾場の遺構である。現存長2.7m、幅1.2m、深さ85cmを測る。男柱は平面が75×85cmの長方形を呈し、掘方は深さ1.6mの台形を成している。南北方向には男柱の跳ね上がりを防ぐ横木を据えるが、ここでは横木を固定させる為の重石が残っていた。埋土は褐色土層・オリーブ褐色土層（粘質土層）が堆積していた。

遺物は陶磁器片と貨銭（「寛永通宝」か）が少数出土している。

80は京焼系碗である。口径8.6cm。腰部が張り、口縁部は真っ直ぐに立ち上がる。内外面に灰褐色の釉を施し、外側に鉄絵を描く。胎土は灰白色を呈し、精良である。

81は肥前白磁染付碗である。高台畳付は無釉である。高台内に崩れた「太明年製」銘を記す。

18世紀中頃のものである。

土坑6（第35図、PL.13・14）

男柱1で搾った酒を受ける垂壺跡である。直径1m、深さ1mを測る。掘方は西側がテラス状に1段高くなっている。埋土は褐色土層（1～5）と砂層（6～9）であるが、砂が側面と底面に堆積していることから、甕を据える時に掘方と甕の隙間に砂を入れて固定したことが窺える。

男柱2（第36図、PL.14）

南北方向の搾場遺構である。現存長2.4m、幅1.3～1.5mを測る。男柱の埋め込み穴は平面が60×70cmの方形を呈し、深さ1.5mを測る。掘方は方形を呈す。横木跡には上に乗せる重石が残ってるが、遺構の1/3は調査区外に延びている。

土坑10（第36図、PL.14）

男柱2で搾った酒を受ける垂壺跡である。直径1.2m、深さ90cmを測る。掘方は中央が1段窪んでいて、甕底部を収まり良くしている。埋土は土坑6と同様に、遺構底面に砂層（6）が堆積しており、僅かな隙間にも砂を入れて甕を固定している様子がわかる。

いずれの遺構からも遺物の出土はなかったが、男柱2が井戸2（18世紀前半頃）より新しいことから18世紀中頃以降の年代が与えられる。

井戸 2 (第37図)

直径1.2mを測る円形の素掘りの井戸である。埋土は拳大の石を含む黄褐色粘質土層(1)、砂~拳大の石を多量に含むオリーブ色粘質土層(2)の下に、拳大の石を含んだ砂利層(3)がつづく。北側を僅かに男柱2に切られている。

遺物の出土は殆どなく図化できた物は次の2点である。

82は肥前白磁染付盃である。口径6.2cm、器高2.5cm、底径3cm。内外面に緑がかった釉を施す。高台・壘付は無釉。高台内外面には釉が厚く掛かる。外側に笹文を描く。

82は肥前白磁染付碗である。口径9cm。内外面に青みがかった白色釉を施す。外側に菊と草花文を描く。

呉須の発色は良好で、淡い藍色を呈す。18世紀前半頃のものである。

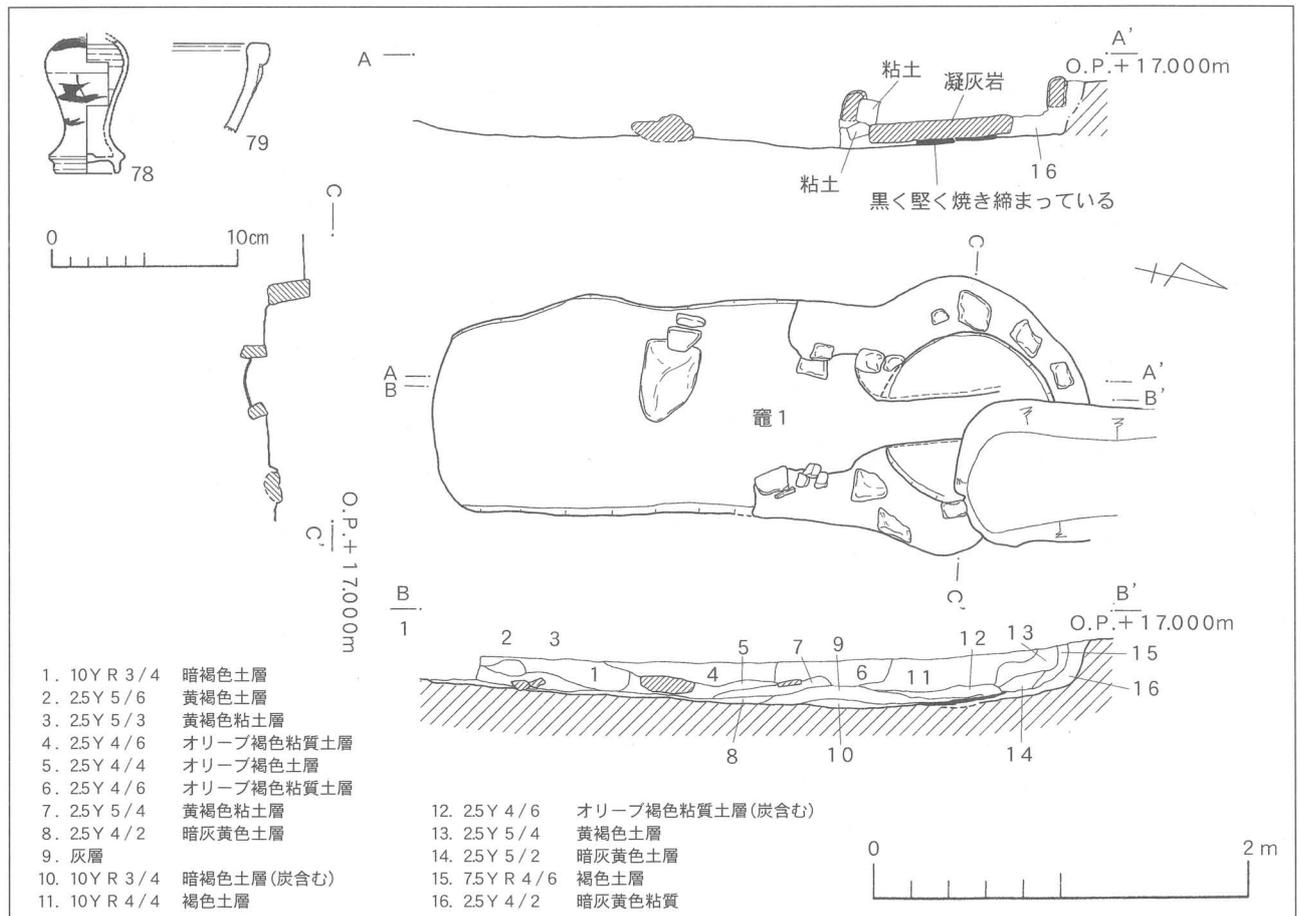
井戸 3 (第28図、PL.16)

調査区北西隅で検出し、調査区外に広がる大型の素掘りの井戸である。短径1.5m×長径2m以上の楕円形の掘方をもつ。確認できた埋土は、上層に多量の瓦と炭を含んだ暗オリーブ褐色土層(109・110)の下に拳大の石、多量の瓦・遺物、炭を含む褐色の粘土層(111・112・113)が堆積する。その下に多量の黄色壁土、白色壁土を含む灰オリーブ色土層(114・115)がつづく。

酒造用の井戸と思われる。竈3とセットの可能性もあるが、酒造遺構は西・北側にも広がっているため断定できない。

遺物 (第38図、PL.27・28)

84~91は灯明具である。84は柿釉灯明受け皿である。口径5.8cm、器高1cm。底部に糸切り痕が残



第34図 竈1平面図・断面図・出土遺物(1/40・1/4)

る。内側に灯明皿を受ける返りが巡る。

85は柿釉灯明皿である。口径8.5cm、器高1.6cm。底部に糸切り痕が残る。いずれもロクロ成形による。

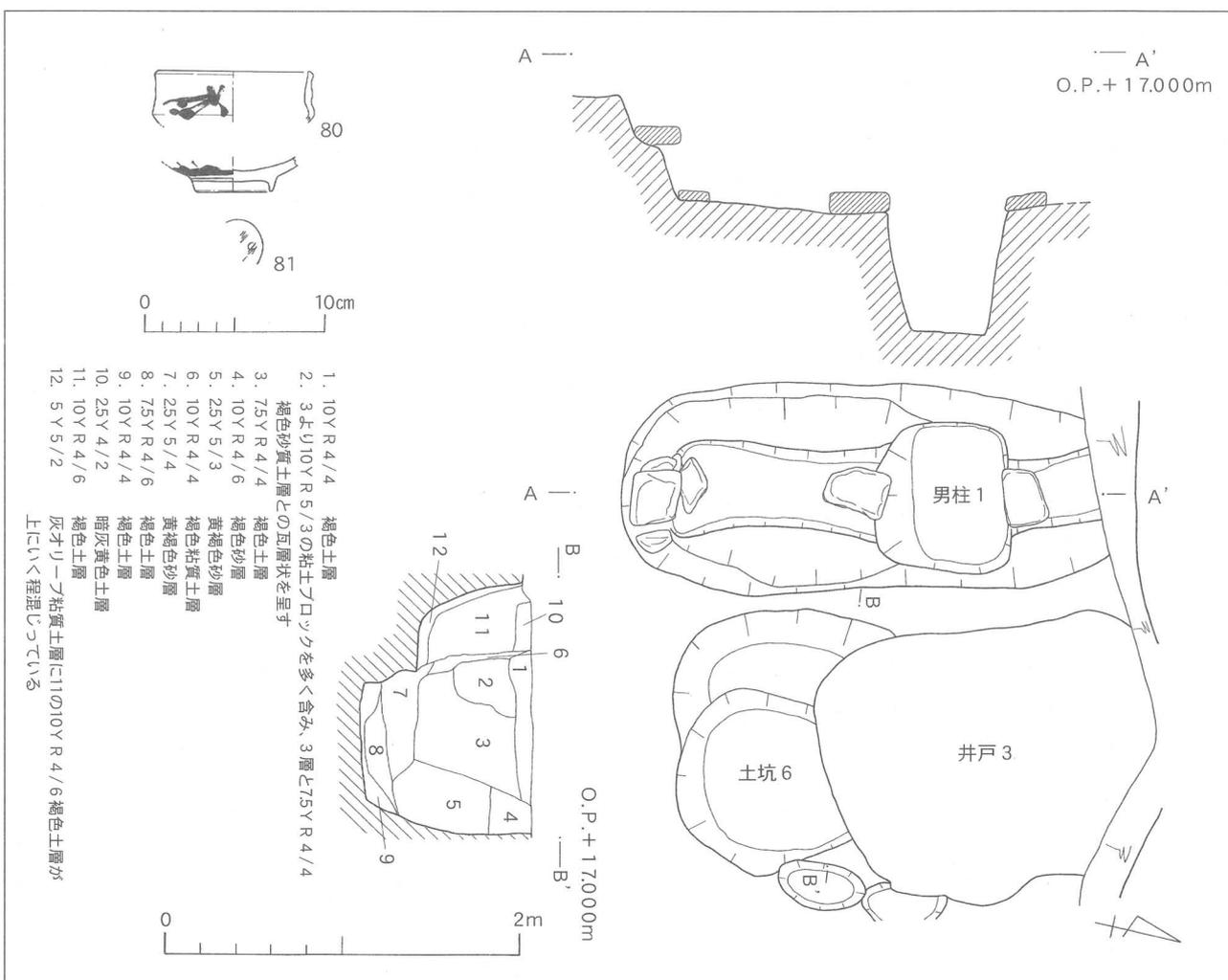
86~88は土師器灯明大皿である。口径11.8~12.2cm、器高2.3~2.5cmを測る、大型の灯明皿である。手捏ねにより、外面には指頭圧痕が顕著に残る。口縁に煤が付着している。地下室状遺構からも同様の皿が多数出土している。

89~91は伊賀・信楽焼である。89は灯明皿である。口径11cm、器高2.3cm、底径4.2cm。内面に重ね焼きの目跡が残る。5本1単位の櫛目が3ヶ所に入っている。内面から外面口縁端部にオリブ灰色の釉を施し、全体に細かい貫入が入る。

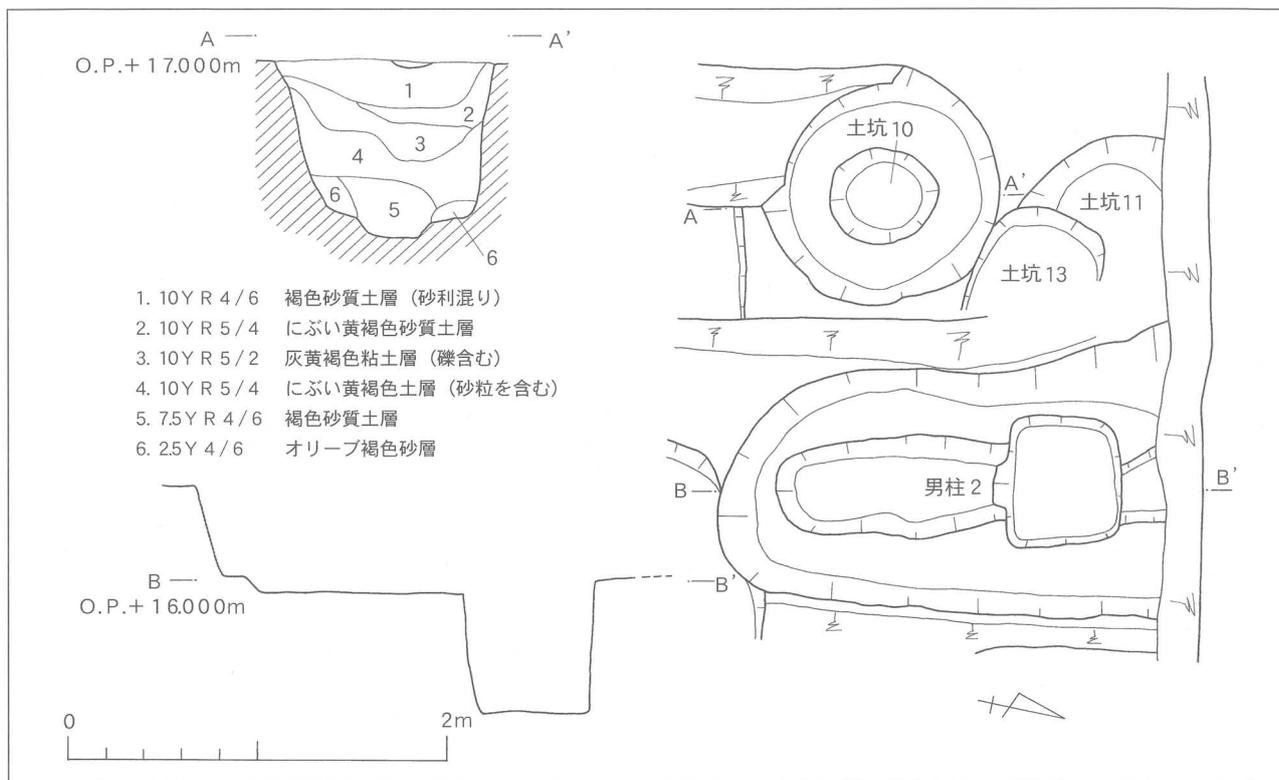
90・91は灯明受け皿である。89の皿をのせるものである。90は口径10.6cm、器高1.8cm、底径4.3cm。口縁部は底部から内湾気味に立ち上がる。内面中位に受け部が直線的に立ち上がる。

91は口径12.4cm、器高2.4cm、底径4.8cm。底部から外反気味に延びる口縁部は、端部でやや肥厚する。内面中位に受け部が短く立ち上がる。いずれも内面から外面口縁端部に灰白色の釉が施され、全体に細かい貫入が入る。

92は焙烙である。口径40.3cm、器高8.2cmを測る大型品である。深い体部に、短く内傾気味に立ち上がる口縁が続く。体部と口縁部境の稜は鋭い。両側に幅広で浅い把手が付く。見込みと外面には煤の



第35図 男柱1・土坑6平面・断面図・出土遺物(1/40・1/4)



第36図 男柱2・土坑10平面・断面図 (1/40)

付着が認められる。胎土はにぶい橙色を呈し、雲母・クサリ礫を含み精良。

93~104は肥前白磁染付である。93は広東碗の蓋である。口径10.1 cm、器高3.1 cm。青味がかった灰白色の釉を施し、全体に粗い貫入が入る。胎土は黄灰色を呈し、粗い。外側に山水文、つまみ内に松の絵、見込みに岩に砕ける波濤の絵を描く。

94・95は小振りで薄手の碗である。高台畳付は無釉。94は口径9.2 cm、器高6.6 cm、底径3.3 cm。外側に鶴と雲の絵を描き、見込みにはくずした「壽」の文字を記す。焼継が行われている。上手物である。

95は口径8.8 cm、器高4.5 cm、底径3.4 cmを測り、更に小振りである。外側に海浜風景を描き、見込みにくずれた「壽」を記す。数個体 (セットものか) の出土が見られる他、地下室状遺構からも同種の碗が出土している。上手物である。

96は端反り碗である。口径12.4 cm、器高5 cm、底径4.3 cm。高台畳付は無釉。外面にはロクロ成形痕が良く残っている。見込みは蛇の目釉剥ぎして、コンニャク印判の五弁花を配す。

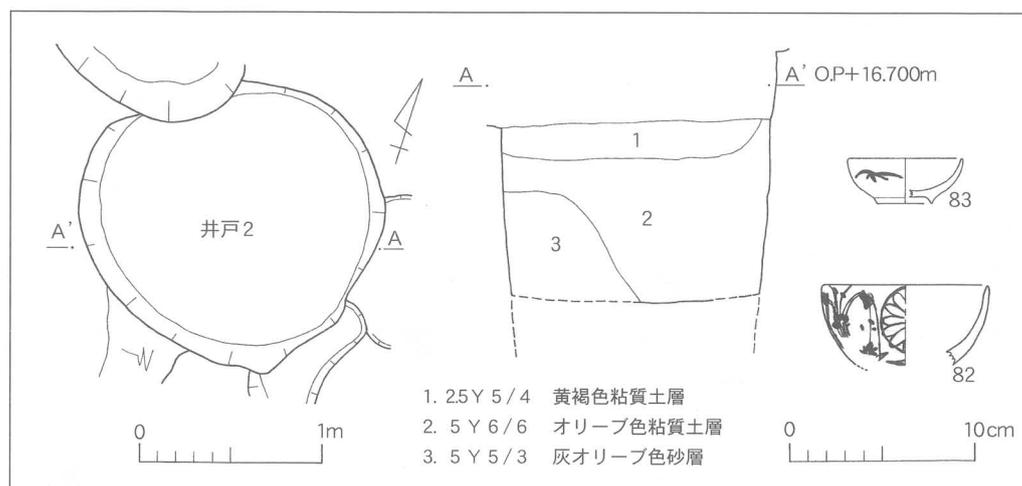
97は皿である。口径11.9 cm、器高4 cm、底径4.7 cm。器壁はたいへん分厚い。高台畳付は無釉。見込みを蛇の目釉剥ぎする。内側に草花文を描き、見込みにコンニャク印判の五弁花を配す。

98は輪花皿である。口径13.9 cm、器高4.1 cm、底径8.6 cm。高台は蛇の目凹形高台で、高台内を蛇の目釉剥ぎする。口鏝を施している。内側は海浜風景を描く。数個体出土しており、上手物である。

99は輪花手塩皿である。口径9.8 cm、器高2.4 cm、底径6.1 cm。高台畳付は無釉である。内側に海浜風景を描く。

100は輪花小皿である。口径10.7 cm、器高2.5 cm、底径6.2 cm。高台畳付を除いて全釉する。外側に唐草文、内側には草花文、見込みに五弁花を手描きして、高台内には「渦福」を記す。上手物である。

101は小杯である。口径6.6 cm、器高3.4 cm、底径2.6 cm。高台畳付は無釉で、離れ砂が付着する。外側に笹の絵を描く。



第37図 井戸2平面・断面図・出土遺物（1/40・1/4）

102は赤絵小杯で、薄手の上手物である。口径6.8cm、器高3.3cm、底径2.3cm。高台畳付は無釉で、離れ砂が付着する。外側に扇と花文が描かれている。

103は筒形碗である。口径8.4cm、器高6.5cm、底径3.6cm。高台畳付は無釉である。内外面に粗い貫入が入る。外側口縁部に格子文を帯状に配し、デザイン化した「壽」文をそえ、見込みにくずれた五弁花を手描きする。

104は大振りで高台が撥形に開く蓋物の碗である。口径11.6cm、器高5.8cm、底径4.7cm。高台畳付を除いて、青味がかった白色の釉を施釉する。外側には菊と渦文、内側は口縁部に格子文、見込みに環状の松竹梅円形文を配す。

105は青磁染付碗である。口径14.8cm、器高6.4cm、底径6.8cmを測る大振りの端反りの碗である。高台畳付を除いて緑灰色の釉が施こされる。外側に魚文と波文・蛸唐草文を描き、見込みには波文をそえる。高台内には銘を記すが、判読できない。焼継を行っている。胎土は灰白色を呈し精良。清朝のものかと思われる。

106～109は瀬戸染付磁器碗である。青味を帯びた透明白色釉が施され、磁胎は精良で、磁肌が光っている。106は碗蓋である。口径9.6cm、器高3cm。外側は「壽福」と「福壽」と格子文を交互に描き、内面口縁部に「福」と「壽」と格子文を帯状に配す。見込みに福袋が描かれる。

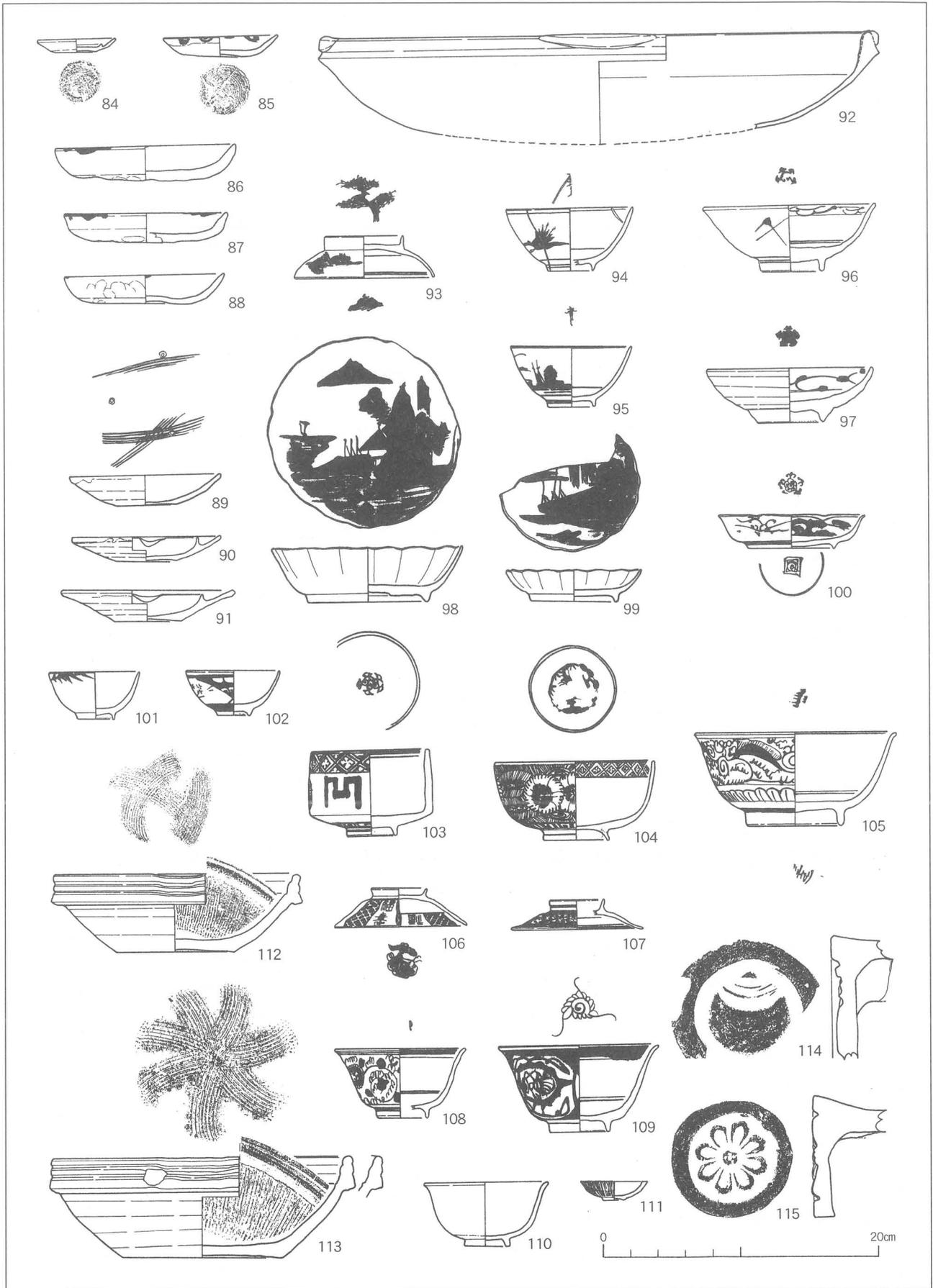
107は碗蓋である。口径9.4cm、器高2.2cm。つまみ端部は無釉である。外側中位に草花文、その上下と内面口縁部は墨弾きで渦巻文を描く。108は碗である。口径9.4cm、器高5.2cm、底径3.6cm。口縁部を強く外反させる。高台畳付は無釉。外側に草花文を描く。109は碗である。口縁部は外反する。口径11.4cm、器高6.5cm、底径4.4cm。高台畳付は無釉である。外側に窓絵を描き、見込みに桔梗文を配す。

110は伊賀・信楽焼系碗である。口径8.8cm、器高4.9cm、底径3.3cm。高台は削り出しによる。オリブ灰色の釉を施すが、高台は無釉である。全体に細かい貫入が入る。

111は肥前白磁紅皿である。口径4.9cm、器高1.4cm、底径1.4cm。型押し成形。体部下半は無釉である。

112は堺焼小型の播鉢である。口径17.4cm、器高5.7cm、底径8.7cmを測り、櫛目の単位は10本である。内面の櫛目は密に施され、見込みの櫛目はウールマーク状に入る。内面口縁の段や体部との境の段はあまり明瞭ではなく、沈線状に区画される。底部縁辺から縁帯部直下までを丁寧にヘラケズリする。底部に離れ砂が付着している。内外面ともに赤褐色を呈する。

113は明石焼播鉢である。口径21.5cm、器高7.6cm、底径11.6cmを測り、櫛目の単位は10本である。



第38図 井戸3出土遺物

内面の櫛目は密に施され、見込みの櫛目は放射状に施す。口縁部内面の段や体部との境の段は明瞭ではない。内外面は赤橙色を呈し、外面は褐色釉が塗布されたように見える。

114・115は棟込瓦である。114の菊丸瓦の瓦当文様は宝珠文である。瓦当径11.2cm、外縁幅1.8cm、瓦当側面厚1.8cm、外縁高0.5～0.7cmを測る、やや大振りのものである。外縁はヨコナデ調整。瓦当裏面は周囲を強くヨコナデし、中心は不定方向のナデの後、十字にナデている。瓦当と胴部の接合部分はしっかりと指押さえた後、丁寧にヨコナデする。胴部凸面はミガキ、瓦当付近はヨコナデする。

115の瓦当文様は菊文。瓦当径9cm、外縁幅1.2cm、瓦当側面厚1.4cm、外縁高0.5cm。文様高は高く、外縁高を凌いでいる。花卉は剣菱状のシャープな作りである。外縁はヨコナデ調整し、瓦当裏面は周囲をヨコナデし、中心は指頭圧痕が顕著である。胴部凸面はミガキ調整し、瓦当付近はヨコナデする。胴部凹面はタタキ痕が残る。

この遺構には出土遺物から18世紀後期後半から19世紀前半の年代が与えられる。

土坑22（第40図、PL.17・29）

水琴窟遺構である。47×55cmの楕円形の掘方を呈し、掘方のやや西寄りに甕を伏せている。土坑の床面に拳大の石を敷き詰め、中心に磁器皿（118）を置き、その上に丹波焼甕（119）を倒立させた状態で据えている。位置的にはトイレ遺構（土坑1・2、埋桶1 PL.16）が集中する裏庭にあたり、手水場に備えられた遺構であったと思われる。実際に鳴ったかどうかはわからないが、風流な生活の一端が偲ばれるものである。

遺物

116は柿釉灯明小皿である。口径5.8cm、器高1.1cm。ロクロ成形され、底部外面に糸切り痕が残る。透明釉を内面から口縁部外面に施す。口縁端部に煤の付着が見られる。胎土は浅黄橙色を呈し、クサリ礫・砂粒を含む。

117は肥前白磁染付碗である。口径13cm、器高5.5cm、底径5cm。口縁が外反するいわゆる端反り碗である。高台豊付は無釉で、離れ砂が付着する。見込みは蛇の目釉剥ぎする。外側に松葉模様、見込みにコンニャク印判の五弁花をそえる。

118は肥前白磁染付皿である。口径13.2cm、器高4.2cm、底径8.3cm。高台は蛇の目凹形高台である。豊付は無釉。内側と見込みに笹絵を描く。

119は丹波焼鉄釉甕である。口径21.4cm。内外面はロクロ成形痕が目立ち、全面に鉄釉が施される。球形状の体部に、内傾する玉縁状の口縁を持つ。19世紀初頭頃の遺構である。

土坑23（第41図、PL.17・29）

直径30cmの円形の土坑である。掘方一杯に陶器甕が天地逆に据えられている。水琴窟を意識して作られたようだが、土坑22のような内部構造は見られない。

遺物

120は陶器甕である。口径23.6cm、器高29.9cm、底径14cm。体部上半部にロクロ成形痕が目立ち、器壁は厚い。底部中央を打ち欠いている。体部外面に「人形小口口」（兵衛力）の墨書が記されている。底部には刻印が押されている。胎土は明褐色を呈し、精良である。

19世紀前半頃の所産であろう。

土坑24（第41図、PL.17・29）

34×27cmの楕円形の土坑である。丹波焼甕が倒立して据えられている。土坑22に比べて規模はかなり小さく内部構造も見られないが、土坑23同様、水琴窟を意識して作られたものであろう。

遺物

121は丹波焼鉄釉甕である。口径17.9cmを測る。ロクロ成形痕が良く残っており、器壁は大変薄く仕

上げられている。口縁平坦面から内面には白泥釉を施す。外面は鉄釉を化粧掛けした後、黒色釉を流し掛けしている。

19世紀前半頃の所産であろうか。

胞衣壺 1 (第39図、PL.17・29)

56×33cmの楕円形の土坑である。土師器火消壺と丹波焼徳利が並置した状態で出土した。火消壺は胞衣壺として転用され、徳利は何んらかの祈願の為に一緒に埋められたものと考えられる。建物の土間面での検出である。

遺物

122は土師器火消壺である。身の口径11.4cm、器高16.2cm、底径12.0cm。ロクロ成形する。平坦な底部から体部は強く外反して立ち上がり、肩部で強く内湾する。口縁端部は肥厚して小さな玉縁状を呈す。内面肩部から体部外面は丁寧にロクロナデするが、内面は粘土紐の積み上げ痕が残る。底部周囲を面取り状にヘラケズリする。体部外面（特に屈曲部以下）に炭化物の付着が見られる。胎土はにぶい橙色を呈し、クサリ礫が目立つ。

蓋の口径15.8cm、器高3.5cm、つまみ径3.4cm。丁寧なロクロナデを施す。天井部外面に離砂が付着する。胎土は浅黄橙色を呈し、クサリ礫が目立つ。

123は丹波焼徳利である。口径3cm、器高23.6cm、底径8.7cm。ロクロ成形痕がよく目立ち、器壁は薄く仕上がっている。底部は上げ底。体部は腰部からあまり膨らまずに肩部へ続く。短く立ち上がる頸部に内傾する玉縁状の口縁部が付く。口縁部内面から底部周囲まで褐釉を施す。外面肩部には鉄釉が施されているが、焼成時に釉の表面が弾け飛んでいる。19世紀中頃前後のものである。

胞衣壺 2 (第39図、PL.18・30)

胞衣壺1の北隣に埋められていたものである。掘方は平面で一辺25cmの隅丸方形を呈し、中央に直径20cm、深さ17cmの掘り込みを持ち、壺の体部を収めている。埋土は褐色土層で一度に埋められているが、体部周囲の埋土には締まりがない。土間面での検出である。

遺物

124は土師器火消壺である。122と同器形だが、一回り大きい。口径12.1cm、器高20.1cm、底径13.4cm。ロクロ成形する。底部は平坦で、体部は外反しながら立ち上がり、肩部から強く内湾。口縁は短く立ち上がった玉縁状をなす。外面は丁寧にロクロナデされ、体部内面はロクロ成形による凹凸が残る。底部際を面取り状にヘラケズリする。体部外面（特に屈曲部以下）に炭化物の付着がある。

蓋の口径14.8cm、器高3.7cm、つまみ径3.1cm。ロクロ成形し、内外面は丁寧にロクロナデする。天井部外面に輪状に離砂が付着する。身・蓋共に胎土はにぶい黄橙色を呈し、クサリ礫・雲母・石英・石粒を含む。122より体部の外反が緩く、やや時期が古いと思われる。19世紀前半頃に比定されよう。

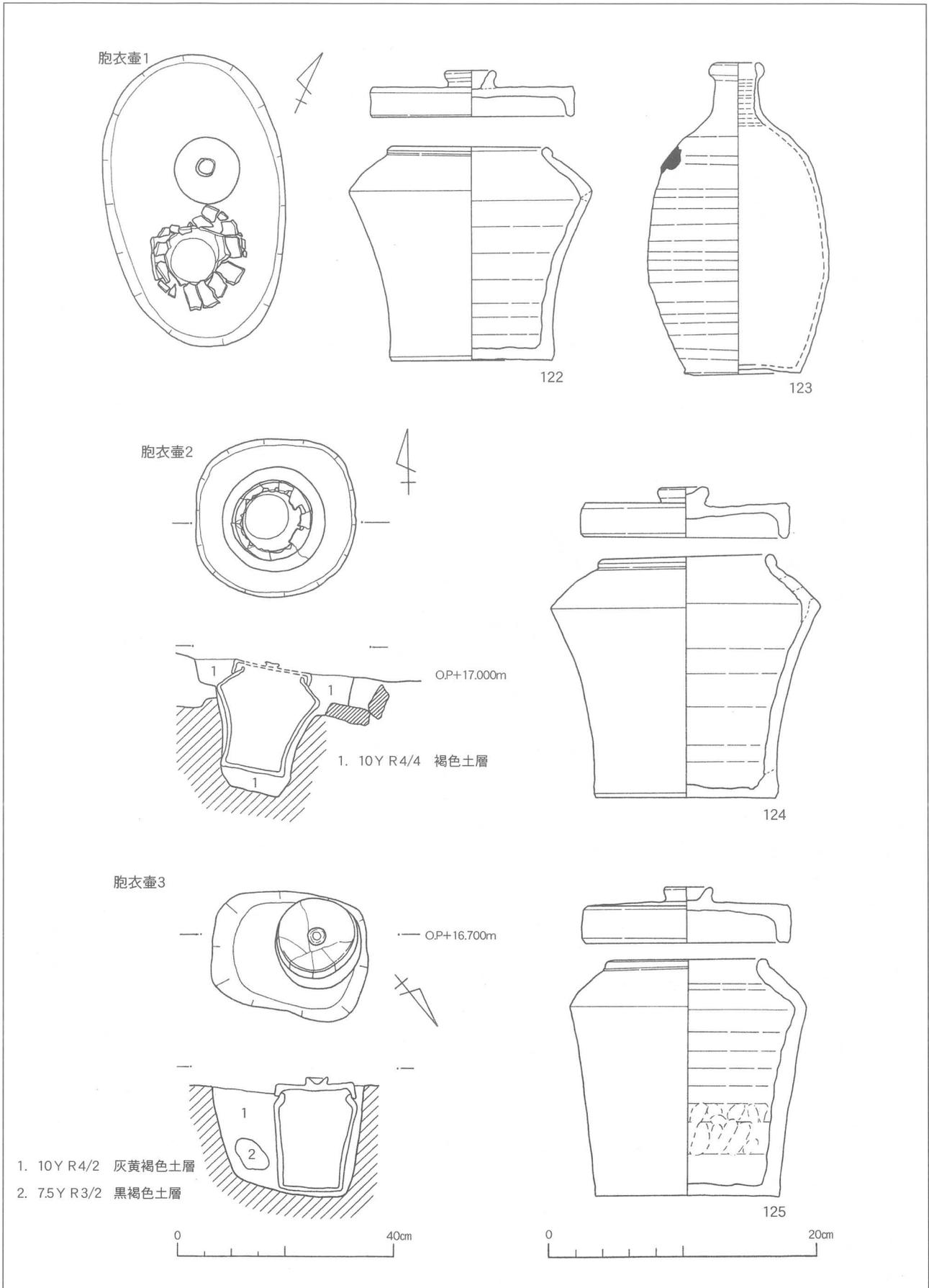
胞衣壺 3 (第39図、PL.18・30)

長辺30×短辺23cm、深さ21cmの長方形の土坑である。壺は土坑の一方に偏って埋納されている。埋土は灰黄褐色土層で、一部黒褐色の木片塊が堆積しているが、これは木製品の副葬があったとも考えられる。壺内には胞衣と思われる内容物が残っていた。

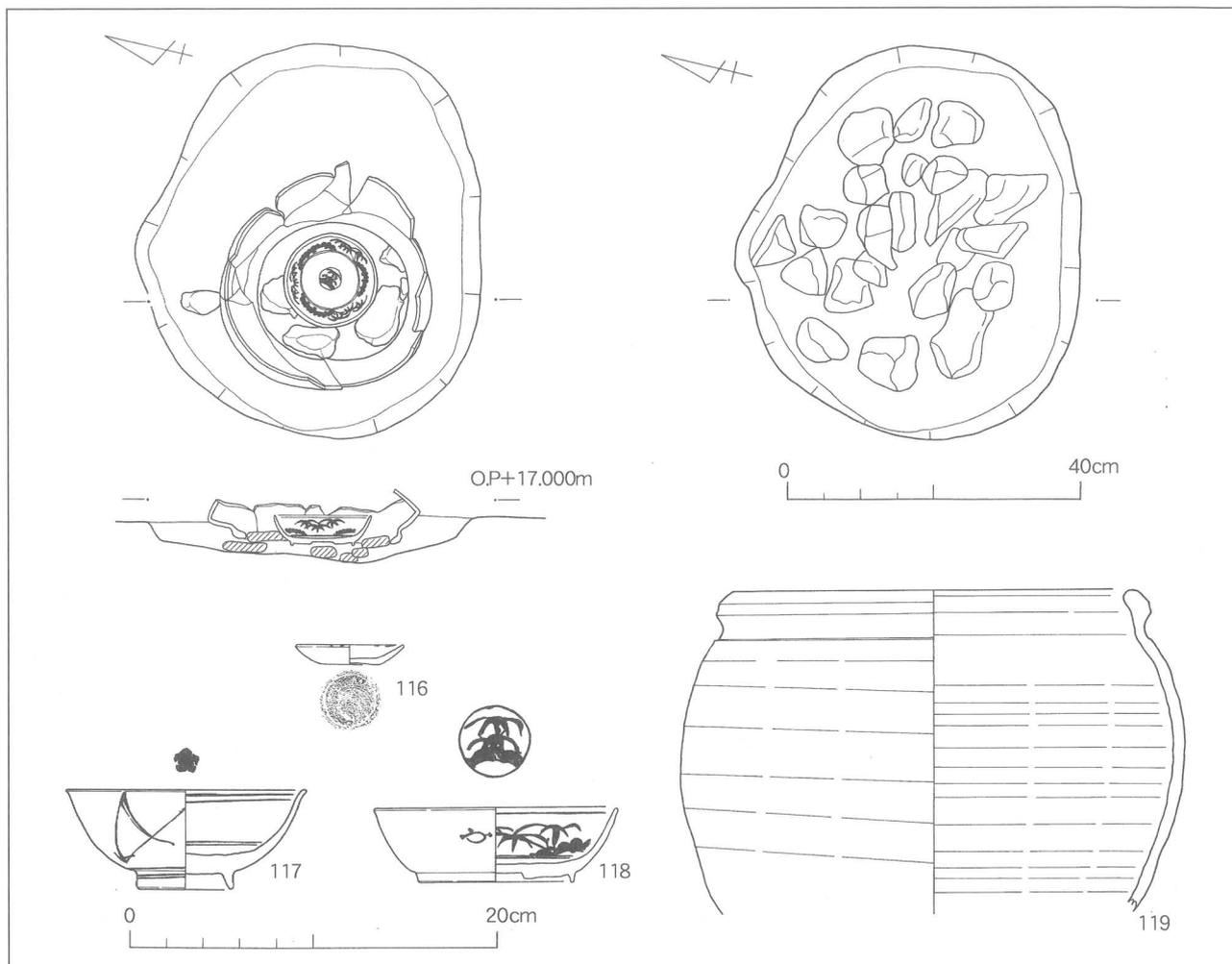
遺物

125は土師器火消壺である。身の口径11.4cm、器高17.8cm、底径13.6cm。ロクロ成形する。平坦な底部から体部は直線的に立ち上がる。肩の張りは122・123に比べると緩やかに内湾する。口縁端部の立ち上がりは僅かである。器壁は厚く、内面にはロクロナデと指頭圧痕による凹凸が顕著に残る。それに比べて底部壁は薄く、丁寧にナデ調整されている。

蓋の口径15cm、器高4.2cm、つまみ径3.4cm。丁寧にロクロ成形され、器壁は口縁にいくほど厚くなる。



第39図 胞衣壺1・2・3出土状況、出土遺物



第40図 土坑22遺物出土状況・出土遺物（1/10・1/4）

共に黄橙色を呈し、雲母・クサリ礫・砂粒を含む胎土である。18世紀中頃から後半のものであろう。

土坑40（第29図、PL.18）

調査区東端で検出したもので、南北1m、東西0.9mの平面が平行四辺形の土坑である。3辺に石組みがされており、河原石に加えて五輪塔や石仏を使用している。埋土は褐色土の下に灰黄褐色砂質土が堆積している。北側は掘方に沿って石を置いているが、南側は石組みを据えた後の隙間に褐色土を入れて固定している。石組内には何ら施設も確認できず、遺構の性格は不明である。

遺物としては丹波焼播鉢、伊賀・信楽焼土瓶、肥前磁器などが出土している。

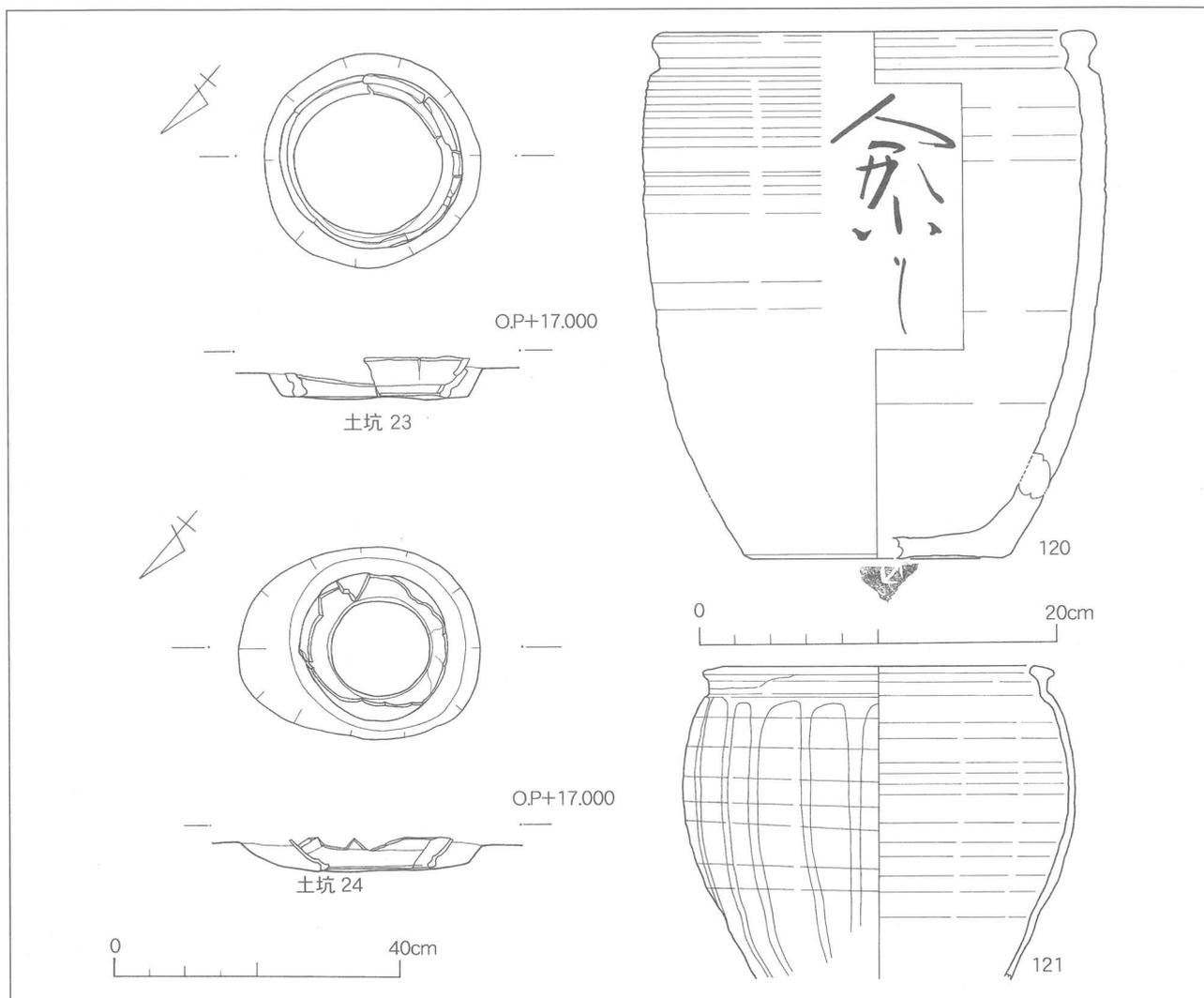
溝3（第42図）

調査区中央で検出した東西方向の敷地境の溝である。現存長4.5m、幅0.9～1.5m、内法幅20～30cm、深さ20～25cm。縁石を伴う溝で、南側の掘方に大きな石を並べ、内側の面を合わせている。河原石の他に五輪塔・石臼なども転用している。掘方に褐色粘質土層（1～4）を入れて、縁石を固定している。溝は2～20cm大の石を多く含む褐色粘質土（5～8）を埋土とし、砂利を多く含むにぶい褐色砂質土層で完全に埋まる。

遺物（第43図、PL.30）

126～131は掘方からの出土である。

126～127は土師器灯明小皿である。口径7～7.4cm、器高2cm。半球形を呈している。口縁端部には



第41図 土坑23・24遺物出土状況、出土遺物（1/10・1/4）

煤が付着する。ナデ調整しているが、体部には指頭圧痕が残る。胎土は明橙色を呈し、精良である。

128は土師器皿である。口径10.4cm、器高1.5cm。内外面はヨコナデ調整するが、底部付近に指頭圧痕が残る。薄手の土器である。胎土は明黄色を呈し、精良である。129は焙烙である。口径28.2cm、器高6.8cm。口縁は上方に立ち上がり、口縁部で内傾して端部を丸くおさめる。口縁はヨコナデ、底部はナデ調整する。底部と口縁の境に右上がりの平行タタキを施している。口縁と底部の器壁の厚さは変わらない。胎土は明褐色を呈し、精良である。A類（難波洋三1992）に比定されるものである。

130は肥前白磁染付皿である。口径13cm、器高3.5cm、底径5.4cm。口縁端部は小さく外反する。高台畳付は無釉で、離れ砂が付着する。内側に草花文を描く。

131は肥前白磁染付碗である。口径9.8cm。体部は膨らみを持ち、口縁部は小さく外反する。外側に草花文を描く。

132～135は溝埋土からの出土である。

132・133は唐津焼二彩鉢である。132は口径39.2cmを測る大型の鉢である。外面にはロクロ成形痕が顕著に残る。内面に黄白色の釉を刷毛掛けし、口縁に灰緑色の釉を施す。外面には透明釉が掛かる。133は底径11.4cm。削り出し高台で、体部下半から高台内にかけては無釉である。内面に黄白色の釉を刷毛掛けし、灰緑色の釉と緑釉を模様掛けする。見込みに砂目が残る。外面は体部中位まで透明

釉を施す。高台畳付に胎土目の痕が残る。

134・135は肥前白磁染付碗である。134は口径9.2cm。外側に楓文を描く。135は底径4.6cm。高台畳付は無釉である。

出土遺物から、溝3は17世紀中頃に設けられ17世紀後半には徐々に埋まっていったようである。

溝4（第42図）

溝3に切られている東西方向の敷地境の溝である。現存長5.1m、現存幅1～1.25m、深さ25～32cm。埋土は褐色粘質土層（14）の上になぶい黄褐色粘質土層（11）が堆積する。

遺物（第43図、PL.30）

136は焙烙である。口径21.6cm、器高7.4cm。底部は緩やかな平底である。口縁部は外方へ一度立ち上がり、中位で屈曲した後、肥厚しながら内傾する口縁が続く。口縁端部は三角形を呈し、内側に明瞭な内向斜面をもつ。底部外面は丁寧なナデ、口縁はヨコナデした後の指頭圧痕が残る。口縁部下半に右上がりの平行タタキを施す。口縁部内面は丁寧にヨコナデするが、上半部には条痕の目立つ強いヨコナデ痕が残る。底部は丁寧にナデ仕上げする。底部内面と口縁部の境、口縁部外面は煤けている。胎土はにぶい黄橙色を呈し、雲母・クサリ礫・粗砂を含む。A類（難波洋三1992）に比定されるものである。

137は土師器皿である。口径4.8cm、器高2cm。内外面共に丁寧にナデ調整する。胎土は灰白色を呈し、精良である。

138は肥前青磁染付碗である。底径4.4cm。外面に青磁釉を施し、高台は無釉である。見込みに菊文をそえる。

139は唐津焼溝縁皿である。口径13cm、器高4.2cmに復元できる。底径4.6cm。内面から高台付近まで長石釉を掛ける。以下は無釉。見込みに目跡が3ヶ所、高台内に砂目が残る。胎土はにぶい橙色を呈している。

140は丹波焼平鉢である。口径3.4cm、器高7.1cm、底径2.68cm。底部は平坦である。内湾気味に大きく開く口縁部は先端で上方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。底部外面にガラス質の自然釉が見られる。胎土はにぶい赤褐色を呈し、砂粒を多く含み粗い。

出土した遺物から見て17世紀中頃の遺構と考えられる。

溝5（第42図）

溝4に切られている東西方向の敷地境の溝である。現存長4.9m、現存幅0.9～1.35m、深さ25～45cm。埋土は一段落ち込んだ所ににぶい黄褐色粘質土層（20）が堆積する。その上に拳大の石を多量に含む黄褐色粘質土層（11）が続く。さらに黄褐色砂層（18）、砂利を含む黄褐色粘質土層（17）が堆積して溝の機能はおわる。

遺物（第43図、PL.31）

141は焙烙である。口径23.1cm、残存器高8.5cmを測り、136よりも器高が深い。底部は緩やかな丸底を呈す。口縁部は1/3立ち上がったところで屈曲して、肥厚しながら内湾する。口縁端部は明瞭な内向斜面をなす。口縁部外面はヨコナデした後の指頭圧痕が残る。口縁部下半から底部際にかけて右上がりの平行タタキが施される。内面口縁部は丁寧にヨコナデし、底部はナデで仕上げる。口縁部外面がよく煤けている。胎土はにぶい黄橙色を呈し、クサリ礫・砂粒を含みやや粗い。A類（難波洋三1992）に比定されるものである。

142は土師器皿である。口径7.2cm、器高1.4cm。内面には横方向のナデ痕がよく残っている。外面はナデ後の指頭圧痕が目立つ。胎土は黄橙色を呈し、精良である。

143は丹波焼播鉢である。直線的に外方へ開き、口縁端部は切り離れた様な明瞭な面を持つ。口縁

内面に段が巡る。外面は口縁付近まで指押さえ痕が残る。内面の櫛目は8本単位である。無釉の焼き締めである。II型式(大平 茂1992)にあたる。

144は瀬戸・美濃焼灰釉折縁皿である。口径10.9 cm、器高2.25 cm、底径5.9 cm。外折する口縁部は端部を内側に小さく巻き込む。内面にヘラ工具による凌ぎが巡る。高台は削り出し高台で、高台内に輪トチン痕が残る。内面見込みには鉄釉が粗く刷毛塗りされ、それ以外には灰緑色釉を施釉する。

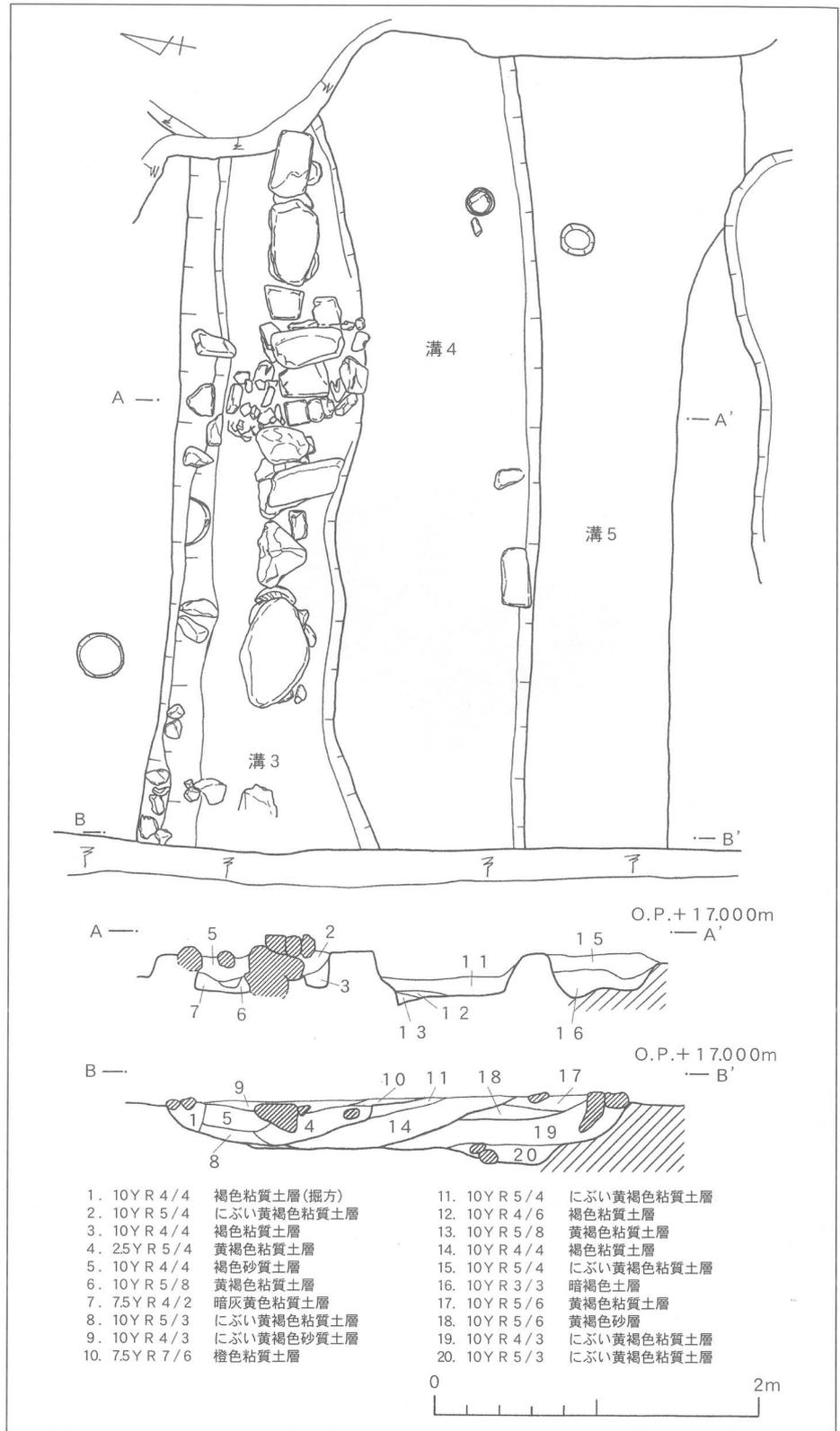
145は瀬戸・美濃焼灰釉向付である。口径11.5 cm、器高3.8 cm、底径5.4 cm。丸く張った腰部から、外反気味に立ち上がる口縁部が続く。口縁端部はさらに外反して尖り気味におさめる。高台は削り出し高台である。緑灰色の釉を施釉するが、高台は無釉である。高台畳付に離れ砂が付着している。

146は唐津焼鉄絵皿である。底径7.0 cm。外面は無釉である。内面は釉を掛け、鉄絵を施している。見込みに目痕が残る。

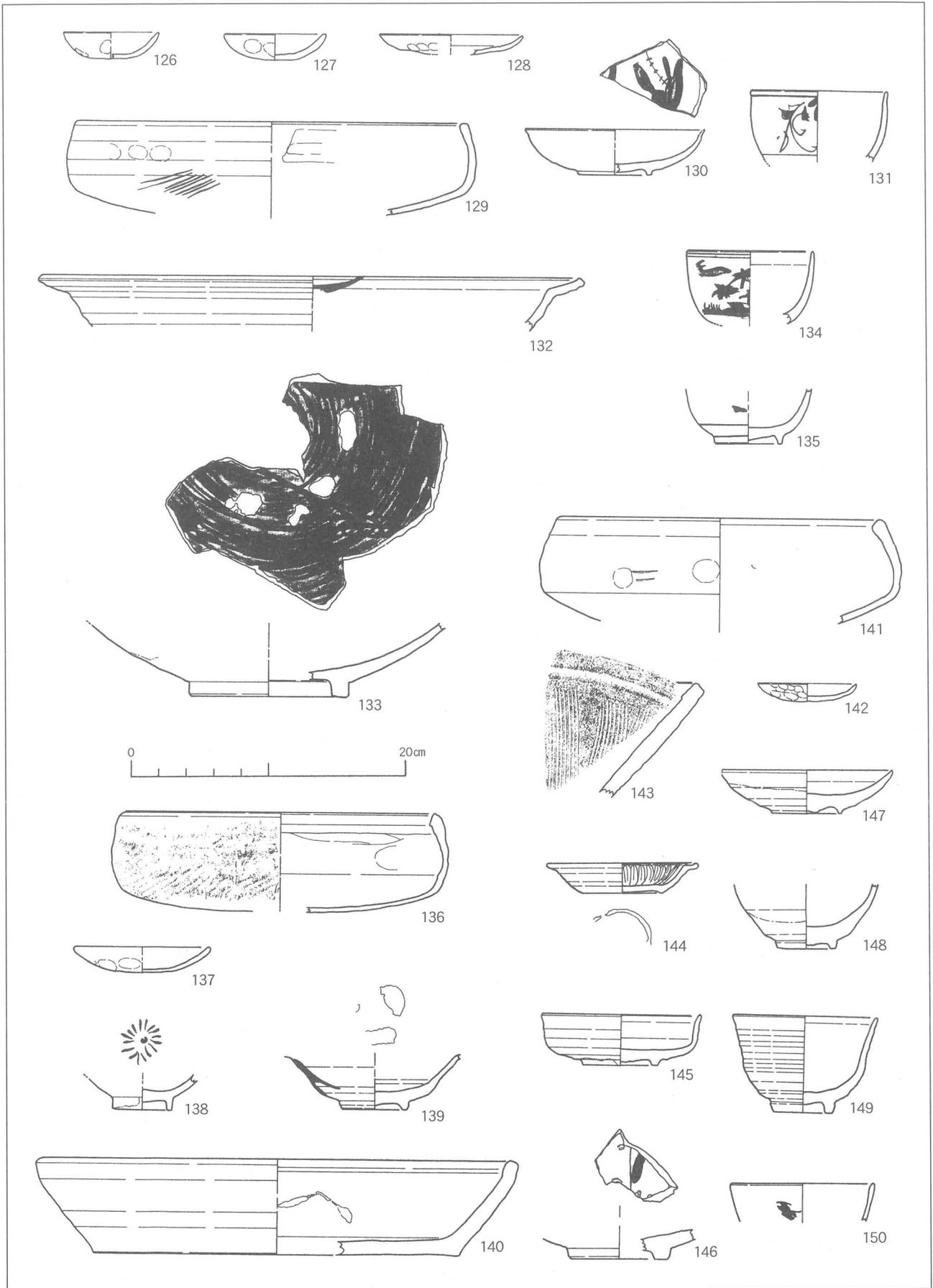
147は唐津焼皿である。

口径12.3 cm、器高3.15 cm、底径5 cm。外面下半の回転ヘラ削りはシャープである。高台は削り出し高台である。内面から口縁にオリーブ色の釉を施す。

148・149は唐津焼碗である。148は底径4.3 cm。体部下半の回転ヘラ削りはシャープに行われる。高台は削り出しである。内面から体部下半に暗緑褐色の釉が掛かる。胎土は淡橙色を呈し、焼成は甘



第42図 溝3・4・5平面・断面図(1/40)



第43図 溝3・4・5出土遺物

い。

149は口径10.4cm、器高7.2cm、底径4.4cm。体部の回転ヘラ削り痕が顕著である。体部中位で外方に張り出し、外反して開口縁部が続く。高台は削り出しである。豊付を除いて灰白色の長石釉を施す。

これらの遺物から溝5の時期を見ると、144・145のような古手の遺物も含まれるが、概ね17世紀前半頃の所産と考えられる。

第2遺構面（第44図）

男柱3（第45図、PL.15）

東西方向の搾場遺構である。長さ2m、幅1.55mを測り、今回検出した搾場遺構の中で最も小規模なものである。深さ1.3mの長方形の男柱の掘方は遺構の中央には設けられておらず、かなり西よりに位置する。他の搾場遺構と比べると、検出面から横木までが深く、そこからの男柱掘方は浅い。また、この遺構だけが東西方向に長軸をもっている。調査区内には垂壺跡が見られず、北側調査区外に存在すると思われる。

遺物として丹波焼播鉢（ヘラ描）・甕、備前焼播鉢、肥前染付磁器一重網目文碗・青磁碗、青花、瓦等が少量出土している。また、男柱3を切っている井戸6からは、コンニャク印判の肥前染付碗・一重網目文碗、土師器皿、中国製青花が出土していることから、遺構の時期を17世紀中頃から後半頃におきたい。

男柱の規模や方向性は時期的なものであろうか。規模は明らかに後出の男柱1・2・4が大きくなっている。

男柱4（第45・46図、PL.15）

南北方向の搾場遺構である。長さ3.67m、幅1.55m、深さ1.3mを測る。径1×1.1mの楕円形の男柱掘形には底に根石が据えられており、南北方向の横木跡には横木が浮かないように重石にした石が残っている。埋土にはにぶい黄褐色土層（粘質土層）・灰黄褐色土層（粘質土層）が堆積する。

遺物は肥前磁器、丹波焼甕などが少量出土している。

152は白磁染付碗である。底径4cmで、体部に対して低い小さな高台である。豊付は無釉である。体部最下半に花文を描いている。

153は白磁染付皿である。口径12.6cm、器高3.5cm、底径7.4cm。口縁端部を内側に少し巻き込む。高台豊付は無釉である。内面に墨弾きを施している。

154は白磁染付皿である。底径11.8cm。小さな断面三角形の高台を持つ。豊付は無釉である。内面に花文を描く。

直径1.2mの素掘りの井戸5からは堺焼播鉢、肥前磁器片が少数出土している。151は白磁染付盃である。口径7cm。口縁端部が小さく外反している。外側に花文を描く。

出土遺物と井戸5を切っていることから男柱4の時期を17世紀後半頃とする。

土坑65（第45図、PL.15）

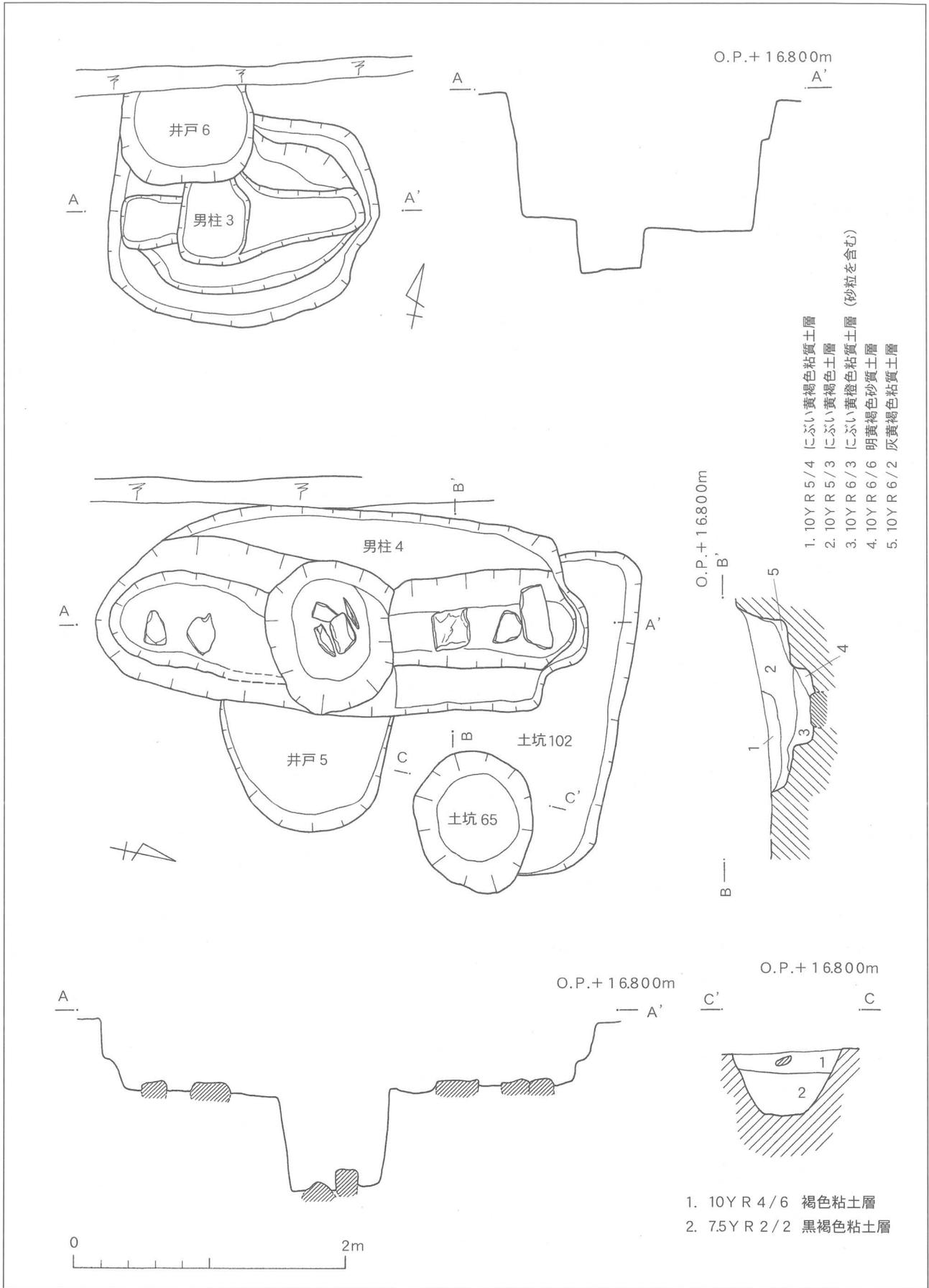
径0.83×1.1m、深さ0.5mの垂壺跡である。埋土は褐色粘質土層が堆積する。土坑内から遺物の出土はないが、男柱4に伴う遺構であることから17世紀後半と考えられる。

井戸4（第47図、PL.31）

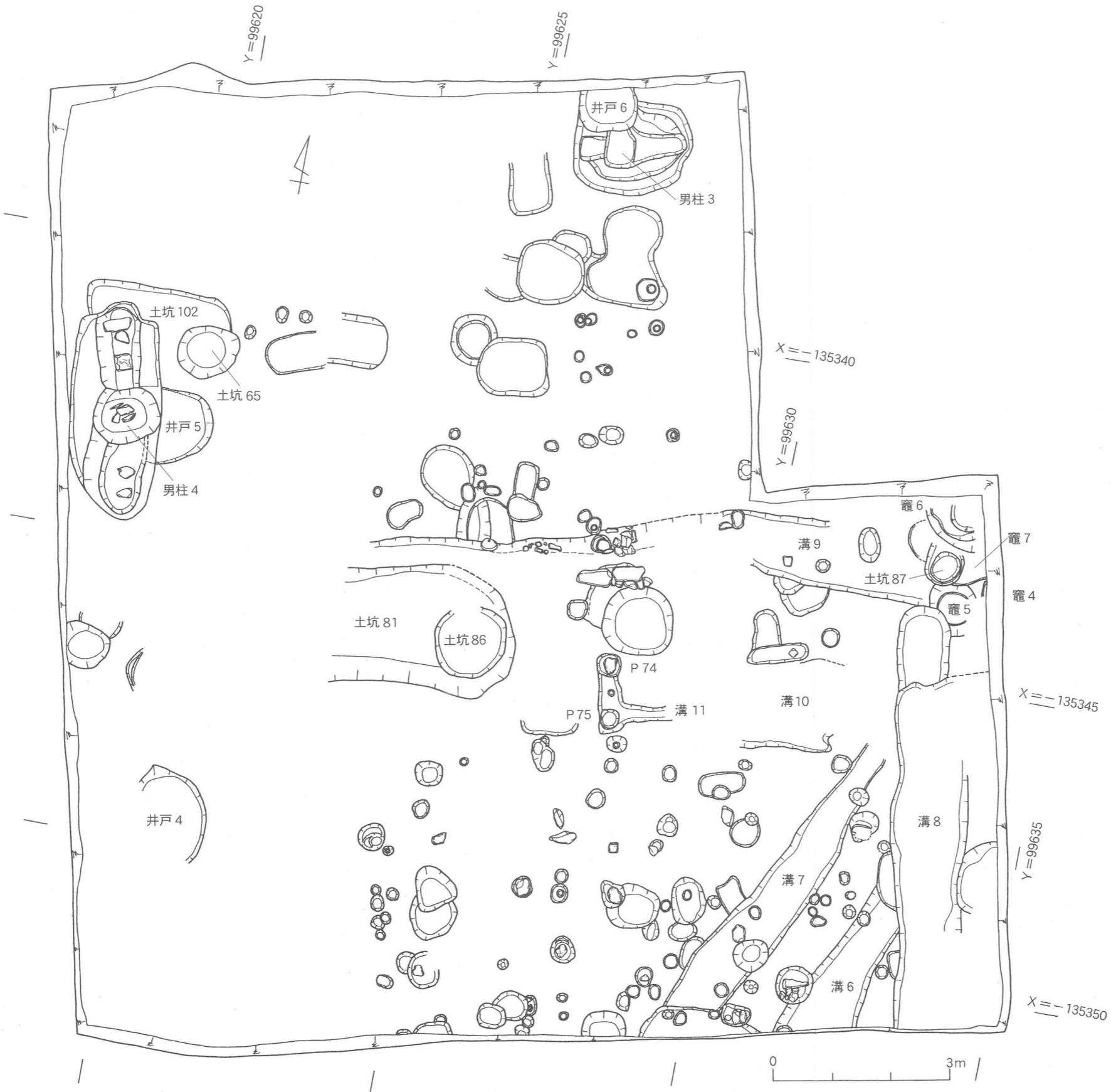
地下室状遺構の下から検出した直径約1.4mの素掘りの井戸である。埋土はオリーブ褐色砂質土層が堆積している。検出面から約80cmの深さまで調査した。

遺物

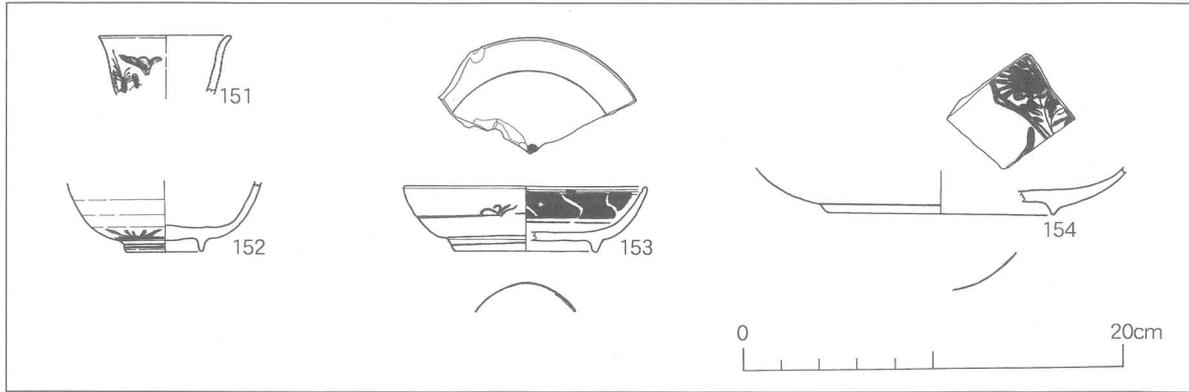
155は肥前白磁染付小坏である。口径6.1cm、器高4.3cm、底径2.7cm。内外面に青白色釉が掛かっている。



第44図 男柱3・4、土坑65平面・断面図



第45図 第2遺構面平面図



第46図 男柱4・井戸5出土遺物(1/4)

るが、高台は無釉である。外側には丸鑿による鎬文様と「寿」の文字を交互に配す。

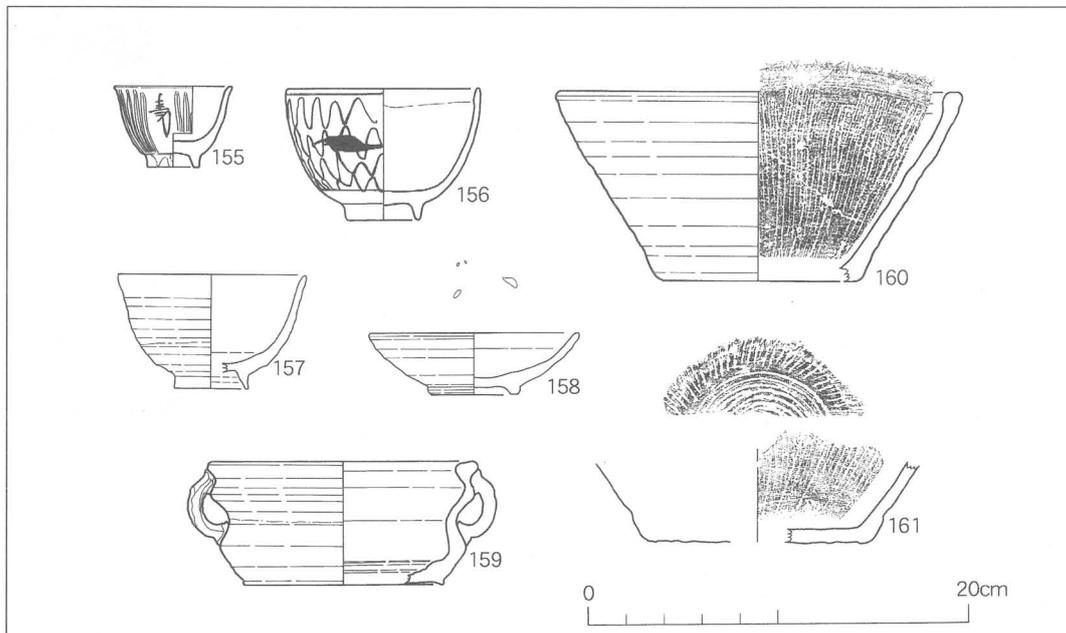
156は肥前白磁染付一重網手補魚文碗である。口径10.2cm、器高7cm、底径3.8cm。器は楕円形を呈しており、口縁は上方に行くにつれて内湾していく。高台畳付を除いて、内外面に青緑色気味の白色透明釉を掛け、口縁部内面は掛け分けがなされている。畳付には離れ砂が付着する。

157は唐津焼碗である。口径9.95cm、器高6.05cm、底径4cm。外面にはロクロ成形痕がそのまま残る。高台は小さく撥形を呈している。内外面には暗オリーブ色の釉が掛かっているが、体部下半から高台内は無釉である。

158は唐津焼皿である。口径11.1cm、器高3.9cm、底径4.6cm。外面にはロクロ成形痕がそのまま残り、高台の削り出しはあまい。内面から外面口縁部に長石釉を掛ける。見込みには胎土目が残る。

159は丹波焼火入れである。口径13.8cm、器高6.7cm、底径10.5cm。体部は強く屈曲し、口縁部は平坦面をもつ。底部周囲は高台状に削り出している。内外面は丁寧にロクロナデする。口唇部内面から体部外面中位に塗土を施す。口唇部内面と張り出し部分、底面に灰白色ガラス質の自然釉が掛かる。胎土は橙色を呈し、長石・石英・砂粒を含んでいる。

160・161は丹波焼播鉢である。160は口径21.2cm、器高10.1cm、底径10cmを測る小型の播鉢である。外



第47図 井戸4出土遺物(1/4)

面から口縁部にかけては丁寧にロクロナデされる。体部にはロクロナデの凹凸が残る。口縁は内湾して内側に肥厚する。口縁端部は平坦面を持つ。6本単位の櫛目が密に施される。胎土は淡橙色を呈し、砂粒・小石を多く含み粗い。

161は底径11.6cmを測り、見込みには6本単位の櫛目が同心円状に入る。外面底部周囲を丁寧に指オサエしている。胎土は橙色を呈し、砂粒・小石を多く含む。

これらの遺物から17世紀中頃には井戸4の機能は終わっていたと考えられる。

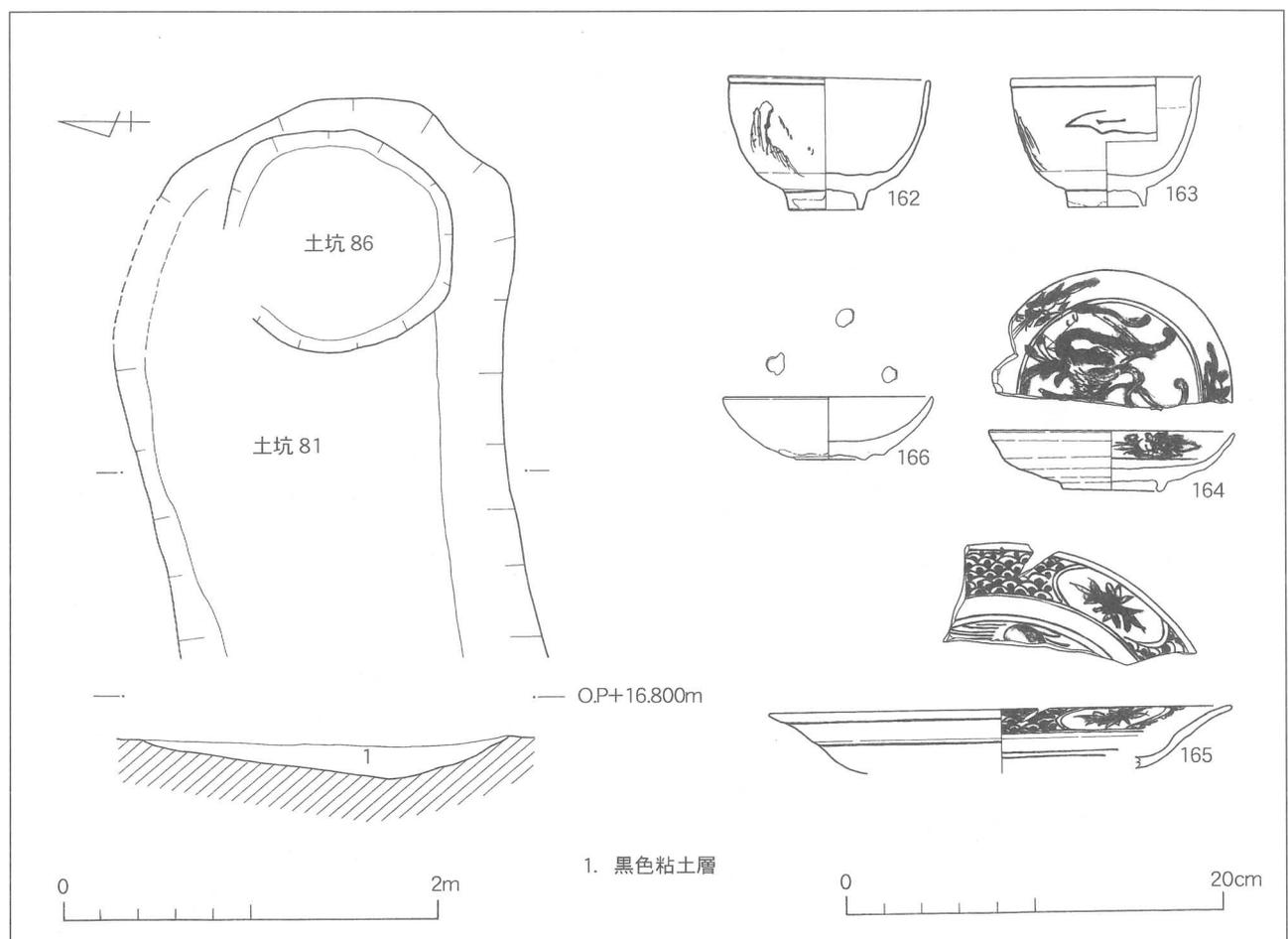
土坑81 (第48図、PL.31)

調査区中央で検出した現存長3m、幅2.1m、深さ0.1~0.4mを測り、南側に落ち込んでいる遺構である。埋土は黒色粘土層が堆積する。

遺物

162・163は肥前白磁染付碗である。162は口径10.6cm、器高7.1cm、底径3.8cmを測り、碗部は楕円形を呈している。内外面にはロクロ成形による凹凸が残り、体部器壁は薄く仕上げられている。163は口径10cm、器高7cm、底径4.2cm。162に比べると器壁が厚く、体部の張りも小さい。口縁端部は外反気味に立ち上がり、内側に肥厚する。共に明緑灰色の釉が厚く掛かり、口縁部内面は掛け分けされている。高台は無釉である。外側には柳文が描かれるが、呉須の発色は悪く、薄い藍色を呈している。

164は肥前白磁染付皿である。口径13cm、器高3.2cm、底径5.2cm。腰部で屈曲して口縁が内湾気味に立ち上がる。口縁部は薄く仕上げられている。外面はロクロナデの凹凸が残っている。見込みに鳳凰文を配し、口縁に花文を描く。高台畳付は無釉で、離れ砂が付着する。



第48図 土坑81平面・断面図、出土遺物 (1/40・1/4)

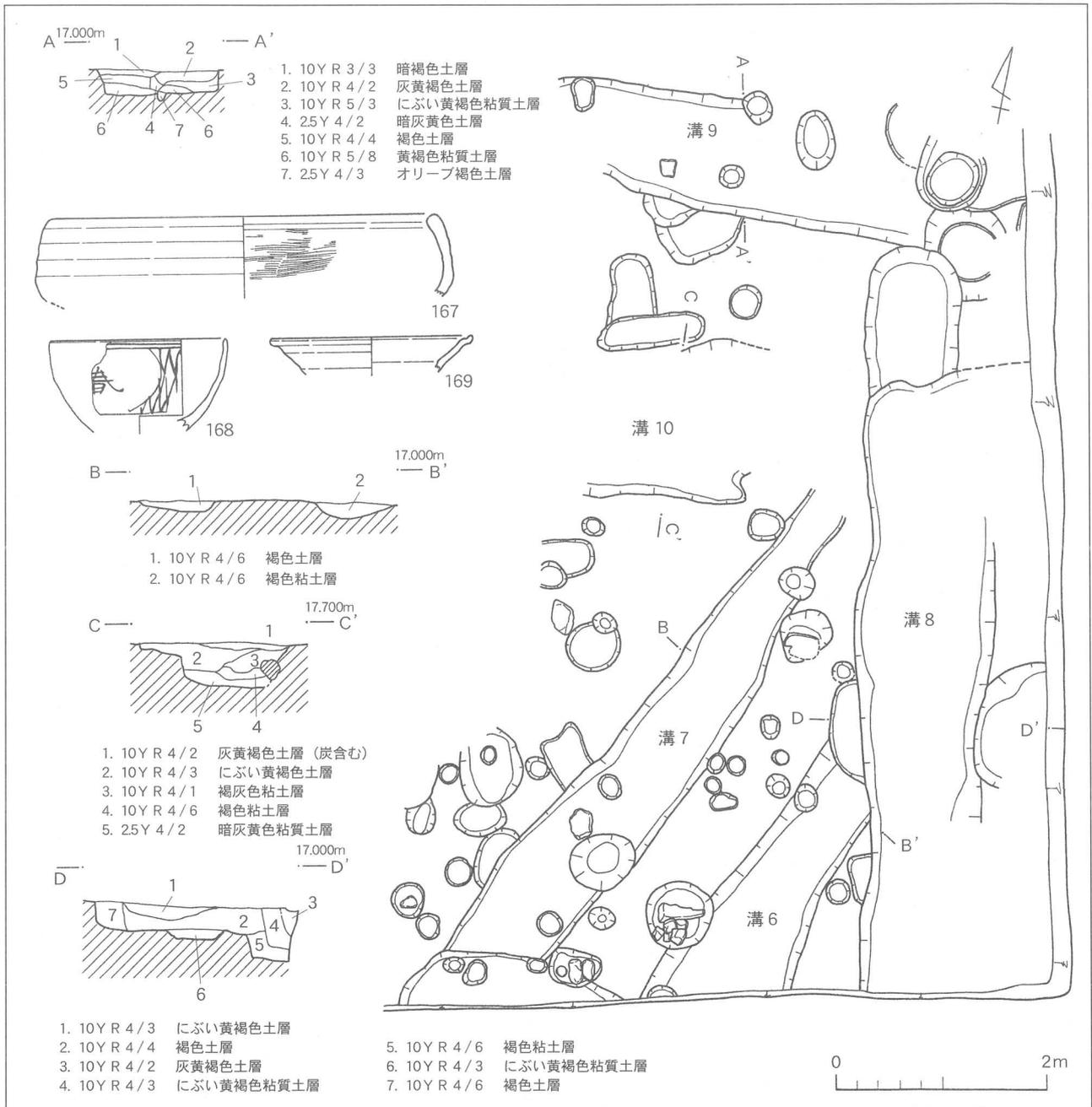
165は青花皿である。口径24.8cm。浅い底部から大きく外反して開く口縁が続く。口縁部内側には花文を、見込みに花鳥文を描く。外面下端部に砂の付着が見られる。磁胎は白色を呈し、白色透明釉が厚く掛かる。呉須は淡い藍色を呈す。明朝磁器である。

166は唐津焼皿である。口径11cm、器高3.4cm、底径4.7cm。小さな断面三角形の高台を削り出す。内外面に長石釉が掛かり、高台付近に釉が厚く溜まっている。高台内は無釉であるが、付近の釉が流れ込んでいる。底面には離砂が付着している。見込みに胎土目が残る。

青花皿や胎土目唐津焼皿も出土しているが、供伴する肥前磁器碗から遺構の時期は17世紀中葉と考えられる。

溝6 (第49図、PL.20)

調査区南東隅で検出した遺構である。溝8の南北軸に対して35度東に振れている。現存長3.5m、幅



第49図 溝6・7・8・9・10平面・断面図 (1/40)、溝9出土遺物 (1/4)

0.75～1 m、深さ15cmである。埋土は褐色粘質土層が堆積する。遺物の出土はない。

溝 7 (第49図、PL.20)

溝 6 の西側に並行して走る溝である。現存長5.6m、幅0.4～0.95m、深さ10cmである。埋土は褐色土層が堆積する。遺物は出土していない。溝 6・7は切り合い関係と走行方向から見て、敷地境溝 3～5・8～10以前の17世紀前半以前の時期が考えられる。

溝 8 (第49図、PL.20)

調査区南東隅で検出した南北方向の溝である。現存長5.6m、幅1.3m、深さ30cmを測り、北端で東方向に直角に曲がって調査区外に延びる。埋土は、底ににぶい黄褐色粘質土層が溜まり、その上に褐色土層、にぶい黄褐色土層が堆積する。粘質土の堆積が見られることから、水が流れていて溝として機能していたことがわかる。

遺物は丹波焼甕・播鉢片(Ⅲ期相当 大平 茂1992)、土師器皿・焙烙(外面に平行タタキ)、軒丸瓦、などが出土しているが、細片のため図示できるものは無い。17世紀中葉頃のものと考えられる。

溝 9 (第49図、PL.20)

溝 8 の北側で検出した東西方向に延びる溝である。現存長3.5m、幅1.1m、深さ25cmを測り、断面形は長方形の箱形をなしている。埋土は黄褐色粘質土が堆積し、その上に砂利・粗砂を含む褐色土が堆積する。粘質土の堆積が見られることから、ある程度の水が溜まって溝として機能していたと考えられる。

遺物として焙烙・丹波焼播鉢・磁器碗などが出土している。

167は焙烙である。口径24 cmを測る。深い底部から、内傾して立ち上がる長い口縁部が続く。内面は刷毛目調整を施した後、丁寧にナデを加える。外面は強く横ナデし、底部と口縁部との境にタタキを施す。胎土はにぶい橙色を呈し、粗砂を含み粗い。

168は肥前白磁染付碗である。口径11cmを測る。外側には一重網目文と「春」字を描く。青味がかかった白色透明の釉を内外面に施釉す。呉須は発色が良く、藍色を呈している。全体に細かい貫入がはいる。

169は唐津焼溝縁皿である。口径12.5cmを測る。口縁部は短く外折し、端部を内側に小さく巻いている。内外面に長石釉を施釉する。出土遺物から17世紀中頃の時期が考えられる。

溝 10 (第49図、PL.20)

溝 9 の南側に並行して走る溝である。現存長1.5m、幅1.45m、深さ21.7～39.8cmを測る。溝埋土は暗灰黄色粘質土層・褐色粘土層の上に、小石や炭を含む黄褐色土層が堆積する。

溝 9・10は溝の方向性や出土遺物から、第1遺構面で検出しきれなかった溝 3～5に続く敷地境溝である。また、溝 8が溝 9・10に直交する形で走っていることから同時期の南北方向の敷地境溝であったとも考えられる。

溝 11 (PL.20)

溝 10の西側で検出したL字形の溝である。現存長は東西1.25m、南北1.35m、深さ7～12.1 cmである。南北方向には溝内にピットが設けられている。ピット74は径43cm×38cm、深さ20cmを測り、根石を伴っている。ピット75は直径30 cm、深さ19.4cmの隅丸方形を呈している。この溝は柱穴を設ける際に掘られた溝である。

調査区南側では多数の柱穴を検出しているが、この柱穴に並ぶものは確認できなかった。溝内から焙烙(外面に平行タタキ)、肥前白磁染付碗、備前焼甕片、唐津焼碗、瀬戸・美濃焼鉄釉稜皿が出土している。古手の遺物が見られるが、17世紀中頃前後の所産であろう。敷地境溝で画された町屋以前の建物跡である。

竈4・5・6・7 (PL.16)

調査区東壁中央付近で検出した竈である。上部はかなり削平されており、遺構の残りは浅い。

竈4は燃烧部内法55cm、掘方径90cm、深さ10cmを測る小型の竈で、東に焚口部を設ける。単基の竈である。

竈5は燃烧部内法1.1m、掘方径1.7m、深さ30cmを測る大型の竈である。焚口部は道路側に延びていると思われる。竈6は竈4を切って設けられた、径1.6mの竈である。竈7は僅かに壁際で確認できた竈で、規模は不明である。何れの竈からも出土遺物はなく時期は確定できないが、竈5のような大型の竈の存在は、第1面で確認している搾り場遺構に伴う釜屋の遺構である可能性が高い。

その他の出土遺物 (第50図、PL.32)

170~172は第1遺構面調査区南東で検出した土間面からの出土である。

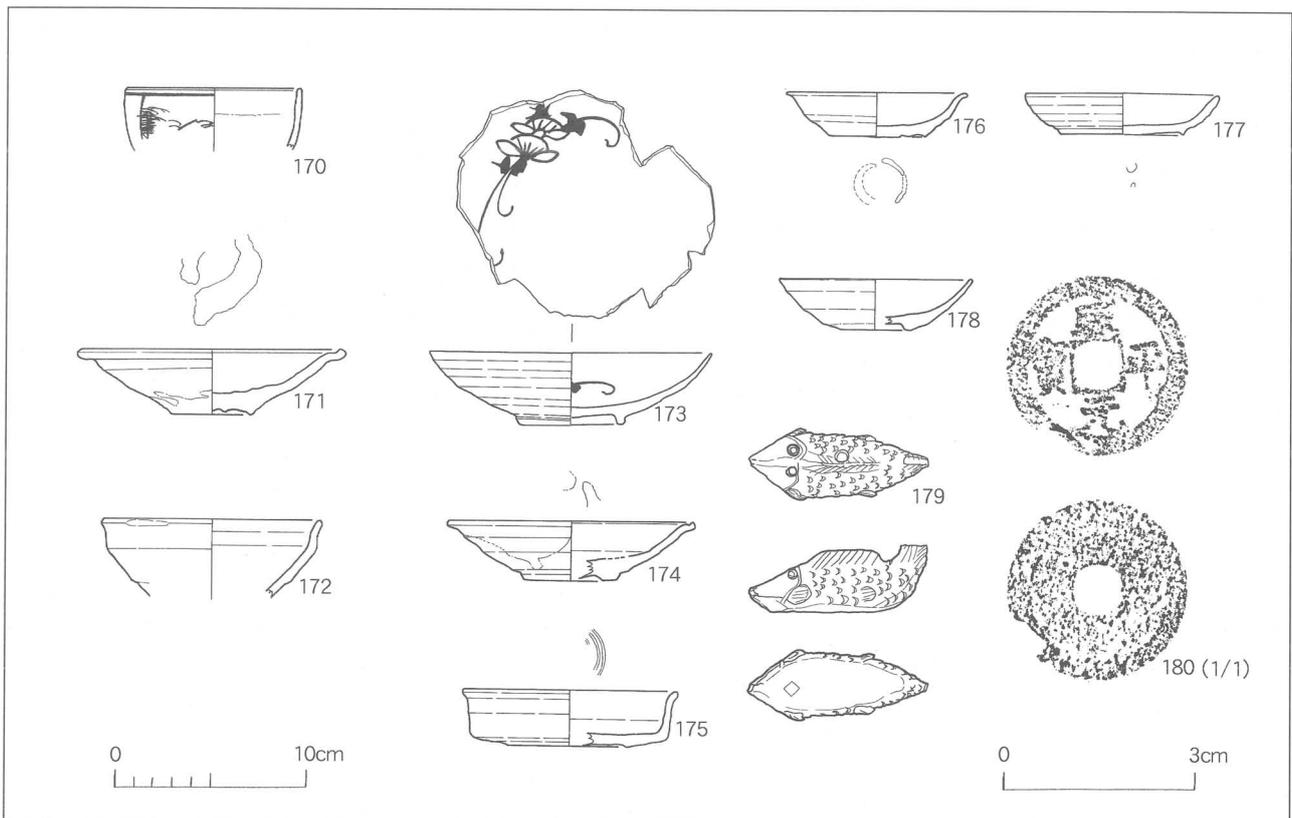
170は肥前白磁染付碗である。口径9.2cm。内外面に青味がかった釉を施し、内面口縁部に掛け分けが見られる。

171は唐津焼溝縁皿である。口径13.8cm、器高3.6cm、底径4.2cm。口縁は強く外折し、端部は三角縁状に巻き込んでいる。高台は断面三角形に小さく削り出す。高台内の回転糸切りは未調整である。内面から体部下半に長石釉が掛かる。見込みには砂目が残っている。胎土はにぶい褐色を呈し、精緻である。

172は瀬戸・美濃焼天目碗である。口径11.4cmを測る。体部は「ハ」の字状に大きく広がり、口縁部は外反して大きく立ち上がる。体部と口縁部の境は明瞭である。光沢のある暗褐色の鉄釉が掛かる。胎土はにぶい黄橙色を呈し、精良である。

173~175は土間面~地山面までの包含層出土である。

173は肥前白磁染付皿である。口径14.9cm、器高3.85cm、底径5.4cm。外面はロクロナデの凹凸が顕著



第50図 土間・地山面出土遺物 (1/4)

であるが、口縁部の器壁は薄く仕上げられている。青味がかった透明白色の釉を全面施釉し、全体に細かい貫入が入っている。内面に描かれた花文は呉須の発色が良く、藍色を呈す。畳付と高台内に離れ砂が付着している。

174は唐津焼溝縁皿である。口径12.9cm、器高3.15cm、底径4.9cm。口縁部は緩やかに外折して、端部の巻き込みも小さい。高台は削り出しの平高台である。内面から外面中位にかけて長石釉が薄く掛かる。見込みには砂目が残っている。胎土はにぶい黄橙色を呈し、精良である。

175は灰釉銅鑼鉢である。口径3cm、器高11.1cm、底径6cm。平らで広い底部を持ち、僅かに高台を削り出している。腰部で屈曲して短く立ち上がる口縁部は端部で外反する。見込みに凹線を3条巡らしている。黄灰色のガラス質釉が全釉され、貫入が入っている。高台脇に目跡が残っている。胎土は灰白色を呈し、精良である。

176～179は地山面からの出土である。

176は灰釉皿で、いわゆる「端反皿」である。口径9.5cm、器高2.35cm、底径5cm。胴部で膨らみ、口縁部は外反して立ち上がり、端部は短く外折する。高台は断面三角形の付け高台である。見込みにトチン痕が残るが、表面を平滑に仕上げている。口縁部や外面上位の釉は2次焼成を受けたように見える。高台内には輪トチン痕が残る。高台内を除いて緑灰色のガラス質釉が掛かる。胎土は灰白色を呈し、精良である。

177は灰釉丸皿である。口径10.4cm、器高2.2cm、底径6.6cm。腰部から口縁部にかけて丸みをもって緩やかに立ち上がる。外面のロクロ成形の凹凸痕は明瞭である。高台は断面三角形の付け高台である。

高台内には輪トチン痕が残る。高台内中央を除いて緑灰色のガラス質の釉を施釉し、全体に貫入が入る。胎土は灰白色を呈し、長石・砂粒を含み粗い。

178は景德鎮窯の白磁皿である。口径10cm、器高2.7cm、底径3.45cm。底部から口縁部にかけて丸みを帯びて緩やかに立ち上がり、口縁端部は内傾気味にやや肥厚する。外面はロクロ成形痕が明瞭に残っているが、器壁は薄く仕上げられる。高台は基筍底である。全面を施釉した後、高台周囲の釉を掻き取っている。灰白色の釉が厚く掛かる。胎土は白色を呈し、大変精緻である。

179は備前焼魚形水滴である。現存長8.5cm、現存高3.6cm、底部幅3.8cm。手づくねであろうか。上面に白色化した灰が付着し、透明の自然釉が掛かり、底面に垂れている。4つの鱗は立体的に貼り付けられ、背鱗はつまみ出している。鱗は丸ノミで表し、鱗の線や顔はヘラ描きされている。底面に「□」の窯印が押されている。胎土は灰褐色を呈し、精良である。魚を上からの形で表現していて、造形的に優れた逸品である。

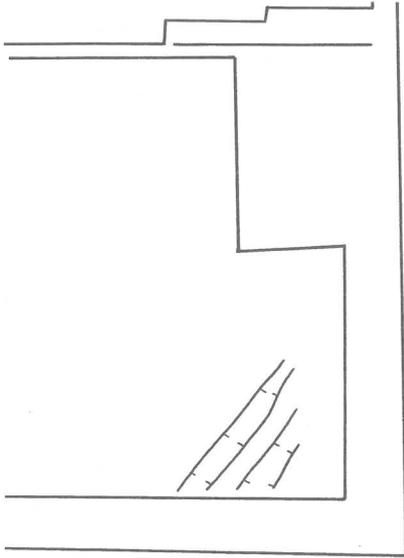
同じような水滴が大阪府中央区内久宝寺町2丁目の豊臣前期の溝から出土している。179の時期は出土状況からいって確定できていないが、豊臣前期頃をひとつの指標とできるかもしれない。

180は北宋銭である。銅銭で、銭文は「咸平元宝」、初鑄年は北宋咸平元年(998)となっている。銭径2.4cm、厚さ1mmを測る。

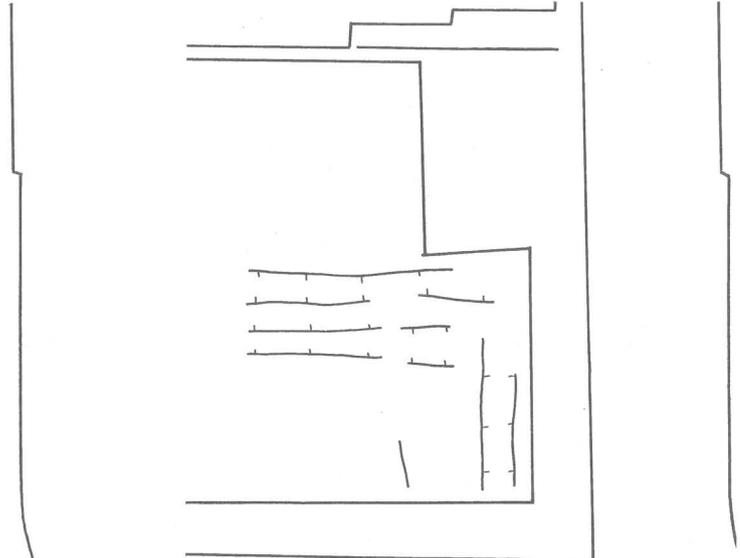
まとめ

今回の調査では江戸時代中期から後期の酒蔵遺構と前期頃の町屋の遺構を検出しており、この辺りが町屋から酒蔵へと変わっていった様子を知ることができた。酒蔵遺構及び諸施設の変遷についての良好な資料の一つとなるものである。

このあたりは、文禄年間(1592～1596)には既に町屋として成立していたとされるが、調査ではその時期の確実な遺構を確認することはできなかった。しかしながら、地山付近からは16世紀後半～17



17世紀前半以前の区画



17世紀前半以降の区画

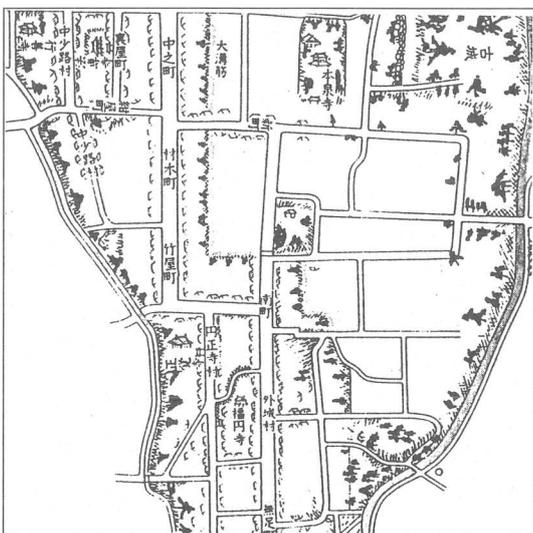
世紀初頭頃の遺物が出土しており、当時の町屋の存在は何い知ることができる。

—調査でわかったこと—

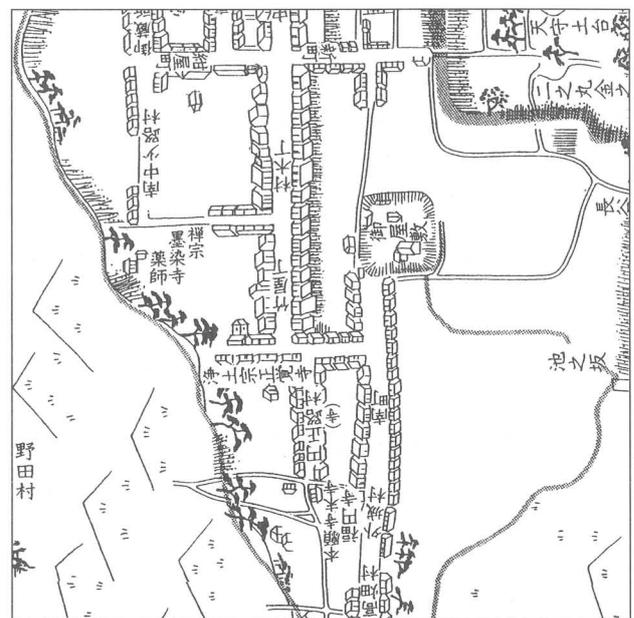
溝6・7は17世紀中頃の敷地境溝8に切れ、溝8に対して東に35度振れていることから、それ以前の町屋に係わる遺構であると推定される。

それ以降の敷地境溝や敷地の方向は、現行の道路や区画と殆ど変わらず、江戸時代前期頃からそのまま踏襲されていることがわかる。地山付近から出土している遺物が溝6・7の時期を表すとするならば、有岡城廃城後にこの辺りの区画を変えた可能性が大きい。

その後、溝3～5を敷地境とする町屋となるが、調査区南半部では南東付近で検出した丸瓦敷きの溝(PL.20)が南北方向の敷地境だとして南側に開口する南北3.5m以上、東西3m以上の町屋を3軒



第51図 「文禄伊丹之図」



第52図 「寛文9年伊丹郷町絵図」



第53図 「天保15年伊丹郷町分間絵図 解説図」



第54図 「大正4年伊丹町地籍図謄本」

復元することができる。敷地境溝3が埋まった17世紀後半以降は酒蔵としての機能が考えられる。

釜屋の遺構は、竈2・3を含む西側と、竈5・6を含む東側に広がると推定され、搾り場は比較的北側に集中し、出土遺物や遺構の切り合い関係から男柱4→男柱2→男柱1へと移っていったと考えている。男柱1・2・4は南北方向に長軸を持っているが、男柱3は東西方向に長軸を持ち、規模もかなり小さい。時期的にやや先行するものであり、初期の男柱は小規模だったが、17世紀後半から18世紀中頃には大規模な施設になっている様子がわかる。

地下室状遺構を除く酒造遺構（竈・男柱等）の存続期間は17世紀後半から18世紀後半頃までである。

地下室状遺構は今のところ使用目的がよくわかっていない。酒造関連遺構とも考えられるが礫層を掘り込んで構築していることから、温度を一定に保つことを必要としているようで、室のような、物を発酵させ保存しておく施設の可能性が考えられる。

一史料からわかること一

次に、史料から当調査地点を検討してみたい。

この辺りは、江戸時代の伊丹郷町では南町に属し、「寛文九年（1669）伊丹郷町絵図」では福円寺の北に広がる家並みが描かれ、惣構の南端から伊丹郷町の中心部へと通る大阪道沿いに位置する。

描かれた時代は下るが天保7年（1836）作の「文禄伊丹之図」にもこの辺りに軒が並んでいる様子が描かれており、古くからの町屋であったことがわかっている。

「天保十五年（1844）伊丹郷町分間絵図」では既に小区画の屋敷地として描かれてる。調査では17世紀後半から18世紀後半頃までの酒蔵遺構を検出していることから、19世紀中葉段階で酒蔵から町屋へ移行していく様子が窺える。酒造業は洗い場や釜屋、仕込み蔵、搾り場、澄まし蔵と言った諸施設が必要な大がかりな事業である。広大な敷地と建物を要するが、当調査区では釜屋と搾り場が隣接していることから、比較的小規模な酒蔵であったと考えられる。

大正4年の地籍図によると543番地が調査区にあたり、検出した酒造遺構は543番地の西・北側に広がることが確認できているので、北側の敷地（542番地）を合わせた広い屋敷地を所有して酒造業を営んでいたと考えられる。

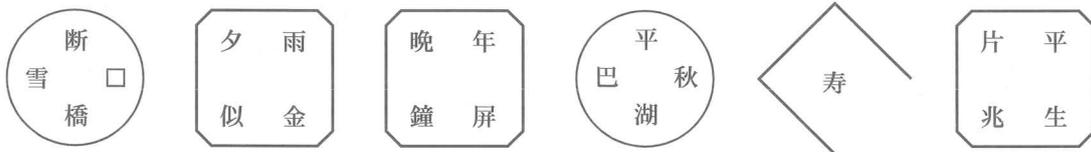
「伊丹酒家盛衰之事」『有岡古続語』には文化～元治元年（1804～1864）に南町に3軒の酒蔵があっ

たことが記され、加勢屋与右衛門、津国屋勘三郎、樽屋吉右衛門が各々所有していたが、当酒蔵が誰の所有であったのか今のところ特定できない。

その後、542番地の酒蔵は武内利兵衛に譲渡され、近年には伊丹の銘酒「老松」の製米所となっていた。
(瀬川)

<参考文献>

- ・和島恭仁雄氏（伊丹市立博物館館長）より適切な御教示をいただいた。当調査区の史料的見地については、それに負うところが多い。
- ・「大正4年伊丹町地籍図謄本」伊丹市博物館蔵
- ・「文禄伊丹之図」伊丹市博物館蔵
- ・『伊丹古絵図集成（別録）』伊丹資料叢書6 伊丹市役所 1982
「寛文九年伊丹郷町絵図」
「天保15年伊丹郷町分間絵図 解説図」
- ・『伊丹市史』第2・4巻 伊丹市役所 昭和43・44年
「伊丹酒家盛衰之事」『有岡古読語』
- ・『聞き書き 伊丹のくらし』伊丹市博物館 平成元年
- ・地下室状遺構出土の白磁色絵鉢（59）外側の銘文は、森口日向氏（書作家）に解説をお願いした。



- ・大平 茂 1992 『下相野窯址—近畿自動車道舞鶴線に伴う埋蔵文化財調査報告書—』
兵庫県文化財調査報告 第107冊 兵庫教育委員会
- ・難波洋三 1992 「徳川氏大阪城期の焙烙」『難波宮址の研究』第九 助大阪市文化財協会
- ・川口宏海 1989 「胞衣壺考」『大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院研究集録第9号』
大手前女子学園
- ・土坑23出土甕の墨書は、藤川永子氏に解説をお願いした。
- ・今井静夫 1993 「桃山の華 大阪出土の桃山陶磁」土岐市美濃陶磁歴史館
宮本佐知子氏（助大阪市文化財協会）は備前焼水滴を「型づくりの痕跡は認められないが、手づくねとも決めにくく、製作方法は不明である。成形してから、ヘラ描きと粘土貼り付けで、細部を表現している。」と解説されている。今回出土した水滴も製作方法については同様で、型作りとも、手づくねとも決め難い。
- ・藤澤良祐他 1986 『瀬戸市歴史民族資料館研究紀要V』瀬戸市歴史民族資料館
- ・大橋康二他 1984 『国内出土の肥前磁器』佐賀県立九州陶磁資料館

付編

地下室状遺構から採取された貝類は以下の通りである。

軟体動物門

腹足綱

アカニシ	Rapana Venosa Venosa (Valenciennes)
クロアワビ	Notohaliothis discus (REEVE)
メカイアワビ	Notohaliothis sieboldi (REEVE)
マダカアワビ	Notohaliothis gigantea (GMELIN)
サザエ	Turbo (Batillus) cornutus (SOLANDER)
バイガイ	Babylonia japonica (REEVE)
ボウシュウボラ	Charonia Sauliae (REEVE)

斧足類

アカガイ	Anadara (Scaphayca)
イタヤガイ	Pectiniidae gen.et sp.indet
ハマグリ	Meretrix lusoria (Roding)
マシジミ	Corbicula (Corbiculina) leana Prime

総数は84点で、ハマグリが32点と一番多く、全体の38.37%を占める。大きさは高さ3～4.5cm、長さ3.5～4.5cm位のものが多い。次いで、マシジミが14点で、クロアワビは13点出土している。アワビ類はこの他に、メカイアワビ・マダカアワビを1点ずつ検出した。出土したアワビ類の大きさの平均は、高さ8～10cm、長さ10.5～13cmと大型であることが特徴であり、伊丹郷町遺跡ではこれまで多量に出土した例はない。

続いて多いのは、バイガイが9点、アカガイ7点、サザエ2点と続く。サザエは、2点とも無刺型のもので、内海の波静かなところで生息していたものと思われる。

イタヤガイも2点出土し、そのうち1点には3つの穿孔がみられ、ここに針金を通し竹の柄をつけて貝杓子として使用されていたのであろう。その他の貝類は1点ずつである。以上の出土した貝類のうち、マシジミは淡水産であるが、それ以外の貝類は海水産であり、大阪湾近郊に生息しているものが中心である。しかし、アワビ類やボウシュウボラのように外洋で採集されたものも含まれる。

このように、大型のアワビ類が多量にみられること、多種類の貝類が出土するという事は、日常の食材としてよりむしろ祝宴的な行事で用いられた可能性が考えられ、今後、伊丹郷町遺跡の食文化を考える上で貴重な資料である。(赤松和佳)

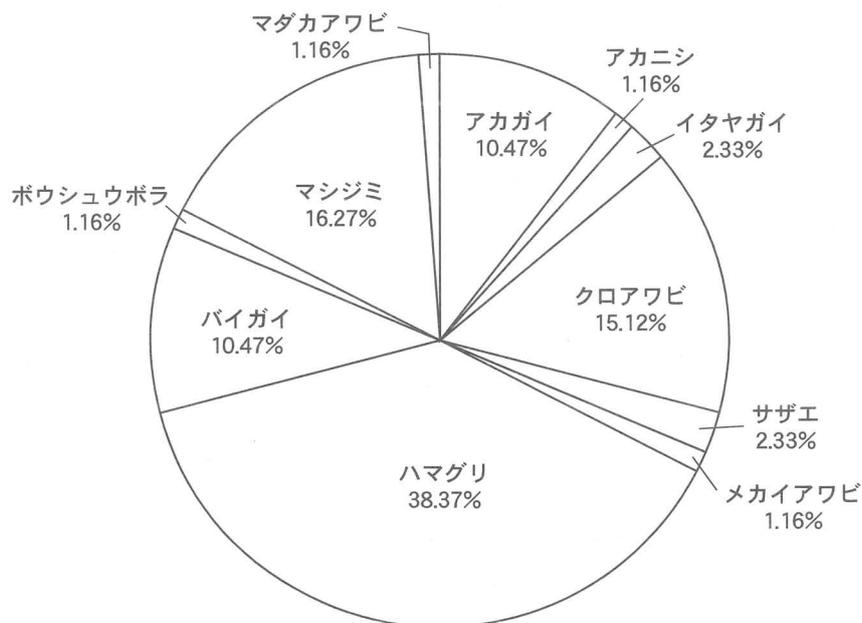


表1 第163次 SV3 貝類組成

第3節 有岡城・伊丹郷町遺跡第182次調査

所在地 伊丹市中央三丁目382他

調査面積 140m²

調査期間 平成8年7月24日～9月5日

調査担当 伊藤 敏行・河合 修

調査概要

本調査は、土地所有者田中整爾氏による共同住宅建設に伴う事前緊急発掘調査である。伊丹市のこの周辺は、有岡城・伊丹郷町の範囲にあたり、当該地周辺でも発掘調査が数次に渡り行われている。そのため、伊丹市教育委員会では、隣接地域の成果を基に試掘調査を行わずに本調査を行うこととし、震災復旧・復興市町支援として兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の伊藤、河合が調査を担当した。

調査はアスファルトと表土除去を重機で行い、遺構調査および掘削は人力で行った。記録は1/20を基本とした。

遺跡の概要

伊丹市は兵庫県南西部に位置する。市の中央部は長尾山地に端を発する伊丹台地（洪積台地）が南に向かって延び、武庫川と猪名川に挟まれている。有岡城は伊丹台地の東縁にあたる。有岡城の地域は、前身の伊丹城と荒木村重による有岡城、廃城後の酒造りを中心とする伊丹郷町の形成までが同一地域で重なっている。

調査成果

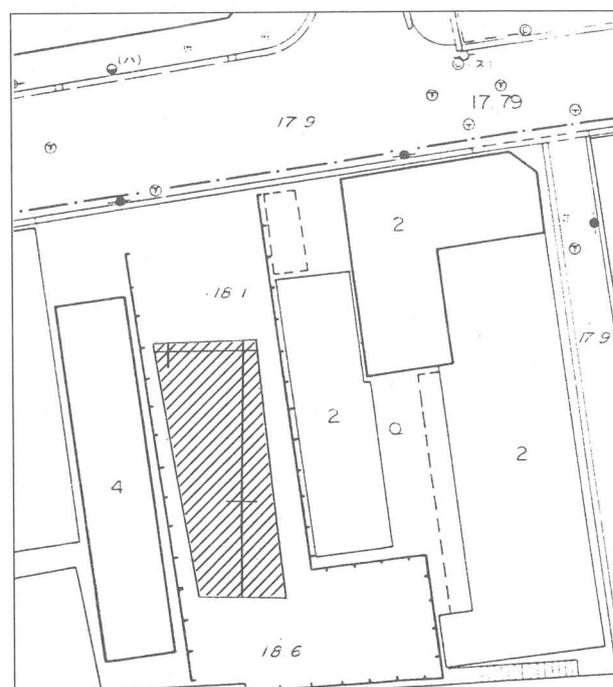
発掘調査は7月24日から開始したが、現況が駐車場であったため、アスファルトの除去と表土掘削から開始し、25日から遺構の確認作業に入った。当初、土地所有者の田中氏の話として、明治以降に紺屋を営んでいて、その時の染め物用の大甕が残っているという話と、遺跡中央に大きな防空壕が掘られているとの情報があった。

そのため、それぞれの遺構の確認作業を行ったが、遺跡南側で確認された大甕は染め物用の甕ではなく、便所甕であった。便所甕は東側中央付近からも検出された。防空壕は当該敷地内では検出されなかった。

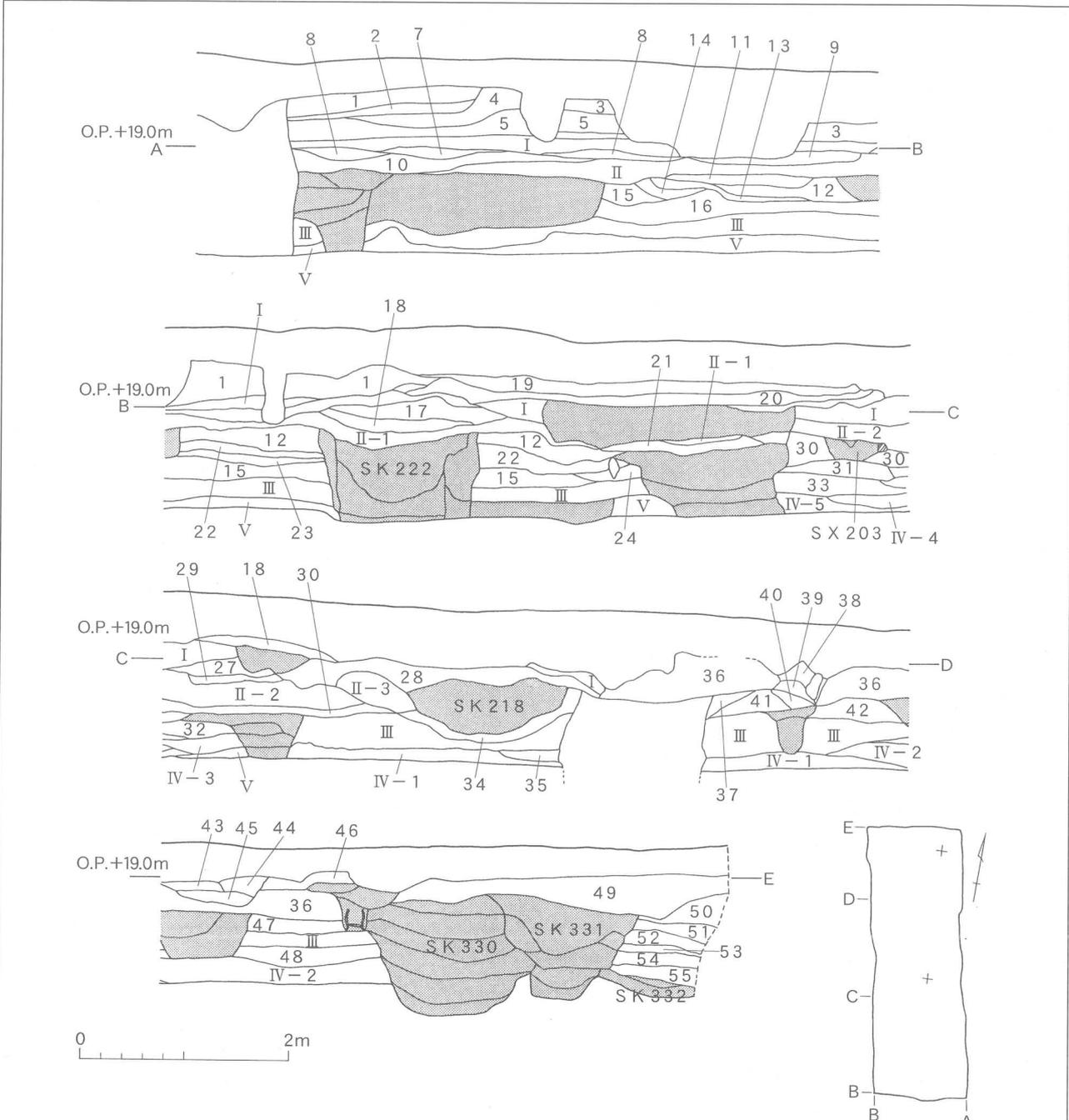
遺構確認の結果、大型の切り石が直列状に並ぶ石列と配石の遺構や、半地下式の竈、土坑等が検出された。第1面調査途中で、遺跡全体の遺構面把握のため試掘坑を設け確認したところ、約1mの



第55図 第182次調査区位置図（1/2,500）



第56図 調査区設定図（1/500）



- | | | | |
|------------------|---------------|---------------|------------|
| I. 黄色粘質土層 | 5. 焼土混り黒褐色土層 | 20. 赤褐色土層 | 34. 赤色焼土 |
| II. 赤色焼土を含む褐色土層 | 6. 7. 赤色焼土 | 21. 黄褐色土層 | 35. 黒褐色土層 |
| III. 炭化物を含む黒褐色土層 | 8. 黄褐色土層 | 22. 黄色土層 | 36. 乳褐色土層 |
| IV-1. 黄褐色土層 | 9. カーキ色土層 | 23. 赤色焼土層 | 37. 淡褐色土層 |
| IV-2. 炭化物を含む褐橙色層 | 10. 茶褐色土層 | 24. 黄色土 | 38. 灰色土層 |
| IV-3. 黄色土層 | 11. 黄褐色土層 | 25. 灰色粘土層(杭痕) | 39. 白灰褐色土層 |
| IV-4. 赤褐色土層 | 12. 茶褐色土層 | 26. 黄褐色土層 | 40. 白灰色粘土層 |
| IV-5. 赤黄色土層 | 13. 黄赤色焼土混り土層 | 27. 褐色土層 | 41. 淡褐色土層 |
| V. 地山(橙色土~粘土) | 14. 赤色焼土層 | 28. 黄褐色土層 | 42. 褐色砂質土層 |
| 1. 焼土混り茶褐色土層 | 15. 茶褐色土層 | 29. 茶褐色土層 | 43. 赤褐色土層 |
| 2. 橙色~白色粘土層 | 16. 黄褐色土層 | 30. 焼土混り黄褐色土層 | 44. 灰褐色土層 |
| 3. 黄褐色礫混り粗砂層 | 17. 暗褐色土層 | 31. 赤褐色土層 | 45. 黒褐色土層 |
| 4. 黒褐色土層 | 18. 黄褐色土層 | 32. 黄色土層 | 46. 赤褐色土層 |
| | 19. 黄褐色粘土層 | 33. 暗褐色土層 | 47. 黄色土層 |
| | | | 48. 乳黄色粗砂層 |
| | | | 49. 赤黒色土層 |
| | | | 50. 褐色土層 |
| | | | 51. 灰色土層 |
| | | | 52. 赤褐色土層 |
| | | | 53. 黒褐色土層 |
| | | | 54. 黄褐色土層 |
| | | | 55. 黄灰色土層 |

第57図 土層断面図 (1/60)

厚さで遺構が確認できることが判明した。そのため、調査期間の関係もあり、第1面を含め3面で遺構を確認、記録することとして第1面の調査を8月6日に終了し全景写真を撮影後、約50cmを重機で掘り下げた。第2面の調査は8月8日から行ったが、途中8月12日から16日まではお盆休みとし、19日より再開した。第2面では竈や桶の入った土坑などを検出し、20日に全景写真を撮影した。第3面は26日より調査を開始し、当該地域で地山となる明褐色土に近い覆土を有する大型の土坑等を検出した。調査は当初8月末で終了の予定であったが、遺構面が多く、遺構も多数検出されたため、9月4日まで延長され、4日に第3面の全景写真を撮影して終了した。9月5日は埋め戻し作業と若干の残務整理を行い、残務整理（第1次整理）は9月13日まで行った。

層序

調査区内で観察された層位は、地山類似層が自然堆積と思われるほかはすべて10～40cm位の厚さを測る盛土で構成されており、中世末からの約400年間に町の発展に伴って最大で2.2m嵩上げされていることが判明した。これらの層を大きく分けると18世紀後半頃の火災とその後の盛土層、17世紀～18世紀間の細かな盛土層、16世紀末から17世紀の盛土が施されない地山層直上及び地山類似層に絞ることが出来よう。以下に概要を遺構検出面の位置と合わせてみてみたい。

現地表である駐車場に伴う盛土は40cm前後で、その直下には便所甕が機能していた時期に伴う盛土層が遺存している（南壁1～6層、9・20・26層）。これらの層は明治以降の陶磁器やガラス片などを含んでいる。

第1面を検出したのは黄色粘質土層（Ⅰ層）と同レベル上にある層上である。黄色粘質土層は礎石と思われる石列に平行することから、根固めなどの基盤整備のために張られたものと考えられる。この直下には焼土や炭・灰などを含む層（Ⅱ層）が堆積していることから、18世紀後半ごろに火災があり、褐色味を帯びる土層（西壁4・5・38層、南壁9～11層など）で火災後を整地し、更に黄褐色粘質土層を入れて建物を再建したのと考えられる。調査区内に唯一比較的広域に見られる黒褐色土層（Ⅲ層）は調査区中ごろで40cm前後と最も厚くなり南側、西側では10cm前後と薄くなる。この層の凹部を褐色味を帯びる土層（15・31～33層）で充填し、平坦に整地していると見受けられる。これらの層上で第2面を検出した。

第3面は地山層（Ⅴ層）上で検出した。地山層は標高18m付近にあり、やや凹凸がある。この層上の凹んだ部分には炭化物を含む、いずれも橙色味を帯びた地山類似層（Ⅳ—1・Ⅳ—2・Ⅳ—3）が堆積している。この面に伴う遺構は地山類似層を覆土としていることから有岡城の営まれていた時期の生活面はこの付近にあったと考えられる。

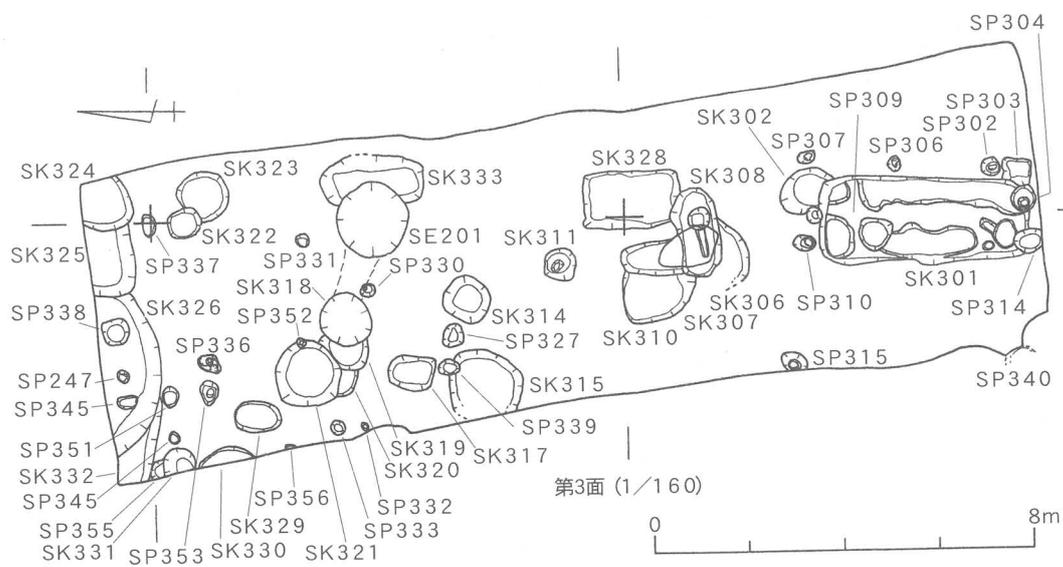
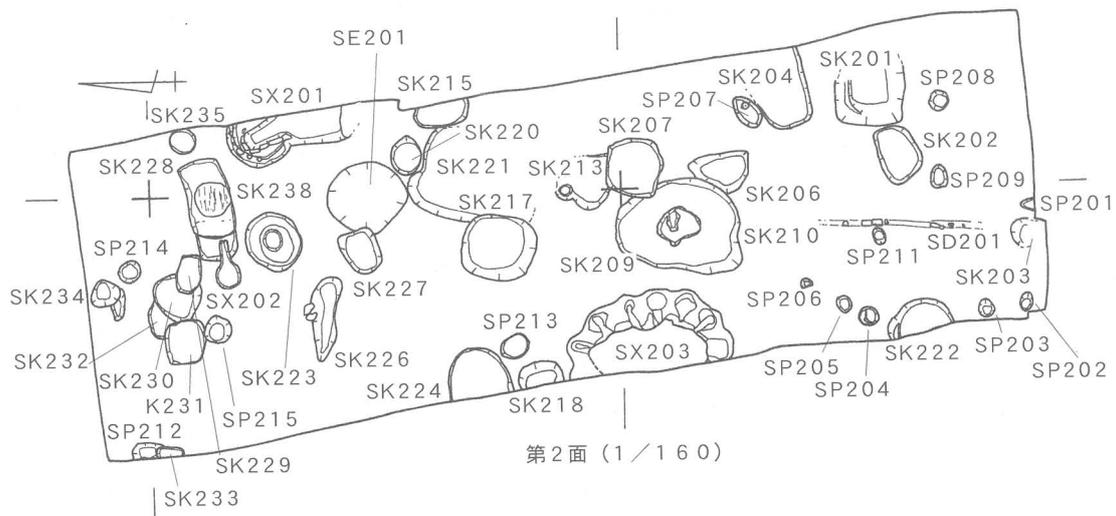
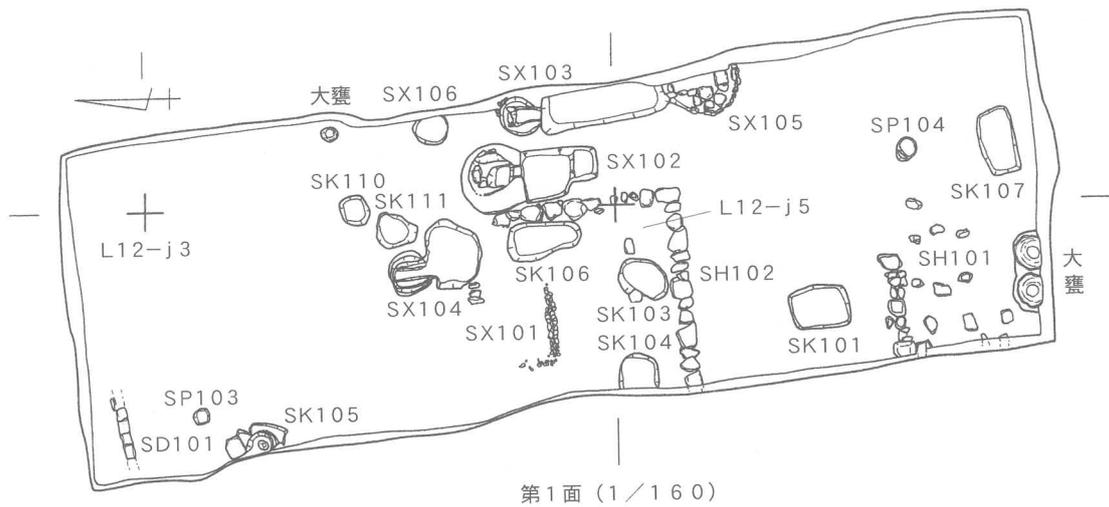
遺構

調査は3面に分けて調査を行ったため、各面ごとに報告する。なお、遺構ごとの記号はSXが竈等の遺構、SPがピット状遺構、SKが土坑を基本として、遺構確認段階に命名したが、調査の結果土坑とピットの形状や性格が未分化のものや、結果として確認時と異なった遺構となった遺構もある。しかし、写真図版の混乱等の問題もあるので、記号等の変更は行わず、当初の記号のまま使用している。また、確認時に命名したために、結果として遺構とならなかったものは本報告では欠番とした。ここでは図示した遺構について報告を行うが、土坑・ピット状遺構の類については特に説明が必要なものを記述する。

遺構の時期については、今後遺物の詳しい検討が必要であるが、各遺構ごとの出土遺物を概観し、大まかな帰属時期を記述する。したがって、時期については今後変更される可能性がある。

第1面

大型の石が連続する石列及び配石遺構2基（SH101、102）、小石が溝状に並ぶ遺構（SX101）1基、



第58図 第1・2・3遺構面平面図 (1/160)

半地下式の竈（SX102～106）5基（6基）、土坑（SK101～111）8基、ピット状遺構（SP103・104）2基、瓦製の溝状遺構（SD101）1基を検出した。その他に便所甕が3個出土している。

配石・石列

配石・石列は建物の区画及びその礎石に関する遺構とみられる。遺構の性格から時期の判断は難しいが、整地層からの出土遺物や竈との位置関係から概ね18世紀末から19世紀前半の遺構と考えられる。

SH101大型の石が約2mつながった列と約半間間隔で並んだ石からなる。1間×半間しか残っていないが、南側は便所甕の掘り込みで破壊されているものと考えられる。古銭が7枚まとまって出土している。

SH102は、大型の石が「L」字状に残っている。建物の区割り等の配石と考えられる。SX101は、SH102の区画の中にあり、小石を列状に並べ屈曲している。幅は約20cmで、排水用の溝の可能性はある。

竈

竈はいずれも半地下式の竈で、5基（6基）が確認された。時期は概ね19世紀前半のものと考えられるが、焚き口部の土坑には明治以降の遺物が混入しているものもある。SX102は半地下式の竈である。新旧の2つの竈からなる。新竈は径約1mの円形の燃焼室からなり、焚き口から中央付近まで燃焼部が1段深く掘られている。燃焼室には石が支えとして使用されている。焚き口は約1mの方形の土坑状で、外側に1段階状の掘り込みが付く。旧竈はほぼ焚き口の土坑一杯の規模で、燃焼部の両脇には石を置き、底部は硬化している。旧竈と焚き口の土坑との関係から、旧竈と焚き口の土坑が最初からのセットで、その後竈部分のみ新しく作り直したものとみられる。

SX103・SX105は、遺跡東側際にあり、SX103はほぼ全掘されたが、SX105は約半分のみ調査となった。焚き口の土坑は当初別々であったが、結果としてつながってしまった。最初から同一に掘られていたものではないと考えられるが、底面のレベルも形状もほとんど連続している。SX103の方が小型で径約80cmほどであるが、SX105の方は径が約1.5mほどある。ともに竈壁に石を使用しているが、SX105の方は燃焼室の底面に大型の石を敷きつめたようになっている。

SX104は、径約1mの燃焼室と長さ約1.2mの方形の焚き口からなる。しかし、焚き口と燃焼室の位置がやや斜めにずれた格好となっており、しかも燃焼部の底面と焚き口の土坑底面のレベルがほぼ同じであり、土坑が焚き口の役割を果たしていたのか疑問もある。

SX106は、焼けた壁面が残る土坑で、遺跡東側に延びる竈の燃焼部の可能性がある。

土坑

土坑は長方形や円形のしっかりとした掘り込みを持つものが多いが、プランも掘り込みもしっかりしないものもある。土坑は19世紀から明治のものが多い。

SK106は、掘り込みが浅く、覆土の判断が難しかったため北側を掘り過ぎてしまっている。

SK105は、遺跡西壁に接した土坑で、約70cm程度の土坑を2段に掘り込み、甕を逆さに埋置している。甕の底には孔が開けられ、内部からは土製の般若の面の破片が出土している。受け皿はなく、実際には鳴らないと思われるが水琴窟と考えられる。時期は明治・大正時代である。

ピット状遺構

2基であるが、SP103からは4枚の銅銭が出土している。時期は19世紀前半と考えられる。

溝状遺構

SD101は瓦製の溝であるが、瓦とは違い「コ」の字に最初から作られている。それが瓦を繋ぐのと同様に入れ子状につながる受けを雄雌持ち、連続した溝を作っている。「コ」の字に作られている以外

は全く瓦と同様の製品である。黒色に燻ぶされている。江戸時代にはこのような瓦製の溝を寡聞にして知らないで、恐らく明治以降と考えられる。しかし、明治でも土管等の普及以前と考えられるので、技法からしても江戸時代からそれほど離れた時期ではないと考えられる。

以上第1面は18世紀末から19世紀前半の遺構面で、遺物は明治期以降のものもある。遺構は水琴窟など明治期以降のものも若干あるが、多くは幕末までは下がないものと考えられ、若干上層を削平されている可能性もある。

第2面

竈 (SX201~203) 3基 (5基)、土坑 (SK201~238) 25基、ピット状遺構 (SP201~215) 14基、瓦製の溝状遺構 (SD201) 1基、井戸 (SE201・SK224) 2基、桶底1基を検出した。

竈

酒造り用の半地下式の竈2基 (4基) と焚き口部が1か所で多数の小型の燃焼部が付く竈1基である。時期は18世紀中葉と考えられる。

SX201は、新旧2基からなる。旧竈は新竈の40cmほど下から確認され、石組のしっかりした作りである。旧竈の焚き口の一部はSE201の確認のためのトレンチにより破壊してしまった。

SX202は、小型の半地下式の竈で、赤化した竈壁と炭化物の入った燃焼部を当初竈としてSX202として調査した。焚き口部に当たるSK228との間に黄褐色の粘質層(1)が堆積していたことから、当初はSX202とSK228は別遺構として調査した。その後SX202とSK228の間に一段深い幅80~70cm、深さ20cmほどの掘り込みが確認され、それがSX202とつながることと、その中に炭が多量に入っていたことが判明した。そのことから、SX202は新旧ほとんどレベルが変わらないところで構築され、焚き口をSK228を含め2ヶ所所有する新旧の竈と判断した。しかし、竈は新旧ではなく、焚き口部だけ作りなおしている可能性もある。(堆積土: 1.黄褐色粘質土、2.黄褐色土、3.礫まじり褐色土)

SX203は、長径3.5mに及ぶ大型の竈である。中央に1箇所の焚き口部を有し、径40cmほどの小型の燃焼部を7か所連続的に配置した竈である。確認レベルが低く、燃焼部も焚き口も残存状況は悪い。ほとんど掘り込みレベルは無く、燃焼部の最下部の焼土や炭のみが確認された。焚き口部のレベルも約5cm程度しかない。レベル差がほとんどないのでエレベーションは作成していない。

土坑・ピット状遺構

楕円形のしっかりした土坑や円形のピットが多いが、中には土坑とピットの形状に差異がないものもあり、性格が異なるものもある。時期は一部17世紀後半の遺物を含むものもあるが概ね18世紀前半から中葉のものと考えられる。SK216からは織部、志野とみられる破片が出土している。

SK204・221は、第1面の遺構による破壊により遺存状態が悪いので、全体図のみの表示である。

SK201は、東側を新しい井戸と攪乱により破壊されている。方形の掘り込みを有する土坑で、瓦が多く出土している。

SK207は、浅い方形の土坑であるが、甕と脚付の土製埴底が出土している。

SK223は、楕円形の土坑の中に桶が設置され、さらにその中に円形の掘り込みが掘られている。外側の土坑と桶の間の土(5層)は黄白のシルト状の土を含むもので、おそらく桶の耐水を兼ねた支え土と考えられる。桶の中の小さな土坑からは鉄や鋼の破片が出土し、魚骨片等も本遺跡の中では特に多く出土している。炊事等に使用された桶であったと考えられる。(堆積土: 1.黄色砂質土、2.暗褐色腐食土、3.黄褐色シルト質土、4.黒褐色土、5.黄褐色土、6.灰色粘質土、7.明褐色土)

SK226は、長楕円形の土坑であるが掘り込みはハッキリしない。石臼が出土している。

SK215・SK222は、円形の土坑であるが、いずれも半分が調査区外に出ている。桶の底痕が残っている。SK222では土坑中央付近で「タガ」痕も残っていた。

SK238は、土坑では無く、桶の底板の残存である。掘方は明瞭ではない。

SP207は、浅い土坑状の遺構である。五輪塔の上部が出土した。

瓦製の溝状遺構

SD201は、丸瓦の湾曲した側を内側にして溝状にした遺構である。瓦溝の底部しか残っておらず、連続もハッキリしないが、さらに前後へ続いていたものと考えられる。

井戸

SE201は、確認面で白色や赤色の粘土がブロック状に周囲から検出された。結果的に円形の井戸の周囲を取り巻くように埋められていたが、全周に存在するわけではなく、ブロックのそれぞれの大きさも深さも異なっている。井戸のプランも周囲の粘土ブロックとの関係が明瞭でなく、トレンチを開けて初めて深い井戸と判明した。周囲の粘土ブロックの性格は判断できなかったが、何らかの井戸周囲の補給財として使用されたと思われる。しかし、こうした粘土は当該地のものではないので、かなりの量をどこからか運んできたものと考えられる。なおSE201については第3面の報告で詳述する。

SX224は、当初は浅い土坑として記録したが、第3面へ掘り下げ、土層断面で上層から連続する井戸と判断された。深く、壁面が崩壊してきたため、底面までの調査はできなかった。

以上、第2面は17世紀後半から18世紀の遺構面で、遺構により19世紀の遺物の混入もあるが、概ね18世紀前半の遺構と考えられる。一部17世紀代の遺構も存在するものとみられる。

第3面

土坑（SK301～331）25基、ピット状遺構（SP306～356）27基を検出した。第3面は最終確認面で、当該地域の地山である明黄褐色層の面で確認した。遺構は、調査の結果暗褐色の覆土を持つものと、地山に近い明黄褐色土に類する覆土の二種に分かれる。後者は多量の土師器皿や口縁部に肥厚のない播鉢等の出土と、覆土の様相からも16世紀代の遺構と判断される。前者は覆土が近世の遺構に類似し、遺物も16世紀末から17世紀のものが中心で、近世の遺構と判断される。またどちらにも判断できなかった遺構もある。

近世の遺構は第2面から連続する井戸等の他、第2面と第3面の間に確認面を有する遺構が多く、近世の遺構ではあるが、比較的古い段階のものであることは間違いない。確実に16世紀代の遺物を出土した遺構のみ記述するとSK301、SK325、SK326、SK334、SP306、SP351である。

SK301は、44×18mの方形の土坑であるが、さらに円形の掘り込みが長軸に平行して掘り込まれる。円形の掘り込みは特に東側では連続してしまっているが、西側では独立しているのが並んだように確認され、おそらく甕や桶を5～6個を二列に並べた施設と考えられる。小破片であるが16世紀代とみられる土師器皿が出土しており、覆土も地山に近い黄褐色土で有岡城時代の遺構と考えられる。遺構の性格は他の遺跡で検出されている甕倉といわれる遺構に類するものと考えられる。

SK325、SK326は、遺構の大部分が調査区外に出してしまうが、不整形のだらだらとしたプランの遺構で、掘り込みは浅い。黄褐色の土師器皿と灰色の焼き締めたような土師器皿が13枚以上出土している。SK325はSK326と同様に土師器皿が出土している。いずれも上層の遺物の混入が遺構確認段階でみられるので、全てを16世紀のものとするわけにはいかないが、播鉢や天目、大窯段階の陶器皿片等が出土している。灰色の土師器皿は口縁に煤が付着するものがあり、灯明皿として使用されていたものがある。また、「へそ皿」に類する土師器皿も1枚出土している。

SK307は、第2面と第3面の間からの瓦溜りの遺構の最終底部部分である。間層の除去段階ですでに瓦が確認されている。

SK308は、掘り込みの中にピット状の坑があり、その両袖に土坑軸に沿って浅い掘り込みが付く。形状としては、酒搾り用の男柱と考えられる。

SK323は、第2面で検出したSK222と同様の桶底痕が残る遺構で17世紀代とみられる。

SX328は、2×1.2mの方形の土坑で、深さ95cmを測る。覆土は礫を含んだ灰暗褐色土と赤褐色土が互層のような状況で埋まっている。遺物は出土していないが、17世紀代の遺構とみられる。(堆積土：1.茶褐色土、2.赤黄褐色土、3.灰暗褐色土、4.赤褐色土、5.灰暗褐色土)

SP302・306・308・310・315、SP302・306・308・310は、覆土が近似し、底に根石を持つなど類似する点が多い。概ね一間間隔に位置し、一連の建物跡と考えられる。SP315はやや間隔が開き、石を伴わないなどやや違いがあるが、ほぼ直線上に位置することから一連のピットとみられる。なお、時期はSP306から16世紀代の土師器皿が出土していることから、16世紀代の遺構と考えられるが、覆土が暗褐色で他の16世紀代の遺構の覆土と異なることや、SK301に直接伴うものではないとするならば、位置関係からしてやや新しい時期に考える必要がある。

SP340は、調査区南西角に位置し、当初調査区に少しかかるだけのピットであった。調査の結果、土師器皿が3枚重なるように出土した。時期は16世紀代とみられる。

SE201、SK318・319・321・320・333、SE201は、第2面で検出した井戸とみられる深い掘り込みの遺構である。SK333は同じく第2面でSE201の周囲に存在した粘土ブロックの残存で、ここだけは結果として長方形の土坑状になった。粘土は白色の混ざりの少ないものである。

SK319・321・320は、浅い掘り込みの土坑の切り合いである。SK318は掘り込みが深く井戸状になっている。SE201もSK318も底まで掘りきれなかった。当初両方とも井戸と考えていたが、調査の結果両遺構が地下でつながってしまい、一連の遺構であることが判明した。しかし、SK318からSE201方向へつながる坑と同一軸方向(南東方向)にSE201を越えて横方向に坑が広がることが判明した。横方向の広がりには1mのピン・ポール以上あり、僅かながら天井との隙間で見えるかぎりかなり奥まで続いているように判断できる。しかし、その方向はすぐに調査区外へ出てしまい、隣接する民家の下へ続いているため、調査を断念せざるを得なかった。また、SK318とSE201の底についても、これ以上周囲を掘り下げることが困難なため、断念せざるを得なかった。そのためSK318とSE201の関係についても、同一に掘られたものか、偶然にこのような状況になったものかは確認できなかった。二つの井戸を底で繋げたものである可能性もあるが、南東方向へ広がる横坑から考えて地下室状の遺構であることは間違いない。時期は一部18世紀代の遺物も混入するが概ね17世紀後半の遺構と考えられる。

あくまでも仮説であるが、SE201は第2面ですでに検出され、SK318は出土遺物から第2面に続く時期の遺構ではあるが、確実に第2面で確認されなかったことと、横に広がる軸方向からして、SK318が地下室状の遺構の立て坑であり、偶然に地下室の天井部分を抜くような位置でSE201の井戸が掘られたのではないだろうか。そのため、SE201を掘った段階で天井部分を含め井戸の周囲を補強するために粘土を井戸に張りつけたのではないだろうか。

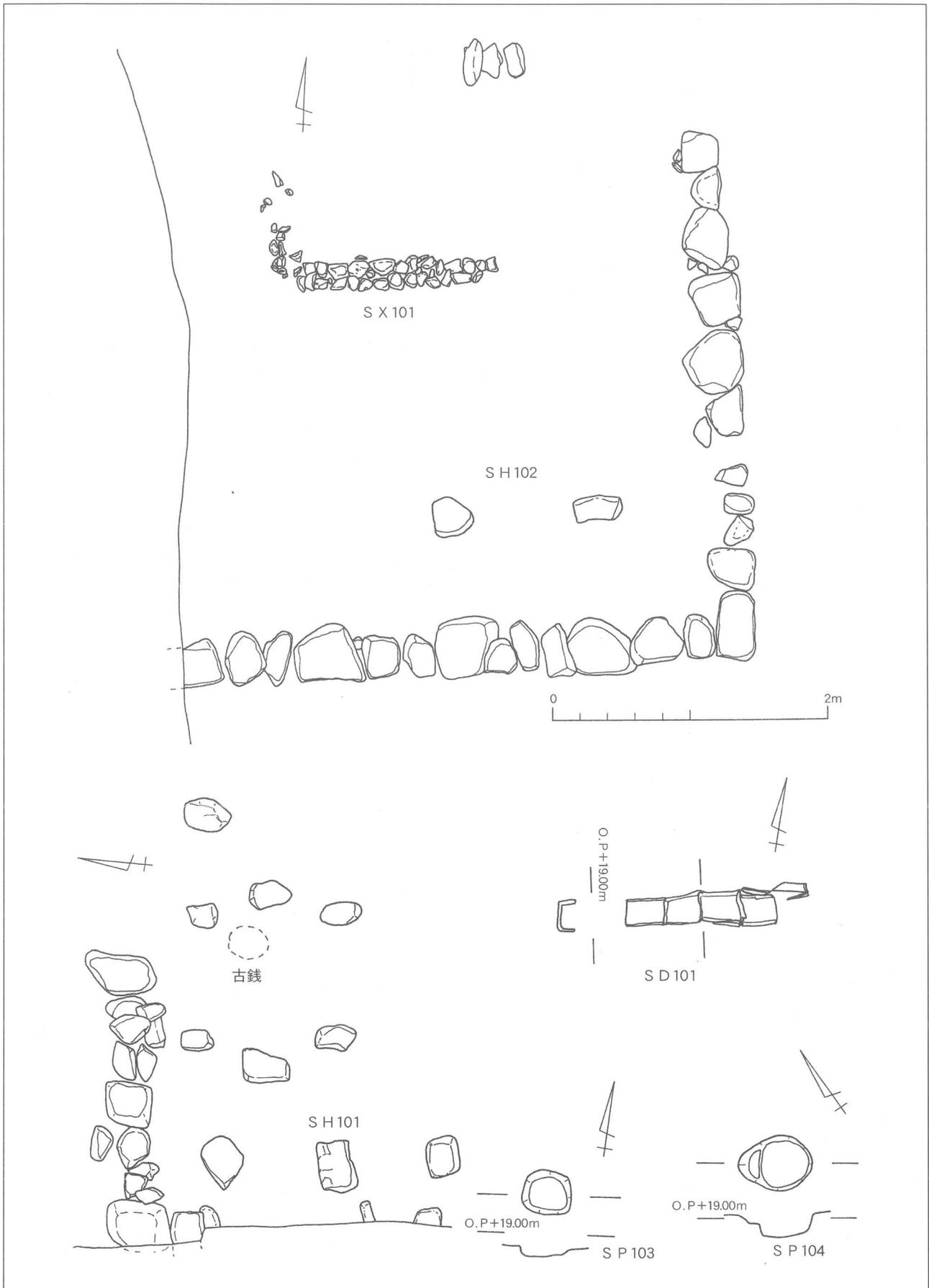
以上、第3面は16世紀後半から17世紀の遺構面で、上述のように16世紀の有岡城段階の遺構と17世紀前半ころの遺構に分かれる。遺構により18世紀代の遺物の混入もみられる。(伊藤、河合)

遺物(第67・68図、PL.42・43)

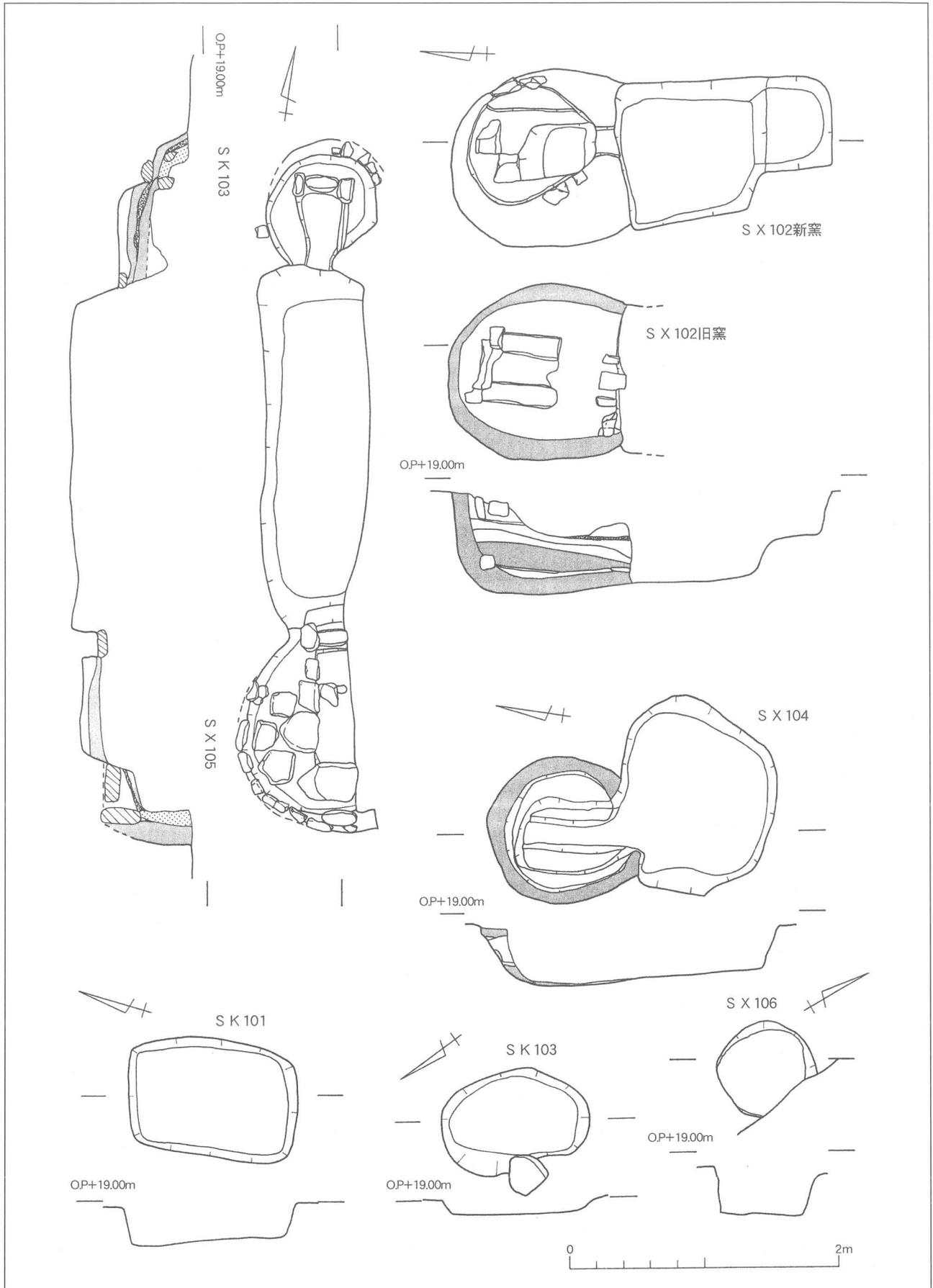
出土遺物のうち主要なものについて、遺構別に説明しておきたい。

SX104(1～7)

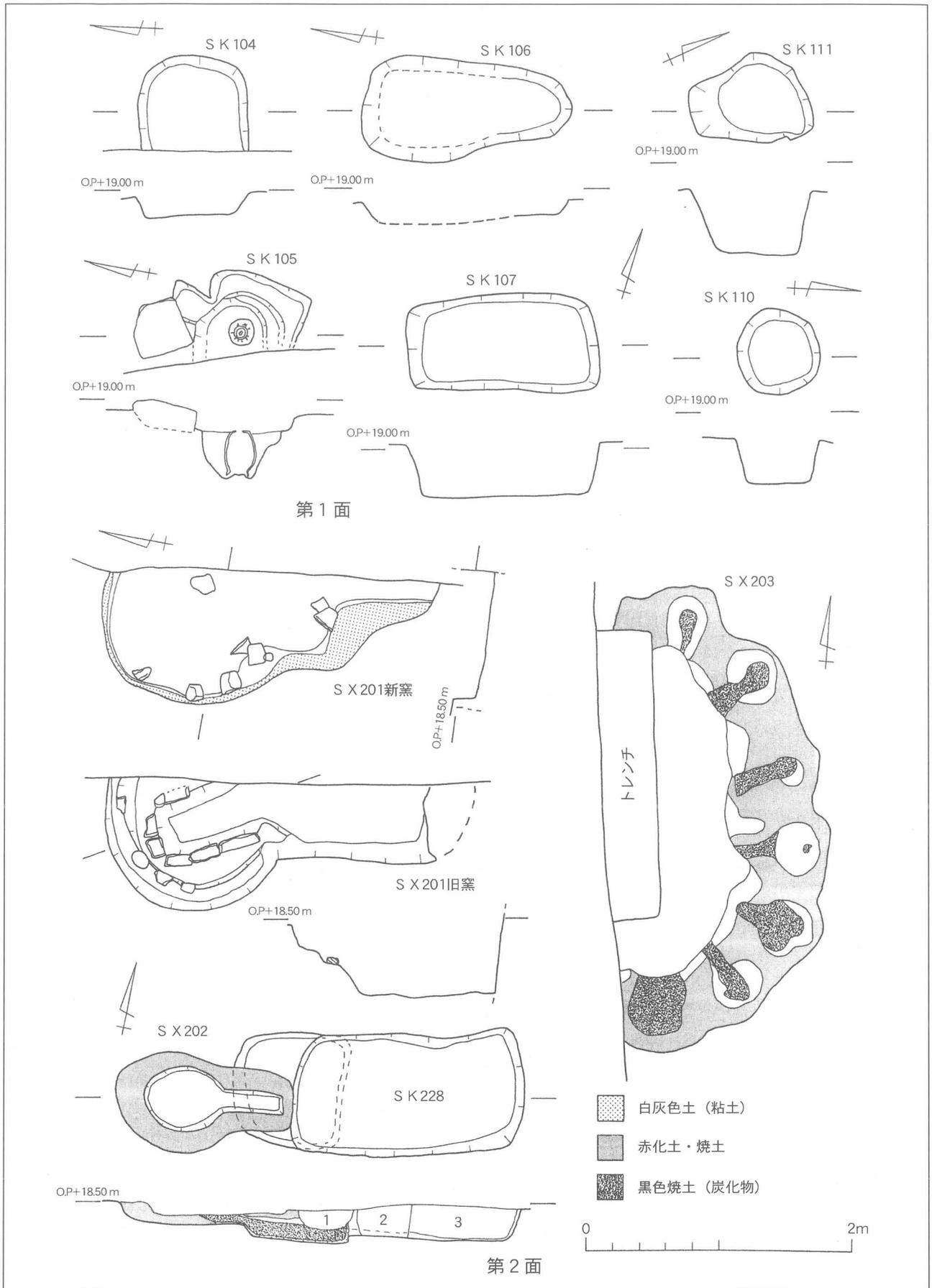
1は土師質植木鉢である。口径11.6cm、器高7.2cm、底径5.6cm。ロクロ成形で、底部外面には回転糸切り痕が残る。焼成後、底部中央に直径2.5cmの水抜き孔を両側から穿っている。浅黄橙色を呈し、砂粒を多く含む粗い胎土である。2は肥前白磁染付のミニチュア徳利である。口径1.7cm、器高7.5cm、底径2.7cm。内面口縁部から外面に施釉するが、畳付は無釉である。高台内に離れ砂が付着している。外



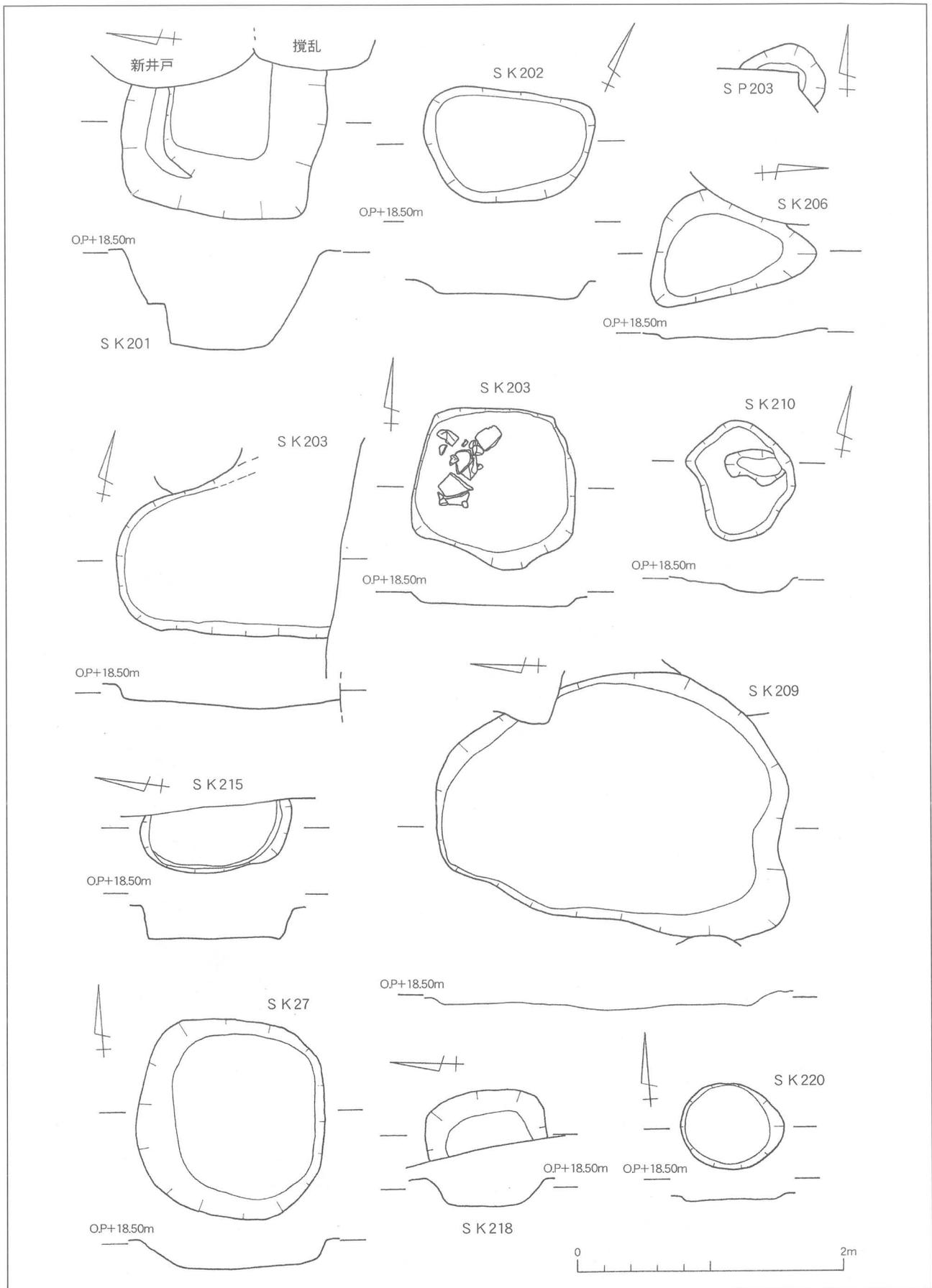
第59図 第1面平面図(1)



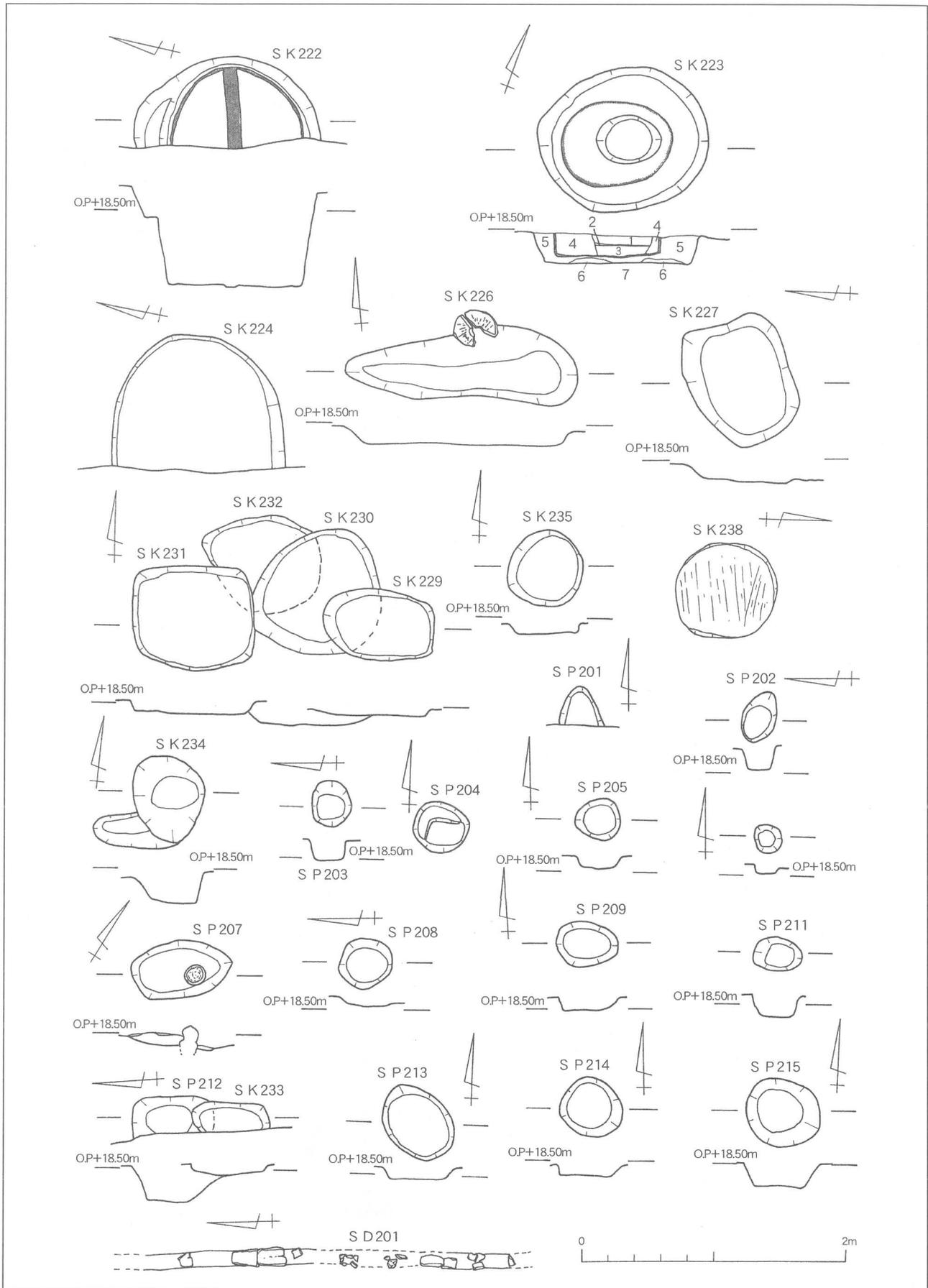
第60図 第1面平面図(2) (1/40)



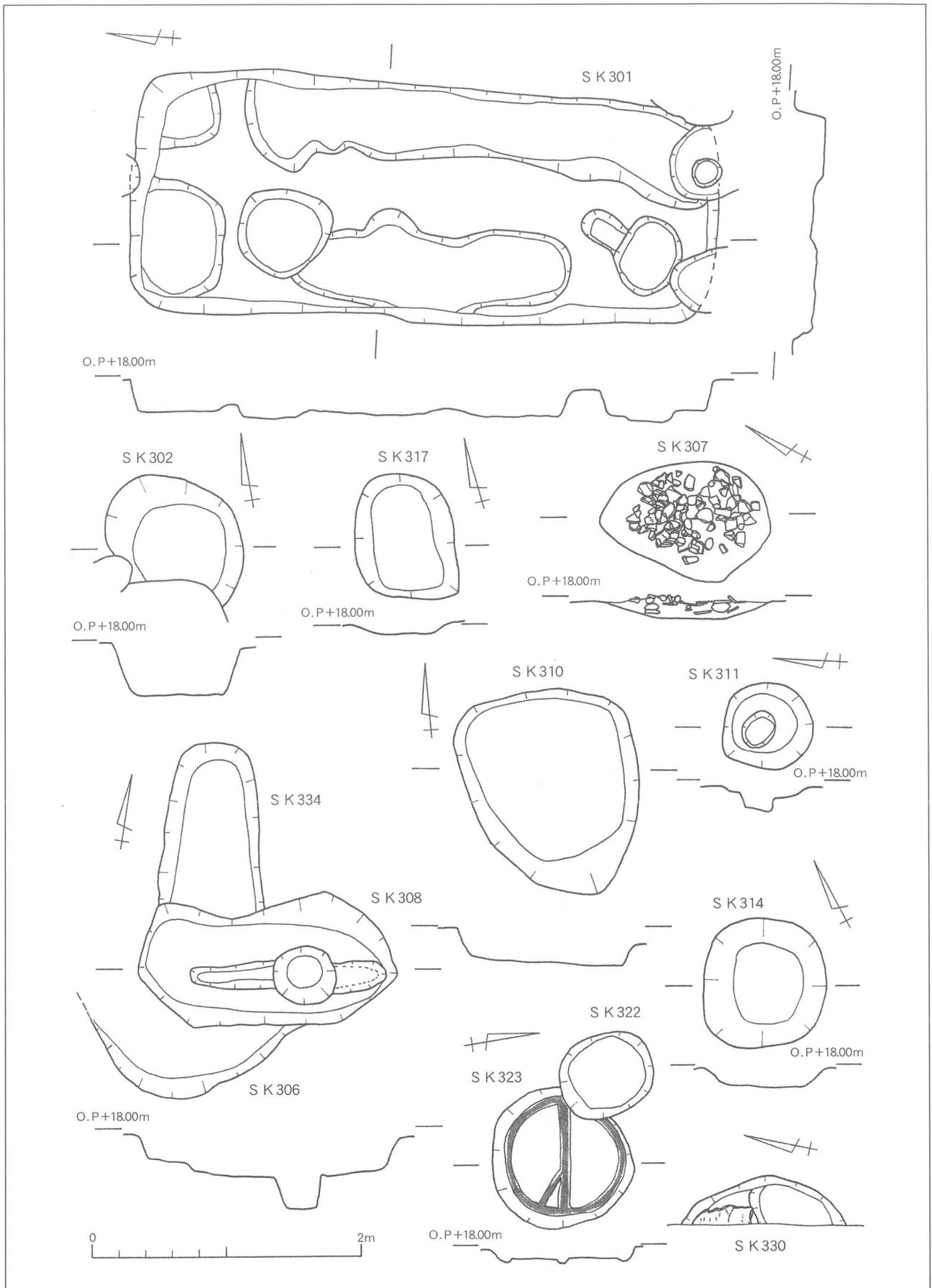
第61図 第2面平面図 (1) (1/40)



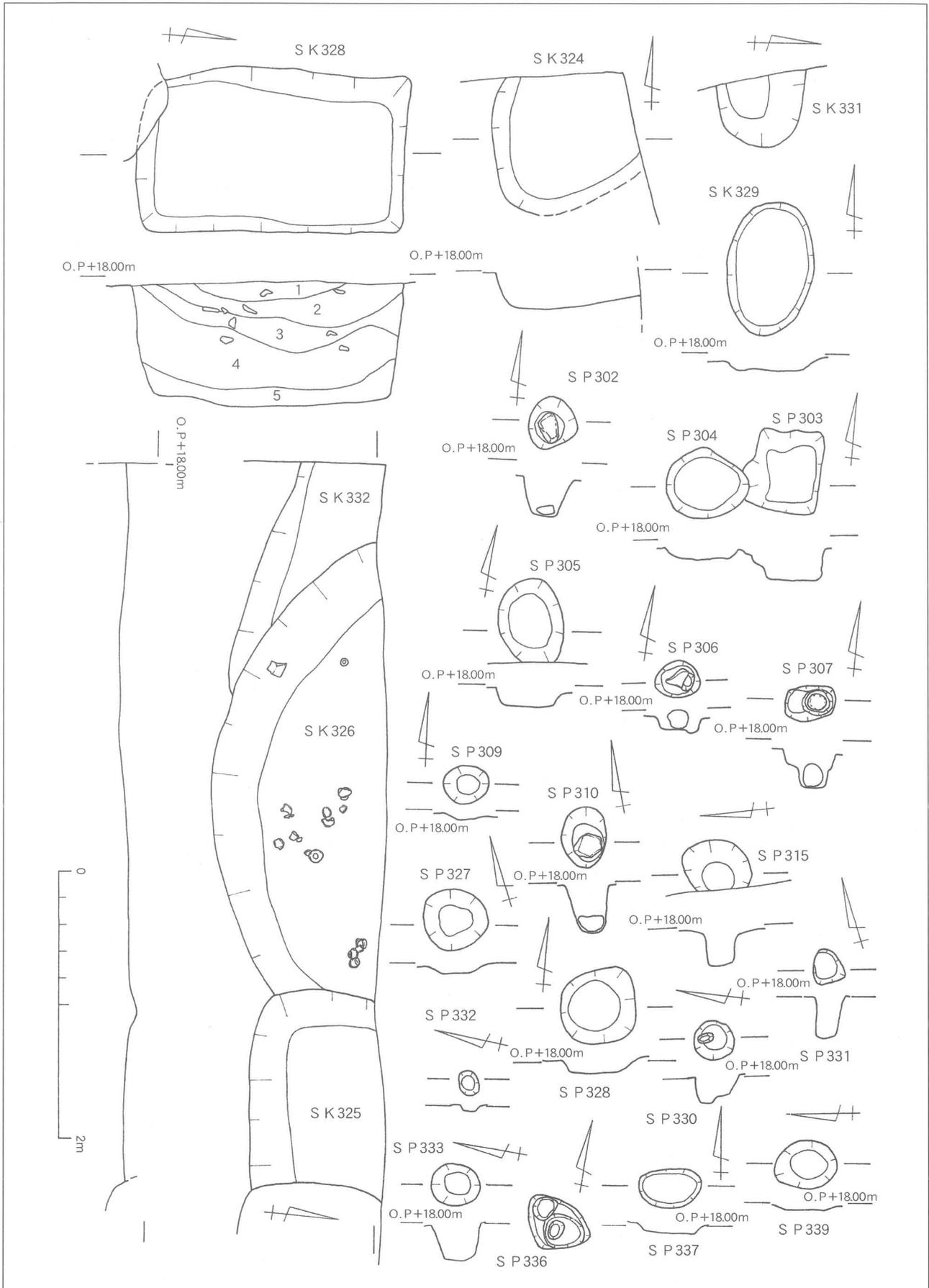
第62図 第2面平面図 (2) (1/40)



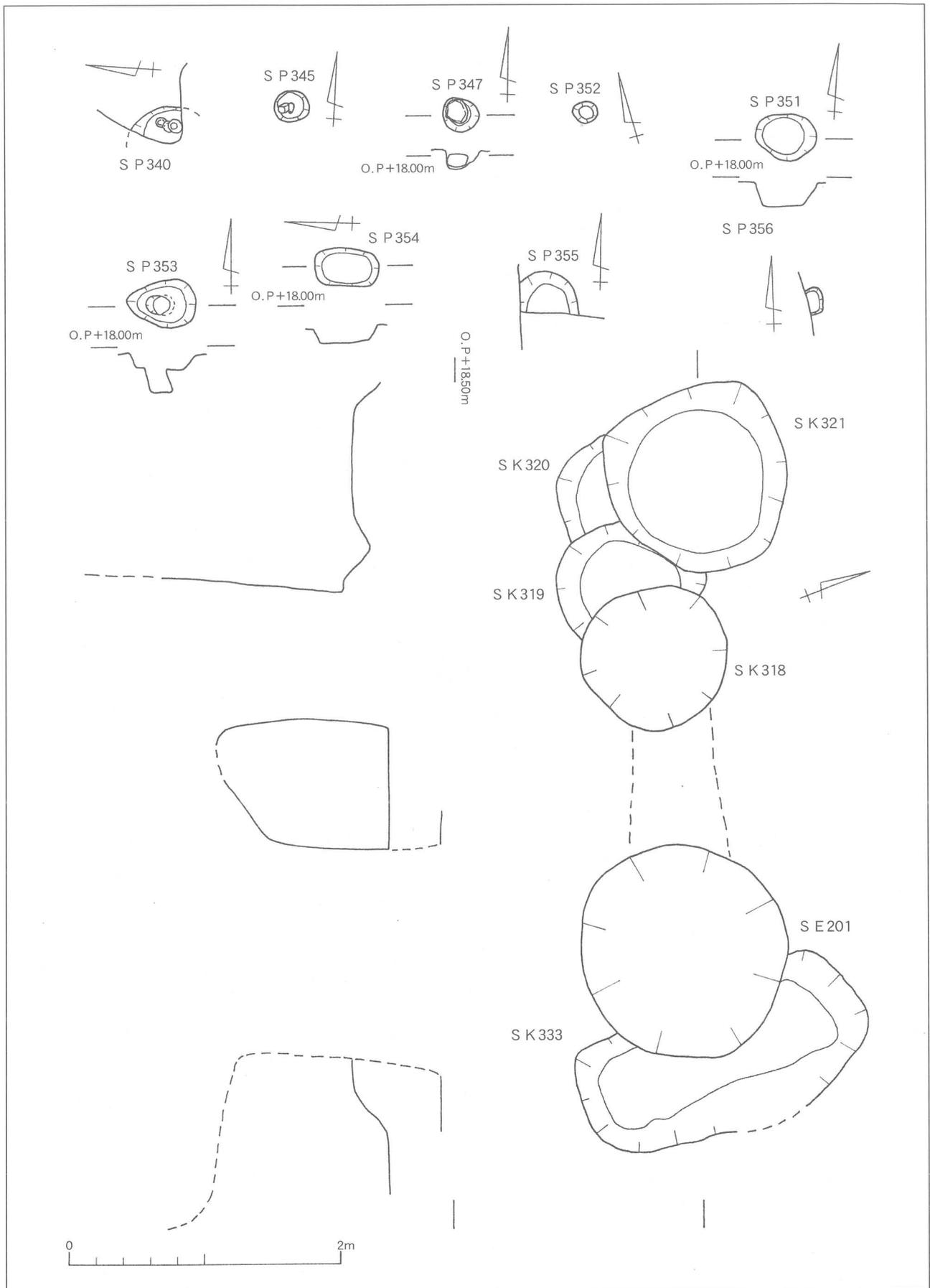
第63図 第2面平面図(3) (1/40)



第64图 第3面平面图 (1) (1/40)



第65図 第3面平面図(2) (1/40)



第66图 第3面平面图(3) (1/40)

側中位に笹文と梅文を対面して描く。3は肥前白磁染付皿である。口径13.9cm、器高3.5cm、底径9.1cm。高台は蛇の目凹形高台である。内側に草花文、見込みに牡丹文を描く。4は瀬戸白磁皿である。口径8.9cm、器高2.1cm、底径5.1cm。畳付以外は全釉である。見込みにデザイン化した「寿」字を陰刻する。5は土師質焙烙である。口径31.9cmを測る大型品である。浅い底部に短く立ち上がる口縁部が続く。口縁部はヨコナデし、底部内外面は丁寧なナデ調整を行う。外面はよく焼けているが、特に底部上半部に煤の付着が見られる。6は丹波焼徳利である。口径3.6cm、器高25.4cm、底径8.4cm。内面はロクロ成形による凹凸が顕著である。外面は丁寧にロクロナデされ、器壁は薄く仕上げられている。底部は中央が上げ底気味にへこむ。外面に褐釉を施し、口縁部内外面に鉄錆釉を上掛けする。内面に褐色釉と鉄錆釉が釉垂れしている。外側に白泥釉で「播幸」（酒屋の屋号か）と「中之嶋」（酒銘）の文字を記す。通い徳利であろう。7は明石焼播鉢である。口径28.7cm、器高9.8cm、底径14.5cmを測り、櫛目の単位は13本である。内面の櫛目は密に施され、体部との境の段は沈線により区画される。内面見込み周囲、底部外面周囲に焼き台の痕跡が残る。また、底部に離れ砂が付着している。口縁部は暗赤褐色～灰黒色、内外面は橙色～赤褐色を呈し、胎土中に小石・石英・長石を多く含む。

SX103（8・9）

8は肥前白磁染付鉢である。口径18.3cm、器高9.6cm、底径7.5cm。畳付を除いて全釉される。見込みに竹と柴垣文を、内側口縁部は線描きだけで素描されている。外側は松竹と柴垣・鳥を描く。呉須の発色は淡く、水色を呈している。焼継がなされている。9は明石焼播鉢である。口径29.4cm、器高9.6cm、底径13.9cm。櫛目の単位は13本である。内面の櫛目は密に施され、見込みは放射状に施す。内面口縁の段と体部との境の段は明瞭である。

SX106（10～12）

10は土師器小皿である。口径5.8cm、器高3.4cm。底部中央が僅かにへこむ。丁寧なナデ調整を行っているが、器壁の剥離が著しい。浅黄橙色を呈し、精良な胎土である。灯明皿としての使用痕は認められない。11は肥前白磁色絵盃である。口径5.8cm、器高3.4cm、底径2.2cm。全釉するが、口縁端部は口禿を呈する。薄手の上手物である。12は伊賀・信楽焼小型片手鍋である。口径15cm、器高3.2cm、底径6.1cmを測る浅い鍋である。蓋受け部と体部下半以下は無釉である。施釉されている所は全体に細かい貫入が入っている。体部下半以下はよく焼けている。

SX201（13～14）

13は土師器皿である。口径11.4cm、器高1.5cm。内面は丁寧にナデ調整するが、外面には指頭圧痕が残る。器壁は薄く仕上げられている。口縁端部が若干焼けているので、灯明皿としての使用が考えられる。14は肥前青磁染付碗である。畳付から高台中位まで無釉。体部中位の釉を凹線状に掻き取っている。高台と高台内に鉄錆釉を施す。17世紀前半～中頃の所産であろう。

SK207（15・16）

15は土師質火鉢である。口径25cm、器高15.7cmを測り、かなり高い脚が3本付く。内外面は丁寧にナデ調整し、内面の粘土の継ぎ目を丁寧に指オサエする。脚の内側上部に直径6mm、深さ1cmの孔を1ヶ所穿つ。浅黄橙色を呈し、クサリ礫・雲母・砂粒を含む。16は丹波焼甕である。口径27.1cmを測り、胴部最大径を肩部付近にもつ。口縁がやや肥厚するものの、器壁の厚さはほとんど変わらず、口縁部は短く外折する。内外面とも丁寧にロクロナデしているが、僅かに指頭圧痕が認められる。

SK318（17～21）

17は土師器灯明皿である。口径7.1cm、器高1.8cm。内外面を丁寧にナデ調整する。口縁部は指オサエを加えることで小さく外反する。口縁端部に煤が付着する。浅黄橙色を呈し、クサリ礫・雲母を含む精良な胎土である。18は肥前青磁碗である。口径11.6cmを測る。器壁は薄く整えられている。内外

面に明緑灰色の釉を薄く施釉し、口縁部内面を掛け分けする。19は青花皿である。底径5.9cmを測る。高台は無釉の削り出し高台である。内外面には青味を帯びた透明白色の釉が掛かり、呉須はコバルトブルーに発色している。高台畳付外側に離れ砂が付着する。見込みに「渦福」が描かれ、高台内には墨書が記されている。景德鎮窯のものである。20は丹波焼播鉢である。櫛目は12本単位。下部の櫛目はよく使用されたようで、櫛り消えている。内面はロクロ成形のヨコナデがよく残り、外面は指頭圧痕が上部まで及ぶ。口縁端部は上下に若干拡張する。無釉の焼き締めである。橙色を呈し、小石・長石・石英などを多く含む粗い胎土である。21は瀬戸・美濃焼三足盤である。口径18.9cm、器高5.4cmを測る。底部は浅く、短く直立する頸部に小さく外折する口縁部が続く。底部外面は回転ヘラ削り調整される。底部を除き長石釉を施釉する。17世紀前半の所産であろう。

SK323 (22~23)

22は唐津焼皿である。口径10.2cm、器高3cm、底径3.6cm。高台は削り出しによって碁筍底となっている。灰淡緑色釉を内面から高台際まで掛ける。23は唐津焼小碗である。口径7.2cmを測る。内外面に薄く長石釉が掛かる。17世紀前半頃の所産であろう。

SK325 (24~29)

24は土師器皿である。口径8.3cm、SK326で皿Bとした硬質の皿である。外面口縁部に指頭圧痕が残る。外面は灰黒色、内面は灰黄橙色を呈し、胎土は精良である。25は土師器皿である。口径9.4cm、器高2cm。底部から外反しながら広がる口縁部が続く。外面はナデ調整、内面はヨコナデ痕が残り、口縁は外面を斜めにナデ上げることで、更に外反する。浅黄橙色を呈し、胎土中に雲母・砂粒を含む。26は瓦質小型羽釜である。口径11.3cmを測る。内面から口頸部にかけて炭素吸着により黒色を呈しているが、鏝以下は灰黄褐色を呈し、表面の剥離が著しい。27・28は肥前白磁一重網目文碗である。27は口径9.4cmを測り、底部から余り開かず延びる口縁である。灰色気味の白色の釉が掛かる。28は底径4cmを測り、緑灰色気味の白色の釉が掛かり、高台畳付は無釉である。29は白磁碗である。口径5.4cmを測り、口縁端部は小さく外反する。古手の遺物も含まれるが、概ね17世紀中頃の所産である。

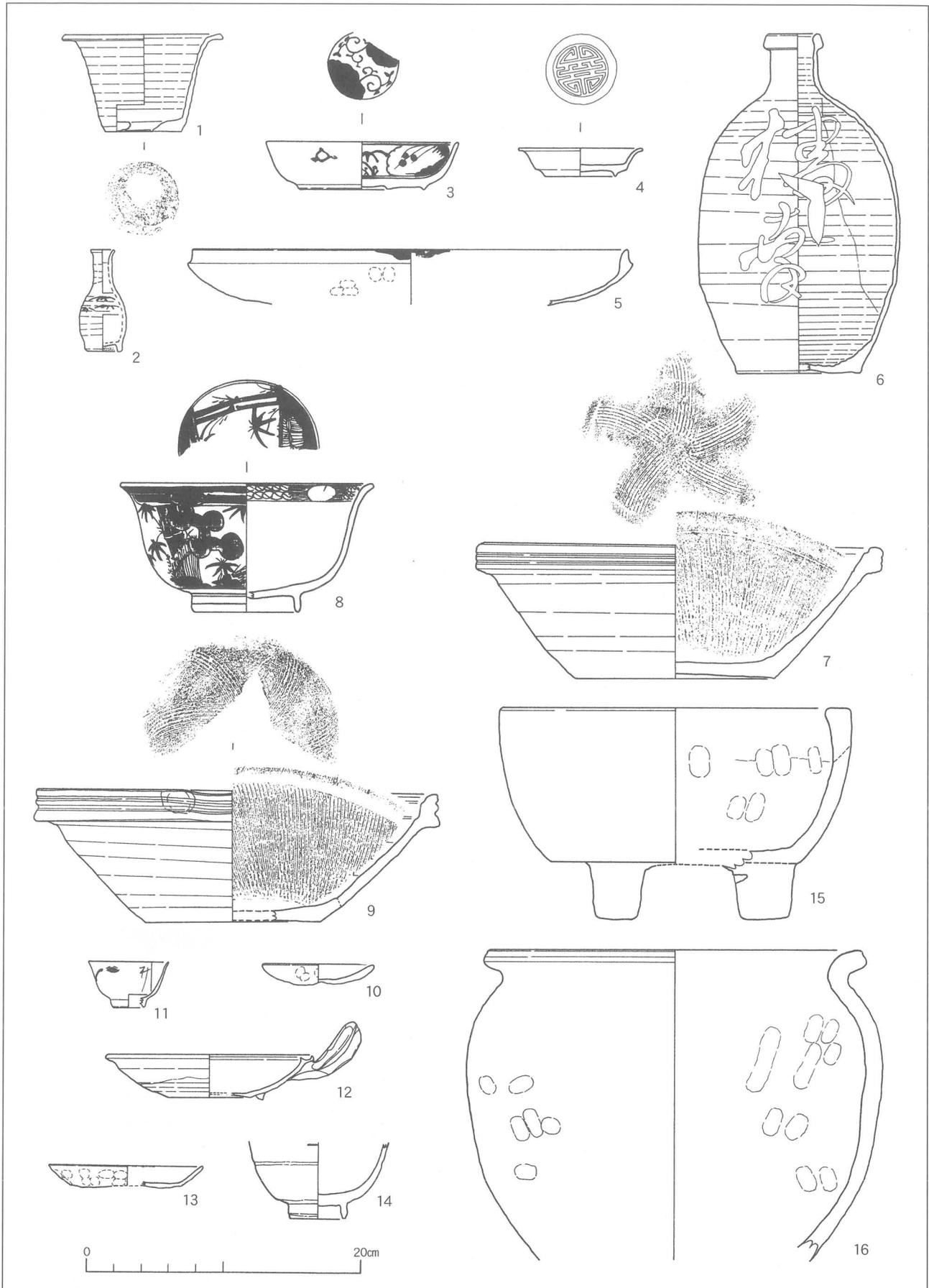
SK326 (30~49)

30~44は土師器皿である。器形・調整は同様であるが、浅黄橙色を呈する軟質のもの(30~36 以下皿A)と灰色を呈する硬質のもの(37~44 以下皿B)が出土している。皿A(30~36)は口径7.7~10.6cm、器高2.2~2.8cmを測る。口径8~9cm、器高2~3cmを中心として分布する。丸底の半球形を呈し、口縁端部は面を持って立ち上がる。内面は丁寧にナデ調整するが、外面は指頭圧痕による凹凸が顕著である。皿Aは(36)を除き煤付着などの顕著な使用痕は認められず、灯明皿以外の使用が考えられる。

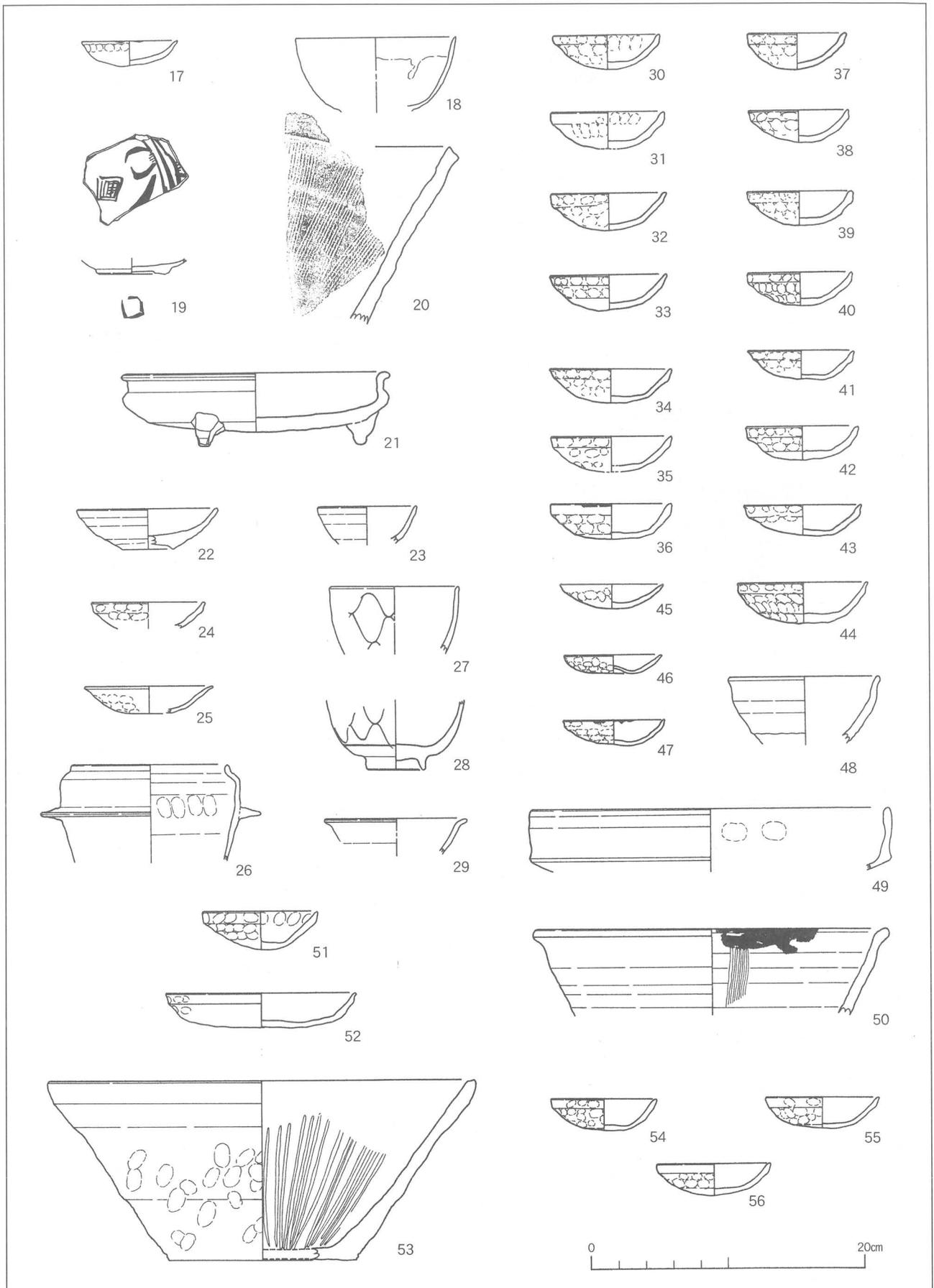
皿B(37~44)は口径7~9.5cm、器高1.7~3cmを測る。口径7~8cm、器高2~3cmを中心として分布し、皿Aより小振りとなっている。丸底の半球形を呈し、口縁端部は面を持ってやや外方に立ち上がる。内面は丁寧にナデ調整するが、外面は指頭圧痕による凹凸が顕著に残る。

皿Aでは確実な使用痕は認められないが、皿Bは(38)を除き全てに使用痕が残っている。内面~外面上部に鈎滓状の付着物が見られる。この付着物は器面全面に残るものではなく、片側あるいは器面の1/3~1/4だけに残っている。

45~47は土師器小皿である。45は口径7.6cm、器高1.8cm。丸底の浅い半球形を呈し、口縁端部を尖り気味におさめる。46は口径7.1cm、器高1.4cm。ヘソ皿タイプのものである。内面はナデ調整するが、外面は指頭圧痕がそのまま残る。内外面に粘土の継ぎ目が残っており、粘土板の一枚作りであることがわかる。浅黄橙色を呈し、胎土は精良である。47は口径7.4cm、器高1.8cm。口縁部内外面に煤の付着が認められ、灯明皿として使用されていたことがわかる。浅黄橙色を呈し、クサリ礫・雲母・砂粒を含



第67図 第1・2面出土遺物 (1/4)



第68图 第3面出土遺物 (1/4)

む。

48は瀬戸・美濃焼天目茶碗である。口径10.9cmを測る。口縁部は外反して立ち上がり、端部は玉縁状にやや肥厚する。内面から外面中位に褐釉を掛ける。

49は土師質焙烙である。口径26cmを測る。底部と口縁部の境に稜を持ち、口縁部は内湾気味に立ち上がる。内外面を丁寧にナデ調整している。にぶい橙色を呈し、雲母・クサリ礫・石英・砂粒を含む胎土である。

50は信楽焼播鉢である。口径25.5cmを測る。櫛目は5本単位。口縁端部は小さく外反する。内外面にはロクロナデによる緩やかな凹凸が残る。浅黄橙色を呈し、石英・長石粒を含み粗い胎土である。

SK334 (51~53)

51は土師器皿である。口径8.3cm、器高2.8cm。底部が尖り気味の浅い半球形を呈し、口縁部は面を持って外方に立ち上がり、端部は尖り気味におわる。内面は丁寧にナデ調整するが、外面は成形時の指頭圧痕の凹凸が残る。煤付着などの顕著な使用痕は見られない。浅黄橙色を呈し、雲母・石英などの砂粒を含む。SK326出土の皿Aと同器種である。

52は土師器皿である。口径13.8cm、器高2.5cm。内外面には成形時のナデによる緩やかな凹凸が残る。口縁部はさらにヨコナデと指頭圧痕を加えて、2段に外反させる。

53は丹波焼播鉢である。口径31.2cm、器高13.4cm、底径14.1cm。8本1単位の櫛目を施すが、櫛目の間隔は幅広で一定していない。ロクロ成形による緩やかな凹凸が全体に残り、その後、外面は上方まで指頭圧痕を加える。器壁は体部中位で一旦薄くなるが、口縁部で再び肥厚して、口縁端部は尖り気味におわる。赤褐色を呈し、焼成はあまい。砂粒を多く含んだ粗い胎土である。これらの遺物は17世紀初頭頃の所産であると考えられる。

SP340 (54~56)

54~56は土師器皿である。SK326で皿Aとした軟質の杯である。口径7.7~8.4cm、器高2.3~2.4cm。内面は丁寧なナデ調整、外面は指頭圧痕による凹凸が残る。煤付着などの顕著な使用痕は認められない。浅黄橙色を呈し、胎土は雲母・クサリ礫・石英・長石粒を含み粗い。(瀬川)

まとめ

本調査は最終的に3面の調査を行い、16世紀の有岡城段階の遺構・遺物を検出することができた。遺物は16世紀代から明治・大正時代までの長い幅があり、包含層も約1mもあった。調査は調査期間の関係もあり、3面で調査を行ったが、各面の間に存在し、間だけで消滅してしまった遺構や、調査途中では確認できず、遺跡セクションにより確認できた遺構もある。間層を重機で除去した関係もあり、瓦溜りや焼土の遺構などは除去中に確認できたものも各確認面までとばして調査したものもある。こうした不十分な調査であったが、かなりの成果もあった。

有岡城段階の甕倉と考えられる大型の土坑や土師器皿のセット、未調査のため確実なことは言えないが、大型の地下室状遺構の検出は貴重は発見と考えられる。今後、遺物の検討を踏まえ、再考していきたい。(伊藤、河合)

<参考文献>

- ・大平 茂 1992『三田市 下相野窯址 一近畿自動車道舞鶴線に伴う埋蔵文化財調査報告書一』
兵庫県文化財調査報告 第107冊 兵庫県教育委員会
- ・藤澤良祐他 1986『瀬戸市歴史民族資料館研究紀要V』瀬戸市歴史民族資料館
- ・大橋康二他 2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁研究会

第4節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第187次調査

所在地 伊丹市中央6丁目507-4番地

調査面積 約300㎡

調査期間 平成8年11月20日～平成9年3月5日

調査担当 武内 雅人（和歌山県）

若島 一則（広島県）

調査概要

今回の調査は、阪神・淡路大震災における共同住宅の建設に伴うものである。全面調査を、兵庫県埋蔵文化財調査事務所復興調査班の支援職員の派遣を得て実施した。

調査は、まず重機によって瓦礫層・攪乱層を除去した後、人力によって発掘し、遺構面・遺構・遺物の検出に努めた。

遺跡概要

当地は、有岡城惣構の南西隅に相当する地点で、当地南にある墨染寺には「女郎塚碑」が残っていることや、江戸時代から伝わる絵図等により、以前より女郎塚砦跡に比定されていた。

昭和60年に隣接地（現在伊丹第1ホテル）の第20次調査において、有岡城期の堀が検出され、また前方後円墳と考えられる古墳の存在が明らかとなり、女郎塚砦が古墳を利用して築かれていたことが推察された。（県年報19）

伊丹郷町段階では材木町に属し、本町通りに面した酒蔵であったことが古絵図等に記載されている。

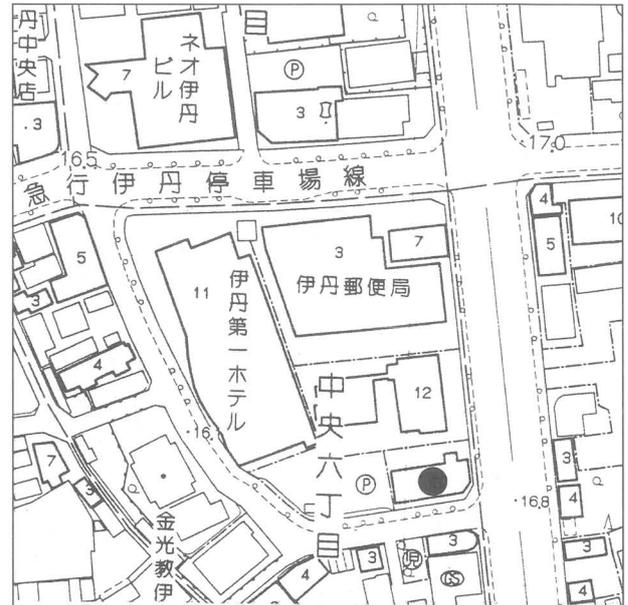
昭和18年、小西酒造の「宝来蔵」として転廃対象の蔵となるまで、酒造りが営まれていた。

第2次大戦後、兵庫県西宮土木事務所（調査区東側）・摂津財務事務所（西側）が建てられ、昭和40年代の事務所移転後は民有地になっていた。

調査成果

第20次調査同様、有岡城期の堀が検出された。また、その堀は、廃城後早い時期に、古墳を利用して造られたとされる女郎塚砦を削平し、埋められたことが明らかとなった。

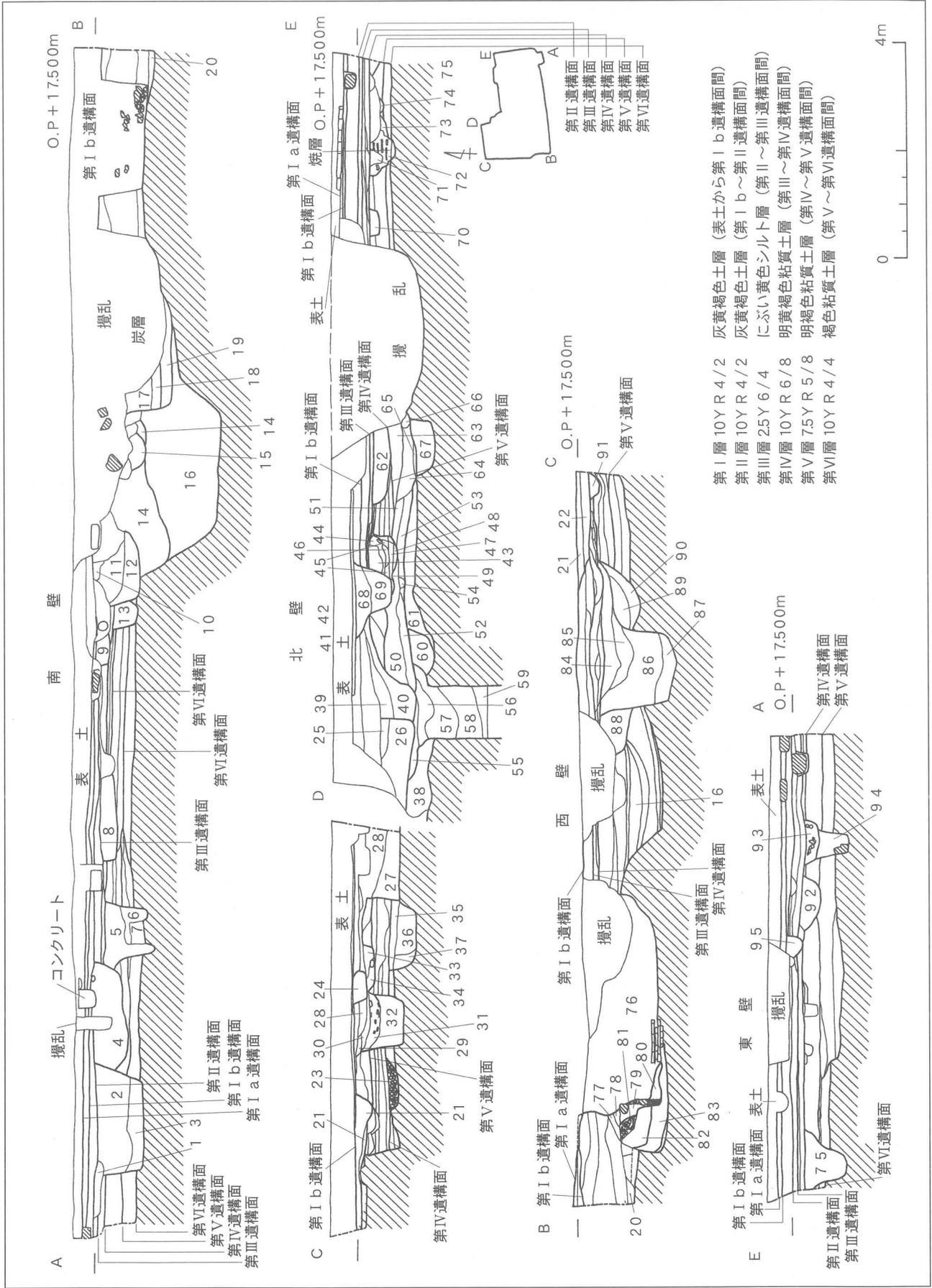
それ以後、当地においては、伊丹郷町内でも早い時期から酒造りが行われ、昭和に至るまで、継続的に続いていたことが明確となった。



第69図 第187次調査位置図（1/2, 500）



第70図 調査区設定図（1/500）



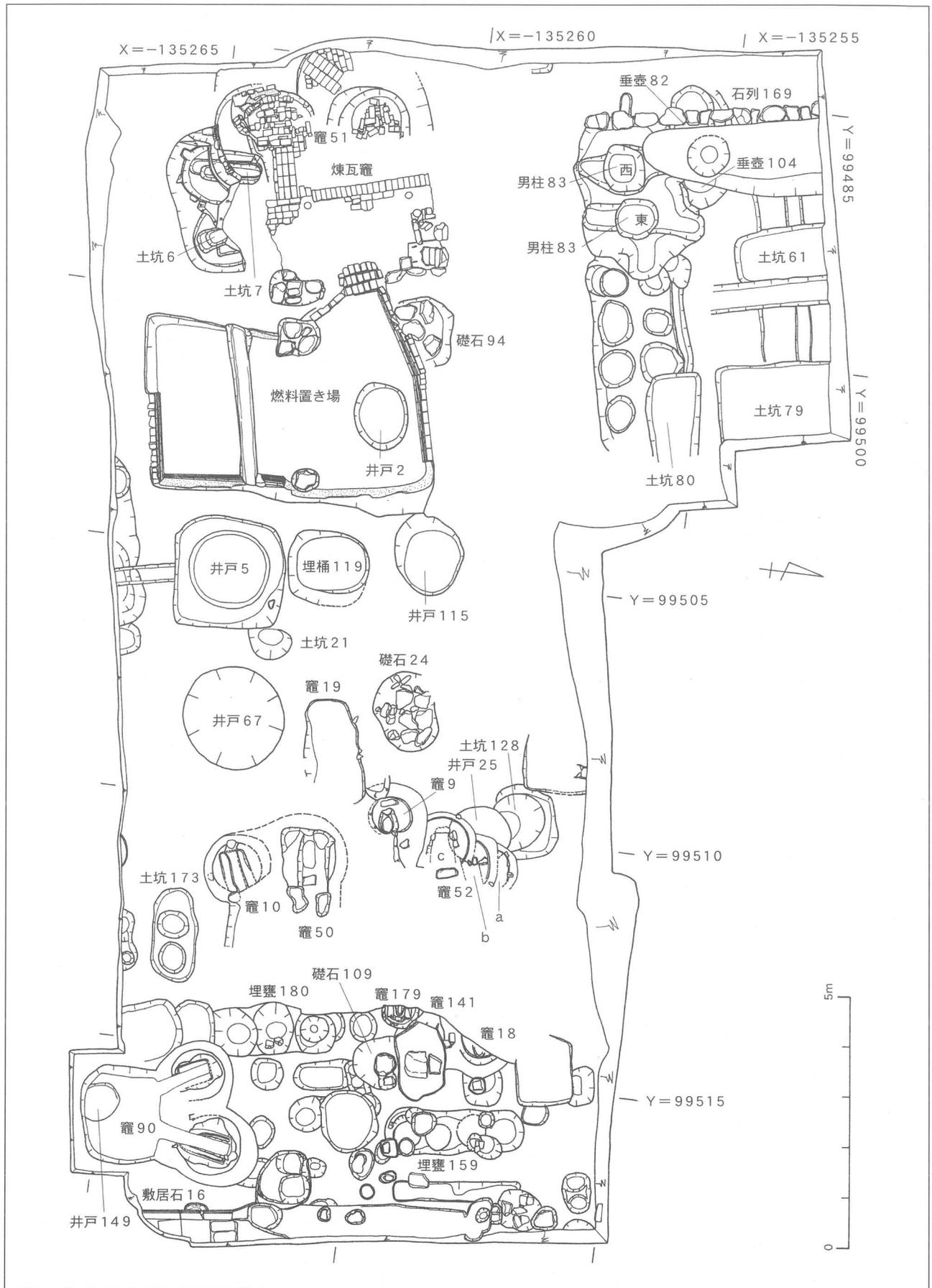
第71図 土層断面図 (1/100)

1. 円礫層
2. 2.5Y 4/6 オリーブ褐色砂利層(竈埋土上層、石、砂利、礫、粗砂層)
3. 5 Y 5/3 灰オリーブ色粘質土層(竈埋土下層)
4. 5 Y 4/4 暗オリーブ色土層
5. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色土層(小石、瓦片、炭、竈焼土を含む)
6. 10Y R 4/1 褐灰色粗砂、礫層
7. 10Y R 4/1 褐灰色シルト層(粗砂、礫を含む)
8. 2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト層(炭、多量の竈焼土と粘土ブロック、瓦片を含む)
9. 2.5Y 4/2 暗灰黄色土層(粗砂混じり、瓦片を多量に含む)
10. 2.5Y 4/2 暗灰黄色砂質土層(砂～5mm大の丸石を多く含む、10Y R 5/8 黄褐色土を多く含む)
11. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色土層(粗砂、砂利、炭、瓦片を含む)
12. 2.5Y 5/2 暗灰黄色土層(粗砂混じり)
13. 2.5Y 4/4 オリーブ褐色土層(粗砂、砂利、礫混じり)
14. 2.5Y 5/3 黄褐色土層(5 Y 5/2 灰オリーブ色砂を含み、少量の石、灰、瓦片、遺物を含む)
15. 10Y R 5/6 黄褐色粘質シルト層(小砂利、焼土粒を含む)
16. 堀145埋土(第89図参照)
17. 瓦溜り層(18の粘土を含む)
18. 5 Y 5/2 灰オリーブ粘土層
19. 2.5Y 4/2 暗灰黄色土層(小砂利、焼土ブロック、灰を含む)
20. 10Y R 3/3 暗褐色土層(炭、拳大の丸石を含む)
21. 10Y R 4/2 灰黄褐色土層(少量の丸小石、漆喰、5 Y 5/2 灰オリーブ色粘質土を含む)
22. 2.5Y 5/3 黄褐色土層(微砂、漆喰片を含む)
23. 10Y R 5/4 にぶい黄褐色土層(拳大の丸石で形成)
24. 2.5Y 3/1 黒褐色土層(炭を多く含む、小石～10cm大の石、瓦片、漆喰を含む)
25. 10Y R 6/6 明黄褐色土層
26. 8cm大の円礫と瓦の層
27. 2.5Y 3/2 黒褐色土層(細砂、小石、多量の瓦片を含む)
28. 2.5Y 3/2 黒褐色土層(細砂、小石、瓦片を含む)
29. 2.5Y 4/6 オリーブ褐色土層
30. 2.5Y 4/4 オリーブ褐色土層(小石～4cm程の丸石、瓦片を含む)
31. 2.5Y 3/2 黒褐色土層(瓦片、竈焼土を多く含む)
32. 2.5Y 4/1 黄灰色粘質土層(地山の土をブロックで多く含む)
33. 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色土層
34. 10Y R 4/2 暗灰黄色土層(瓦片、5～15cm大の丸石を多く含む)
35. 10Y R 5/4 にぶい黄褐色粘質土層(小砂利を多く含む)
36. 10Y R 4/4 褐色土層(小砂利～小丸石を含む)
37. 10Y R 6/4 にぶい黄褐色粗砂混じりシルト層(小丸石を多く含む)
38. 10Y R 6/6 明黄褐色シルト層
39. 2.5Y 5/2 暗灰黄色シルト層(粗砂、焼土、5cm大の円礫、炭を含む)
40. 10Y R 5/8 にぶい黄褐色シルト層
41. 10Y R 5/3 にぶい黄褐色シルト層(3cm大の丸石を含む)
42. 10Y R 6/3 にぶい黄褐色シルト層(灰を多く含む)
43. 2.5Y 6/2 灰黄色粘土層
44. 灰溜り層(焼土と粘土の混合土)
45. 灰黄色粘土層
46. 堅い焼土層
47. 10Y R 7/2 にぶい黄褐色シルト層
48. 10Y R 7/3 にぶい黄褐色シルト層
49. 灰層
50. 10Y R 4/4 褐色粘質土層(小礫を多く含む)
51. 2.5Y 6/4 にぶい黄色シルト層(2～3cmの小石混じり)
52. 10Y R 6/6 明黄褐色シルト層
53. 10Y R 6/6 明黄褐色シルト層(埴輪を含む層)
54. 2.5Y 5/2 暗灰黄色シルト層
55. 10Y R 4/4 褐色粘質土層(小礫を多く含む)
56. 10Y R 4/4 褐色粘質土層(小砂利を含む)
57. 2.5Y 5/2 暗灰黄色粘土層(丸石混じり)
58. 10Y R 4/6 褐色粘土層
59. 粗砂層
60. 10Y R 6/6 明黄褐色シルト層
61. 5 Y 5/2 灰オリーブシルト層(1～10cm大の円礫を多量に含む)
62. 10Y R 7/6 明黄褐色小礫混りシルト層
63. 10Y R 7/6 明黄褐色シルト層(2～3cmの円礫、粗砂を含む)
64. 10Y R 5/4 にぶい黄褐色シルト層(粗砂、小礫まじり)
65. 10Y R 6/6 明黄褐色シルト層
66. 10Y R 6/6 明黄褐色シルト層
67. 2.5Y 5/4 黄褐色土層
(1～5cm大の円礫を多く含む、粗砂混じる)
68. 2.5Y 6/2 灰黄色粘土と焼土、炭の瓦層
69. 2.5Y 6/3 にぶい黄色シルト層(焼土、炭、粗砂を含む)
70. 5 Y 6/3 オリーブ黄色粘質シルト層
71. 10Y R 4/4 褐色粗砂層(竈内埋土、3～5cmの円礫を含む)
72. 5 Y 6/3 オリーブ黄色粘質シルト層(竈壁粘土)
73. 5 Y 6/3 オリーブ黄色粘質シルト層(旧竈の埋土)
74. 5 Y 6/3 オリーブ黄色粘土層
75. 5 Y 6/4 オリーブ黄色小礫混りシルト層
76. 7.5Y R 4/6 褐色土層(多量のレンガ、竈建築材料で形成)
77. 焼土層
78. 2.5Y 4/2 暗灰黄色粘質土層(粗砂、瓦片、竈材、炭を含む)
79. 5 Y 5/2 灰オリーブシルト層
80. 10Y R 5/3 にぶい黄褐色土層(5 Y R 4/6 赤褐色土を含む)
81. 瓦片層
82. 2.5Y 5/2 暗灰黄色粘質土層(竈6(新)埋土)
83. 2.5Y 5/2 暗灰黄色粘質土層(竈6(旧)埋土)
84. 10Y R 4/4 褐色土層(粗砂、10cm大の石、瓦片を含む)
85. 10Y R 5/4 にぶい黄褐色砂礫層(粗砂、砂～10cm大の石で形成)
86. 10Y R 4/4 褐色粘土混土層(粗砂～拳大の丸石を含む)
87. 10Y R 5/4 にぶい黄褐色土層(粗砂～小丸石を含む)
88. 10Y R 3/4 暗褐色土層(7.5Y R 4/6 褐色粘土、粗砂～丸小石～5cm大の石、炭を含む)
89. 10Y R 3/4 暗褐色土層(粗砂～10cm大の石、7.5Y R 5/8 明褐色粘土をブロックで含む)
90. 10Y R 5/4 にぶい黄褐色粘質土層(粗砂～小丸石を含む)
91. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色土層(細砂、炭、瓦片、丸小石を含む)
92. 5 Y R 4/4 にぶい赤褐色土層(円礫を含む)
93. 2.5Y 3/4 暗赤褐色土層(大きな円礫を多く含む)
94. 5 Y R 5/6 明赤褐色土層(円礫を少量含む)

層序

今回の調査地は、西宮土木事務所等の建物の取り壊しによる瓦礫層(第I層)が調査地の一面を覆い、攪乱穴も多数掘削され、遺構面も包含層も著しく削平を受けているため、遺存状況の良い部分では都合6面の遺構面を確認したが、個々の遺構については、所属面がはっきりしないものが多い。

したがって、本稿では、遺構について、有岡城期以前と伊丹郷町以降の2時期に大別し、説明を行うこととする。この中で、この遺跡を考える上で重要な遺構を、遺構の種類ごとに順を追って紹介する。



第72図 第1遺構平面図 (1/100)

第Ⅰ遺構面 [O.P+17.700~17.800m]

30cm程の厚さで礫混じりの黄橙色系の土（第Ⅱ層）を第Ⅱ面上に整地。部分的な面の作り替えがあり、a, bの2小期に識別できる。

調査区東側（本町通りに面した部分）では、礎石が多く残っていた。Ⅰb期の礎石がⅠa期では使用されていないこと、Ⅰb面に焼けた部分があることから、火災により建物の建て替えがあったことが推察される。そしてその造り替え後設置された敷居石16等は、目地にモルタルが使用されており、後述する煉瓦竈・燃料置き場の補修と時期を同じくするものと考えられる。この面は、昭和18年の廃業までのものである。

第Ⅱ遺構面 [O.P+17.500m]

東半部では土間面が遺構面となる。第Ⅲ面上に厚さ10cm程度の明黄褐色小礫混シルト層（第Ⅲ層）で整地して構成した面。酒蔵の大黒柱を支える礎石の根石（24・94・109）が検出されている。以下に述べる遺物は古相を示すものが多いが、細片のため図示できなかったコンニャク印判手の肥前染付碗や京焼風陶器等が出土していることから判断して、この面は18世紀前半に形成されたと考えられる。

第Ⅲ遺構面 [O.P+17.400m]

西半部は削平され、第Ⅱ・Ⅲ面の遺構が同一面で検出される。第Ⅳ面上に15~30cm程の厚さで黄褐色系の粗砂や円礫を含むシルト層（第Ⅳ層）で整地して構成した面。遺物はほとんどが細片であるため図示できなかった。第Ⅲ・第Ⅴ遺構面との関係から判断して17世紀後半から18世紀前半に使用された面と考えられる。

第Ⅳ遺構面 [O.P+17.300m]

褐色系の粘質土層（第Ⅴ層）を約60cmの厚さで、第Ⅴ遺構面上に整地して構成した面。図示した遺物の他に、叩き目のある焙烙や瓦質の花器、瀬戸・美濃焼のソギ皿、唐津焼溝縁皿、肥前染付碗が出土している。出土遺物は主に陶器類が多く、磁器は肥前染付碗片の一点である。古相を示す遺物もあるが、出土遺物から判断すると、17世紀前半に構成された面と考えられる。

第Ⅴ遺構面 [O.P+17.000m]

地山及び地山上に最大で20cmほど、10Y R 6/4にぶい黄褐色粗砂混シルト層（第Ⅵ層）で整地して構成した面。堀の埋土同様、埴輪片を含む。遺物は土師皿、丹波焼一本引摺鉢、藁灰釉の唐津焼、底部に窯印をもつ備前焼舟徳利（67）、そして青花の端反りの皿（65）、見込に「壽」字が描かれた碗や青磁蓮弁文碗の輸入磁器も出土している。第Ⅴ層には唐津焼が多く含まれるが、第Ⅵ層は藁灰釉のものが1点出土しているだけである。古相を示す遺物も若干含まれているが、遺物はほとんどが16世紀末から17世紀初頭にかけて出土するものであるため、その時期に構成された面と考えられる。

第Ⅵ遺構面 [O.P+16.500~16.700m]

地山（第Ⅶ層）を基盤とする面で有岡城期の堀などの遺構を検出した。調査区東側が高く、ゆるやかに傾斜し、西側がやや低い。第Ⅴ遺構面の年代観からみて、この遺構面は16世紀末まで使用されたものと思われる。

伊丹郷町以降の遺構・遺物

当地からは、江戸時代以降の伊丹の基幹産業であった酒造業に関連する遺構が多数発見されたので、以下それらを中心に説明していきたい。

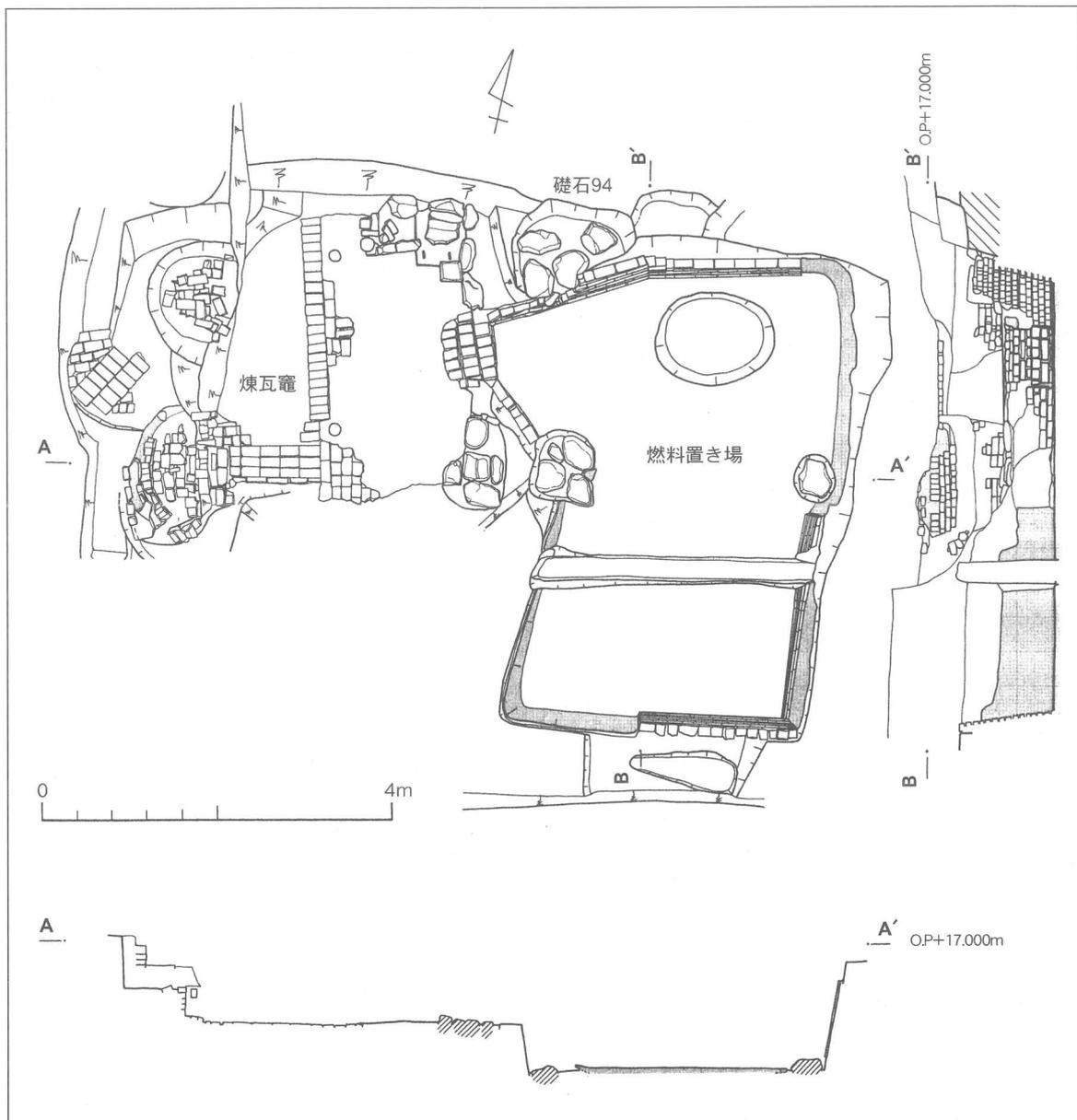
竈1・燃料置き場（第73図、PL.46-a）

調査区南西隅に位置する。重機掘削時に煉瓦・コンクリート片・ビニールを含む土（第Ⅰ層）を除去後、燃料（石炭）置き場とともに検出した。第Ⅰ遺構面に属する竈である。竈燃焼部上半部は大きく破壊されており、器壁はほとんど残っていない。燃焼部の床面の下に遺存した灰の掻き出し部分が

らみて、南北に2基の燃焼部（二連式）を持ち、焚口を東側に設けた半地下式竈と推定できる。構築材に煉瓦（22.5×10.5×5.5cm）を用い、燃焼部内部に耐火煉瓦を使用している。

南側燃焼部は、検出した底部を取り除いた後、ほぼ同じ位置で、古い底部を検出したため、1度作り替えられていることがわかった。下段の底面は、O.P+16.100mで、煉瓦積みの目地に漆喰が使われており、石炭灰が堆積していた。上段の底面はO.P+16.700mで、目地に一部モルタルが使われ、直接火を受ける個所は漆喰が施されていた。ここには石炭灰の痕跡はないため、燃料が重油に代わったものと思われる。

北側燃焼部の底面は、O.P+16.200mである。南側燃焼部から焚口へは幅45cm、長さ1mにわたって煉瓦が轆かれているが、北側燃焼部にはその煉瓦敷きは存在しない。それどころか南側燃焼部焚口から煉瓦が並べられ、北側燃焼部と焚口の間も続いている。そのことから、2連で使用されていた南側下段と北側の燃焼部が、のちに単機の竈として作り替えられ、南側上段の燃焼部のみを使用するようになったものと考えられる。



第73図 煉瓦竈・燃料置き場平面・断面図（1/80）

二連の竈は、底面10cmの高さの違いから、竈の規模は南が大きく、北が小さいことが予想される。

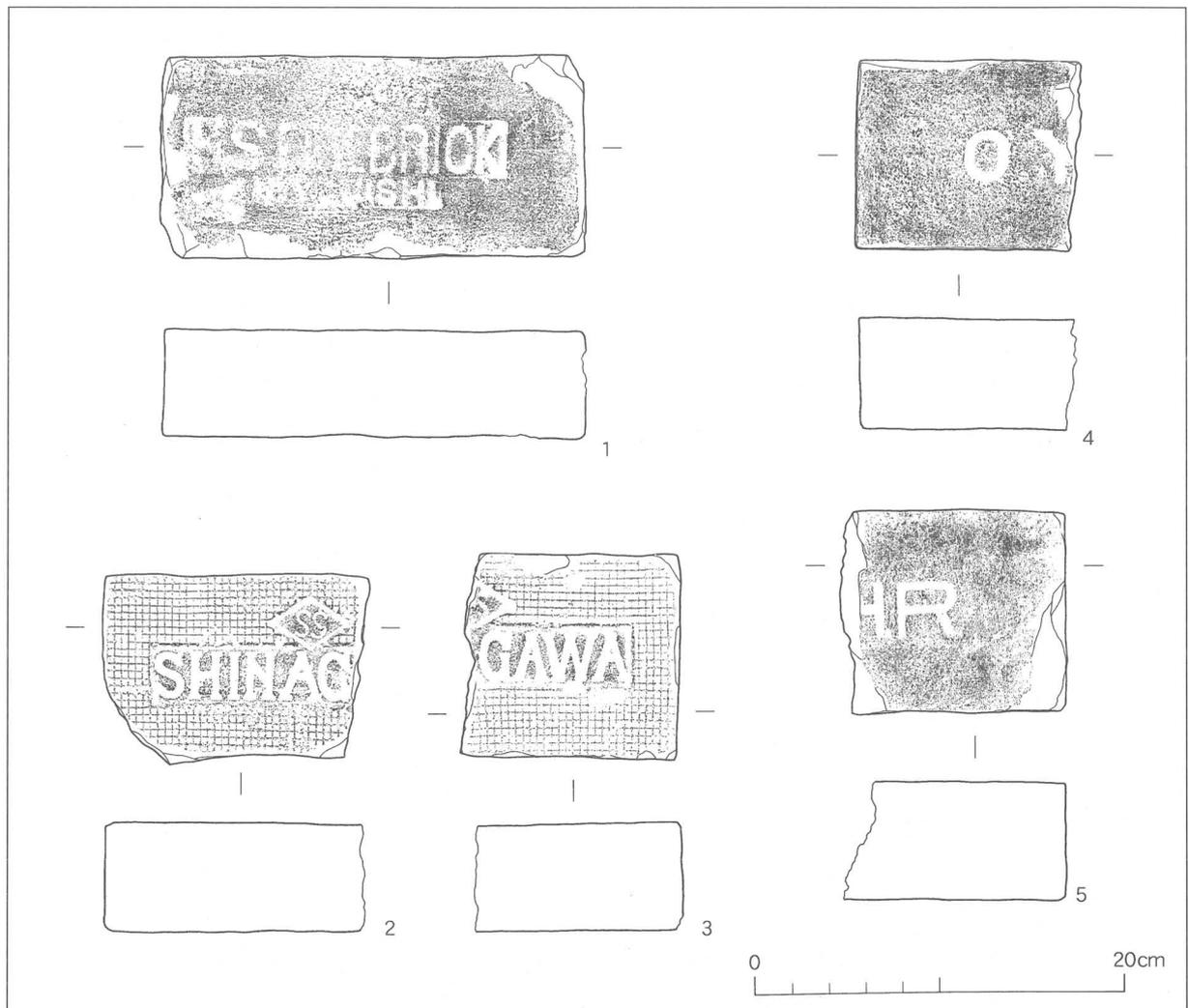
焚口部は、南北約3.6m・東西約1.6mの広さを持つ。西側の壁は、煉瓦積みで目地には漆喰が用いられている。床はモルタルが敷かれていたが、南側燃焼部の上段と同じ時期の補修によるものと考えられ、当初は漆喰が敷かれていたものと思われる。北側には上に上がる階段が付いている。南東隅に礎石があり、その礎石を避けるように燃料置き場の西壁は作られている。

焚口部から燃料置き場へは、二基の燃焼部のほぼ中央線上に煉瓦積みの階段が三段設けられている。燃料置き場の煉瓦の目地も当初漆喰が使われているが、のちにモルタルで補修されている。最終的にはコンクリートを使った大きな改造が加えられている。

耐火煉瓦（第74図）

この竈からは遺物は出土していないが、刻印をもつ耐火煉瓦（白煉瓦）を紹介したい。これらは一般の構造用材の赤煉瓦とは異なり、灰白色で粗砂の多い土を用いて作られている。

2は幅10cm・厚さ6cm、3は幅11.2cm・厚さ6.1cm。南側燃焼部上段の床面で使用されていた。両面に格子状の凹凸がつけられ「<SS>SHINAGAWA」と刻印されている。東京都の「品川白煉瓦製造所」で明治20年以降に製造されたものである。同社は明治37年に大阪工場が完成している。（竹内1990）大正4年開設の県会議事堂の煙突基部等（山形県1991）、仙台坂遺跡（品川区1990）、汐留遺



第74図 煉瓦竈出土遺物（1/4）

跡（東京都1999）に使用例がある。

1は南側燃焼部で使用。長さ23×幅11×厚さ6cmを測る。「H.S.FIREBRICK MITSUISHI」と刻印をもつ。他に、「MITSUISHI H.S.FIREBRICK ☆☆」、「☆☆H.S.FIREBRICK MITSUISHI」と刻印もある。これらは岡山県「三石耐火煉瓦製造所」（明治23年設立）の製品であると思われる（同竹内）。三石製の耐火煉瓦はこの竈の上下段ともに使用されていた。刻印が少しずつ異なることから、生産された時期が違うことが考えられる。

4は幅10.5cm・厚6.2cm。「O.Y」と刻印をもつが、続きは欠損し不明。大阪窯業の頭文字の略と思われる。それならば、この耐火煉瓦は明治39年以降製作のものとなる（同竹内）。5は幅11cm、厚さ6.5cm。「H.R」と刻印をもつが、前半分は欠損し不明。下段に使用されている三石製の耐火煉瓦は明治23年以降のものであるため、この竈は明治23年以降に作られたものと考えられる。また、煉瓦積の目地について山形県会議事堂では、当初（大正4年）からモルタルが使用されている。南側燃焼部の作り替えは、耐火煉瓦が同じであることやモルタルを使用していることから考えて、山形の例と同じ頃のものであろう。

竈51（第75図、PL.46-b）

調査区南西隅に位置する。燃焼部が南北に2連（南が大、北が小）並び、焚口を東側に設けた半地下式竈である。竈1がこの竈の真上に作られているため、遺存が非常に悪い。燃焼部の壁は、南側約1/3が残存しており、北側燃焼部は掘方のみを地山面で検出した。南側燃焼部の平面形は、東西に長い楕円形で、長径約180cmを測る。壁は、高さ約50cm残っており、平瓦積みで目地に粘土を施している。床面より平瓦6枚を積み上げ（20～26cm）、その上に石を一段重ね、また平瓦を積み、その上に石を重ねるといった構築方法を用いる。床面には灰の掻き出し溝が掘られており、長さは1m以上・深さは6～8cmを測る。この竈から遺物は出土していない。竈1の前に使われていたものと考えられる。

竈6・7（第75図、PL.46-b・c）

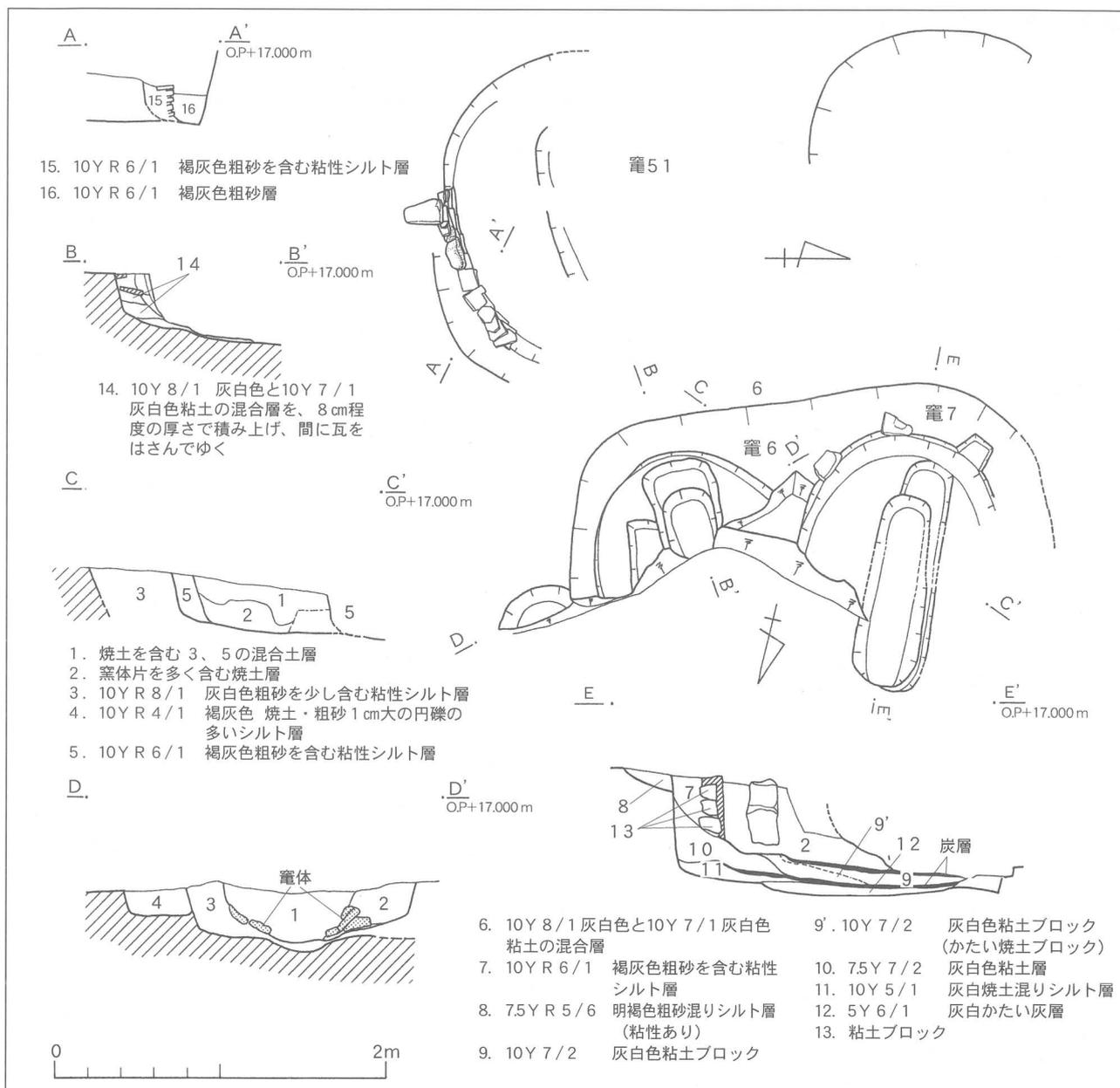
調査区南西隅に位置する。西側を竈51に切られている。竈7は底面に溜まった灰層が上下2時期あることから、1度造り替えられていることがわかる（新をb・旧をaとする）。また東側の竈6の構築粘土を切って、竈7bは造られている。竈7bは単基式なのだろう。それらから考えると、竈6は竈7aと対になり、燃焼部は東西（東側6が小、西側7bが大）に2連並ぶ半地下式竈であると考えられる。竈1や竈51とは異なり、焚口を北側に設けている。燃焼部の構築方法は、竈6・竈7aはブロック状にした粘土（10×8×14cm）を積み上げており、竈7bは粘土積みに瓦を挟み作られていて、補強材として凝灰岩の切石を立てている。床面には灰の掻き出し溝が掘られている。どちらの竈の焚口部も、燃料置き場に壊されている。遺物は埋土より軒棧瓦・磁器片等が出土しているが、時期を特定できるものではない。竈6・7a及び竈7bは竈51以前の使用であると考えられるため、これらの竈は江戸時代後期（19世紀前半）のものであろう。

竈19（第72図）

調査区中央、O.P +17.070mで検出した。井戸67や大規模な攪乱により竈燃焼部の壁は残っていないが、焼土面と灰の堆積から竈の底面と推定した。遺物は灰の堆積部から（10）が出土した。焚口の方向は不明である。この他に釘・瓦等が極少量出土しているが、この筒形碗を考える限りでは、竈19は江戸時代後期（19世紀初）に廃棄されたものと思われる。

遺物（第77図、PL.54）

10は肥前白磁染付筒形碗。口径7.2cm、器高5.5cm、高台径3.5cm。白色の精緻な胎土に全面施釉。外面の上下に一重圏線、その中に七宝繫文。高台脇には二方に退化した唐草文、高台には二重圏線。内面上部に四方禪文。見込に一重圏線と印判の五弁花文が描かれている。



第75図 竈6・7・51平面・断面図' (1/40)

竈10・50 (第72図、PL.47-a)

調査区中央東より、O.P+17.020mで検出した。既存建物撤去時に遺構の大部分は破壊されていて、焚口部・竈50の燃焼部は地山でしか確認できなかった。

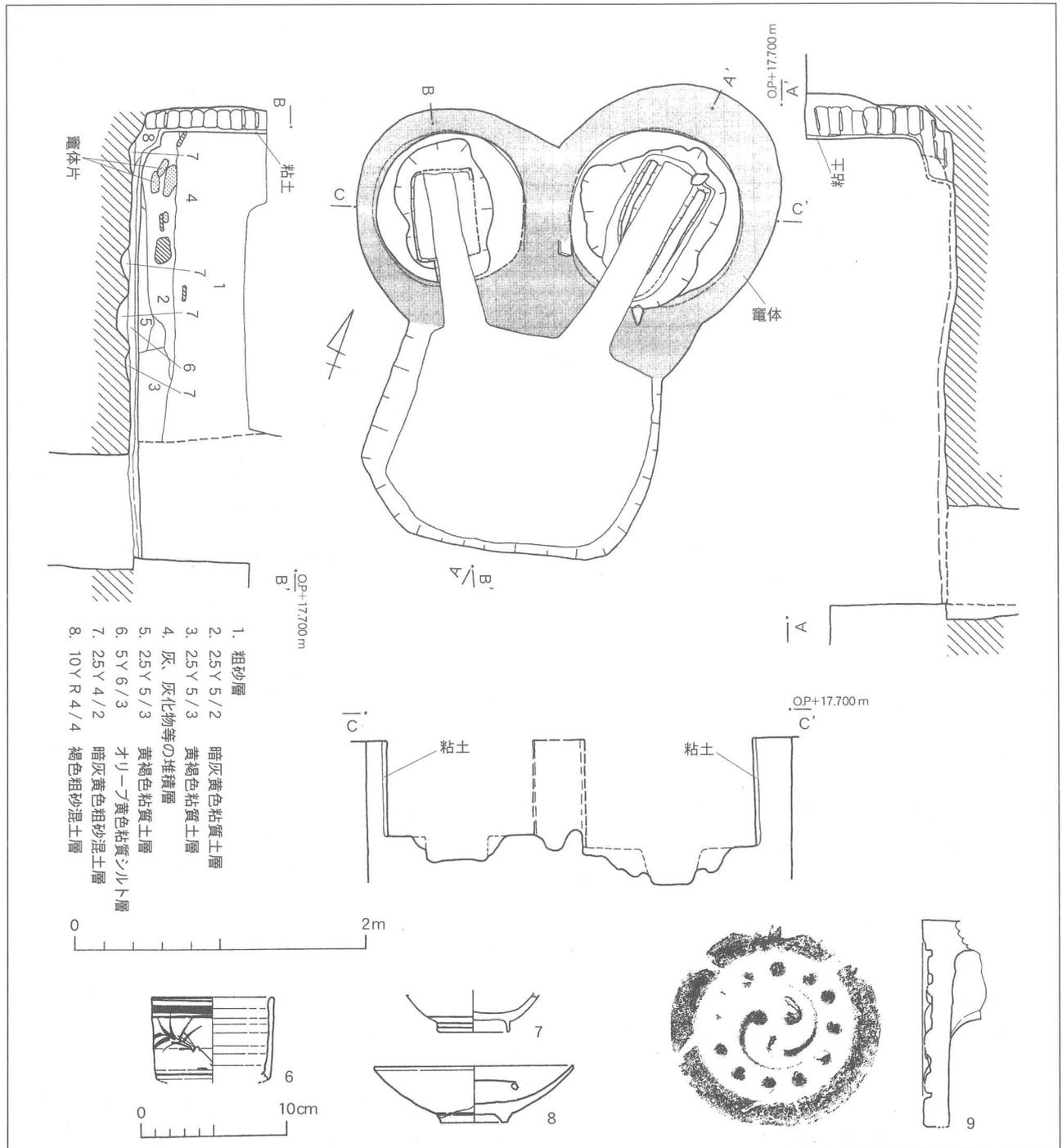
竈10は内径約95cmを測り、壁は粘土で構築され、補強材として凝灰岩の切石が立てて使用されている。床面はO.P+16.380mで、二段落ちの灰の掻き出し溝が設けられていて、上幅50cm、下幅20cm、最深22cmを測る。

竈50の掘方は、直径約14cm、床面はO.P+16.000m、掻き出し溝幅60cm、深さ15cmを測る。それから考えると、竈50が大・竈10が小の南北に2基の燃焼部を持ち、焚口を東側に設けている半地下式竈であることがわかる。竈50の埋土から少量ではあるが、肥前磁器や瓦等が出土していることから判断して、この竈は江戸時代中期 (18世紀後半) に埋められたものと考えられる。

竈90 (第76図、PL.49)

調査区東南隅に位置する。第Ⅱ遺構面 (O.P+17.550m) で検出した。燃烧部が東西に2連並び (西側が小、東側が大)、焚口を南側に設けた半地下式竈である。本調査で見つかった竈のうち最も遺存状況がよい。燃烧部の掘方は眼鏡型を呈し、大小燃烧部の円形に沿って、粘土ブロックと平瓦 (棧瓦含む) を交互に積み上げた後、内面と床面に厚さ約3cmの粘土を上塗りして壁を整えている。粘土ブロックは長さ21×幅9×厚さ6cm (7×3×2寸) 前後を測る。

西側燃烧部は内径1m、焼成を受け変色した床面までは深さ70cmを測る。床面の真中は40cm×60cmの長方形に深さ20cm掘りくぼめられ、その中心に灰が堆積していた。東側燃烧部は内径1.2m、変色し



第76図 竈90平面・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)

た床面までは深さ80cmを測る。床面は西側燃焼部と同じように一段掘りくぼめられ、灰の堆積した掻き出し溝が焚き口方向に続く。その溝の両側の粘土は、中心が凸状になっている。凹状に切りこまれた凝灰岩を、平坦面を上にして、燃焼部の底面に据え付け、燃焼部床面を補強していたものと思われる。また、凝灰岩の切石は二連の燃焼部の仕切部分に使われていた。竈の燃焼部は、内径の違い（羽釜の胴径）により深さが違うこともわかった。

遺物（第90図、PL.54）

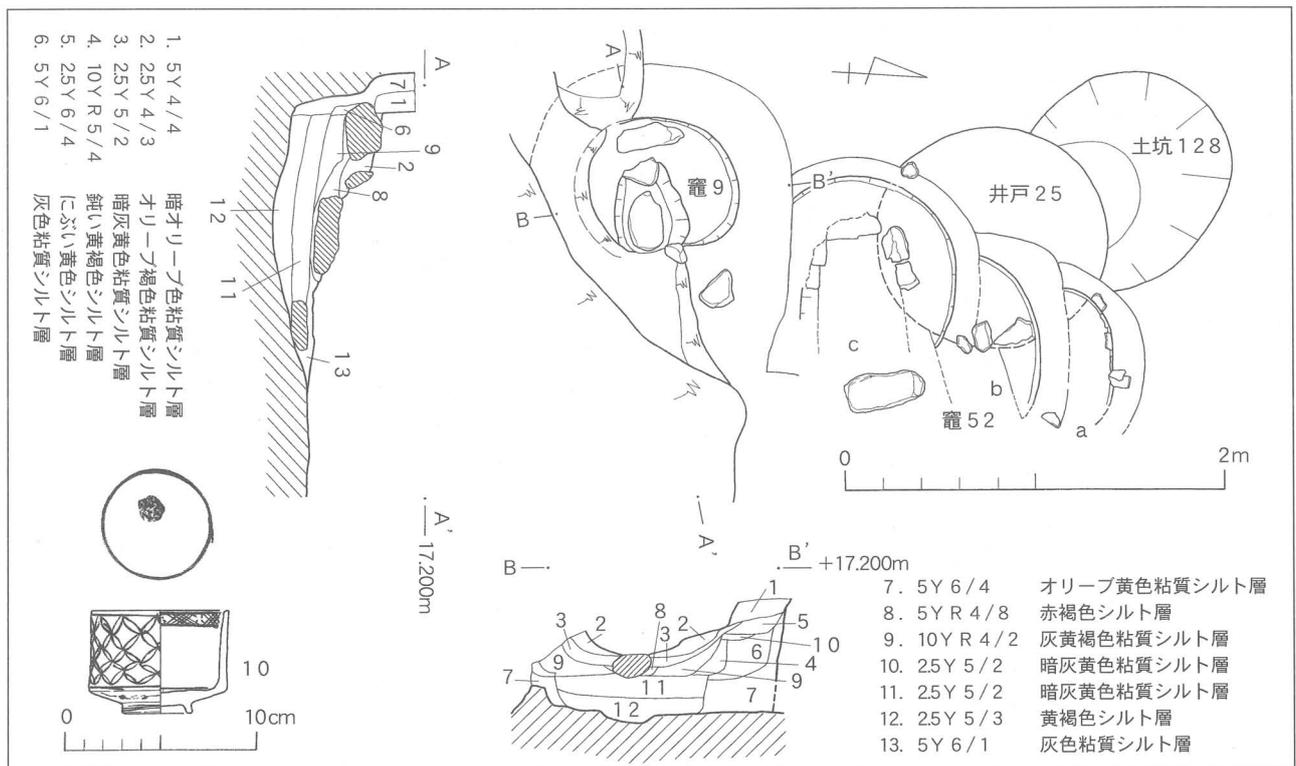
6は肥前染付筒形碗。口径8.3cm。胎土は灰白色、内外面を施釉し、貫入が入る。絵付は丁寧で、外面の上・下に圏線、そのなかに竹文を描く。7は肥前染付碗。燃焼部の粘土ブロックの目地に使われていた粘土に混ざり出土した。高台径4.7cm。内外面ともに施釉、釉の透明感は低く、高台畳付を釉ハギしている。高台の器壁は非常に薄く、呉須の発色は良く、高台から腰にかけて、三条の圏線が巡る。8は肥前染付皿。口径13.6cm、器高4.0cm、高台径4.6cm。白色の精緻な胎土に黒色粒を含む。青味がかった白色の釉を、内外面に施す。高台内から外面の腰にかけては露胎、見込は蛇の目釉ハギ。呉須の発色悪し。9は軒丸瓦、左巻三つ巴連珠文。瓦当直径14.4cm、外縁幅2.0cm、外縁高0.6cm、瓦当厚1.4cm。珠文径1cm、珠文数は12。瓦当に離れ砂が残る。瓦当裏面下部に周縁に沿うナデを施す。

構築材中より出土した肥前磁器碗7は江戸時代中期（18世紀後半）のものであることから、この竈はこの時期に造られたと考えられる。

竈9（第77図、PL.48-a・b）

調査区中央に位置し、O.P+17.100mで検出した。竈の南側を竈10・50に切られているため、遺構の遺存状態は悪い。そのため燃焼部も二連かどうかは不明である。焚口は西側に設けられていたものと思われる。また灰の堆積や壁を観察すると、3回の造り替えが考えられる。大きさはほとんど変わっていない。

燃焼部の壁は5Y/4浅黄色粘質シルトで構築されており、床面から高さ20cm程残っていた。燃焼



第77図 竈9・52平面・断面図（1/40）、竈9出土遺物（1/4）

部平面形は南北に長い楕円形で、長径約90cmを測る。この竈9は前述してきた竈に比べて小型であることがわかる。遺物は、埴輪片、瓦、土師器、瓦質土器、染付が出土しているが、実測に値するものはなく、また時期が推定できるものもない。しかし、竈10・50に切られていることから判断すると18世紀後半以前のものであると思われる。

竈52 (第77図、PL.48)

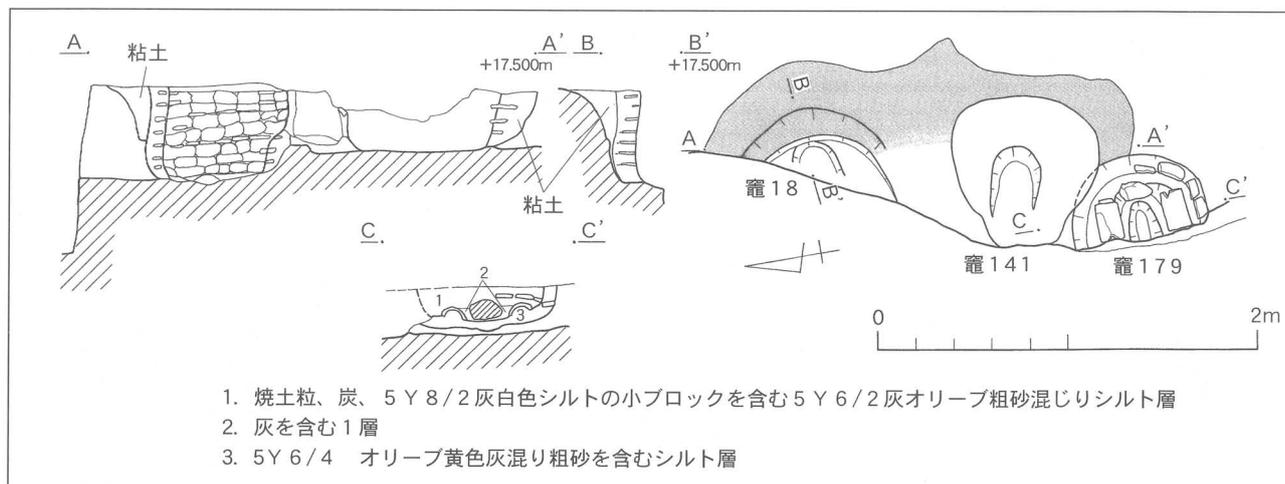
調査区中央に位置し、O.P+16.880mで検出した。検出時に単一遺構の竈として考えていたが、切り合った竈の焼成部が3基あることがわかった。南側を竈9に切られているため、対になる竈焼成部があるかどうかはわからない。竈9に切られた竈が一番新しく、東側が一番古い。古い方から順にa.b.cとする。52cと52bは焚口を西側に設けているのがわかるが、52aは遺存状態が悪いため明確でない。井戸25を廃棄し埋め戻した跡に竈52を造っているため、竈の壁体大半が井戸25の内部に陥没した状態で検出した。52cは北側1/3が、52bは半分が、陥没していた。焼成部の内径は、竈52cが推定で1mと考えられるが、他の竈52b・竈52cは遺存状態が悪く推定できない。竈52cの床面はO.P+16.690m、壁は5Y7/4浅黄色粘土で築かれ、高さは20cm程しか残っていない。約南側に開口する灰の掻き出し溝は幅40cm、最深20cmで、両側には20cm大の石が据えられている。底は灰が堆積していた。遺物は出土しているが、細片ばかりで時期を得る手がかりにならなかった。

竈18・141 (第78図、PL.47-c)

調査区東側、O.P+17.300mで検出した。竈18の壁が井戸77内に陥没していた。掘方は眼鏡状に掘られており、竈18と竈141は対をなす二連式竈であることがわかる。断面を観察すると、焼成部の壁が焼成を受け変色しているところがあることから、一度造り替えられていることがわかる。当初は粘土を構築材として用いており、その後、粘土ブロックと平瓦を互層に積んで壁を構築している。内径は、竈18は井戸77に陥没しているため不明、竈141は直径70cmを測る。床面は竈18がO.P+16.850m、竈141がO.P+17.000mであることから、18が大・141が小の竈であることがわかる。大小の深さが15cmも違い、直径が大きく違うことが考えられる。灰の堆積により焚口を西側に設けていたことがわかるが、焚口部は建物撤去時に破壊されているため、規模は不明である。図示できる遺物はなかったが、埋土から出土した遺物から、この遺構が江戸時代前期(17世紀)に埋められたことが推察できる。

竈179 (第78図、PL.47-b)

調査区東側、O.P+17.300mで検出した。北側を竈141に切られている。焼成部の内径は55cm、掘方は一回り大きく掘られ70cmを測る。非常に小型の竈である。壁は粘土と平瓦の互層により作られてい



第78図 竈18・141・179平面・断面図(1/40)

る。床面はO.P+17.150cmで、補強のために、丸瓦の凸面を上にして左右に配置し、一番奥に15cm大の石を置いている。丸瓦の間は幅24cmである。焚口は西側に設けていることがわかるが、焚口部は建物撤去時に破壊されている。

使用されている丸瓦や出土した遺物により、この竈は江戸時代前期（17世紀）に使用されていたと思われる。

井戸5（第72図、PL.45-a）

調査区西側で検出した。枠にコンクリートを使用した、直径1.5mの円形の井戸。井戸内の掘削は行っていない。この酒蔵で最後に使用された一番新しい井戸で、小西酒造「宝来蔵」時代のものと考えられる。第I遺構面に所属する。

井戸67（第72図）

調査区中央南側で検出した。平面形は円形で、直径2mとかなり大きい。検出面より約1mまでを掘削し、土師質灯明皿や徳利片とともに煉瓦片、また酒造工程（火入れ）で使用するものと思われる多くの蠣殻が出土した。底までは達しておらず、掘削は上層のみに限った。煉瓦片が出土していることから、明治以降に埋められたと考えられる。

井戸2（第72図）

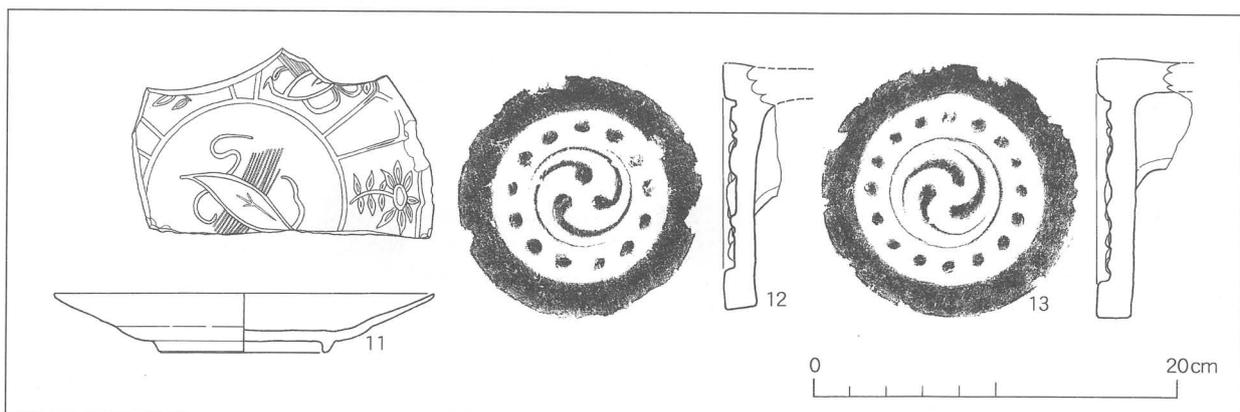
調査区西側、燃料置き場の漆喰の床下で検出した。平面形は東西に長い楕円形をしており、長径1.3mを測る。素掘りの井戸で、約1.5mまで掘削したが、底まで達していない。少量の陶磁器片を含み、瓦のみが堆積していた。椀瓦・道具瓦を含む大量の瓦が投棄されていることから、この井戸を廃棄する時期に、酒蔵の補修があったことが考えられる。それらの瓦を見ると、江戸時代後期に焼かれたと思われるものが多い。この井戸2は燃料置き場建設以前に埋められていることは明確で、竈51か竈6・7と同時期に使用されていたと思われる。

遺物（第79図、PL.54）

11は肥前白磁陽刻皿。口径21cm、器高3.3cm、高台径9.0cm。全面施釉、高台畳付は釉ハギ、砂が付着。型押成形、内面は芙蓉手宝文。12は軒丸瓦、左巻き三つ巴連珠文。瓦当直径13.7cm、外縁幅2.0cm、外縁高0.7cm、瓦当厚1.2cm。珠文は13を数える。瓦当裏面に刻目・カキ目、瓦当裏面下部にナデが施される。瓦当面にキラコが残る。13は軒丸瓦、左巻き三つ巴連珠文。瓦当直径14.4cm、外縁幅2.0cm、外縁高0.6cm、瓦当厚1.3cm。巴は極めて小さく凝縮。内外区を分かち圏線が残る。珠文は16を数える。瓦当裏下部にナデが施される。瓦当面にキラコが残る。

井戸25（第77図）

調査区中央、O.P+17.150mで検出した。遺構面は第Ⅲ面。平面形は円形を呈し、直径は1.15mを測



第79図 井戸2出土遺物（1/4）

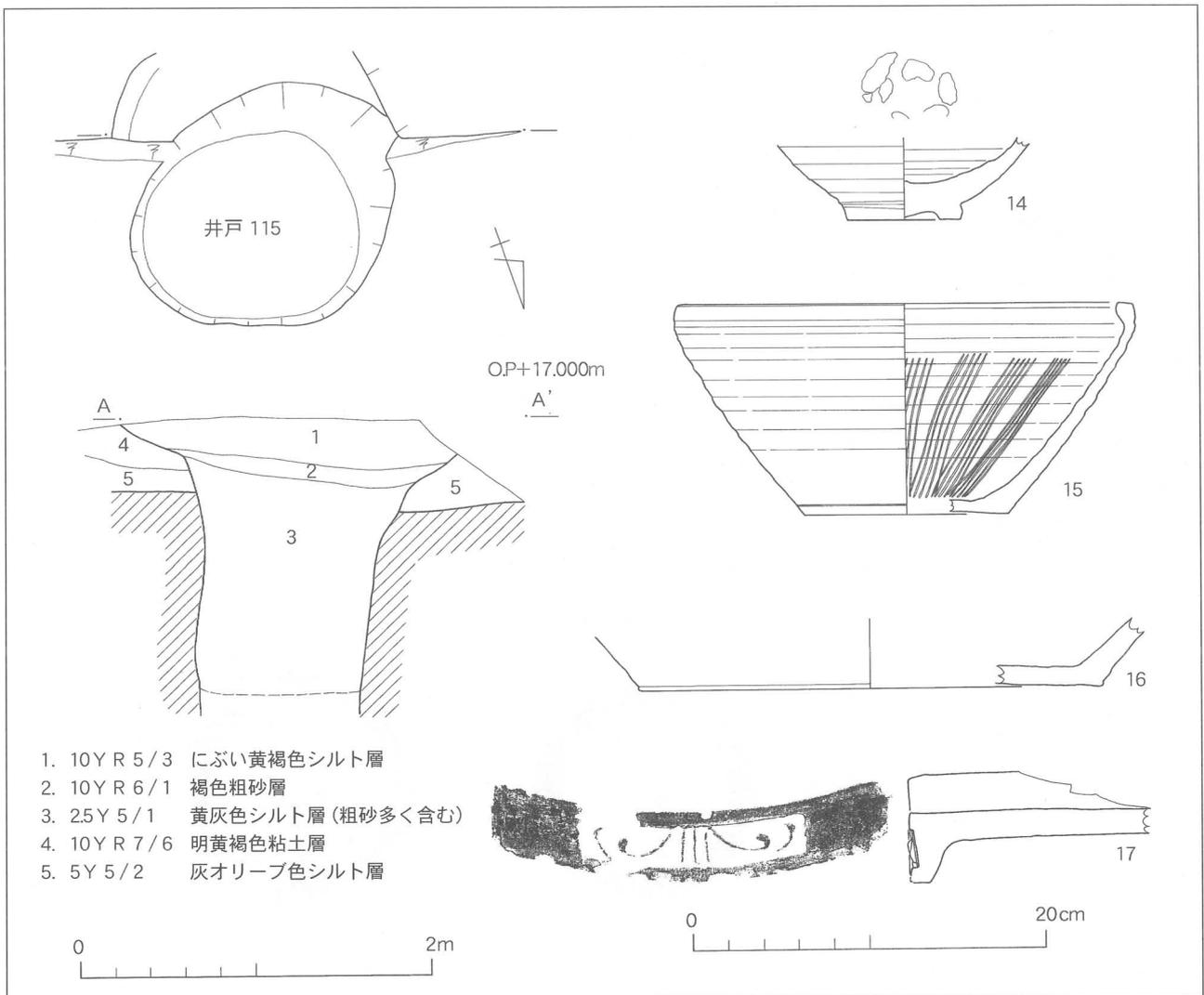
る。深さ約1.4mはほぼ垂直に掘られているが、-2.3mまでの掘削によりその下は礎石24の方向にトンネル状になっていることを確認した。上面から1mまでの埋土中から唐津・瀬戸美濃焼、磁器等が出土したが、細片のため時期は不明である。

井戸115 (第80図)

調査区西側、O.P+17.000mで検出した。素掘りの井戸で、検出面では平面形は東西に長い楕円形をしており、長径1.2mを測るが、上から60cmのところでは径は1mとなり、そこから下はほぼ垂直に掘られていた。-1.6m掘削したが底までは達していない。この井戸115の南側に土坑123がある。長径1.6mの南北に長い楕円形をし、深さは60cmを測る。幅3cmのタガ跡が3段残っていることから、木桶が埋められていたと思われる。「洗米」という酒造工程において、井戸から汲み上げた水を楕円形の「ハス桶」と呼ばれる木桶に1度溜めて、洗い桶ですくっていることから、この土坑123は「ハス桶」と考えられる。

遺物 (第80図、PL.54)

14は唐津焼鉢。高台径6.4cm。見込と高台畳付に灰白色の胎土目積跡あり。胎土は精緻で、灰色。内面は灰オリーブ色の釉に覆われ、外面は露胎、灰黄褐色。15は丹波焼播鉢。口径26cm、器高12cm、底部径11.8cm。小型で、5本の櫛目が施されている。胎土に1~2mm大の長石含む。外面の上部1/4



第80図 井戸115平面・断面図 (1/40) 出土遺物 (1/4)

は暗赤褐色、残り3/4は灰色をしており、重ね焼きされたことが窺える。16は丹波焼平鉢。残存率低く、底部径は推定26.4cm。胎土は灰黄褐色、0.2~2mm大の砂粒・長石含む。17は軒平瓦。瓦当の上弦幅22cm、幅4cm、また脇区幅は4.5cmと広い。三葉文を中心飾りとする均整唐草文だが、相当退化し簡略化している。瓦当全面と平瓦両面に離れ砂が付着。瓦当裏面にナデが施されている。平瓦部厚1.4cm。塀用の瓦と考えられる。

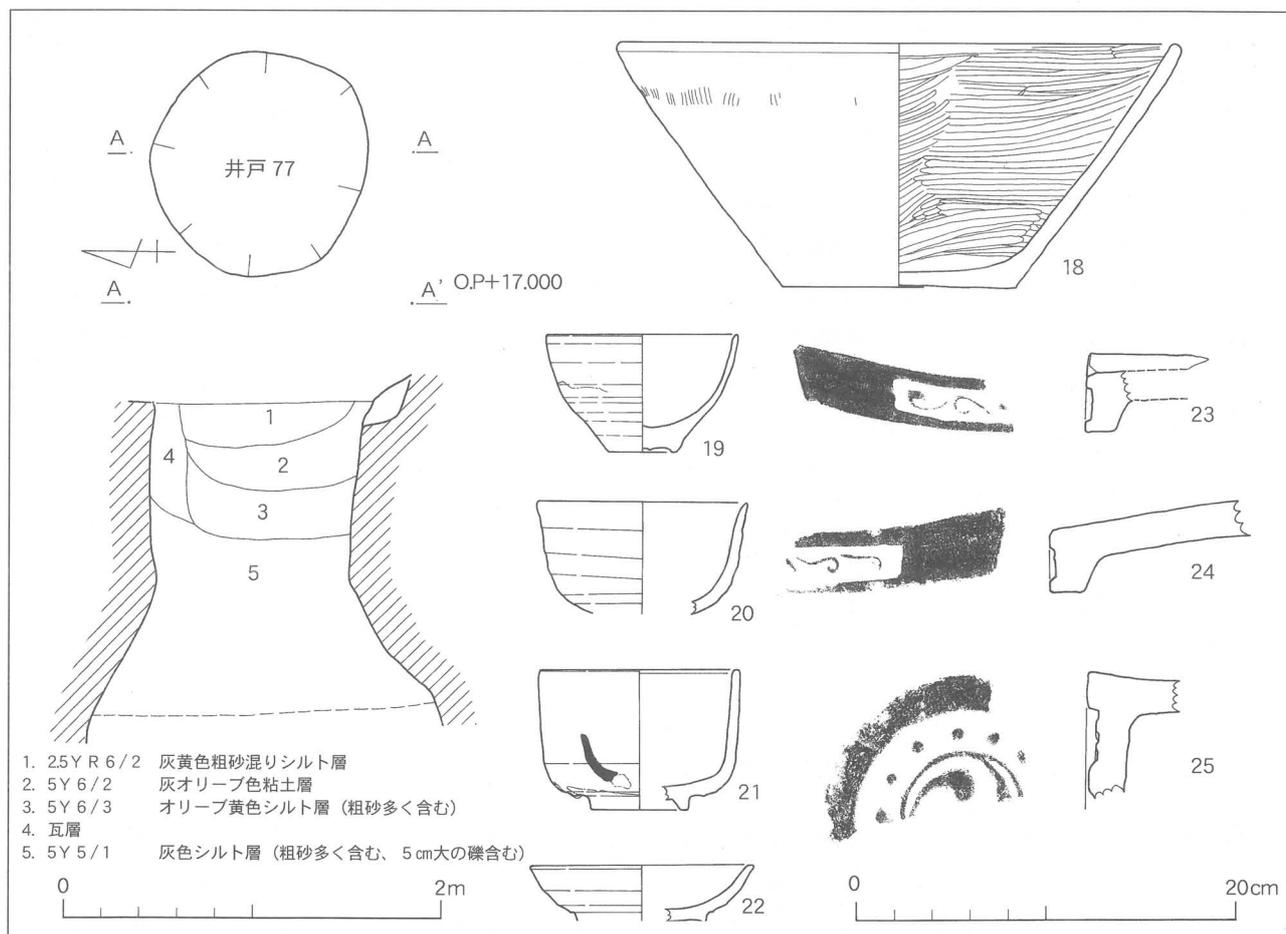
出土遺物の中には少し古い時期のものもふくまれるが、端反の肥前磁器が含まれていたことから、この井戸115は江戸時代中期（18世紀前半）には埋められたと思われる。

井戸77（第81図、PL.50-d）

調査区北東、O.P+16.500mで検出した。平面形はほぼ円形をしており、直径1.2mを測る。素掘りの井戸で、1.6mまで掘削したが底までは達していない。上から70cmまでは、この井戸を埋めた後の遺構である竈18の、熱を受けた構築材の粘土の壁体片等が混じっており、井戸77の埋土が陥没したものであると思われる。その下は、5cm大の円礫を含む灰色土で埋められていた。

遺物（第81図、PL.56）

18は瓦質鉢。復原口径29.6cm、器高13cm、底部径12.4cm。外面は口縁部までヨコナデ調整、一部平行タタキ目が残る。内面にヘラミガキを施す。19は唐津焼碗。口径10cm、器高6.3cm、高台径3.6cm。ロクロ成形で、底近くはロクロ引きのままで削らず、高台内面を碁笥底状にヘラ削りを行う。灰褐色の胎土に、オリーブ黒色の釉を内面から外面の上1/3に施す。20は唐津焼碗。口径11.0cm。口縁はわずかに外反する。灰色の胎土に、灰色の釉を全面に施釉する。21は唐津焼碗。復原口径40.4cm、器高5.5cm、



第81図 井戸77平面・断面図（1/40）出土遺物（1/4）

高台径5.2cm。半筒形の茶碗。ロクロ成形、削り出し高台。鉄分の多い胎土を用い、灰色の釉を施す。高台周辺は露胎、腰部に鉄絵がある。22は志野丸皿。口径11.6cm、器高3.1cm、高台径6.6cm。削り出し輪高台、体部1/2以上を回転ヘラ削り。淡黄色の胎土に、長石釉が全面に掛けられ、高台畳付は釉ハギされている。貫入あり。23は軒平瓦。脇区幅は4.5cmと広い。中心飾りは不明、唐草文。瓦当上面に面取りを行い、瓦当下面から裏面にかけて接合時のナデ。顎貼り付け式段顎。胎土は非常に粗く、焼成も悪い。二次焼成を受けているのか。24は軒平瓦。脇区幅は4.5cmと広い。中心飾りは不明、唐草文。瓦当全面と平瓦両面に離れ砂が残る。瓦当裏面に接合時のナデ。25は軒丸瓦、左巻三つ巴連珠文。圏線を持ち、珠文径は0.8cmと小さい。丸瓦凸面に縦方向のナデ、瓦当上面には円周に沿ったナデ。接合のためのカキ目・刻目あり、各部の調整はナデ。コビキB。(PL.56-a)は唐津焼皿。削り出しによる高台は、径4.3cm。にぶい赤褐色の胎土に、灰色5Y5/1の釉を施す。見込には鉄絵が描かれ、胎土目積跡が残る。(PL.56-b)は唐津焼皿。にぶい黄色の胎土に、灰色5Y6/1の釉を施す。胎土目跡あり。(PL.56-c)は瀬戸美濃焼天目碗。推定高台径4.3cm。明黄褐色の胎土に黒褐色釉を施す。井戸の埋土から出土した遺物を見ると、江戸時代前期(17世紀前半)のものが多い。それから考えるとこの井戸は、その時期に埋まったと見るべきであろう。

井戸149 (第72図)

調査区南東、竈90の焚口部底より検出した。素掘りの井戸で、平面形は不整形をしていて、直径80cmを測る。この調査区中最も小さい上、ほぼ垂直に掘られているため掘削は非常に困難であった。60cm掘削したが、底には達していない。埋土より鉄滓が多く出土した。

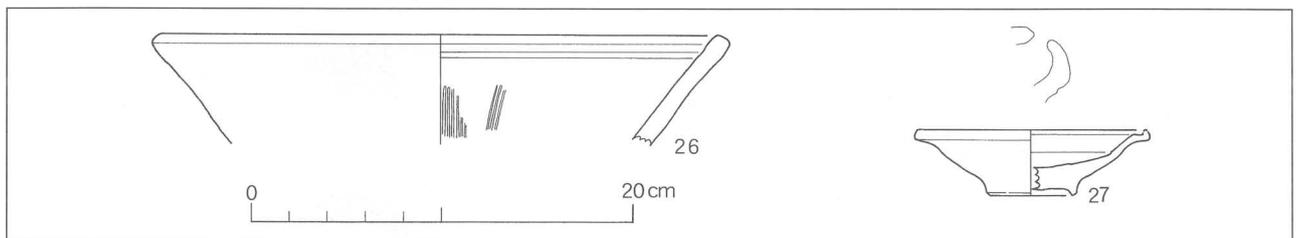
遺物 (第82図、PL.55)

26は丹波焼播鉢。口径29.2cm。胎土はにぶい赤褐色、焼成は良。直線的な口縁をもち、内面に凹線が巡る。6本1単位の櫛目。27は唐津焼溝縁皿。ロクロ成形で、削り出し高台は浅い。見込と高台畳付に砂目跡が残る。胎土はにぶい橙色、内面から腰部にかけて暗灰黄色の釉を施す。

遺物は他に埴輪片や土師皿、瓦が出土しているが、埴輪片以外は同一時期の遺物とみられ、この井戸は江戸時代前期(17世紀前半)に埋められたものと思われる。

男柱83東・西 垂壺82、104 (第83図、PL.51)

調査区西端で検出した搾り場の遺構である。遺構検出当初、二基の男柱を、単一の遺構と認識し掘り始めたため、切り合いについて不明となってしまったが、垂壺により切り合いを理解することができ、東から西へ約1m移動したことがわかった。男柱や横木に使用された木材や、それらを固定するための石材は、すべて抜き取られている。



第82図 井戸149 出土遺物 (1/4)

男柱83東 男柱を支える横木を南北・東西の十字に配し、南北の横木の上に、東西の横木を通していったようである。男柱の掘方は、南北の横木から考えると、遺構の中央ではなく少し南よりに位置し、直径80cmのほぼ円形で、底部は平らか、深さは1.65mを測る。横木は、南北が長さ2.3m、幅50cm、深さ1.2m、東西は、男柱の造り替え時に壊されているため、長さについては推定2.5m、幅50cm、深さ1

mを測る。

垂壺104 男柱1の北西1.5mに位置する。そのことより、酒槽の大きさが、長さ2m、幅1.2mと復原できる。男柱の造り替え時に、垂壺は抜き取られ残存していない。また、平面の形状は、当初の掘方を留めていないが、約1m×1.2mの楕円形を呈し、底部は約65cmの円形で、深さは1mを測る。

男柱83西 横木が南北にのみ通る。男柱の掘り方は80cm×1mの不整円形で、底部は丸く、抜き取り時に掘られたのか、北側に一段、差がつき、深さ1.5mを測る。横木は、長さ2m、幅40cm、深さ1mを測る。男柱1と比べ、横木が南北の一方しか配されず、また長さも短い。

垂壺82 男柱83西の北西1.5mに位置する。酒槽の大きさは、東側のものとはほぼ同じであると思われる。平面は直径90cmのほぼ円形で、底部は直径65cmの円形、深さは1mを測る。垂壺104を抜き取るのと、この垂壺を据え付けるための掘方を同時に掘削したようで、垂壺104と垂壺82を含めて大きく掘り込まれており、垂壺82の掘り方完掘後、垂壺104の甕を抜き取り、移動させ、据え付けたものと思われる。垂壺82も甕は残存せず、その抜き取り時のものと思われる80cmの円形の穴が西側より掘られている。

土坑61（第72図）

調査区北西隅、O.P+17.400mで検出した。第Ⅱか第Ⅲ遺構面に属するものと思われる。東西1.1m、南北は2m以上あり、北側は調査区外へ続く。深さは70cmを測り、底部は平らである。瓦や竈構築材等を多く含む土で埋められていた。

遺物（第84図、PL.54）

29は肥前染付大皿。全面施釉、豊付のみ釉ハギ。絵付けの筆は良く、呉須の発色も良い。高台は圏線が巡り、「大明成化年製」の銘がある。ハリ支えの跡が残る。30は肥前染付皿。口径11.0cm、器高3.2cm、高台径3.6cm。焼成悪く、呉須の発色も悪い。内外面施釉され、高台は露胎。見込は蛇の目釉ハギ。31は肥前陶器皿。ロクロ成形、ヘラ削り高台。灰白色の胎土に、内面から外面上部にかけて灰黄色の釉を施す。高台は露胎。見込は蛇の目釉ハギ。33は軒丸瓦、左巻三巴連珠文。瓦当直径14.0cm、外縁幅1.9cm、外縁高0.7cm、瓦当厚1.4cm。圏線が残る。珠文数16。接合の刻目・カキ目あり。瓦当裏面下部に円周に沿ったナデが巡る。瓦当離汜は不明。32は土師質焙烙。口径25cm。口縁端部は丸く、口縁部の内外面には回転ナデを施す。底部は浅い。

土坑79（第72図）

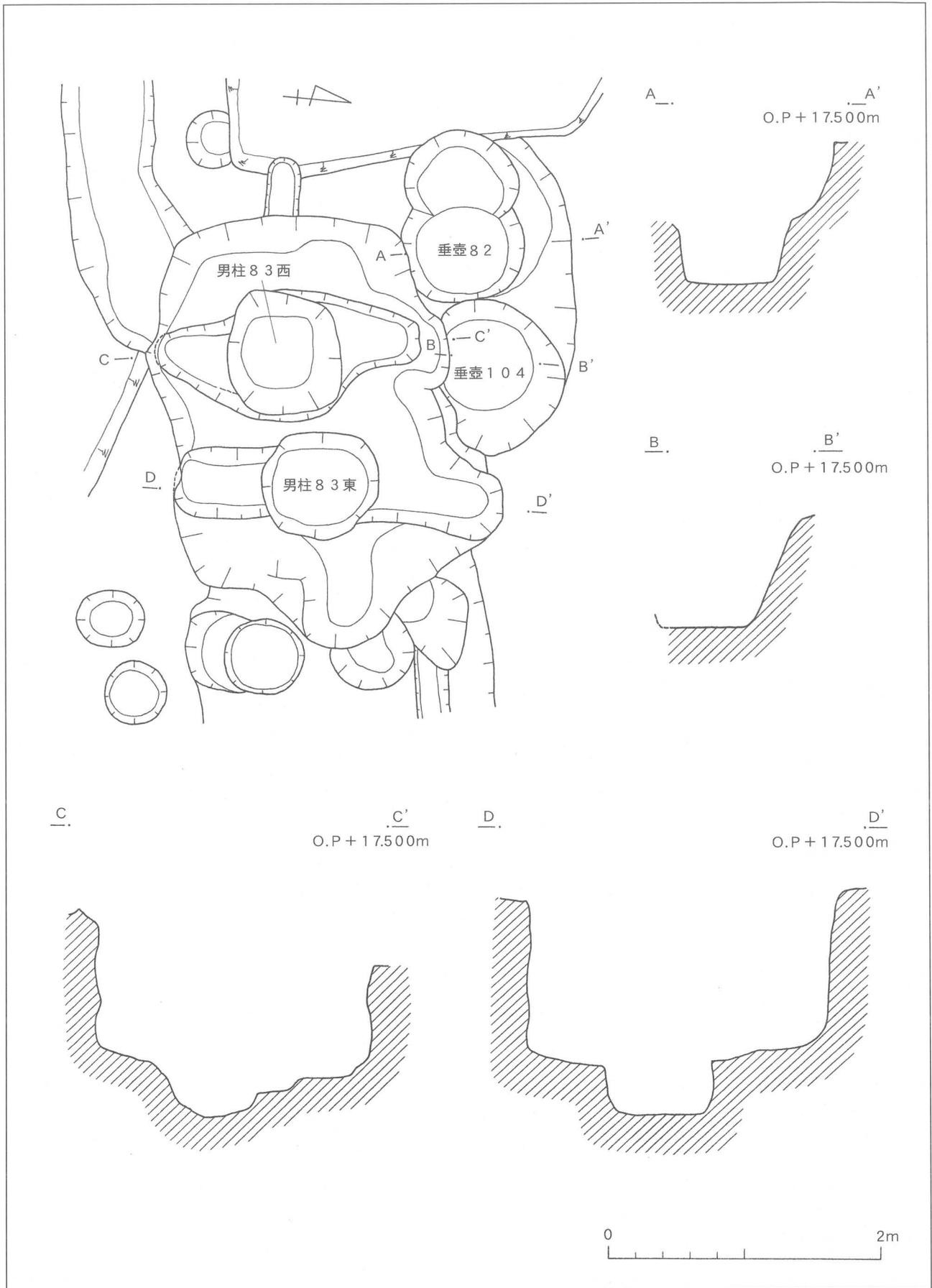
調査区北西隅、O.P+17.300mで検出した。東西1.5m、南北2.2m以上、北側と東側へは調査区外へ続く。底部は平らで、深さ55cmを測る。土坑61とはほぼ平行し、掘られている。埋土にはやはり多くの瓦を含む。

遺物（第84図、PL.55）

34は肥前染付碗。口径10.1cm、器高5.7cm、高台径4.1cm。器壁は薄く、外面に草花文、高台に二条の圏線、高台裏に「大明年製」の崩れ銘を描く。35は軒丸瓦、左巻三巴連珠文。瓦当直径13.8cm、外縁幅1.6cm、外縁高0.4cm、瓦当厚1.3cm。珠文数15。尾は圏線に接する。瓦当裏面下端部は連続した円周に沿ったナデ調整を施す。接合時のカキ目・刻目なし。瓦当に離れ砂残る。36は軒丸瓦、左巻三巴連珠文。瓦当直径15.0cm、外縁幅1.6cm、外縁高0.7cm、瓦当厚1.4cm。珠文数13。珠文・巴に段がある。瓦当にキラコが残る。37は軒平瓦。橘文を中心飾りとする均整唐草文。瓦当幅4cm。脇区はナデ調整、瓦当上縁に面取りあり。瓦当にキラコ残る。

土坑80（第72図）

調査区北隅、O.P+17.300mで検出した。南北1m、東西1.9m以上、東側は調査区外へ続く。底部は平らで、深さは40cmを測る。土坑79とはほぼ平行して掘られており、埋土の状態などから考えて、同時



第83図 男柱83平面・断面図 (1/40)

期の遺構と思われる。

遺物（第84図、PL.55）

38は軒丸瓦。左巻三巴連珠文。瓦当直径15.0cm、外縁幅1.8cm、外縁高0.5cm、瓦当厚1.4cm。珠文数12。瓦当裏面はナデ調整、下部は円周に沿ったナデあり。瓦当にキラコ残る。コビキB。掛け瓦（釘穴あり）。

土坑21（第72図）

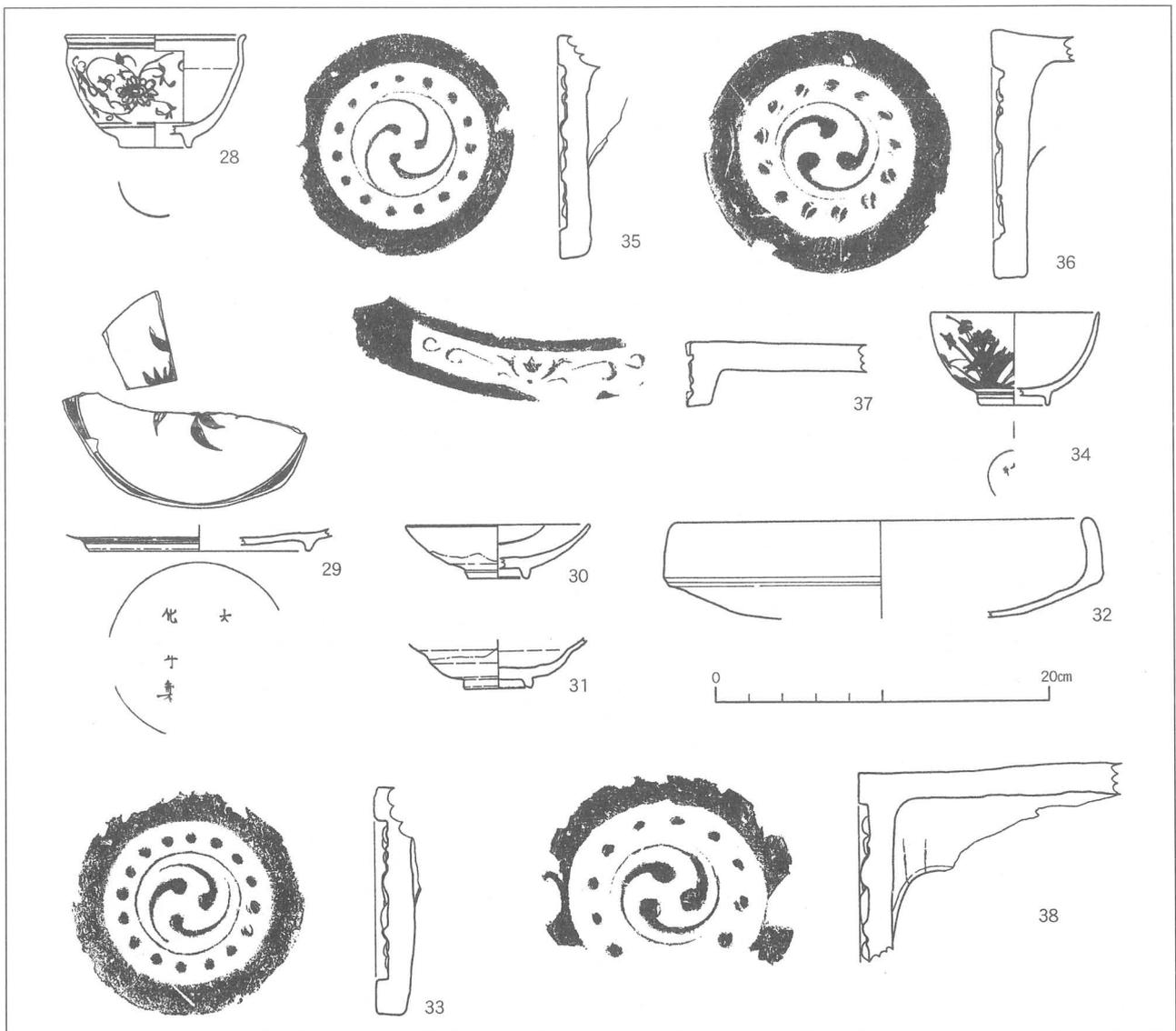
調査区中央、O.P+16.520mで検出した。直径90cmのほぼ円形で、西側を井戸5に切られている。砂礫を多く含む灰色土で埋められていた。

遺物（第84図、PL.55）

28は肥前染付碗。口径10.6cm、器高7.0cm、高台径4.0cm。天目形の碗。全面施釉、畳付のみ釉ハギ。呉須の発色は良く、外面の上下に二本ずつ圈線が引かれ、その間に菊花唐草が描かれている。見込には圈線が一本巡る。

埋甕173（第72図、PL.50-b）

調査区東側南壁際、O.P+17.100mで検出した。東西1.9m、南北90cmの楕円形の掘方を持ち、直径約



第84図 土坑21・61・79・80出土遺物（1/4）

60cmの円形の底部が二つ掘られている。

埋甕180 (第85図)

調査区東側、O.P+17.300m (第IV遺構面) で検出した。南北約2.4m、東西1mの楕円形の掘方をもち、直径約80cmの円形の底部が3つ掘られている。

遺物 (第85図、PL.54)

39は肥前染付碗。口径10.4cm。精緻な胎土で、器壁は薄い。焼成は良好、内外面に施された釉の透明度は高く、青味がかっている。呉須の発色は良く、上下に一本ずつ圈線が巡り、その中には梅樹文が描かれる。40は丹波焼水盤。口径16.6cm、器高5.5cm、底部径17.9cm。ロクロ成形。胎土はにぶい黄橙色で、0.1~2.0mm大の砂粒を含む。焼成は良好、外面は明赤褐色である。

他に埴輪・土師皿・瓦等が少量出土しているが、図示した遺物から見てこの遺構は江戸時代前半(17世紀)のものと考えられる。

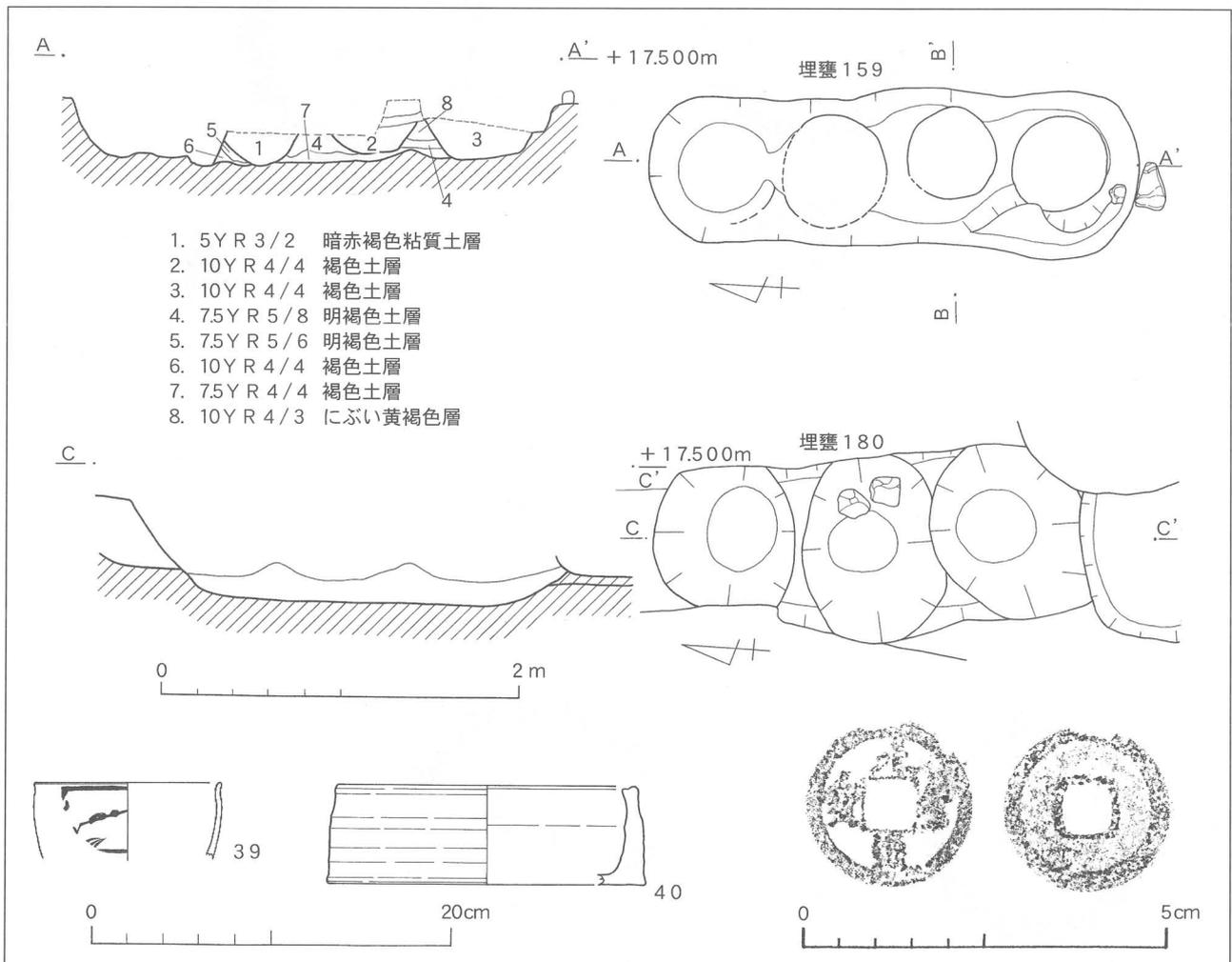
埋甕159 (第85図、PL.50-a・c)

調査区東隅、O.P+17.200m (第IV遺構面) で検出した。南北2.7m、東西80cmの楕円形の掘方に、直径約50cmのほぼ円形の底部が4つ掘られている。

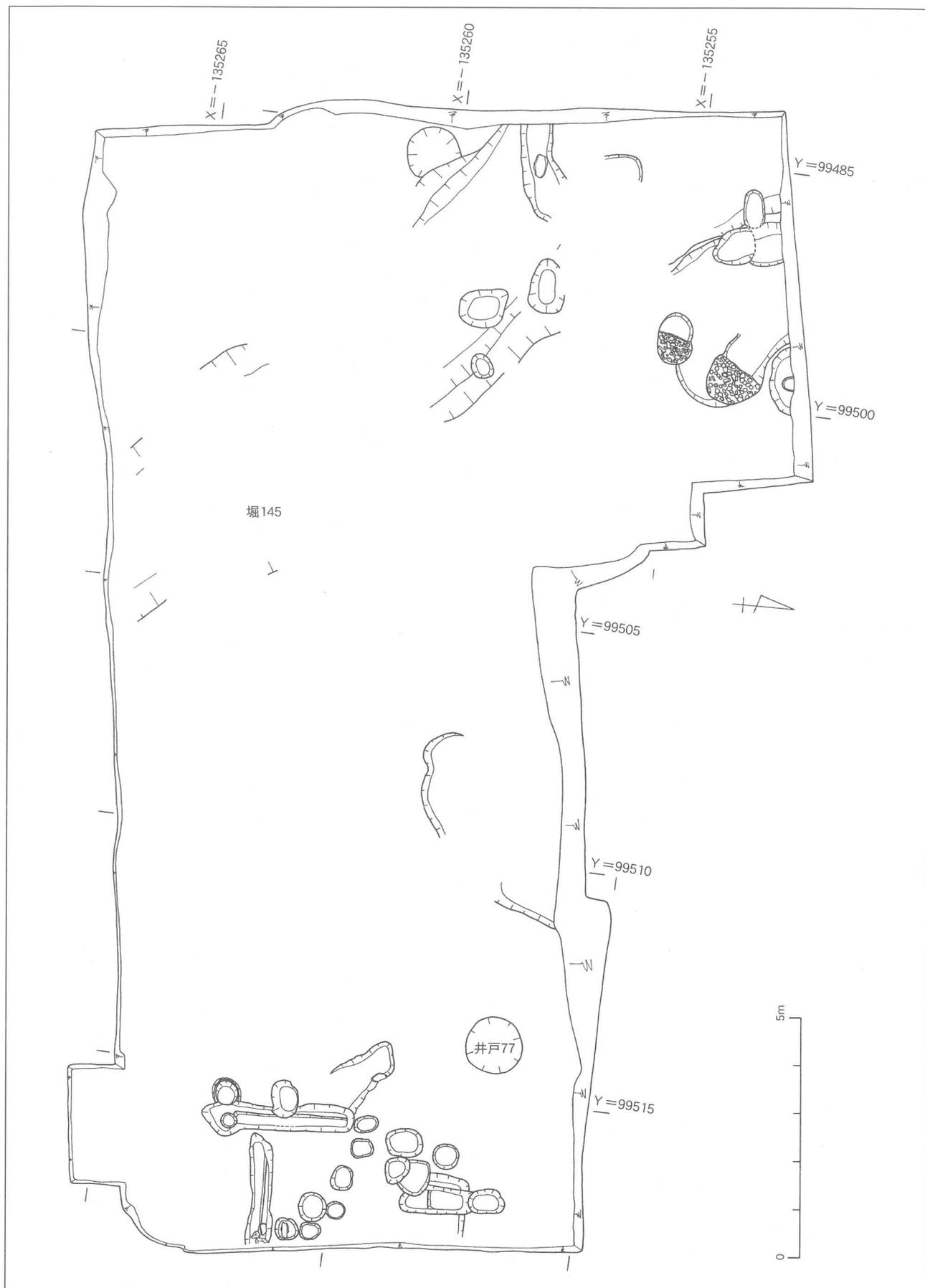
遺物 (第85図)

41は銅銭。元豊通宝。直径2.3cm、裏面無文。

(以上中畔)



第85図 埋甕159・180平面・断面図 (1/40) 出土遺物 (1/4)



第86図 第2遺構平面図 (1/100)

有岡城以前の遺構・遺物について

伊丹郷町以降の酒蔵（酒造遺構など）によって、有岡城以前の遺構は大きく壊されているが、今回の調査では、有岡城惣構の中で重要な位置を占めていた女郎塚砦に関わると考えられる堀を検出した。またその堀が、有岡城落城（もしくは廃城）後、埴輪混土で埋められており、女郎塚砦が古墳を利用して築かれていたことが明確になった。

堀145（第86・87図、PL.52・53）

調査区西側、第VI遺構面（O.P+17.000m）で検出した。西北方向から東南方向にかけて直線状に延びており、調査区内で約10mを検出したが、堀は調査区外にも続いている。幅は約3～3.5m。断面は、底の平らな逆台形を呈しており（いわゆる箱堀）、南側が深く（最深部1.7m）、北側にむかって急激に浅くなり、調査区西端で途切れている。その西側には、通路か門でもあるのだろうか。堀は、明褐色の粘質土層と礫層とが互層になって埋め立てられており、整然とした作業によって工事が行われたことが推察できる。その埋土には、コンテナ4箱分の埴輪が、瓦・陶磁器類とともに出土した。

埴輪（第88・89図、PL.58・59）

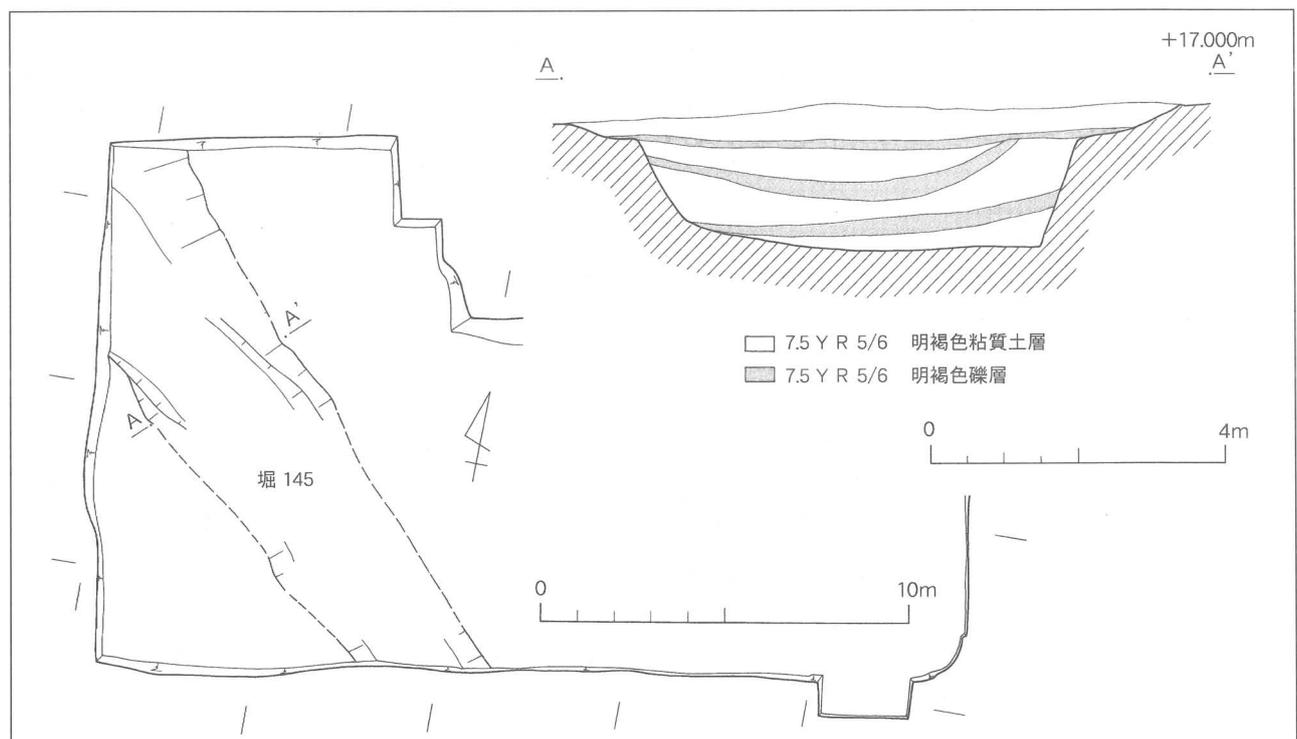
堀の埋土中からコンテナ4箱分の埴輪が出土した。遺存状況は悪く、調整の状況は不明なものが多いため、全体が推定できるものはないが、円筒埴輪のほか、家形・盾形埴輪と思われる形象埴輪の破片も少量確認できた。埴輪はすべて土師質で焼成されており、黒斑の見とめられるもの（45・47・50・51・53～55）があることから、野焼きで作られたものと見られる。色調は浅黄橙色を呈し、胎土中に雲母片をまばらに含み、軟質に焼成されている。

以下、特徴的なものを図示して概観する。

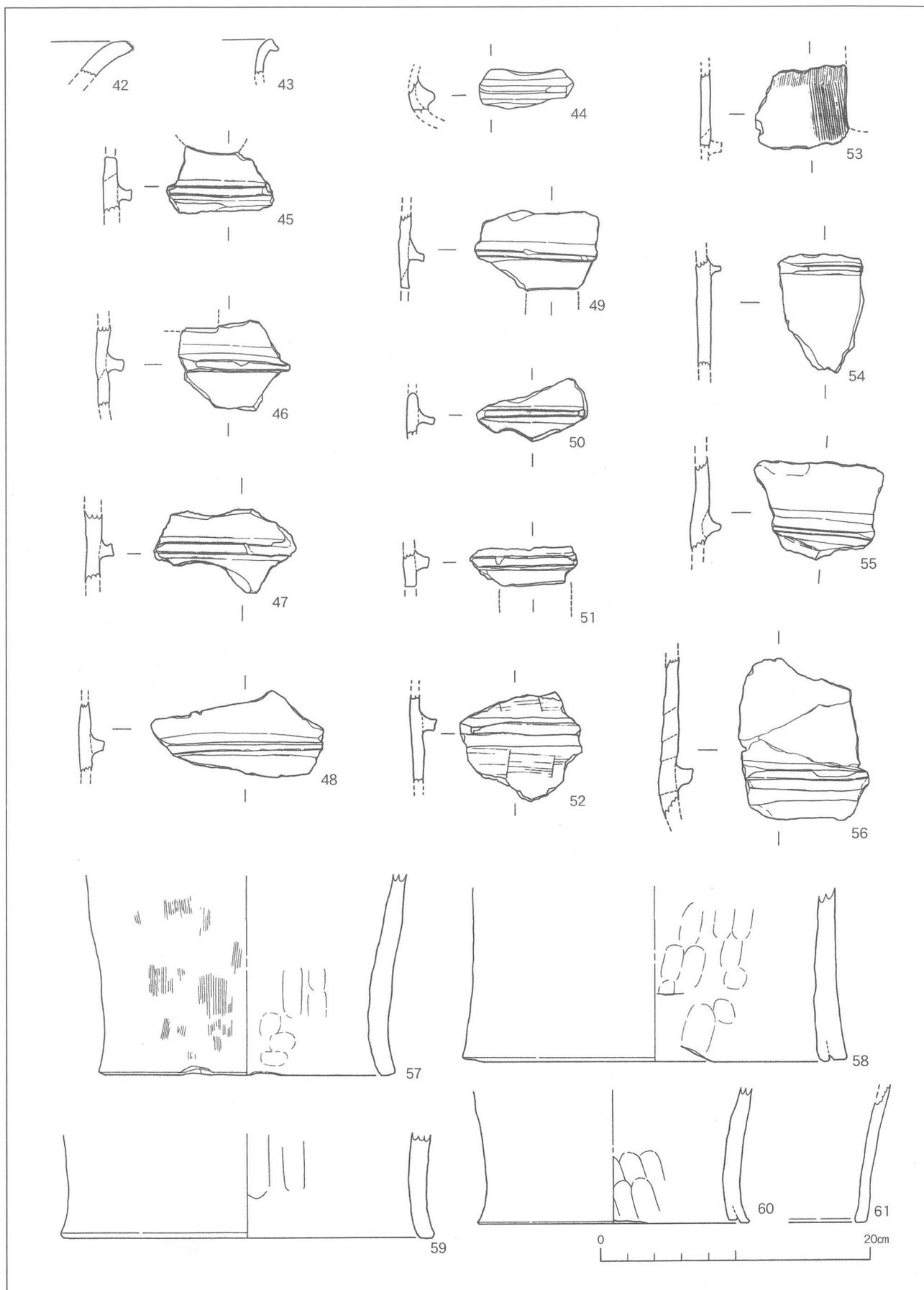
円筒埴輪（42～61）

口縁部の破片は少ないが、(42)と(43)の2形態のものが確認できる。前者は朝顔形埴輪の可能性もある。

体部に巡らした突帯は、断面「M」字状をなすが、突帯が細く長いもの（49・50・54）と、短く太



第87図 堀145平面・断面図（1/100, 1/50）



第88図 堀145出土遺物(1)(1/4)

いもの(45~48・51・52・56)の2形態に区分できる。(52)は突帯の上の段がヨコハケ、下の段にタテハケが施されていることが確認できる。

基底部の調整はタテハケであることから、これは2段目の破片とみられる。このタテハケは突帯貼り付け前に施されており、1次調整のタテハケと判断できる。スカシは円形(45)の他、方形(46・49・51)であることが推定できるものがある。

基底部は径の違う二種が確認できた。径28cmのもの(58・59)と、径22cmのもの(57・60)である。外面の調整はタテハケが確認でき、内面はナデ調整と見られる。(58・60)は内面に粘土帯を接合した重なり部分を残している。

盾型埴輪(64)

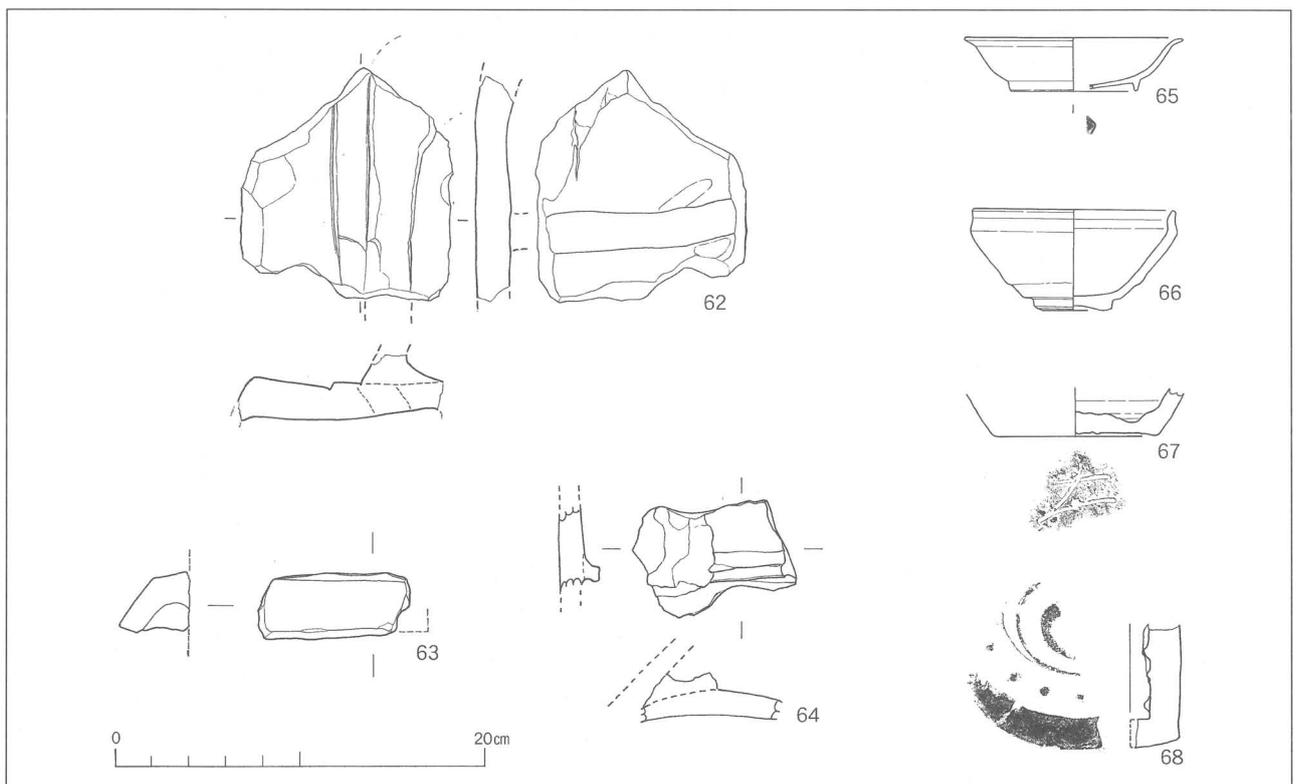
1点だけ確認できた。突帯に直交して鰭状に突起が付く。鰭状の突起の横には補強用の粘土塊が付けられており、鰭状の突起は器壁に対し垂直に付けられていない。以上の点から盾形埴輪と判断した。

不明器材形埴輪(62・63)

(62)・(63)は、器材形埴輪の一部と思われるが、細片であるため、全体の形体について、特定することができなかった。

以上のように、出土した埴輪を概観した。円筒埴輪を手掛かりに編年的位置について考えてみる。まず、野焼きであることから、川西編年(川西1978)ⅡないしⅢ期であることが推定できる。次に、1次調整にタテハケ、二次調整にヨコハケが施されており、基底部は一次調整のタテハケのままである点から判断して、Ⅱ期である公算が大きいと見られる。方形スカシが多数確認できることも、矛盾しないであろう。

これらの埴輪胎土の特徴は、猪名川左岸の大石塚・小石塚の埴輪とは異なっており、武庫川左岸の弥生土器と共通している。埴輪窯跡は確認されていないが、こうした胎土の状況から、この埴輪は武庫川左岸の粘土を使って製作された可能性が強いであろう。(以上 武内)



第89図 堀145出土遺物(2)(1/4)

堀145出土遺物陶磁器（第89図、PL.57）

65は中国製白磁皿。口径11.8cm、器高3.0cm、高台径6.8cm。白色の精緻な胎土に、透明度の高い釉を全面に施す。高台内には銘鑑が描かれている。66は瀬戸美濃焼天目碗。口径10.8cm、器高5.5cm、高台径3.2cm。削り出し高台で、底裏は内反ぎ。高台周辺の露胎部は鬼板により化粧掛けを施す。美濃大窯第Ⅱ期に該当する（〔第3形式〕瀬戸市歴史民俗資料館1986）。68は軒丸瓦、右巻三巴連珠文。内外区を分ける圏線が残り、尾は細く伸び圏線に達する。珠文は径0.5cmと小さい。瓦当裏面は周縁に沿うナデを施す。

(中略)

まとめ

今回の調査は、堀を含む有岡城期の遺構や、伊丹郷町期の酒造遺構など、有岡城跡・伊丹郷町遺跡を語るに相応いものであった。しかし、第20調査で存在が明らかになった古墳については、当調査地点までは及んでおらず、近隣の調査を待たなければならない。

「文禄伊丹之図」には、この女郎塚砦に関わる有岡城の堀は描かれていない。この時期までに、砦を削平し、その土で堀を埋め、平坦に整地を施し町化したものと思われる。堀の埋土に埴輪片が多く含まれることから、この砦が女郎塚古墳上に築かれていたことが考えられる。また、今回の出土埴輪片を見ると、基底部に比べ口縁部が少ないことから、この古墳は一度何らかの削平・破壊をうけていたものと思われる。おそらく、女郎塚砦建設段階において、ある程度の整地が行われ、その時古墳上面・外面を削平したものであろう。

当酒蔵の所有者等の詳細については、以前、伊丹市立博物館の和島氏により考察されたものがあり（和島1996）、それらを参考にしながら今回の調査について考えていきたい。しかし、調査によって検出した遺構の多くが、遺構面の特定さえままならない状況であるため、現段階においてはあくまでも推定であることをお断りしておきたい。

寛保3年（1743）8月に、稲寺屋次郎三郎から津国屋勘三郎に、銀22貫で売却されたことが記載された酒造株譲渡証文が、この蔵の所有者がわかる文書として最も古い。それには、この蔵の位置が「材木町南西角」と表現されており、約4000石の酒株を持っていたことがわかる（『伊丹市史』4）。

文化2年（1805）、当地北側酒造蔵譲渡証文によると、その添付絵図に「南 大黒屋茂 酒造蔵」と書かれており、この時期の当蔵所有者は大黒屋茂であったことがわかる。

天保4年（1833）、約277貫で、紙屋重左衛門から紙屋与作へ譲渡されたことがわかる証文では、酒株は2株1460石となっている。これは、絵図面はないが、本宅・土蔵・洗場・碓家・米蔵・酒蔵・室・炭納屋の大きさが記載され、1反7畝14歩（524坪）の敷地を十分活用して酒造りが行われたことを物語っている。なお、紙屋一統の銘柄は「菊」である。（『伊丹市史』2）

「天保度以来永代記」（『日本都市生活資料集成』1）によると、紙屋与作は、天保13年（1842）に転廃業している。天保から幕末にかけての伊丹酒造業衰退の影響が、この蔵にもあったのだろうか。

「伊丹酒家盛衰の事」（『有岡古続語』）は、この蔵が、大黒茂から紙屋重左衛門を経て、幕末、丸屋（池上姓）茂兵衛所有になったことを伝える。（銘柄は「剣菱」）



第90図 「天保15年伊丹郷町分間絵図 解説図」

明治3～5年（1870～72）間は丸屋もよが所有、その後明治11年までに、再び池上茂兵衛に、所有が移されている。

明治19年（1886）に提出の「酒造場絵図面届出書」（『伊丹酒造組合書』）には、「池上茂兵衛材木蔵」となっている（第92図）。これと今回の調査区をあわせて見ると、この蔵全体のほぼ東側半分であることがわかる。届出書には本町通りに面した側に「居宅」と書かれており、第Ⅰ遺構面の礎石・敷居石等が検出された位置がこれにあたるものを思われる。「釜屋」は、明治23年以降に製造された煉瓦で造られた竈1はありえないので、その下部にあった竈51か、もうひとつ段階古い竈6・7であると思われる。「洗場」・「井（井戸）」が調査区西半部にかかっているが、これについては、井戸67か井戸2が考えられる。

明治42年の造石高は709石である。大正元年は603石、大正8年（1919）、池上茂代名義で766石、そして大正14年（1927）、池上茂兵衛名義で642石が醸造されている。（『伊丹市史』3）

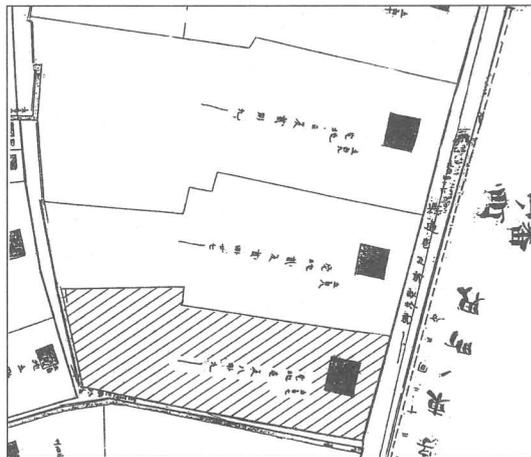
昭和元年（1926）、茂代名義に変えたのを最後に、池上家は没落（『伊丹市史』3）、銘酒『剣菱』は昭和3年より灘に移った。

その後、この蔵は小西酒造株式会社に譲渡され、「宝来蔵」として「白雪」醸造に使われた。当調査で検出されたもっとも新しい遺構がこの時期のものと考えられるため、コンクリート枠をもつ井戸5や、耐火煉瓦で造られた竈1、それに付随する燃料置き場が「宝来蔵」の酒造遺構にあたると思われる。燃料置き場を、コンクリートにより小さくまじき、補修したのも、燃料を薪から石炭へ移行し、大規模に工業化した酒造業を行うことになった結果だろうか。

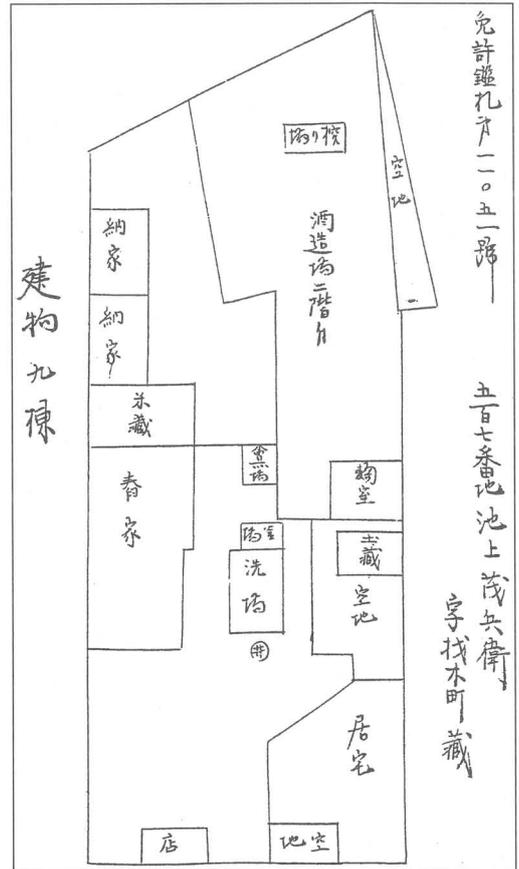
昭和18年（1943）6月、政府による「戦力増強企業整備要綱」が発表され、清酒製造を半分に減らすよう指示されたことをうけ、小西酒造では、9蔵のうち4蔵を転用・廃止することに決めた。この蔵はその対象となり（小西酒造1995）、長く続いてきた酒造業の歴史に幕を降ろした。

この調査中、多くの小西酒造の方が現場の見学に来られたので、度々この蔵のことを質問してみたが、覚えていた方は誰もいなかった。反対に、通りがかった年配の人々から、「ここは剣菱の蔵やったとこやろ？」と多くの指摘を受けた。たった5、60年前の昭和初期の記憶さえまならない現在。今回の調査は、遺跡・歴史について、ますます次世代へ伝達の難しさ、この仕事の重要性を身にしみて感じた。

（中畔）



第91図 「大正4年伊丹町地籍図謄本」



第92図 「明治19年酒造場絵図面届書写」

第5節 有岡城・伊丹郷町遺跡第188次調査

所在地 伊丹市中央3丁目403-5

調査面積 80㎡

調査期間 平成9年1月27日～3月27日

調査担当 小長谷正治・瀬川眞美子

調査概要

今回の発掘調査は阪神・淡路大震災復興事業に伴うものである。当該地に鉄筋コンクリート造りの共同住宅建築が計画され、遺跡への影響が考えられ、全面調査を行うこととなった。

敷地内に東西10m、南北8mの調査区を設定し、まず、表土を重機により除去し、その後を人力によって掘削・精査するとともに、適宜写真撮影・実測等の記録作業を行った。遺構は表土下約50cmで検出したが、調査区西半分では遺構の重複が見られたため、2面に分けて調査記録を行った。

遺跡概要（第93・94図）

本調査地点は有岡城惣構の西側に位置し、伊丹郷町の北端に鎮座する猪名野神社から南へ向かう通りに面している。この辺りは江戸時代の伊丹郷町では中小路村に属し、既に文禄年間には成立していた古くからの町場である。調査区は当時既に町屋として描かれており、その東側には法専寺と近衛家会所が描かれている。当該地の北隣は最近まで稼働していた大手柄酒造の酒蔵があり、また、試掘調査において窺らしい遺構が確認されたことから、酒蔵の存在が予想された。

調査成果

調査区東半分は従前の建物の地下施設により大きく破壊されている。基礎は地山まで及んでおり、それ以外の遺構は残っていなかった。調査区の東・南壁沿いには側溝のコンクリートがほぼ地山まで達しており、調査区はかなりの攪乱を受けていた。辛うじて残った調査区西半分において表土下約50cmで調査を行い、地下室状遺構1基、土坑8基、礎石1基、ピット6基、窺5基を検出した。遺構は浅いところで重複しており、窺の全容を確認するために、窺とその他の遺構を2面に分けて調査・記録を行った。

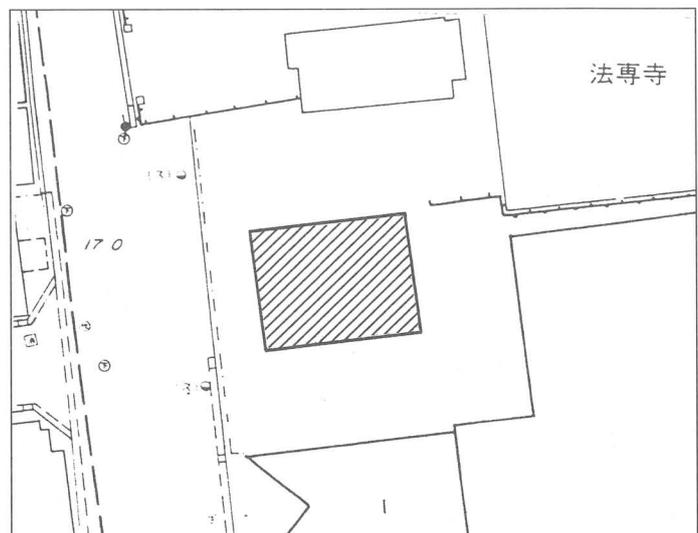
層序（第95図）

調査区の東・南壁はコンクリート製の溝がほぼ地山面まで達し、北壁の約1/2は攪乱が地山面まで及んでおり、水平面の堆積が見られるのは北壁の西側だけである。表土・盛土

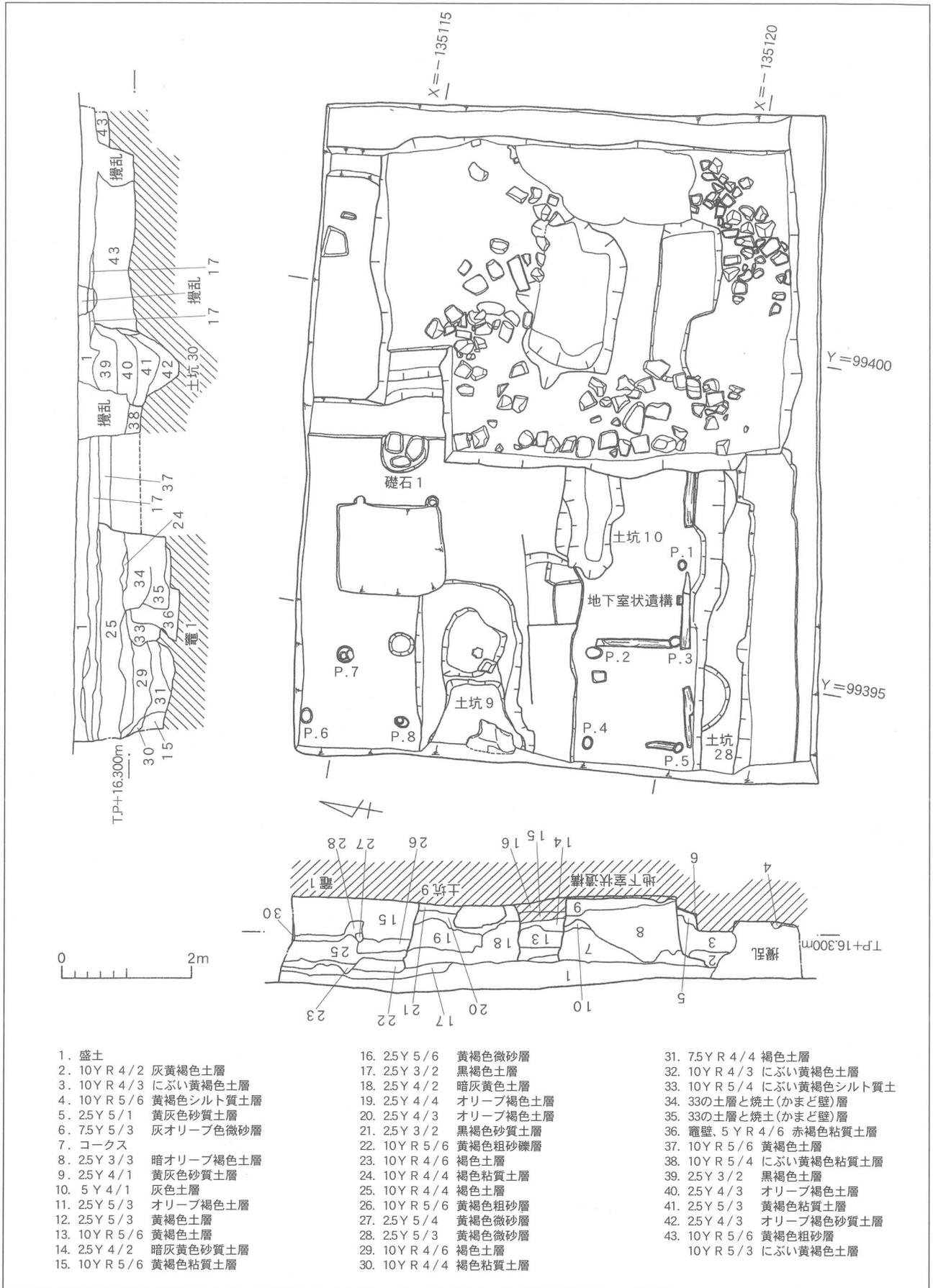
(1) を取り除くと黒褐色土層 (17) が堆積



第93図 第188次調査区位置図 (1/2,500)



第94図 調査区設定図 (1/500)



第95図 第1遺構面平面図、土層断面図

し、その下に黄褐色土層（37・43）が堆積して、地山に至る。

遺構と遺物

第1遺構面（第95図）

次に、検出した遺構と遺物について説明を加えていく。調査区東半分で確認した攪乱坑は教育会館の半地下式駐車場とその下に埋設された浄化槽の跡である。地山面に人頭大の石を置いてコンクリートを敷いていた。北西隅に3段の階段が設けられている。

地下室状遺構（第96図、PL.60・61）

南北2～2.5m、東西現存長5m、深さ90cm～1mを測り、西側は調査区外に延び、東側は上記攪乱坑に切られている。細長い構造をしている。北壁はほぼ直立しているが、南壁は東側半分にテラス状の段を有する。埋土は基本的にはオリーブ褐色土層（12）、にぶい黄褐色砂質土層（11）、黄褐色粘質土層（10）、オリーブ褐色粘質土層（9）の順に水平堆積する。中央から西には更にコークス（16）が堆積しているが、この遺構の上面で検出した土坑10の埋土中には多量の炭とコークスが含まれていて、地下室状遺構埋没後の窪んだ所にその埋土が入れられたと考えられる。遺構の南端は砂礫層（14）、オリーブ褐色粘質土層（13）、褐色土層（17～19）が斜めに堆積している。

北壁中央に階段を備えている。東西1.1m、南北85cmの掘方を持ち、底と東・西側壁に板材を入れ、その中を焼土を含んだ砂質土（4～6）、にぶい黄褐色粘質土層（3）、褐色土層（1・2）で突き固めて3段の階段を造り出している。

遺構底面の長辺に沿って柱穴が並んでおり、壁材を支えるための柱跡と思われる。柱穴の様子から1間×4間以上の規模であったことが予想される。柱穴は何れも検出面からの深さが5～10cmと浅い。ピット1は直径15cm、埋土は灰オリーブ色シルト層とオリーブ黒色粘質土層である。ピット2は径25×18cmの平面楕円形を呈し、埋土は暗灰黄色粘質土層である。ピット3は直径18cmで、オリーブ灰色粘質土層と灰色粘質土層を埋土とする。ピット4は径15×19cmの卵形を呈し、埋土は灰色粘質土層である。床面は伊丹礫層（地山）であるが、表面は青灰色を呈していた。

この床面で柱穴を結ぶように木材が出土している。厚さ7～10cm、残存長は梁行方向で0.5～1.6m、桁行方向で0.9～1.7m、幅は梁行で8～22cm、桁行で7～15cmを測る。材質は杉である。床板を支える時に根太となる部材かと思われる。木材除去後に柱穴は確認できなかった。

遺物（第97図、PL.68）

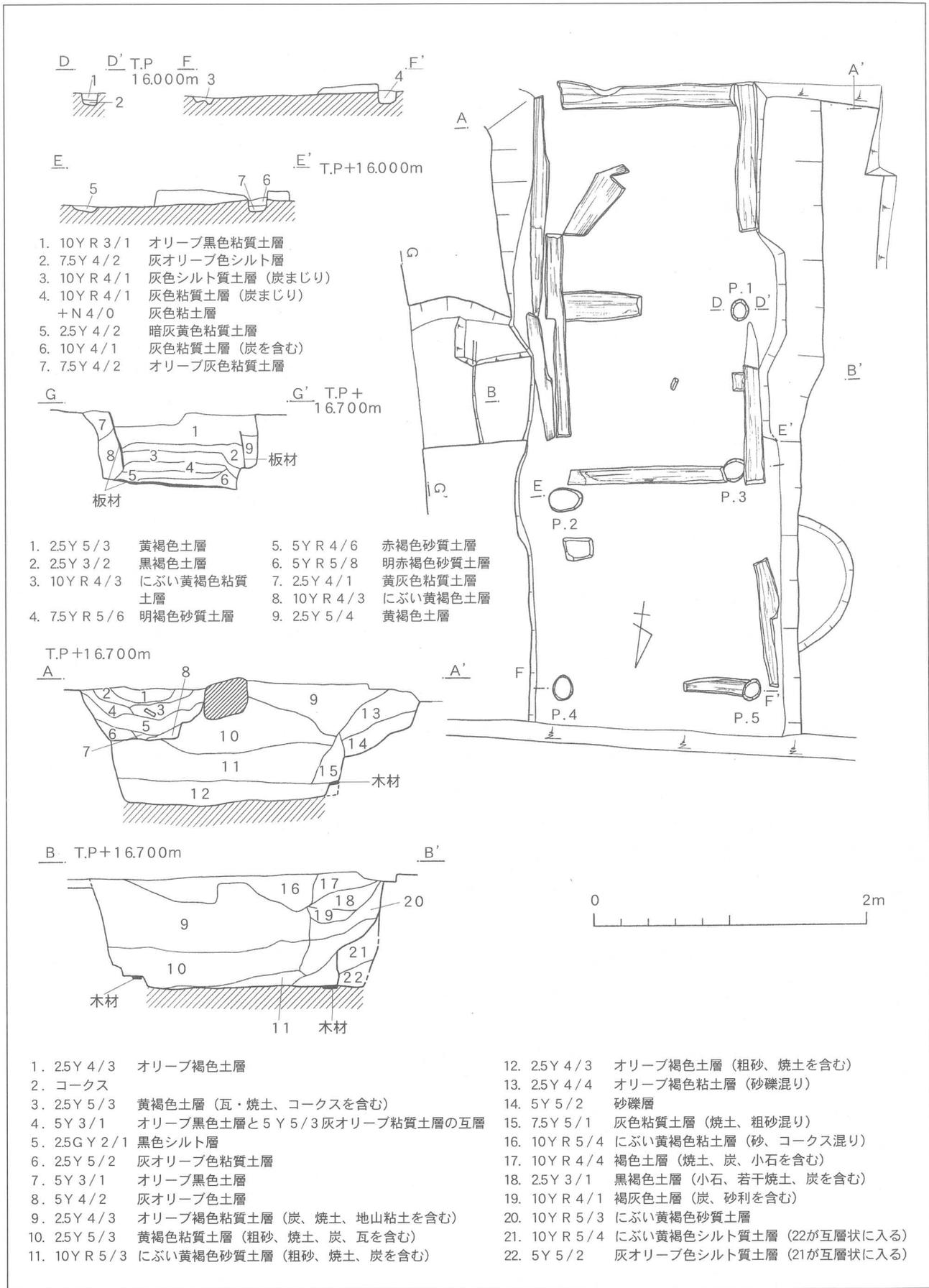
遺物では土師質焙烙、肥前白磁染付碗・皿、伊賀・信楽焼土瓶、丹波焼甕・搦鉢、平瓦などが出土している。図化したものについて若干の説明を加えたい。

1は大谷焼蘭引きの上半部である。口径9.8cm、口縁内法3.8cm、残存高12.6cmを測る。内傾気味に立ち上がる体部は肩部で大きく屈曲し、更に内傾して延びる。口縁部は短く立ち上がり、上部は幅3cmの平坦面となっている。器壁は分厚い。胎土は赤灰色を呈し、精緻で滑らかな感じがする。外面には暗赤褐色釉が掛かる。口縁平坦面と肩部に離れ砂が残っている。

2は肥前白磁染付碗である。口径11.2cm、器高5.8cm、底径4.1cmを測る。口縁は緩やかに外反して広がり、端部は尖り気味におわる。端反り碗と言われるものである。畳付以外に乳白色の釉が厚ぼったく掛かり、内面見込みを蛇の目釉剥ぎしている。外側と見込みに丸文を描く。

3は肥前白磁染付皿である。口径12.8cm、器高3.3cm、底径7.2cmを測る。畳付は無釉である。外側は唐草文、内側に松竹梅を描き、見込みにはコンニャク印判の五弁花を配す。釉調は灰色を呈し、呉須の発色も悪い。

4は肥前白磁染付蓋物である。残存高6.2cm、底径5cmを測る。腰の張った体部から緩やかに外反して開く口縁部が続く。口縁はかなり薄く作られている。畳付は無釉である。外側に「福寿字」文と点



第96図 地下室状遺構平面・断面図

文、鱗文、七宝文を帯状に描き、内側口縁には縁文様を巡らせる。磁胎は白色を呈し、大変精緻である。この碗と対になる蓋も出土しているが、残りが悪く図示できなかった。碗と同じ文様を外側に描く。上手物である。

これらの出土遺物から地下室状遺構の時期を19世紀前半頃と考える。

土坑28（第95・97図）

地下室状遺構南西壁にかかって検出した土坑である。径1m、深さ26cmを測り、埋土は下層に12～20cmの厚さで炭・焼土・小石を含んだ褐色土（10YR 4/4）層が堆積し、上層に焼土をブロック状に含む暗灰黄色土（2.5Y 4/2）層が堆積する。

遺物

5は伊賀・信楽焼系土瓶の蓋である。口径8.5cm、器高4.3cm。上面にトビカンナを施し、つまみと上面には飴釉を掛ける。胎土は灰色を呈し、精良である。

6は伊賀・信楽焼系塙の蓋である。口径11.1cm、器高5cm、つまみ径3.6cm。上面にトビカンナを施す。帯状に鉄釉を掛け、イッチン技法により花文を描いている。内面は灰釉を施している。

7は伊賀・信楽焼系行平塙である。口径13.2cm。外面体部にトビカンナを施している。内面は灰釉掛けし、外面は塗土を施した後、握り手には鉄釉を上掛けする。

8は肥前白磁染付碗である。口径11.4cm、器高5.8cm、底径4cmを測る。畳付を僅かに除き、乳白色の釉が厚ぼったく掛かる。内面見込みを蛇の目釉剥ぎするが、釉の搔き取りは粗雑である。いわゆる「くらわんか手」と呼ばれる粗製品である。外側と内側見込みに丸文を描く。

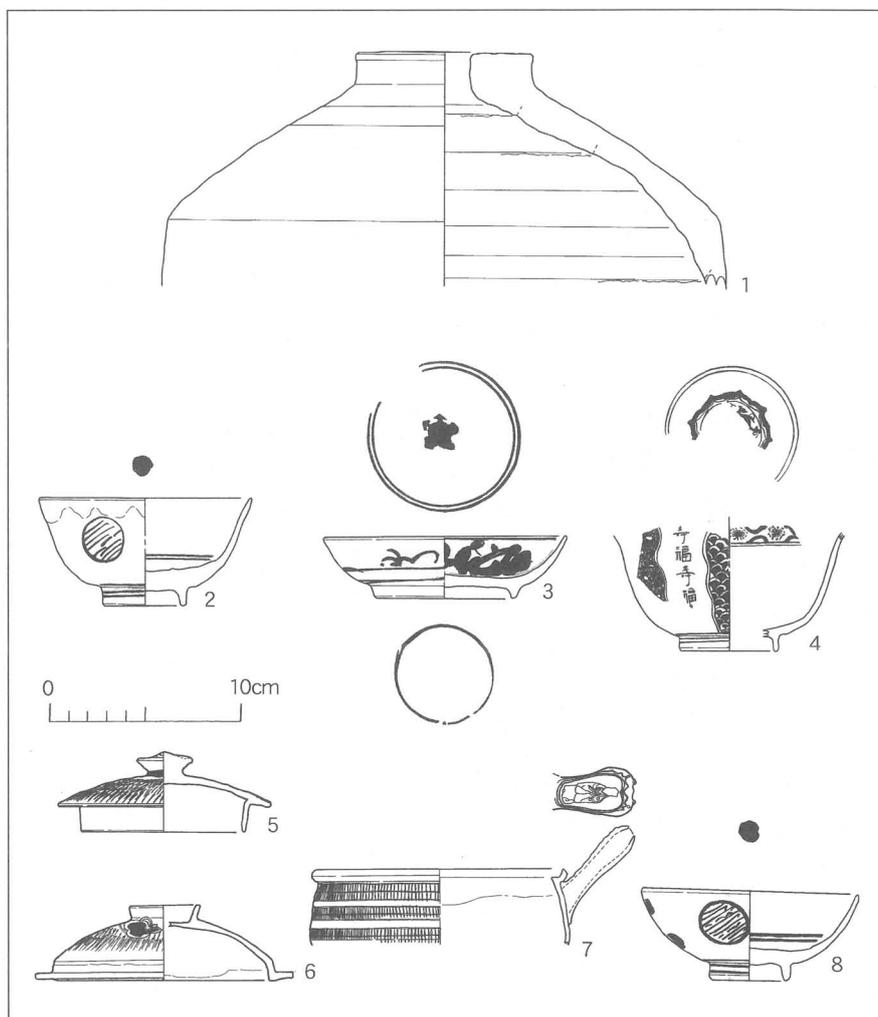
これらの遺物と土坑28が明らかに地下室状遺構より古いことから、18世紀後半頃を比定する。

土坑9（第98図）

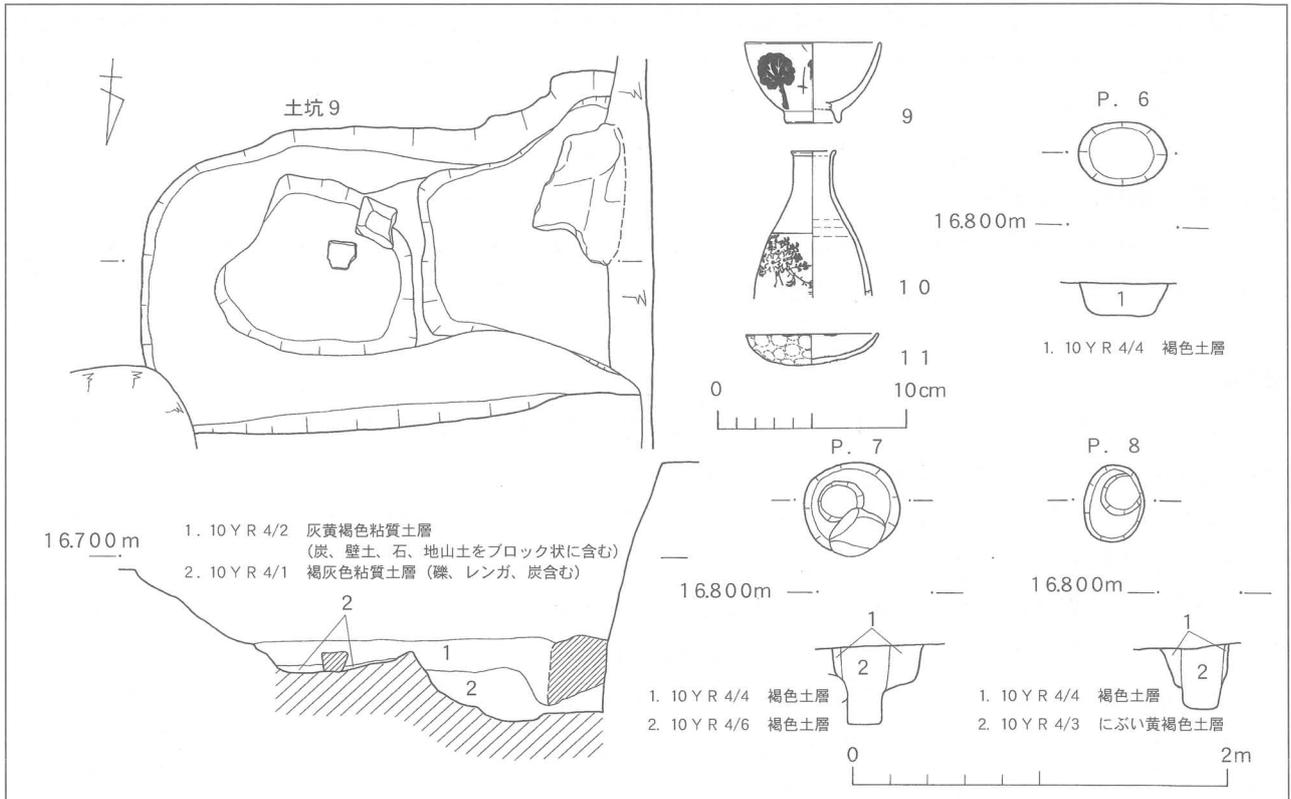
調査区西北で検出した幅1.65m、現存長2.8m、深さ55～80cmの土坑で、遺構は調査区外西側へ延びている。上層には地下室状遺構と同様にコークスが堆積し、その下に炭・焼土を含んだ灰黄褐色粘質土層（1）、耐火煉瓦・礫を含む褐灰色粘質土層（2）が続く。近くに煉瓦積みの竈があった可能性もあり、この土坑がそれらに付随する施設であったとも考えられる。

遺物

9は瀬戸・美濃焼小杯である。口径7.2cm、器高4.4cm、底



第97図 地下室状遺構・土坑28出土遺物（1/4）



第98図 土坑9、ピット6・7・8平面・断面図、土坑9出土遺物（1/40・1/4）

径2.8cmを測る。畳付は無釉。外側に型紙摺りによる文様を施す。呉須を塗った蕨手と十字文、金色を塗った松葉文様が描かれている。

10は瀬戸・美濃焼徳利である。口径2.3cm、残存高7.9cm。内外面に施釉し、外面体部に桜を描いている。器壁はとても薄く仕上げられている。

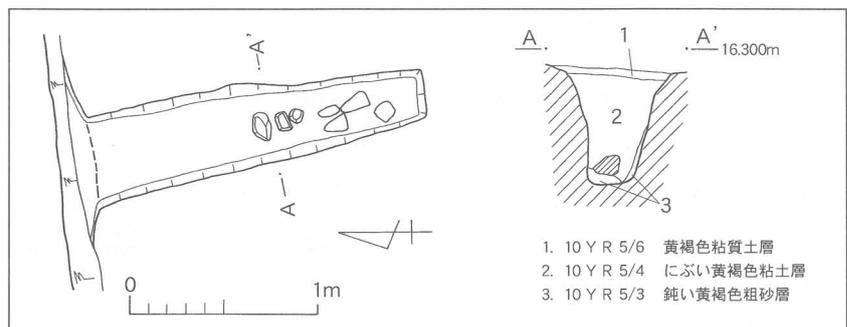
11は土師器灯明小皿である。口径7.1cm、器高1.7cmを測る。内面はナデ調整し、外面には指頭圧痕が顕著に残る。口唇部に煤が付着している。胎土は浅黄色を呈し、雲母・長石・石英などを含み精良である。9・10の遺物や埋土状況から明治以降の年代が与えられる。

ピット6～8（第98図）

調査区北西隅で検出したものである。ピット6は25cm×17cmの楕円形を呈し、深さ8cmの浅い台形のピットである。ピット7は直径25cm、深さ20cmの円形で、柱穴を持つ。ピット8は径20cm×16cm、深さ18cmの平面楕円形を呈し、柱穴に添え木状の石を持つ。何れのピットも褐色土層を埋土としている。ピットから遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。

土坑35（第99図）

調査区北側中央で検出した溝状の遺構で、壁際に土坑30に切られている。一連の遺構の可能性が考えられるが、調査区外に延びているため詳細は不明である。幅25～45cm、長さ1.8m、深さ65cmを測る。底には拳大の石が入っている。埋土は黄褐色粗



第99図 土坑35平面・断面図（1/40）

砂層（2・3）と黄褐色粘質土層（1）である。遺物の出土は無く、時期は不明である。

第2遺構面（第100図）

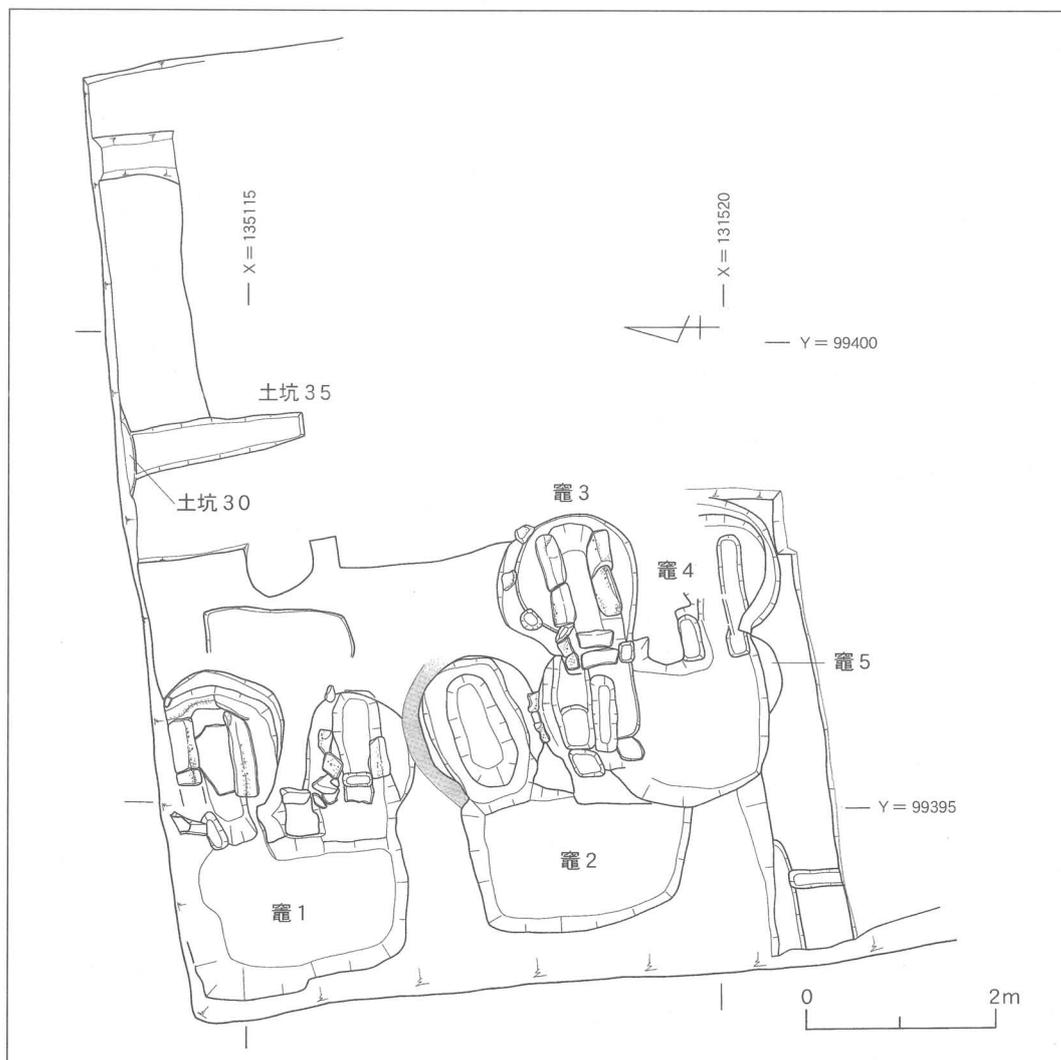
竈

上面遺構の直下から5基の竈を検出することができた。竈は半地下式で、大小2基の燃烧部を一对とする「二基連基型」と呼ばれるものである。竈1から竈4へと造り替えが行われたことが確認できているが、上部遺構の攪乱の為、竈2と竈5の新旧関係はわからない。また、焚口部は竈5を除いて全て西側に設けられている。尚、燃烧部は北側をa、南側をbとして説明している。

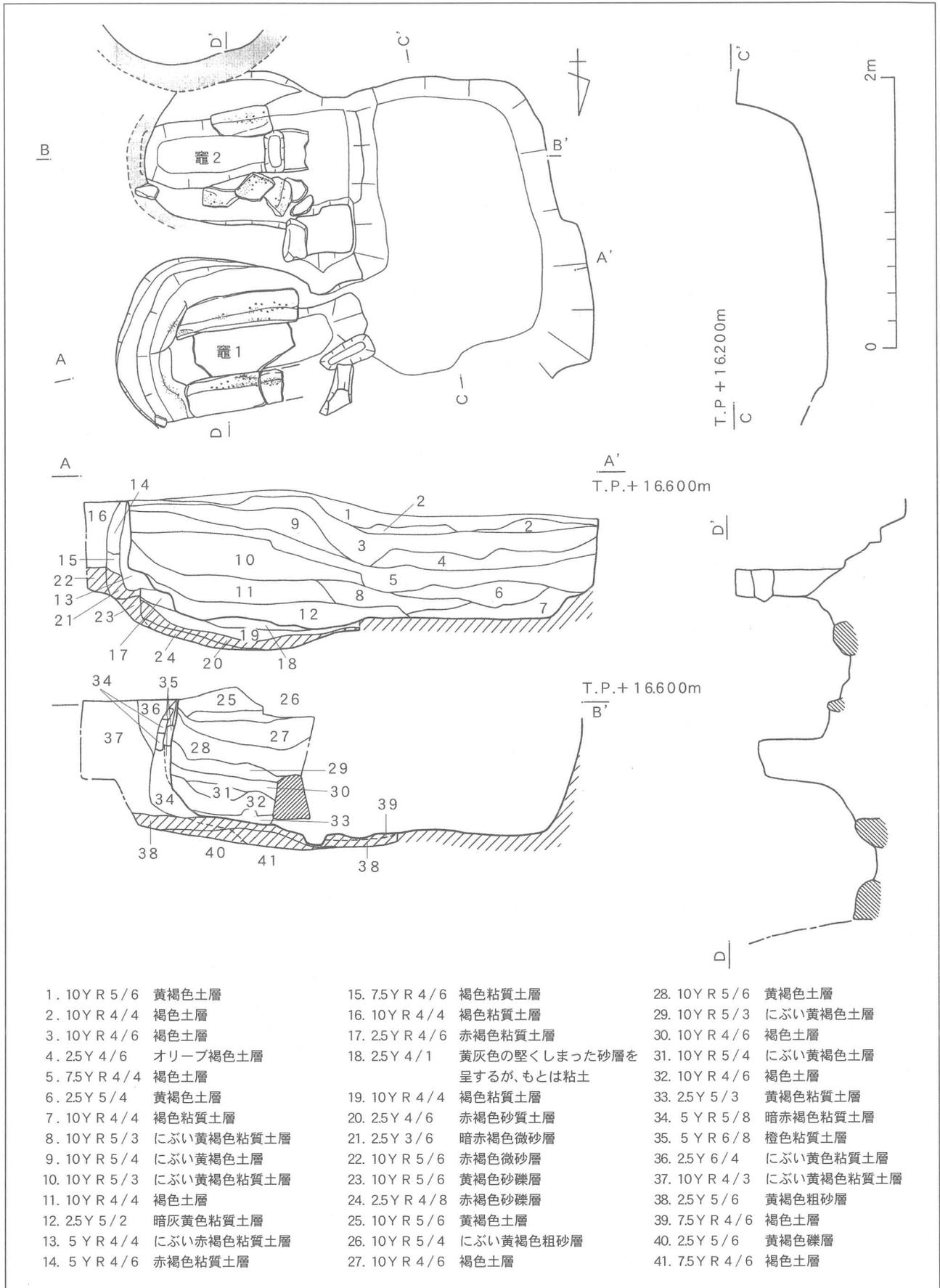
竈1（第101図、PL.62～64）

竈1は全長約3.5m、焚口部は東西1.7m、南北2.3mを測る長方形を呈している。焚口床面には炭がびっしりと堆積していた。焚口部へ降りる階段等の施設は検出されなかった。燃烧部aは内法1.5m、掘方径1.8m、深さ95cmを測る大型のものである。埋土は下層に暗灰黄色粘質土層（12）・褐色粘質土層（7）・にぶい黄褐色粘質土層（8）が堆積し、その上に焼土や竈壁を含んだ褐色土層（2～6・11）、黄褐色砂礫層（1）が続き燃烧部と焚口部を一気に埋め戻している。

燃烧部は粘土で構築している。掘方に沿ってブロック状の粘土を積み（14・15）、その上を粘土（13）で覆っている。この面が燃烧部の壁面であり、使用する毎に上に何度も粘土を塗り重ねて補修している。燃烧部の底面には灰の掻き出し用の溝が設けられ、周りには丁寧に加工した凝灰岩を配してい



第100図 第2遺構面平面図（1/80）



第101図 竈1平面・断面図 (1/40)

る。石の表面は黒く焼けて剥がれ易くなっている。中央の溝内底面は硬く焼け締まった硬化面となっている。また、断ち割りを行ったところ、土層19・21上面に赤く焼き締まった硬化面が見られ、燃焼部 a（竈）の造り替えが確認できた。

燃焼部 b は内法1.2m、掘方径1.5m、深さ95cmを測り、燃焼部 a より若干小さく造られている。燃焼部は掘方内に粘土ブロック（34～36）を積み、その上を粘土（35）で覆って構築している。灰の掻き出し用の溝は凝灰岩の切石を用いて設けられていたようであるが、残りは悪い。焚口には石の抜き取り跡が見られ、下に石が敷かれていた。中の灰を掻き出す時の足場のためと、入り口の土と一緒に掻き取らないための処置であろう。溝の内底面は硬く焼き締まった硬化面を呈している。

燃焼部 b は途中で稼働を終えて、入り口を切石で塞ぎ、炭・竈壁・焼土を含んだ褐色土（32・33）・にぶい黄褐色土（29～31）で閉塞石上面まで埋めている。それより上部と焚口部は燃焼部 a と一緒に埋められている。稼働を終えた竈の廃棄の様子がわかる資料である。

燃焼部 a と b の間には障壁とその上の大きな切石が残っていた。燃焼部 b の閉塞石とで燃焼部入り口のアーチを形成していたものか。焚口部の配置の様子から燃焼部 a と b は同時に構築されたと見られるが、ある時期に小型の燃焼部 b を廃棄して a だけを使用していたようである。燃焼部 b には造り替えの事実が認められないことから、b の廃棄後に a を造り直した可能性がある。2基が同時に稼働していた時期があったかどうかは不明であるが、竈の耐久性以外に、この時期に稼働を縮小せざるを得ない事情があった可能性も考えられる。

遺物（第102図）

12は土師質焙烙である。口縁が内湾気味に高く直立するものである。内外面はヨコナデ調整する。にぶい橙色を呈し、胎土には金雲母・砂粒を含む。外面、特に底部はよく焼けている。

13は土師器灯明皿である。口径10.6cm、器高1.8cm。内外面はナデ調整するが、外面には指頭圧痕が残る。口唇部内外面に煤が付着している。浅黄色を呈し、雲母・石英・砂粒を含む精良な胎土である。

14～17は肥前白磁染付碗である。14は口径9.6cm、器高6.1cm、底径3.6cm。器壁の厚い碗である。高台豊付を除いて施釉し、全体に細かい貫入が入る。外側に草花文を描く。15は現存高5.3cm、底径4.6cmを測り、高台豊付を除いて全釉し、全体に細かい貫入が入る。外側に草花文を描いている。

16は口径8.2cmを測る小碗である。外側口縁部に雨降り文を描く。17は底径4.2cmを測る碗高台である。高台豊付は無釉で、離れ砂が残っている。高台内に崩れた「太明年製」を記す。

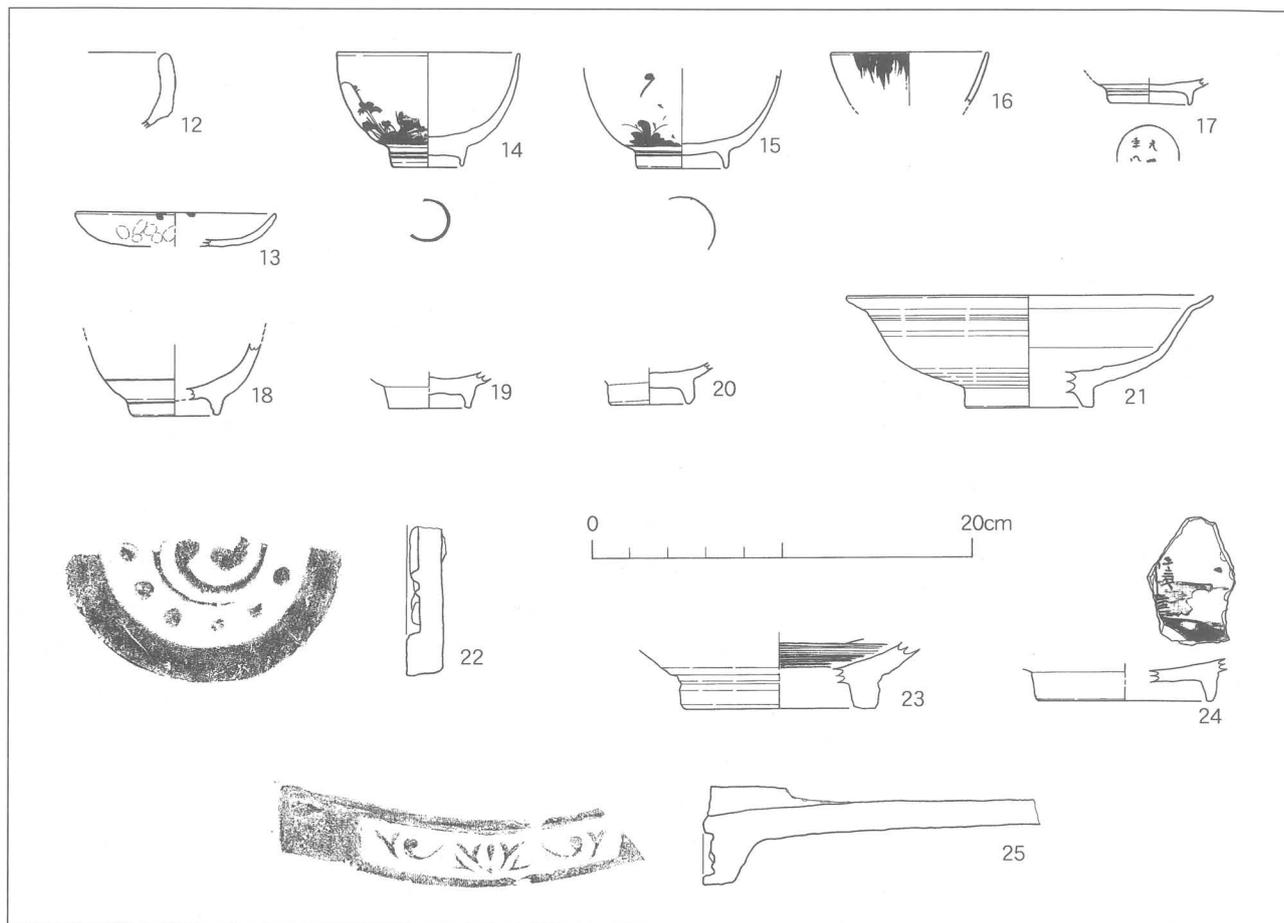
18は肥前青磁染付碗である。底径4.4cmを測り、器壁は分厚い。高台豊付は無釉。内外面にガラス質の明緑灰色の釉が掛かり、全体に粗い貫入が入る。

19は肥前青磁碗高台である。高台は無釉で、豊付に離れ砂が多量に付着している。内外面にはガラス質の明緑灰色の釉が掛かり、全体に細かな貫入が入っている。

20は肥前陶器碗高台で、呉器手と呼ばれるものである。底径4.2cm。高台豊付を除いて透明釉が掛けられ、にぶい黄橙色を呈している。全体に細かな貫入が入る。胎土は灰白色を呈し、精良である。

21は肥前陶器皿である。口径19.1cm、器高6cm、底径6.7cmを測る。口縁は内湾気味の折縁を成す。削り出し高台の豊付から内側にかけては無釉である。外面口縁端部から内面に緑灰色の釉を施し、外面に灰釉を施す。内面見込みは蛇の目釉剥ぎする。胎土は灰白色を呈し、精緻である。

22は軒丸瓦である。瓦当文は左巻三巴文。瓦当径約14cm、外縁幅2.2cm、瓦当側面厚は2cm、外縁高は0.7cmで、文様高とほぼ同じ高さである。外縁はヨコナデ調整し、瓦当裏面は周囲を強くヨコナデし、中心は不定方向にナデ調整する。瓦当面にキラコが付着する。黒灰色を呈し、雲母・長石・石英・石粒を含む胎土である。12・13・17・19・20は燃焼部 a 出土。その他は焚口部からの出土である。これらの遺物から竈の廃棄時期として18世紀前半の年代が与えられる。



第102図 竈1・2出土遺物(1/4)

竈2 (第103・104図、PL.62・65~66)

竈2は竈1の廃棄後、南側に移動して構築された竈である。全長3m、焚口部は東西1.4m、南北2.3mの幅の狭い長方形である。焚口部へ降りる階段等の施設はなかった。焚口周囲を中心に灰が2~6cmの厚さで溜まっていた。燃烧部aは内法1.3m、掘方径1.7m、深さ1.3mを測る。竈1の燃烧部bを切って構築しているため、その部分には竈壁の補強のために粘土の間に方形の大きな凝灰岩を入れ込んでいる。燃烧部は先ず、掘方の縁に沿って粘土(7)を貼り、方形の凝灰岩とスサ入りの褐色粘土ブロック(1~7)を交互に積み重ねて構築し、表面には何回も粘土(9)を貼り重ねて(補修して)使用している。灰の掻き出し溝には、周囲に敷いていた石を抜き取った痕跡が見られ、竈1燃烧部aの様な構造をしていたと思われる。溝内底面は堅く焼き締まった硬化面となっている。燃烧部aは竈1燃烧部bと同様に途中で稼働を終えている。焚口を暗灰黄色粘質土(26)・黄褐色土(25)で塞ぎ、燃烧部だけを砂質土(1~3・5・6・8・11・12)と粘質土(7・10)を交互に入れてしっかり埋め固めている。

燃烧部bは内法約1.5m、深さ1.1mを測る大型の燃烧部に復元できるが、地下室状遺構によって遺構の殆どは削り取られている。燃烧部aを切って構築され、その境には方形の凝灰岩を並べて竈壁を強化している。灰の掻き出し溝の周囲には石の抜き取り痕を検出しており、同様に石が敷かれていたようである。燃烧部bの稼働が終了した後、先ず、焚口をオリーブ褐色土(33・34)で塞ぎ、燃烧部を36~39層で埋めている。そして、焚口部を埋土(14~20・30~32)で一気に埋め戻している。

燃烧部の切り合い状況から、2基同時に構築されたとは考えられず、また、焚口部の南辺が外に張

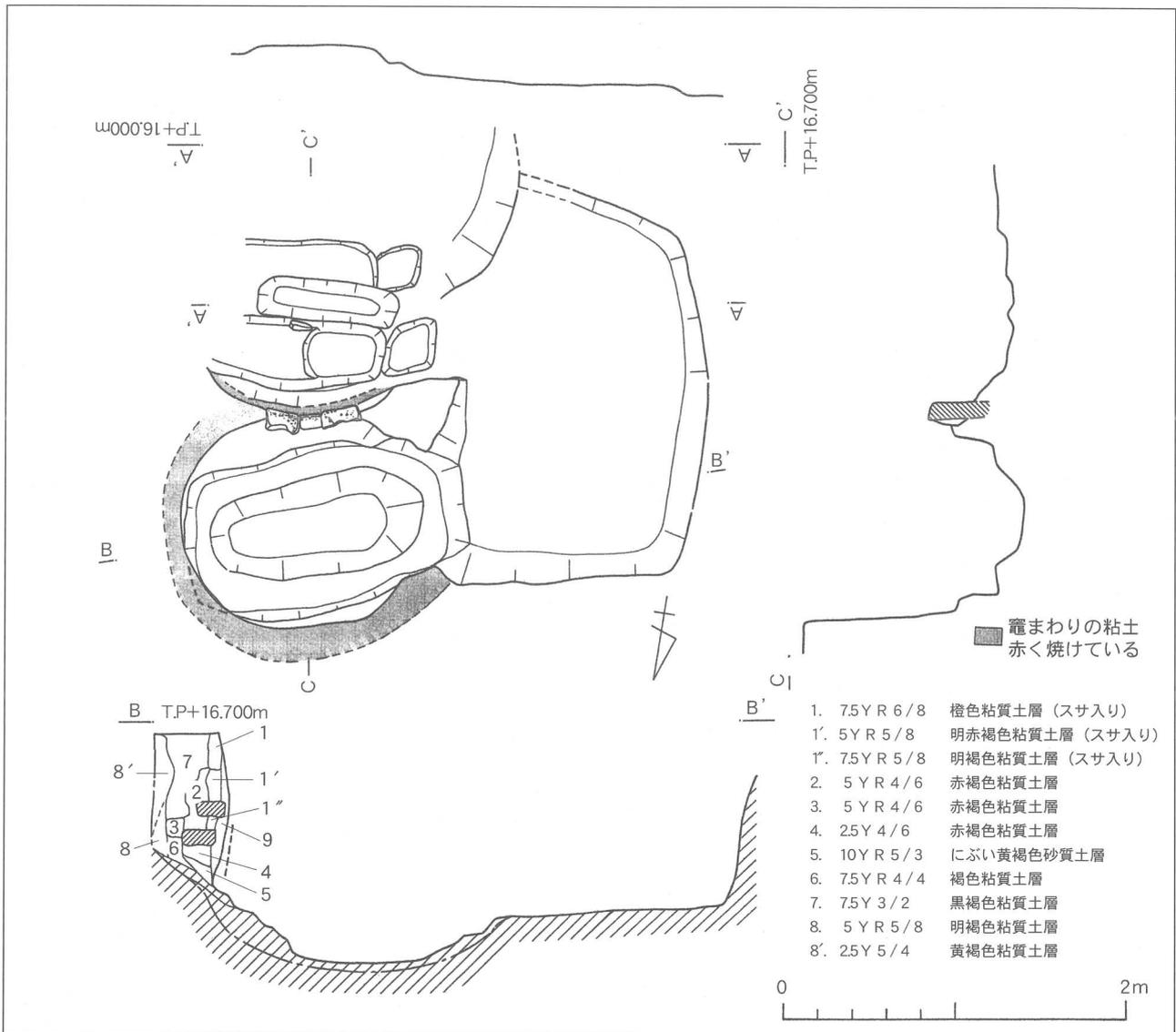
り出していることから、焚口部は拡張されたとするほうが妥当と思われる。当初から燃焼部1基の構築であったのが、何らかの理由で燃焼部aの稼働を中止し、埋めた後に燃焼部bを構築するが、焚口部はそのまま拡張して使用したのではないだろうか。竈1と同様に小型の燃焼部の稼働を中止して、大型の燃焼部だけを使用するようになっている。

遺物（第102図）

23は刷毛目唐津焼鉢の高台である。底径9.9 cm。外面には強い口クロ痕が残る。高台から外面は無釉である。内面に長石釉を刷毛掛けし、その上に透明釉を施しているが、滲んでいる。胎土は赤灰色を呈し、精良である。

24は肥前陶器染付皿で、いわゆる京焼風陶器である。底径9.1cm。高台は削り出しされシャープな作りとなっている。高台から高台内は無釉。内外面に緑灰色の釉を掛け、見込みに風景を描く。施釉面に細かな貫入が入る。胎土は灰黄色を呈し、精良である。

これらの遺物は燃焼部 a からの出土である。燃焼部 a の廃棄時期を18世紀前半頃と考え、その後燃焼部 b を構築、時をあまり経ずに竈を廃棄したと考えられるが、焚口部からの遺物の出土は無く詳細な廃棄時期は不明である。

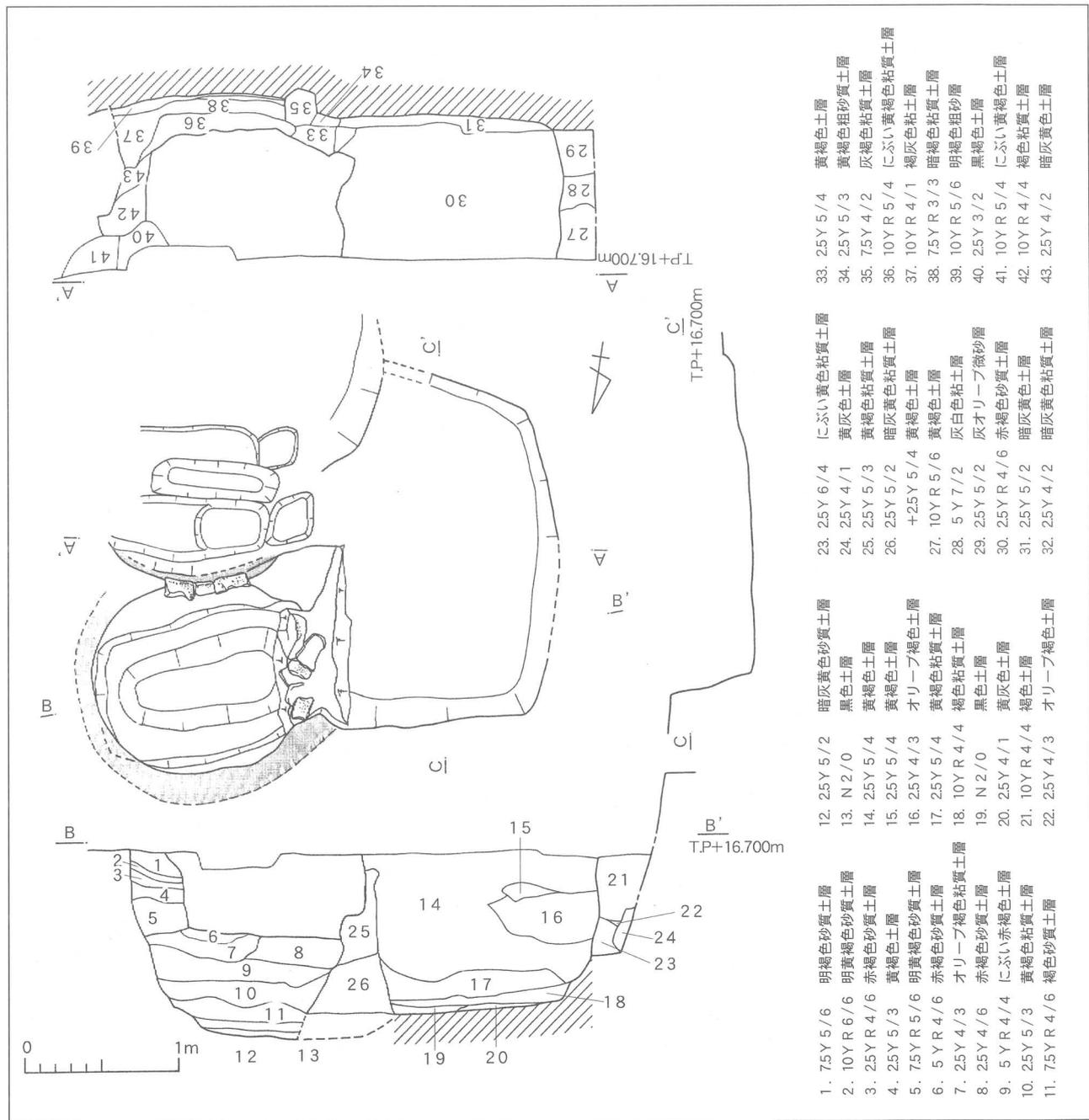


第103図 竈2平面・断面図(1)(1/4)

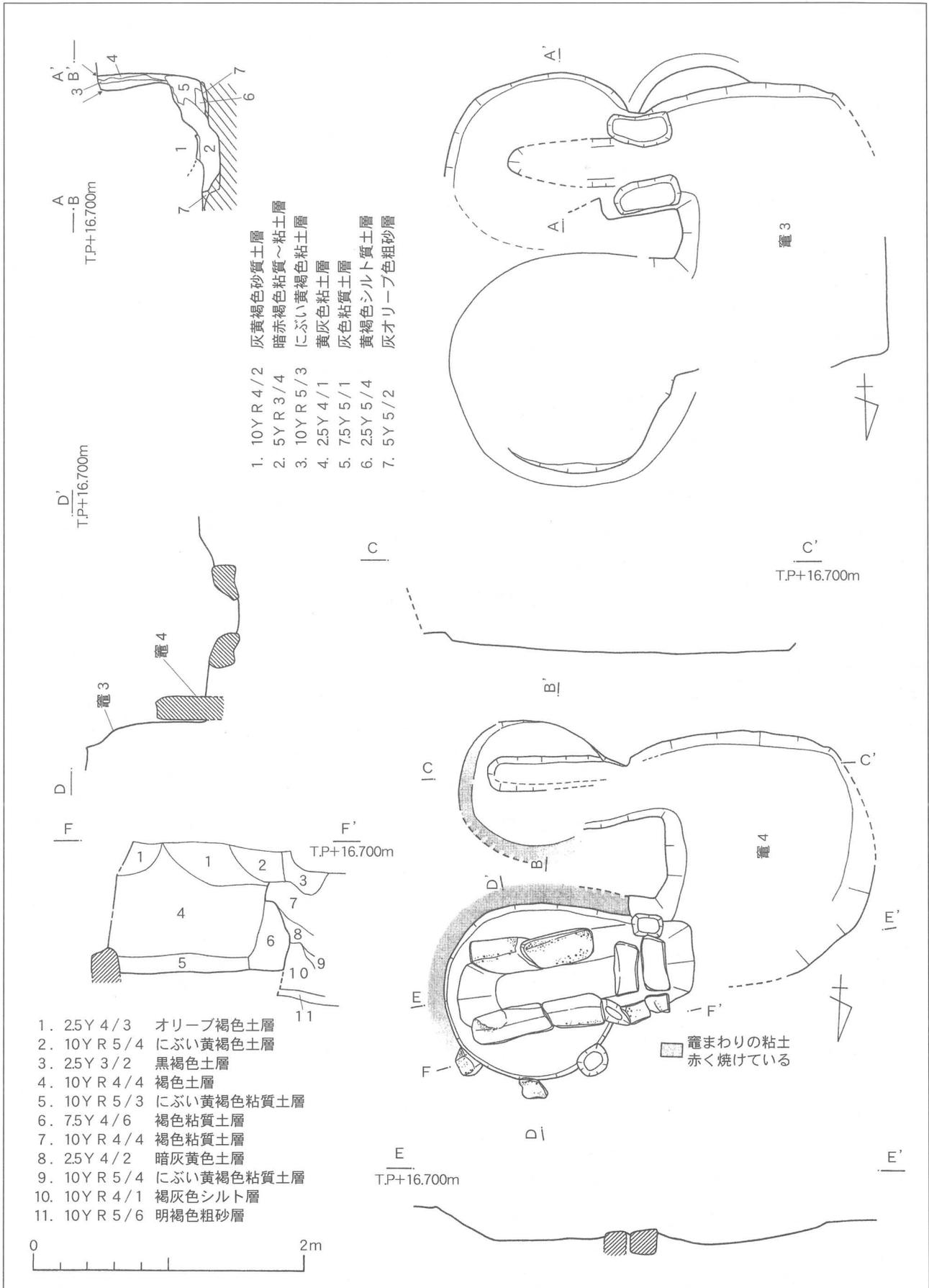
竈 3 (第105図、PL.67)

燃烧部の南北壁以外の上部構造は地下室状遺構によって削り取られ、遺構の残りは悪い。竈3は全長約3m、焚口部は東西1.5m、南北2.2mを測る長方形である。焚口部へ降りる施設は検出されなかった。燃烧部aは内法1.3m。北側の竈壁が残っており(B-B'), 周りに粘土を巻いている様子が観察できる。竈壁は真っ赤に焼けて堅く、表面に貼り付けた粘土の剥離が著しくゴツゴツしている。東西側は床面まで削平されているため、周りの粘土が赤く焼けている様子がよくわかる。

燃烧部bは内法1.6m、深さ0.9mを測り、大型の燃烧部に復元できる。燃烧部の両袖に石の抜き取り跡と思われるピットを検出している。灰の掻き出し用溝の内底面は堅く焼き締まった硬化面となっている(A-A')。遺物の出土は無かったが、竈2との切り合い関係などから18世紀中期頃の年代が与えられる。



第104図 竈2平面・断面図(2)(1/4)



第105図 竈3・4平面・断面図

竈 4 (第105図、PL.67)

竈の南側壁以外の上部構造は地下室状遺構によって大きく削平され、遺構の残りは大変悪い。竈4は竈3を造り直した竈で、燃焼部と焚口部の規模は縮小されている。竈は全長3.3m、焚口部は東西1.6m、南北1.9mを測る隅丸方形に造り直されている。焚口部の構造が横長型から縦長型へ移行する時期を示すものであろうか。焚口部へ降りる階段等の施設は確認できなかった。

燃焼部aは内法1.3m。燃焼部本体は、骨材として等間隔に方形の凝灰岩を据え、その隙間に褐色粘土(6)を積んで構築している。底面には大きな凝灰岩の切石を用いた灰の掻き出し用の溝が設けられている。凝灰岩は上面を丸く、下面は内側に刳り込むように成形されている。また、凝灰岩は粘土を敷いた上に据えられている。灰掻き出し口床面には長さ40cm、厚さ10~12cmの板石が2枚敷かれている。灰を掻き出す時の足場の確保と、入り口の土と一緒に掻き取らないための処置であろう。同様な遺構は竈2にも見られる。燃焼部本体は、にぶい黄褐色粘質土層(5)と竈壁を含んだ褐色土層(4)を埋土として埋め戻しているが、焚口部は遺存状態が悪く、稼働終了後の廃棄過程はわからない。

燃焼部bは内法1.1m、深さ75cmを測る。竈3の燃焼部bに粘土(2~6層)を張り付けて構築しており、床面は15cmほど嵩上げされている。灰の掻き出し用の溝内底面は堅く焼き締まった硬化面を呈している。

遺物としては燃焼部bから軒平瓦(25)が出土している。瓦当文様は中心飾1点5葉2転唐草文である。瓦当厚3.7cm、弧深1.5cm、外縁高0.5cm、脇区幅4.3cm、現存長17.8cm、瓦当側面厚1.8cm、顎深2.5cmである。顎部を横方向にナデており、それに続く平瓦部凸面は縦横にナデる。凹面は縦方向にナデ、さらに瓦当付近を横方向にナデる。平瓦側面は縦方向にナデている。胎土に砂粒を含み、黒灰色を呈す。

竈 5 (第103図、PL.62)

竈3・4と地下室状遺構に削平されている竈で、内法1.1mの小型の燃焼部が残る。西側に焚口の痕跡が確認できないことから、東側に対の燃焼部があり、焚口部が北側に設けられていた可能性がある。

18世紀中期頃の構築と考えている竈3・4に切られているので、それ以前の構築であることは明らかである。但し、今回検出した他の竈は焚口部を西側に設けており、焚口部を北側に設ける竈は古い要素を持つものとも受け取れ、竈1の構築時期(18世紀前半)より以前の年代が与えられるかもしれない。

まとめ

今回の調査では後世の建物の影響を受けたにも関わらず、比較的良好な状態で遺構の検出を行うことができた。地下室状遺構や酒造用の大型の半地下式竈を確認できたことで、酒蔵の存在を知り得たことは大きな成果である。

—竈と焚口部について—

検出した竈は2基が一組となった「二基連基型」が4基と竈1基の計5基である。「二基連基型」の竈の燃焼部は内法1.5~1.6mの大型のものと、内法1.2~1.3mの小型のものを一組としている。竈は北から南へ少しずつ移動しながら何度も造り替えられている。竈1・2を見ると、竈全部を一度に廃棄することはなく、小型の燃焼部の稼働を停止して焚口を塞いでしまい、大型の燃焼部だけを使用する。その後、それを廃して次の竈(竈2・3)へ移るといった変遷が認められる。このような竈の移動は、今のところ他に例がなく、貴重な資料である。

竈2は、当初、「二基連基型」と考えて調査していたが、両燃焼部の切り合いと、焚口部に拡張が見られることから、焚口部を同じくする単基竈の造り替えと理解できる。

燃焼部底面の灰の掻き出し用の溝は、大きな凝灰岩の切石を用いて設けられ、大変頑丈な造りを見せている。焚口に板石を置いているのは、灰掻き出し時の足場の他に、足下の土をすくい取らないための処置であろう。

燃焼部の西側に狭い横長型の焚口部が設けられるが、時期を追うにつれて縦長型へと変化していく様子が窺える。焚口部に降りる階段は造られておらず、梯子などの簡易なものを利用していたものと考えられる。

－竈の構築について－

燃焼部本体の構築方法としては、

- a. 粘土ブロックを積み重ねて、その上に粘土を貼って構築する（竈1）。
- b. 粘土ブロックと凝灰岩の板石を積み重ね、その上に粘土を貼って構築する（竈2）。
- c. 等間隔に立て並べた方形状の凝灰岩を骨材とした粘土造り（竈3・4）。

などが見られる。竈1→4への移動は、構築方法a→cの動きと連動していることから、当釜屋での構築の変遷が辿れる。さらに、赤く焼けた燃焼部表面は薄い層が何層も重なっている状態が確認でき、何度も粘土を塗り重ねて補修を加えながら使用していった様子もわかった。

－調査から窺える酒蔵－

調査区東側では井戸や酒搾り遺構（男柱・垂壺）は確認できていないが、竈1の北辺際では調査区外に続く竈の存在が確認できており、釜屋や諸施設の範囲は北に広がると思われる。

竈は18世紀前半から18世紀中頃にかけての短期間でその機能を終えている。僅かの中に何度も造り替えが行われているが、単基で稼働していたり（竈1・2）、単基の造り替えが行われていたり（竈2）しており、必ずしも2基一組で稼働しているわけではない。

伊丹酒造業の近世前期の発展期は、元禄年間（1688～1703）であり、当酒蔵の稼働開始時期はその直後の創業と考えられる。18世紀前半頃は幕府の厳しい酒造統制策による「減醸令」が出されたり、緩和されたりしており、18世紀中頃には酒造りを奨励する政策を行うなど、頻繁に酒造家への制約が加えられている。竈の造り替えはその耐久性によるものではあるが、竈1・2の様な片側の竈の稼働中止の例はこのような外的条件も起因した可能性があるのではないだろうか。

地下室状遺構は床面から根太部分が検出されたことで、板張りであったことが確認できた。おそらく壁面も板張りであったと思われ、大規模な貯蔵用施設として造られた遺構ではないだろうか。

第163次調査でも同様な遺構を確認しており、ここでの地下室状遺構は伊丹礫層を掘り込んで造られているが、構造的には同一と考えられる。地下に造ることによって温度を一定に保てるのではないかと思われ、室のような、物を発酵させ保存しておく施設の可能性を考慮している。

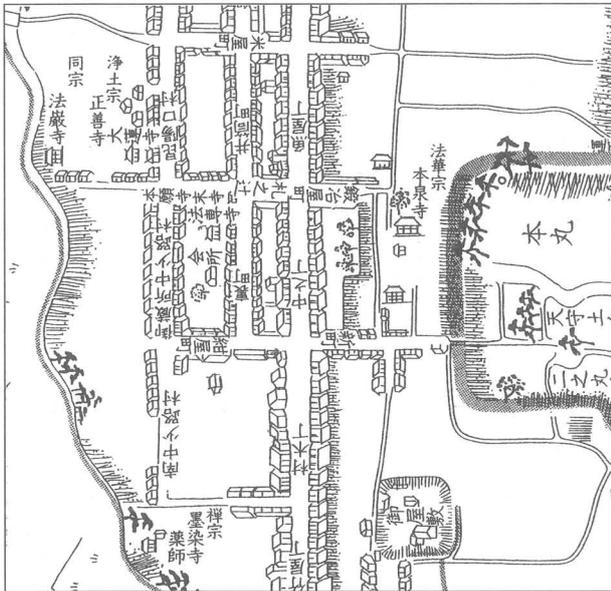
地下室状遺構の検出事例は今のところこの2例である。何れの場合にも遺構は酒蔵からの検出であって、町屋からの検出例はない。伊丹酒造業は幕府の酒造統制の緩和によって文化・文政期（1804～1830）に近世後期の第2の発展期を迎えているが、両遺構とも出土遺物から19世紀前半頃の時期が与えられ、伊丹が近世を通じて最高の江戸入津樽数を記録する頃にその出現があたっている。

しかし、酒の量産用の施設と考えるには事例が少なく、普遍性がないことから、酒造とは直接関係しない副次的な施設であった公算が大きいと思われる。地下室状遺構については、漸く端緒に辿りついたばかりであるが、伊丹酒造業の新たな一面を知るうえで、さらに、資料（史料）の集積と検討を重ねていく必要がある。

これら諸施設を包括する酒蔵建物の可能性がある遺構は礎石1だけで、これに続く礎石等は確認できていない。

一史料から窺える酒蔵一

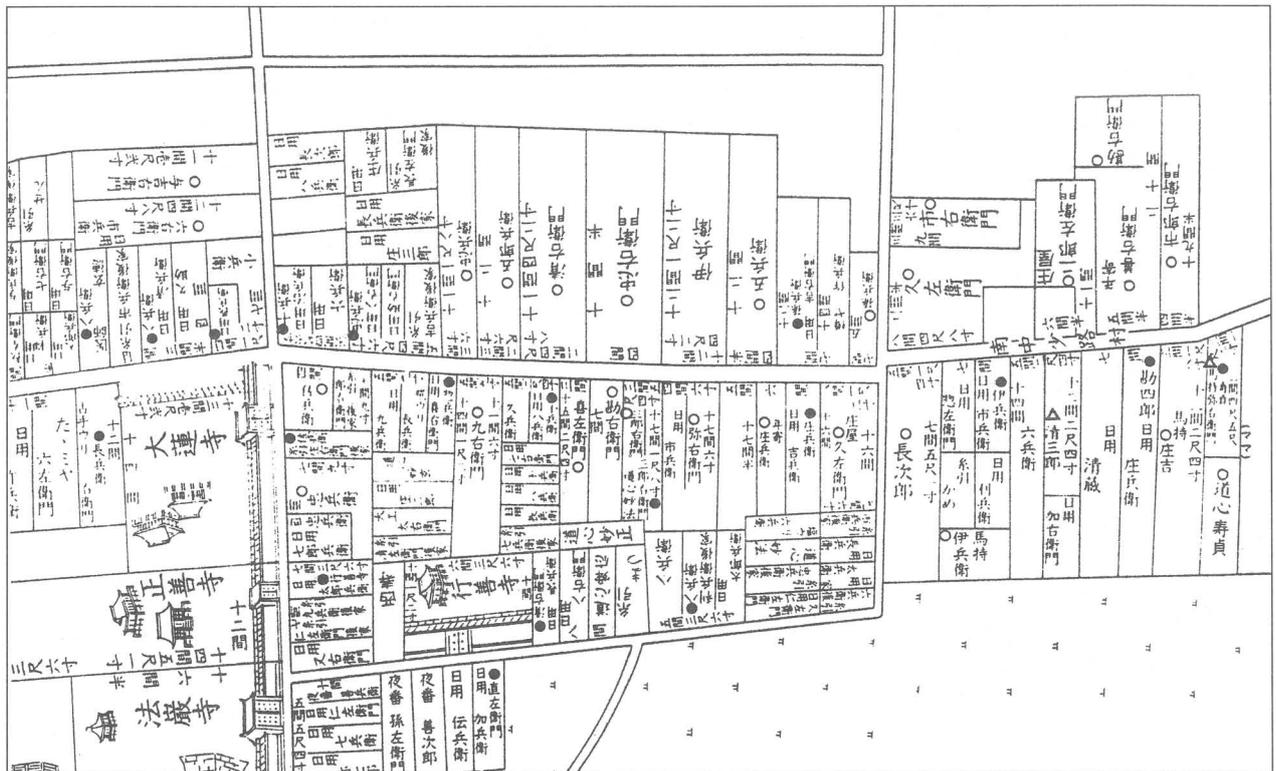
次に、史料等から調査地点を検討してみたい。この辺りは、江戸時代の伊丹郷町では中小路村となっており、「寛文九年（1669）伊丹郷町絵図」には中小路村の家並みと法専寺、会所が描かれている。「元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図」にも小区画の町屋として描かれているが、酒蔵の記載はない。「天保十五年（1844）伊丹郷町分間絵図」には大区画の敷地が描かれ、酒蔵が建っていたことが窺える。



第106図 「寛文9年伊丹郷町絵図」



第107図 「天保15年伊丹郷町分間絵図 解説図」



第108図 「元禄7年柳沢吉保領伊丹郷町絵図 解説図」

『伊丹小学校沿革史』によると「明治18年5月に上西大蔵大鹿屋所有の酒造蔵及び居宅併に敷地を買って校舎の改築を計る」とあり、この土地が大鹿屋の所有地で、酒蔵が建っていたことがわかる。この場所は、大正4年の地籍図では403番地にあたり、広い屋敷地で表されている。北側の敷地には大手柄酒造の酒蔵が建ち、東側は法専寺と406番地の宅地になっているが、宅地の中に近衛家会所は描かれていない。

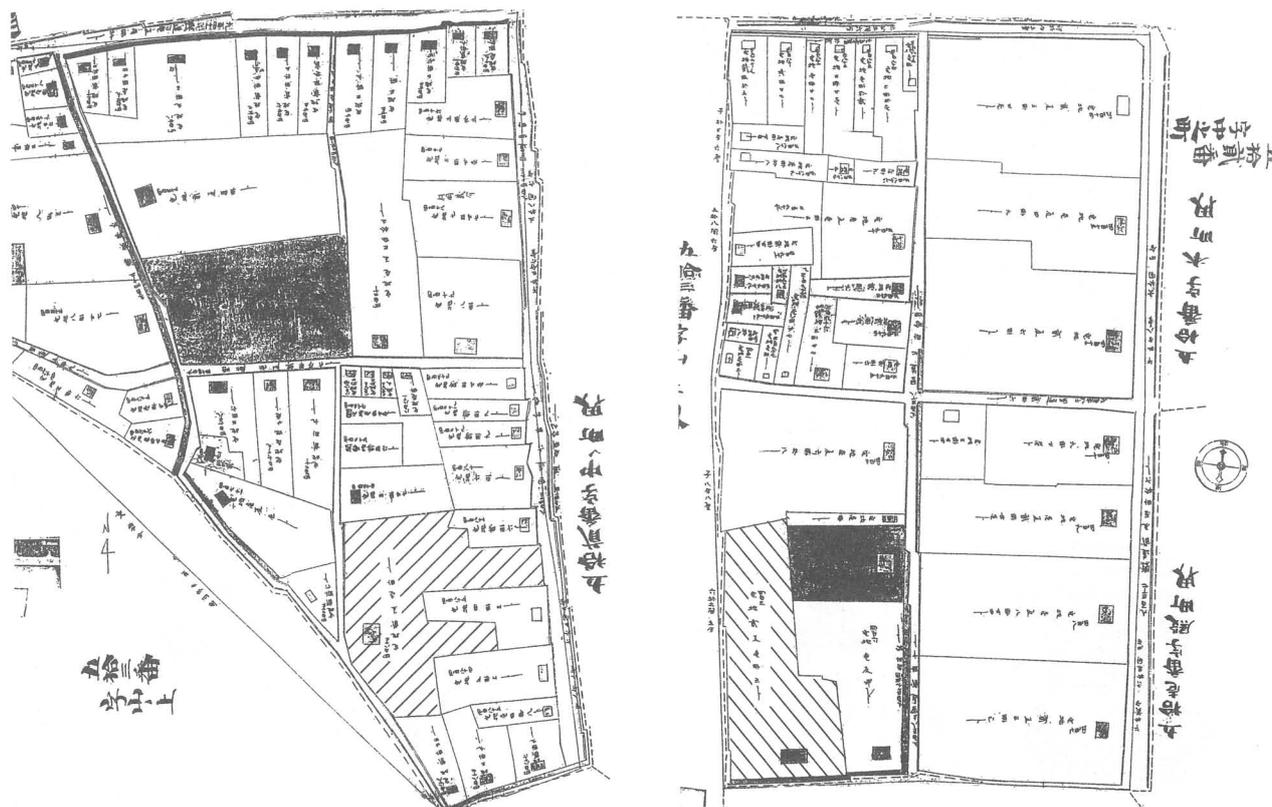
大鹿屋は伊丹の酒造家に名を連ねており、その初見は寛文5年（1665）で、大鹿屋忠兵衛が町分として20石、大鹿屋藤兵衛が昆陽口村に80石の酒株を所有していたものである。

中小路村での大鹿屋の初見は、享保5年（1720）の「酒造人数帳」で、大鹿屋市郎兵衛の名前が記載されており、中小路村に大鹿屋の酒蔵（本蔵）と出店（出見世）があったことがわかる。中小路村の大鹿屋所有の酒蔵は市郎兵衛の2蔵だけであることから推定すると、この本蔵が当調査区にあたり、出店は向かい側の地籍図482番地に相当する。

正徳5年（1715）の「酒株の寄せ帳」に大鹿屋市郎兵衛が酒造を行っていることが記されており、おそらくこの時には既に中小路村に酒蔵を所有していたものと理解できる。この大鹿屋市郎兵衛の初見は元禄10年（1697）で、10石の酒株を所有していたとあり、酒造を行っていたようであるが、中小路村に酒蔵を持っていたかどうかはわかっていない。

明和5年（1768）「月割出金につき平戸藩差入証文」のなかで市郎兵衛の名前が見られるのが史料としては最後である。

その次の代を見てみると、「天保度以来 永代記」『日本都市生活史料集成』の中で「中小路村の大鹿屋市右衛門という酒造家が零落している」との記述があり、また「伊丹酒家盛衰之事」『有岡古統語』の中でも「中小路に大鹿屋市右衛門の蔵が2軒あって、下出店（前述の482番地の出店）を津国屋



第109図 「大正4年伊丹町地籍図謄本」

勘三郎に譲渡した」とあり、幕末時、中小路村に市右衛門の蔵があったことがわかっている。この大鹿屋市右衛門の初見は天明6年（1786）で、市郎兵衛の後、大鹿屋本家を継いでいる。

天保3年（1832）の酒造株高を見ると3253石（本蔵1840石、材木町蔵1413石）で、酒造家57名のなかで8番目にランクされる株高を保有していた。しかし、天保改革以降、幕末にかけて伊丹酒造業は衰退して行き、その中で市右衛門も弘化年間までに没落するに至っている（前掲「天保度以来 永代記」）。

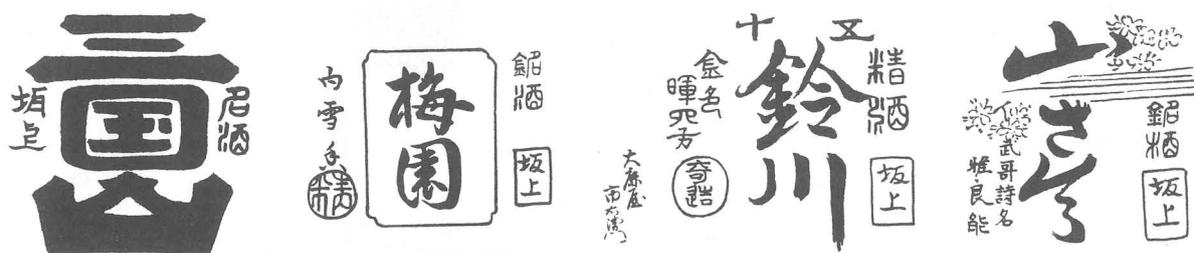
大鹿屋市郎兵衛は元禄10年（1697）～明和5年（1768）にかけて酒蔵を所有し、1715年には当調査区を含めた敷地内に本蔵を所有していたのである。これは調査で18世紀前半から18世紀中頃にかけての酒造用竈を検出していることと一致するところである。

大鹿屋市右衛門は弘化2年の「酒荷物積方申し合せ規定書」に年番として名前が記されているので、天明6年（1786）～弘化2年（1845）頃まで経営難に陥りながらも本蔵で操業していたようであるが、その直後の弘化4年には没落しているの、明治18年頃（前掲「伊丹小学校沿革史」）には既に本蔵の操業はしていなかったと思われる。

史料等の考察の結果、当調査区が大鹿屋の酒蔵であったことがわかり、調査では釜屋を検出したことで酒造業を営んでいたことが確かめられたが、酒蔵建物跡は確認できず、酒蔵の規模は今のところ不明である。
（瀬川）

<参考文献>

- ・和島恭仁雄 1997「第188次調査検出の酒蔵覚え書き」
この中で『伊丹小学校沿革史』の大鹿屋所有の酒蔵と居宅・敷地を『大正4年地籍図』の403番地に特定されている。また、享保5年の「酒造人数帳」の大鹿屋の出店は482番地ではないかのご教示を得た。大鹿屋については研究資料を拝見させて頂くなど、便宜を計って頂いた。
- ・柚木 学 1977「摂州伊丹酒樽銘鑑」『地域研究いたみ 第8号』伊丹市立博物館
- ・文京ふるさと歴史館 1995「特別展図録 江戸の大店高碓屋」文京区教育委員会
- ・『大正4年伊丹町地籍図謄本』伊丹市立博物館蔵
- ・『伊丹小学校沿革史』『百周年記念誌』伊丹市立伊丹小学校 1972
- ・「天保度以来 永代記」『日本都市生活史料集成』一、三都篇1
- ・『伊丹古絵図集成（別録）』伊丹資料叢書6
「寛文九年伊丹郷町絵図」
「元禄7年柳沢吉保領伊丹郷町絵図 解説図」
「天保15年伊丹郷町分間絵図 解説図」
- ・『伊丹市史』第2・4巻 伊丹市役所 1969
「伊丹酒家盛衰之事」『有岡古読語』
「享保5年 酒造人数帳」
「正徳5年 酒株の寄せ帳」
「明和5年月割り出金につき平戸藩差入証文」
「弘化2年 酒荷物積方申し合せ規定書」



第110図 「摂州伊丹酒樽銘鑑（抜粋）」

- ・文政13年（1830）の「摂州伊丹酒樽銘鑑」の中に市右衛門が所持していた「五十鈴川」「三国山」「山ざくら」「梅園」の酒銘（商標）があり、この「三国山」は天保13年（1842）の「高崎屋絵図」中にも描かれ、江戸への「下り酒」として伊丹産の一銘柄として出荷していたことがわかる。
- ・天保末年から弘化年間にかけて酒造経営悪化のため居宅・酒造場・酒造株・酒造道具一式を抵当として近衛家からの拝領金の融通を受けている。大鹿屋市右衛門は中小路村蔵を抵当に入れて、金965両と銀388貫613匁を受け取っている。（『伊丹市史』第2巻より）
- ・第223次調査で地下室状遺構を検出しているが、十分な検討を要していないので事例として取り上げていない。

